

延永ヤヨミ園遺跡 －IV区II－

福岡県行橋市大字延永・吉国所在遺跡の調査

2015

九州歴史資料館

延永ヤヨミ園遺跡

- IV 区 II -

福岡県行橋市大字延永・吉国所在遺跡の調査

序

福岡県では、平成 20 年度から国土交通省九州地方整備局北九州国道事務所の委託を受けて、一般国道 201 号行橋インター関連建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。本報告書は、平成 20 ~ 25 年度にかけて行った福岡県行橋市延永・吉国に所在する延永ヤヨミ園遺跡の発掘調査の記録で、国道 201 号行橋インター関連に伴う本遺跡の調査報告書の 3 冊目となります。

本遺跡は、京都平野に突き出す低丘陵上～斜面及び谷部に立地し、近隣には県指定史跡ビワノクマ古墳などが位置しています。

今回の調査では、弥生時代終末～古墳時代初頭、古墳時代後期を中心とした大規模な集落跡と古代～中世の遺構・遺物を確認しました。中でも IV-C 区谷から出土した木簡類及び墨書き土器などから、本遺跡は『類聚三代格』に記された「草野津（かやののつ）」と考えられることなど、この地域の歴史を知る上で大変貴重な資料を得ることができました。

本書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

平成 27 年 3 月 31 日

九州歴史資料館
館長 杉光 誠

例　言

1. 本書は、一般国道201号行橋インター関連建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県行橋市延永・吉国に所在する延永ヤヨミ園遺跡IV-B 2区及びIV-C区の記録で、一般国道201号行橋インター関連関係埋蔵文化財調査報告の第4集にあたる。
2. 発掘調査は国土交通省九州地方整備局北九州国道事務所の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課及び九州歴史資料館が実施し、整理報告は同所の委託を受けて、九州歴史資料館が実施した。
3. 本書に掲載した遺構写真的撮影は進村真之・大庭孝夫・下原幸裕が、遺物写真的撮影は九州歴史資料館が行った。空中写真については、九州航空株式会社・東亜航空技研株式会社・有限会社空中写真企画に委託し、撮影を行った。
4. 本書に掲載した遺構図の作成は、進村・大庭・下原が行い、発掘作業員が補助した。
5. 出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、小池史哲・城門義廣・小川泰樹の指導の下に実施した。なお、一部の木製品の実測は公益財團法人元興寺文化財研究所に委託した。
6. 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
7. 本書に使用した分布図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000 地形図「行橋」、1/50,000 地形図「行橋・糸島・中津・田川」を改変したものである。
8. 本書で使用した方位は、世界測地系による座標北である。
9. 樹種の鑑定は小林啓が行った。
10. 本書の執筆は進村・大庭・下原・城門・小林・酒井芳司・岩橋由季・株式会社古環境研究所・公益財團法人元興寺文化財研究所が行い、大庭が編集した。

目 次

巻頭図版

序

例言

目次

図版目次

挿図目次

表目次

文中写真目次

I はじめに（大庭）	1
1 調査に至る経緯と経過	1
2 調査・整理の組織	4
II 位置と環境（大庭）	6
1 地理的環境	6
2 歴史的環境	6
III 発掘調査の記録	10
1 遺跡の概要（大庭）	10
2 延永ヤヨミ園遺跡及び関連遺跡の既往の調査（大庭）	10
3 IV-B 2 区の遺構と遺物（大庭・下原・城門・岩橋）	14
(1) 調査の経過	14
(2) 調査区の概要	17
(3) 竪穴住居跡	20
(4) 掘立柱建物跡	71
(5) 土坑	71
(6) 井戸	81
(7) 不明遺構	81
(8) ピット	84
(9) 遺構面等	84
(10) 特殊遺物	84
(11) 小結	90
4 IV-C 区の遺構と遺物（進村・城門・酒井）	92
(1) 調査の経過	92
(2) 調査区の概要	92
(3) 土坑	92
(4) 井戸	101
(5) 溝	109
(6) 包含層	109

(7) 墨書き土器	120
(8) 特殊遺物	120
(9) 木製品	120
(10) 木簡枳文	154
(11) 小結	159
IV 科学分析	159
1 胎土（粘土）分析（株式会社古環境研究所）	159
2 延永ヤヨミ園遺跡IV区における種実同定報告（株式会社古環境研究所）	166
3 延永ヤヨミ園遺跡IV-C区出土木製鞍に伴う分析報告（元興寺文化財研究所）	168
V 総括（大庭・城門・酒井・小林）	169
1 IV-B 2区及びIV-C区の遺構の変遷について（大庭）	169
2 延永ヤヨミ園遺跡周辺の古墳時代初頭前後竪穴住居の構造（大庭）	173
3 カマドの廃絶行為について（大庭）	177
4 木製品について（城門）	179
5 延永ヤヨミ園遺跡における津の考古学的状況（城門）	182
6 木簡・墨書き土器からみた延永ヤヨミ園遺跡（酒井）	186
7 出土木製品の樹種同定（小林）	189
8 延永ヤヨミ園遺跡IV区の調査成果のまとめ（大庭）	195

図版目次

卷頭図版 1	1 IV-B 区122号竪穴住居跡（西から）	2 延永ヤヨミ園遺跡出土手焙形土器
卷頭図版 2	1 IV-B 区134号竪穴住居跡（東から）	
	2 IV-B 区134号竪穴住居跡カマド出土状況（東から）	
卷頭図版 3	1 IV-B 区137号竪穴住居跡（南から）	
	2 IV-B 区137号竪穴住居跡カマド（南から）	
卷頭図版 4	1 IV-B 区140号竪穴住居跡（南から）	
	2 IV-B 区140号竪穴住居跡カマド出土状況（南から）	
卷頭図版 5	1 IV-C 区出土木製鞍	2 IV-C 区出土木簡類
卷頭図版 6	1 IV-C 区出土墨書き土器	2 IV-C 区包含層出土「津」銘墨書き土器
図版 1	1 IV-B 区全景（空中写真、西から）	2 IV-B 区全景（空中写真、上から）
図版 2	1 IV-B 区基本土層（西から）	
	2 IV-B 区120・121・130号竪穴住居跡、32号土坑（北東から）	
	3 IV-B 区120号竪穴住居跡カマド（東から）	
図版 3	1 IV-B 区122号竪穴住居跡出土状況①（南西から）	
	2 IV-B 区122号竪穴住居跡出土状況②（東から）	
	3 IV-B 区122号竪穴住居跡炉跡（南から）	
図版 4	1 IV-B 区131号竪穴住居跡（南から）	2 IV-B 区131号竪穴住居跡カマド（南から）

- 3 IV-B区132号竪穴住居跡出土状況①（南東から）
- 図版5 1 IV-B区132号竪穴住居跡出土状況②（北西から）
 2 IV-B区132号竪穴住居跡屋内土坑（南東から）
 3 IV-B区132号竪穴住居跡完掘状況（南東から）
- 図版6 1 IV-B区133号竪穴住居跡（南から）
 2 IV-B区133号竪穴住居跡カマド（南から）
 3 IV-B区133号竪穴住居跡出土状況（西から）
- 図版7 1 IV-B区134号竪穴住居跡（南東から）
 2 IV-B区134号竪穴住居跡カマド完掘（南東から）
 3 IV-B区134号竪穴住居跡カマド断ち割り（C-C'）（東から）
- 図版8 1 IV-B区137号竪穴住居跡出土状況（北西から）
 2 IV-B区137号竪穴住居跡カマド断ち割り（D-D'）（南西から）
 3 IV-B区137号竪穴住居跡カマド断ち割り（I-I'）（南西から）
- 図版9 1 IV-B区138A・B号竪穴住居跡（北から）
 2 IV-B区138A号竪穴住居跡カマド（北から）
 3 IV-B区139号竪穴住居跡（東から）
- 図版10 1 IV-B区139号竪穴住居跡カマド検出状況（南東から）
 2 IV-B区139号竪穴住居跡カマド完掘状況（南東から）
 3 IV-B区140号竪穴住居跡付近（南から）
- 図版11 1 IV-B区140号竪穴住居跡（南から） 2 IV-B区140号竪穴住居跡カマド（南から）
 3 IV-B区141号竪穴住居跡（東から）
- 図版12 1 IV-B区141号竪穴住居跡カマド（東から）
 2 IV-B区141号竪穴住居跡P1出土状況（南から）
 3 IV-B区143号竪穴住居跡カマド出土状況（東から）
- 図版13 1 IV-B区143号竪穴住居跡カマド完掘状況（東から）
 2 IV-B区144号竪穴住居跡（南東から） 3 IV-B区31号土坑（北東から）
- 図版14 1 IV-B区33号土坑（西から） 2 IV-B区34号土坑（南から）
 3 IV-B区35号土坑（南から）
- 図版15 1 IV-B区36号土坑（東から） 2 IV-B区37号土坑（南から）
 3 IV-B区43号土坑（南から）
- 図版16 1 IV-B区45号土坑（東から） 2 IV-B区46号土坑（西から）
 3 IV-B区47号土坑（北東から）
- 図版17 1 IV-B区48号土坑（南から） 2 IV-B区48号土坑出土状況（南から）
 3 IV-B区4号井戸（南から）
- 図版18 1 IV-B区SX01（南西から） 2 IV-B区P820（西から）
 3 IV-B区P851（北から）
- 図版19 IV-B区出土遺物① 図版20 IV-B区出土遺物②
- 図版21 IV-B区出土遺物③ 図版22 IV-B区出土遺物④

図版23	1 IV-C区東側全景（北から）	2 IV-C区全景（北から）	3 IV-C区全景（東から）
図版24	1 IV-C区東側全景（東から）	2 IV-C区土坑集中部分（東から）	3 IV-C区1002号土坑（西から）
図版25	1 IV-C区1003号土坑出土状況（南東から）	2 IV-C区1008号土坑（東から）	3 IV-C区1009号土坑（南東から）
図版26	1 IV-C区1010号土坑（東から）	2 IV-C区1011号土坑（西から）	3 IV-C区1012号土坑（西から）
図版27	1 IV-C区1013号土坑（西から）	2 IV-C区1014号土坑（南から）	3 IV-C区1015号土坑（北から）
図版28	1 IV-C区1016号土坑（西から）	2 IV-C区1号井戸（北から）	3 IV-C区2号井戸（北西から）
図版29	1 IV-C区包含層①（北から）	2 IV-C区包含層②（南東から）	3 IV-C区包含層③（北から）
図版30	1 IV-C区包含層④（東から）	2 IV-C区包含層⑤（南から）	3 IV-C区包含層⑥（北東から）
図版31	1 IV-C区包含層⑦（南から）	2 IV-C区包含層⑧（南東から）	3 IV-C区包含層⑨（南から）
図版32	1 IV-C区包含層⑩（北から）	2 IV-C区包含層⑪（東から）	3 IV-C区包含層⑫（南から）
図版33	IV-C区出土遺物①	図版34 IV-C区出土遺物②	図版35 IV-C区出土遺物③
図版36	IV-C区出土遺物④	図版37 IV-C区出土遺物⑤	図版38 IV-C区出土遺物⑥
図版39	IV-C区出土遺物⑦	図版40 IV-C区出土遺物⑧	図版41 IV-C区出土遺物⑨
図版42	IV-C区出土遺物⑩	図版43 IV-C区出土遺物⑪	図版44 IV-C区出土遺物⑫

挿図目次

第1図	延永ヤヨミ園遺跡の位置	1
第2図	国道201号線行橋インター関連路線図と調査地点位置図（1/25,000）	2
第3図	調査区割図（1/2,000）	3
第4図	周辺遺跡分布図（1/50,000）	7
第5図	延永ヤヨミ園遺跡等関係図（1/6、1/60、1/120、1/200、1/500、1/600）	11
第6図	延永ヤヨミ園遺跡IV-B・C区区割図（1/1,000）、IV-B 2区遺構切り合い関係図	14
第7図	延永ヤヨミ園遺跡IV-B 2区全体図（1/200）	15・16
第8図	延永ヤヨミ園遺跡IV-B区基本土層（1/60）	18
第9図	IV-B区120号竪穴住居跡実測図（1/60）	19
第10図	IV-B区120号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）	20
第11図	IV-B区120・121号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）	21
第12図	IV-B区121号竪穴住居跡実測図（1/60）	23

第13図	IV-B区122号竪穴住居跡実測図(1/60)	25
第14図	IV-B区122号竪穴住居跡出土遺物実測図①(1/3)	27
第15図	IV-B区122号竪穴住居跡出土遺物実測図②(1/3)	28
第16図	IV-B区122号竪穴住居跡出土遺物実測図③(1/3)	29
第17図	IV-B区122号竪穴住居跡出土遺物実測図④(1/3)	30
第18図	IV-B区122号竪穴住居跡出土遺物実測図⑤(1/3)	31
第19図	IV-B区122号竪穴住居跡出土遺物実測図⑥(1/3)	32
第20図	IV-B区122号竪穴住居跡出土遺物実測図⑦(1/3)	33
第21図	IV-B区130号竪穴住居跡実測図(1/60)	34
第22図	IV-B区131号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60、1/30)	35
第23図	IV-B区131・133・135・136号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	36
第24図	IV-B区132号竪穴住居跡・屋内土坑実測図(1/60)	37
第25図	IV-B区132号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/3)	39
第26図	IV-B区132号竪穴住居跡出土土器実測図②(1/3、1/4、1/8)	40
第27図	IV-B区132号竪穴住居跡出土土器実測図③(1/3)	41
第28図	IV-B区133号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60、1/30)	43
第29図	IV-B区134号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60、1/30)	45
第30図	IV-B区134・138号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	47
第31図	IV-B区135・136号竪穴住居跡実測図(1/60)	48
第32図	IV-B区137号竪穴住居跡実測図(1/60)	51
第33図	IV-B区137号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)	52
第34図	IV-B区137号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	53
第35図	IV-B区138A・B号竪穴住居跡・138A号カマド実測図(1/60、1/30)	55
第36図	IV-B区139号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60、1/30)	57
第37図	IV-B区140号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60、1/30)	59
第38図	IV-B区139・141・143号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	60
第39図	IV-B区140号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	61
第40図	IV-B区141号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60、1/30)	63
第41図	IV-B区142号竪穴住居跡実測図(1/60)	65
第42図	IV-B区142号竪穴住居跡出土土器実測図①(1/3)	66
第43図	IV-B区142②・144・145号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	67
第44図	IV-B区143号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60、1/30)	68
第45図	IV-B区144・145号竪穴住居跡実測図(1/60)	70
第46図	IV-B区146号竪穴住居跡実測図(1/60)	71
第47図	IV-B区146号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/3)	71
第48図	IV-B区9号掘立柱建物跡実測図(1/60)	72
第49図	IV-B区29・31・32号土坑実測図(1/30、1/60)	73
第50図	IV-B区29・31・32号土坑出土遺物実測図(1/3)	74

第51図	IV-B区33~37号土坑実測図(1/30)	75
第52図	IV-B区35~38・43・45・48号土坑出土土器実測図(1/3)	77
第53図	IV-B区38・43・45・48号土坑実測図(1/30)	79
第54図	IV-B区46・47号土坑実測図(1/30)	80
第55図	IV-B区46号土坑出土遺物実測図(1/3)	81
第56図	IV-B区4号井戸実測図(1/60)	81
第57図	IV-B区SX01、820号ピット実測図(1/60、1/30)	83
第58図	IV-B区SX01出土土器実測図①(1/3)	85
第59図	IV-B区SX01出土土器実測図②(1/3)	86
第60図	IV-B区ピット出土土器実測図(1/3)	87
第61図	IV-B区遺構面等出土土器実測図(1/3)	87
第62図	IV-B区出土特殊遺物実測図①(2/3、1/2、1/3)	88
第63図	IV-B区出土特殊遺物実測図②(1/3)	89
第64図	IV-B区出土特殊遺物実測図③(2/3、1/2)	90
第65図	延永ヤヨミ園遺跡IV-C区全体図(1/40、1/200)	93・94
第66図	IV-C区1001~1007号土坑実測図(1/60、1/40)	97
第67図	IV-C区1004・1007・1008号土坑出土土器実測図(1/3)	99
第68図	IV-C区1008~1016号土坑実測図(1/20、1/40)	100
第69図	IV-C区1009号土坑出土土器実測図(1/3)	101
第70図	IV-C区1010号土坑出土土器実測図(1/3)	102
第71図	IV-C区1012・1013・1015・1016号土坑出土土器実測図(1/3)	103
第72図	IV-C区1・2号井戸実測図(1/60)	105
第73図	IV-C区1号井戸出土土器実測図(1/3)	106
第74図	IV-C区2号井戸出土土器実測図①(1/3)	107
第75図	IV-C区2号井戸出土土器実測図②(1/3)	108
第76図	IV-C区11号溝土層・出土土器実測図(1/40、1/3)	109
第77図	IV-C区包含層出土土器実測図①(1/3)	110
第78図	IV-C区包含層出土土器実測図②(1/3)	111
第79図	IV-C区包含層出土土器実測図③(1/3)	113
第80図	IV-C区包含層出土土器実測図④(1/3)	114
第81図	IV-C区包含層出土土器実測図⑤(1/3)	115
第82図	IV-C区包含層出土土器実測図⑥(1/3)	116
第83図	IV-C区包含層出土土器実測図⑦(1/3)	117
第84図	IV-C区包含層出土土器実測図⑧(1/3)	118
第85図	IV-C区出土土・石・鉄製品実測図(1/2、1/3、2/3)	119
第86図	IV-C区1001号土坑出土木製品実測図(1/4)	121
第87図	IV-C区1002号土坑出土木製品実測図①(1/4)	122
第88図	IV-C区1002②・1003・1005号土坑出土木製品実測図(1/4、1/8)	123

第89図	IV-C区1006・1008号土坑出土木製品実測図① (1/4)	124
第90図	IV-C区1008号土坑出土木製品実測図② (1/4)	125
第91図	IV-C区1009号土坑出土木製品実測図 (1/4)	126
第92図	IV-C区1010号土坑出土木製品実測図 (1/4)	127
第93図	IV-C区1011・1012・1014号土坑出土木製品実測図 (1/4)	128
第94図	IV-C区1号井戸出土木製品実測図① (1/8、1/4)	129
第95図	IV-C区1号井戸出土木製品実測図② (1/8)	130
第96図	IV-C区1号井戸出土木製品実測図③ (1/8)	131
第97図	IV-C区1号井戸出土木製品実測図④ (1/8)	132
第98図	IV-C区1号井戸出土木製品実測図⑤ (1/8)	133
第99図	IV-C区1号井戸出土木製品実測図⑥ (1/8)	134
第100図	IV-C区1号井戸出土木製品実測図⑦ (1/8)	135
第101図	IV-C区1号井戸出土木製品実測図⑧ (1/4、1/8)	136
第102図	IV-C区1号井戸出土木製品実測図⑨ (1/4)	137
第103図	IV-C区1号井戸出土木製品実測図⑩ (1/4)	138
第104図	IV-C区1号井戸出土木製品実測図⑪ (1/4、1/8)	139
第105図	IV-C区1号井戸出土木製品実測図⑫ (1/4)	140
第106図	IV-C区包含層出土木製品実測図① (1/4)	141
第107図	IV-C区包含層出土木製品実測図② (1/4)	142
第108図	IV-C区包含層出土木製品実測図③ (1/4)	143
第109図	IV-C区包含層出土木製品実測図④ (1/4)	144
第110図	IV-C区包含層出土木製品実測図⑤ (1/4)	145
第111図	IV-C区包含層出土木製品実測図⑥ (1/4)	146
第112図	IV-C区包含層出土木製品実測図⑦ (1/2、1/4)	147
第113図	IV-C区包含層出土木製品実測図⑧ (1/4、1/2)	148
第114図	IV-C区包含層出土木製品実測図⑨ (1/4)	149
第115図	IV-C区包含層出土木製品実測図⑩ (1/4)	150
第116図	IV-C区包含層出土木製品実測図⑪ (1/4)	151
第117図	IV-C区包含層出土木製品実測図⑫ (1/4、1/8)	152
第118図	IV-C区出土木簡類実測図 (1/2)	153
第119図	遺跡周辺の地質	164
第120図	粘土試料と薄片の偏光顕微鏡写真	165
第121図	延永ヤヨミ園遺跡IV-C区包含層出土の種実	167
第122図	資料写真（保存処理前）と採取箇所	168
第123図	黒色塗膜片のATR-FTIR結果	168
第124図	黒色塗膜片の断面観察（右図：左図の拡大）	169
第125図	毛様観察箇所の断面観察（左図：横断面、右図：断面）	169
第126図	IV-B1区・IV-C区構造変遷図 (1/800)	171

第127図	分析対象堅穴住居跡一覧	174
第128図	延永ヤヨミ園遺跡周辺における堅穴住居跡の変遷（1/6、1/160）	175
第129図	堅穴住居跡カマド廃絶行為の事例（1/60、1/120）	178
第130図	IV-C区出土木製品割合	180
第131図	III・IV区出土木製品割合	180
第132図	古代遺構概略配置図（1/2,500）	183

表 目 次

第1表	一般国道201号行橋インター関連埋蔵文化財調査地点一覧	2
第2表	延永ヤヨミ園遺跡の調査区と期間	4
第3表	延永ヤヨミ園遺跡IV-B2区遺構一覧・対照表	17
第4表	IV-B区出土特殊遺物一覧表	91
第5表	IV-C区遺構一覧・対照表	92
第6表	IV-C区出土特殊遺物一覧表	119
第7表	IV-C区出土木製品一覧表	155～158
第8表	分析試料	160
第9表	胎土中の微化石類と砂粒物の特徴	162
第10表	胎土中の粘土および砂粒組成の特徴	163
第11表	岩石片の起源と組み合わせ	163
第12表	住居跡出土粘土の蛍光X線分析による化学組成	163
第13表	延永ヤヨミ園遺跡IV区における種実同定結果	166
第14表	「津」銘資料出土一覧	184

文中写真目次

文中写真1	馬ヶ岳城跡	文中写真2	旧鉛屋門
文中写真3	旧百三十銀行行橋支店	文中写真4	稚童1号掩体壕
文中写真5	稚童無蓋掩体壕	文中写真6	稚童地下通信司令部壕
文中写真7	122号住居跡出土状況①	文中写真8	122号住居跡出土状況②
文中写真9	132号住居跡出土状況	文中写真10	133号住居跡出土状況
文中写真11	134号住居跡屋内土坑	文中写真12	134号住居跡カマド検出状況
文中写真13	137号住居跡出土状況①	文中写真14	137号住居跡出土状況②
文中写真15	137号住居跡カマド断ち割り①	文中写真16	137号住居跡カマド断ち割り②
文中写真17	138A号住居跡カマド	文中写真18	144号住居跡付近
文中写真19	1005号土坑木製品出土状況	文中写真20	包含層木製品出土状況
文中写真21	IV-B・C区現況写真	文中写真22	本遺跡の現状

I はじめに

1 調査に至る経緯と経過

一般国道 201 号は、福岡県福岡市を起点として飯塚市・田川市などの 4 市 8 町を経由し、福岡県京都郡苅田町に至る、延長約 64km を測る福岡県中央部の横断幹線道路である。当路線は、古くは篠栗街道として栄え、明治以来の日本の近代化・工業化を支えた筑豊炭田の幹線道路としての役割を果たしてきた。しかし、昭和 30 年以降の石炭から石油への転換に伴う産業基盤の著しい衰退により、現在当路線は九州縦貫自動車道福岡インター・や国道 200・211・322 号、東九州自動車道行橋インター等と連結し、かつ近年では緊急輸送ネットワークに位置づけられる主要な幹線道路となっている。

一般国道 201 号行橋インター関連は、国道 201 号の終点部に位置し、国道 10 号と連絡する。当路線は、行橋市及び苅田町市街地の交通混雑の緩和並びに東九州自動車道や新北九州空港と筑豊地域とを結ぶ重要な路線として、平成 12 年度に事業着手された延長 4.5km の区間である。

道路建設に係る経緯は、平成 14 年 9 月に当路線の建設計画についての説明が初めて国土交通省九州地方整備局北九州国道事務所から福岡県教育庁総務部文化財保護課にあったが、日本道路公团（現西日本高速道路株式会社）の民営化の問題もあり、具体的に事業が動きはじめたのは平成 19 年度からである。平成 19 年 5 月に行橋市大字吉國の終点側の試掘調査を行ったのを契機として、平成 20 年 3 月 24 日付国九整北調第 57 号で行橋インター関連予定地の埋蔵文化財の確認について依頼があった。その依頼に対し、平成 20 年 7 月 20 日付 20 教文第 2474 号で、同路線を任意に 7 地点に分割し、その取り扱いについて回答している（第 1 表、第 2 図）。

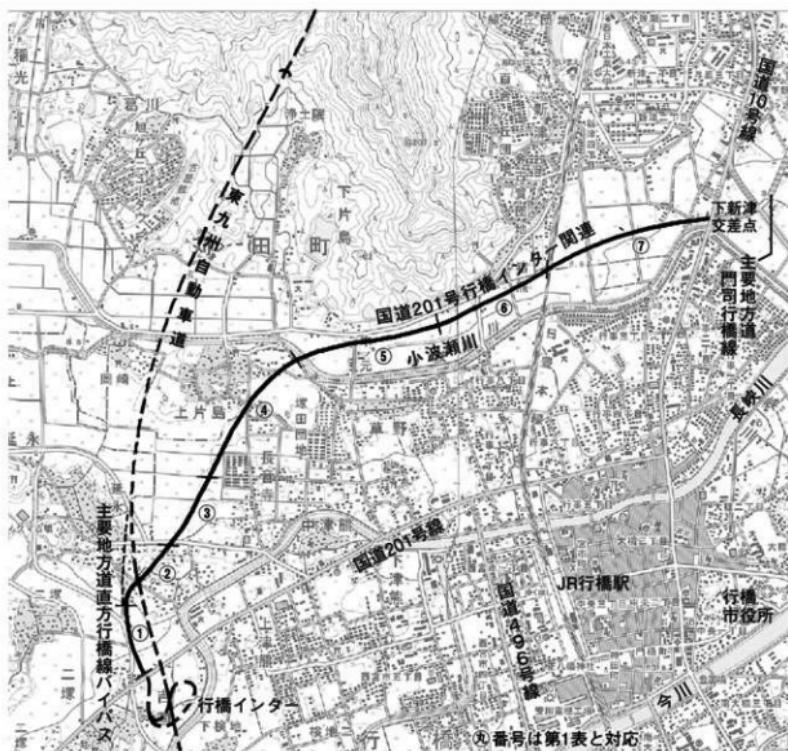
延永ヤヨミ園遺跡が所在する丘陵については、埋蔵文化財の包蔵地として周知化されていたこと、その当時すでに近接する東九州高速自動車道予定地の発掘調査が文化財保護課を担当として実施され、その非常に高い密度の遺構分布から、丘陵全体に遺構が所在すると判断し、確認調査は行わず、平成 20 年 6 月より本調査を行うこととなった。発掘調査は、平成 25 年度まで継続して実施した（第 2 表）。

本遺跡の発掘調査は路線内の用地買収が終了し、発掘調査が実施可能な地区から調査を進めた。本遺跡付近は東九州自動車道行橋インター予定地北側の隣接地であることから、西日本高速道路株式会社が施工する東九州自動車道とそのアクセス道路で福岡県行橋土木事務所（現京葉県土整備事務所）が施工する県道直方行橋線バイパスと本路線の 3 路線が複雑に入り組む形となる（第 3 図）。

そのため、当初に大きく事業ごとに I～V 区という区分けを行い（第 2 表）、本路線は台地と谷の落ち際で III・IV 区と区分けを行った。またその区の中で、調査を実施した順番と現道などを考慮し、III 区は北から A・B・C 区に、IV 区も北から A・B・C 区に小区分けを行っている。



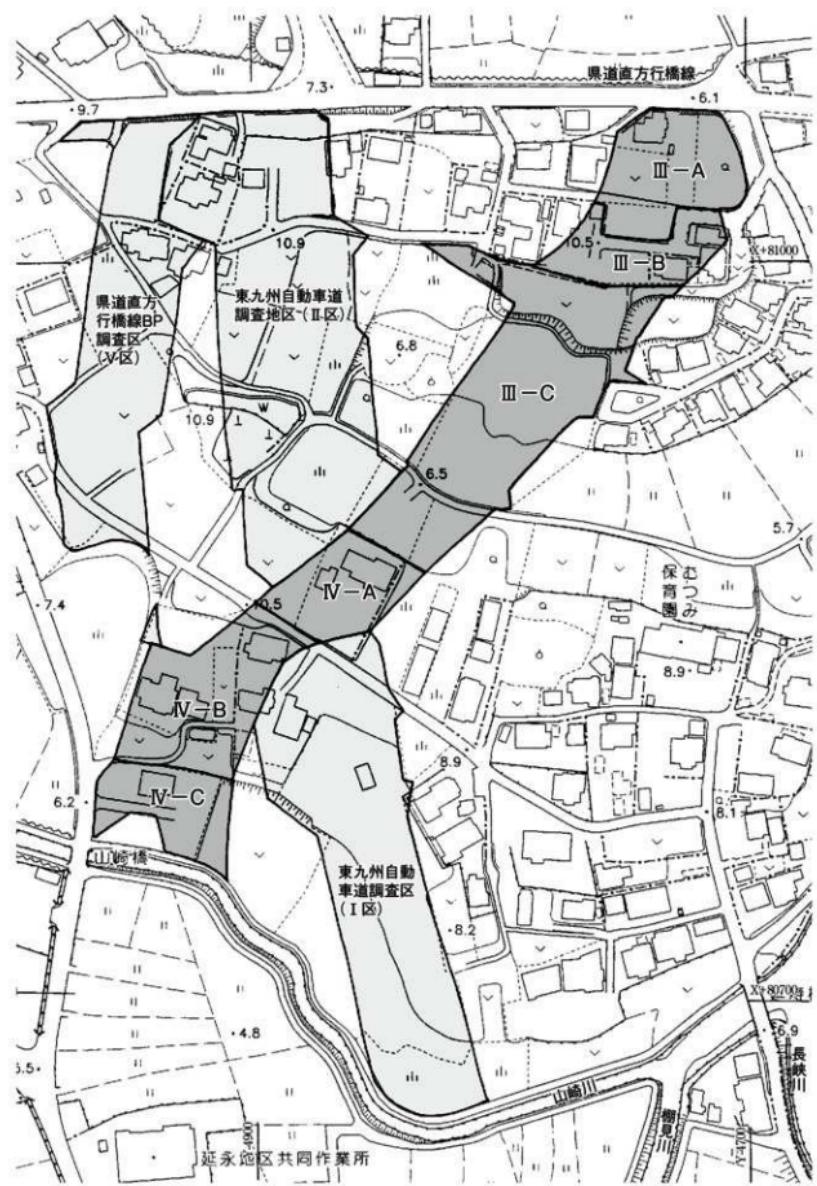
第 1 図 延永ヤヨミ園遺跡の位置



第2図 国道201号線行橋インター間連路線図と調査地点位置図 (1/25,000)

地点	遺跡名	所在地	地点範囲	回答 (H20.7.10)	試査年 度	免査調査 面積	調査年 度	報告年 度	既刊報告 書番号	その後の対応
1		行橋市大字吉国	行橋インター交差点(現国道201号、終点)～山崎川	遺跡なし	H19・20					遺跡なし
2	延永ヤヨミ園遺跡	行橋市大字吉国・延永	山崎川～黙道直方橋線	発掘調査		約19,000m ²	H20～25	H24・26	第1・3～5集	発掘調査
3		行橋市大字吉国	黙道直方橋線～長音寺团地横	要試掘調査	H21					遺跡なし
4	上片島遺跡群	行橋市大字延永 京都府都丸田町上片島	長音寺团地横～小波瀬川	要確認調査	H24	約900m ²	H24	H26	第2集	発掘調査
5		京都府都丸田町上片島	小波瀬川～都市計画道路猪熊行橋線	要試掘調査	H21					遺跡なし
6		京都府都丸田町下片島	都市計画道路猪熊行橋線～JR日豐本線	要試掘調査	H22					遺跡なし
7		京都府都丸田町新津	JR日豐本線～国道201号接続部(下新津ランプ、始点)	要試掘調査	H23					遺跡なし

第1表 一般国道201号行橋インター間連埋蔵文化財調査地点一覧



第3図 調査区割図 (1/2,000)

事業主体	事業名	調査担当	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25
国土交通省北九州国道路事務所	国道201号行橋インター関連	進村		III-C IV-C					
		下原		IV-A	IV-A・B	IV-B			
		城門	III-C		III-C		III-B		
		大庭				IV-B III-A・B	III-B		
		吉村						III-B	
西日本高速道路株式会社福岡工事事務所	東九州自動車道	飛野	I 区	I-1,I-3, I-4,I-5	I-1,I-3, I-4	I-2,I-3, I-4,I-7			
		城門		II-1	II-2	II-1~3	II-4		
福岡県京築県土整備事務所	県道直方行橋線	岡田			V-A・B				
		宮地				V-2~4			
		飛野					V-5・6	V-5・6	

第2表 延永ヤヨミ園遺跡の調査区と期間

2 調査・整理の組織

平成20～25年度の発掘調査関係者及び平成23～26年度の整理作業関係者は以下のとおりである。なお、平成23年度からは組織改革により、九州歴史資料館にて事業者との契約から整理報告までを行っている。

国土交通省九州地方整備局北九州国道路事務所

	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
所長	後藤 徹	後藤 徹	世利正美	世利正美	赤星文生	赤星文生	鶴 敏信
副所長	柳田誠二	上村一明	上村一明	大成和明	大成和明	大成和明	福崎昌博
建設監督官	橋口洋一	松永鉄治	松永鉄治	松永鉄治	松木厚廣	松木厚廣	二口卓史
調査課長	池田稔浩	池田稔浩	大槻 謙	大槻 謙	森山安夫	森山安夫	
専門職	渡辺幹夫	渡辺幹夫	渡辺幹夫	東 昌毅	東 昌毅	羽田史郎	
専門調査員	徳重俊博	徳重俊博	徳重俊博	秋田賢一	秋田賢一	猪井知明	
国土交通技官			山本陽子	山本陽子			
工務課長	今田一典	谷川征嗣	谷川征嗣	谷川征嗣	松元勝美	松元勝美	桜井敏郎
専門官			鍛 淳司	鍛 淳司	見玉祐一	見玉祐一	石橋 正

福岡県教育委員会（平成23年度の機構改革により、発掘調査業務は九州歴史資料館に移管）

	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
総括							
教育長	森山良一	森山良一	杉光 誠	杉光 誠	杉光 誠	杉光 誠	城戸秀明
教育次長	柄崎洋二郎	亀岡 靖	荒巻俊彦	荒巻俊彦	荒巻俊彦	城戸秀明	西牟田龍治
理事兼統務部長							川添弘人
統務部長	荒巻俊彦	荒巻俊彦	今田義雄	今田義雄	西牟田龍治	西牟田龍治	
副理事兼文化財保護課長	磯村幸男						
文化財保護課長		平川昌弘	平川昌弘	平川昌弘	伊崎俊秋	伊崎俊秋	赤司善彦
同 副課長	池邊元明	池邊元明	伊崎俊秋	伊崎俊秋			
参考兼課長技術補佐	小池史哲	小池史哲	小池史哲				
課長補佐	前原寅史	前原寅史	日高公徳				
参考補佐兼調査第二係長	飛野博文	飛野博文	飛野博文				

	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
庶務							
管理係長	富永育夫	富永育夫	富永育夫				
主事	野田 雅	野田 雅	仲野洋輔				
調査							
調査第二係							
主任技師	進村真之	進村真之	下原幸裕				
			下原幸裕	城門義廣			
技師	城門義廣	城門義廣					
九州歴史資料館							
総括							
館長	西谷 正	西谷 正	荒巻俊彦	杉光 誠			
副理事兼副館長				伊崎俊秋			
副館長	南里正美	森田隆行	森田隆行				
参考（文化財調査室長）			飛野博文	飛野博文			
企画主幹（総務室長）	圓城寺紀子	圓城寺紀子	圓城寺紀子	塙塚孝憲			
企画主幹（文化財調査室長）	飛野博文	飛野博文					
企画主幹（文化財調査室室長補佐）		吉村靖徳	吉村靖徳	吉村靖徳			
技術主査（文化財調査班長）	小川泰樹	小川泰樹	小川泰樹	秦 恵二			
庶務							
企画主査	塙塚孝憲	長野良博	長野良博	山崎 彰			
事務主査		青木三保	青木三保	南里成子			
			南里成子	宮崎奈巳			
主任主事	熊谷泰容						
	近藤一崇	近藤一崇					
主事	谷川賢治	谷川賢治	三好洗一	秦 健太			
調査							
企画主幹			吉村靖徳				
主任技師	大庭孝夫	大庭孝夫					
	下原幸裕	城門義廣					
整理報告							
企画主幹				吉村靖徳			
参考補佐	小池史哲	小池史哲					
技術主査				小川泰樹			
				酒井芳司			
	加藤和歲	加藤和歲	加藤和歲				
	進村真之	進村真之	進村真之	進村真之			
				大庭孝夫			
主任技師	大庭孝夫	大庭孝夫	大庭孝夫				
	下原幸裕	下原幸裕	下原幸裕	下原幸裕			
		小林 啓	小林 啓	小林 啓			
	城門義廣	城門義廣	城門義廣	城門義廣			
整理指導員				岩橋由季			

なお、発掘調査・整理報告にあたっては、九州大学坂上康俊教授、福岡市経済観光文化局山口謙治氏、熊本県教育委員会村崎孝宏氏、奈良文化財研究所小田裕樹氏をはじめ、地元の吉国区、延永区の方々、国土交通省九州地方整備局北九州国道事務所、戸田建設（株）、行橋市都市政策課国道・高速道対策室、行橋市教育委員会文化課の皆様よりご協力を賜った。記して感謝いたします。

II 位置と環境

1 地理的環境

行橋市は、福岡県北東部の周防灘（瀬戸内海）に面した場所にあり、東経 $130^{\circ} 54' \sim 131^{\circ} 3'$ 、北緯 $33^{\circ} 40' 20'' \sim 32^{\circ} 45'$ 、面積は 68.65km²を測る。東は周防灘、北は京都郡苅田町と北九州市小倉南区、西は京都郡みやこ町、南はみやこ町と築上郡築上町に接する。行橋市は昭和 29 年 10 月に行橋町、糞島村、今元村、仲津村、泉村、今川村、稗田村、延永村、椿市村の 9 町村が合併し、成立した自治体で、人口は現在 70,000 人余りを数える。

行橋市は、地形的には臨海盆地に位置づけられ、その中央部には京都平野が発達し、市街地を形成している。その盆地の周囲を見てみると、北西部は国指定天然記念物である平尾台カルストに接し、周防変成岩類、平尾花崗閃綠岩類が広く分布する。この平尾花崗閃綠岩類の風化・浸食面上には第四紀更新統の河川堆積層が高～低位段丘地形を形成し、本遺跡は東・南を長崎川、北を小波瀬川によって形成された平尾花崗閃綠岩類を基盤とする砂礫台地である河成の低位段丘上に立地する。本遺跡が立地するこの低位段丘は、河川堆積物である黒添砂層が約 5.5 m 堆積し、その上には阿蘇 4 火碎流堆積層が約 0.5m ~ 3 m 厚く堆積し段丘を形成する。

長崎川・小波瀬川流域の低湿地の地下には海成層である行事層が分布するが、この海成層は行橋市草野の地下 2 m でも確認されていることから、推定旧海岸線は深く湧入していることが判明している。

2 歴史的環境（第4図）

本遺跡周辺の歴史的環境は、国道 201 号に係る本遺跡調査報告書 1 冊目『延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ区 I』(2013) で旧石器～古墳時代、4 冊目の『延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ区 II』(2015) で古代、2 冊目の『延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ区 I』(2015) で中世、3 冊目(本報告)の『延永ヤヨミ園遺跡Ⅳ区 II』(2015) で近世～現代について取り扱う。以上、本卷では、近世～現代について概観することとした。

近世

豊臣秀吉の九州平定を受け、天正 15 年（1587）に豊前国京都・仲津・築城・上毛・下毛・宇佐の 6 郡 16 万石は、黒田孝高（如水）に与えられ、子息の黒田長政は馬ヶ岳城に入った。

この馬ヶ岳城跡は、行橋市とみやこ町の境に聳える標高 216 m の馬ヶ岳とその山麓に築かれた山

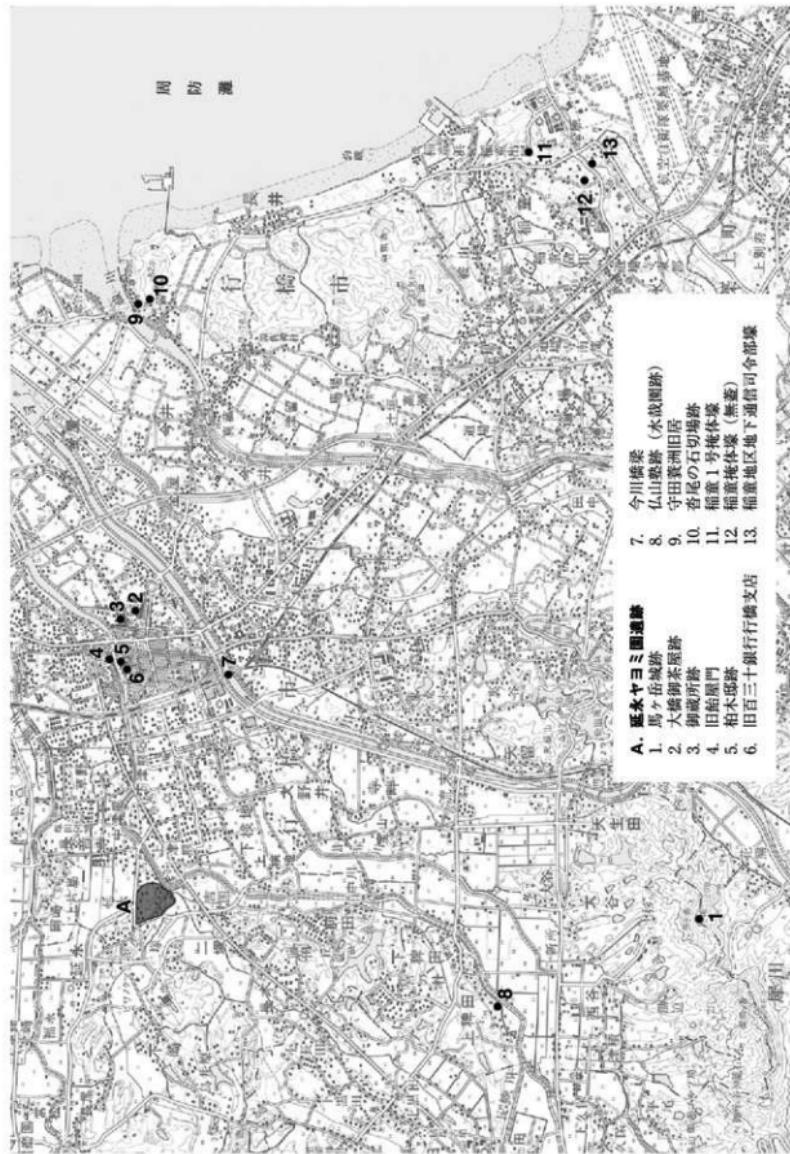


城で、山頂には大小 2 つの曲輪群とそこから山麓に至る尾根上には、約 700 m にもわたる土塁や敵状堅掘群、横堀が確認されている（文中写真 1）。

慶長 5 年（1600）の関ヶ原の戦いののち、黒田氏は筑前国福岡 52 万石に転封となり、代わりに豊前国と豊後国国東・速水の 2 郡 39 万石の領主として、丹後国宮津から細川忠興が豊前中津城に入った。細川忠興は、慶長 7 年（1602）から小倉

文中写真 1 馬ヶ岳城跡（北から）

周防灘



第4図 周辺道路分布図（近世・近代）(1/50,000)



文中写真2 旧飴屋門（行橋市指定文化財） 文中写真2 旧飴屋門（行橋市指定文化財）を設けた。京都郡には、久保・黒田・延永・新津の4つの手永をおき、京都郡代の支配のもと、手永内の村々の民政を行っていた。

長崎川（江戸時代は行事川・大橋川と称される）の河口である京都郡行事村・仲津郡大橋村は、江戸時代初期まで半農半漁の村落にすぎなかったが、長崎川と中津街道（中津往来）、田川郡に至る東西道が交わる場所であることから、その後大橋御茶屋や御藏所、手永宿、高札場など様々な公的施設が設けられ、小倉城下を除けば領内屈指の在郷町として発展する。

この在郷町には、行事村の飴屋と新屋、大橋村の柏屋などの在郷商人が、藩から許可を得て、米や綿実、櫻蝋、酒、醤油などを商うことで、小倉藩を代表する豪商に成長し、郡内通用の私札の発行さえも許されている。特に行事村の飴屋は、小倉藩屈指の豪商であり、現在もその屋敷跡には領内視察の際に小倉藩主を迎えるために建てられた旧飴屋門（文中写真2）があり、ありし日の姿を伝える。

このように在郷町として栄えた当時の行橋には、儒学者・漢詩人である村上佛山が天保6年（1835）に開いた、全国的に知られた私塾「水哉園（仏山塾）」がある。「水哉園」には、九州をはじめ全国各地から約1300人余りの入門者があり、現在も「仏山塾跡（水哉園跡）」として塾関係資料とともに県指定を受け、保存されている。

さらに周防灘を望む沓尾には、「水哉園」で学び、初代塾長を務め、その後大庄屋、区長、県会議員として干拓事業など地域の発展に力を尽くした守田養洲の旧宅が「守田養洲旧居」（市指定史跡）として、当時の趣を伝えている。また「守田養洲旧居」の裏山にあたり、長崎川河口に位置する沓尾山は古くから石切り場として利用され、江戸時代初期には小倉藩主の命令によって、沓尾山から切り出された石材の一部は、船で大坂まで運ばれ、大坂城の石垣の一部に使用された。現在も沓尾山には石を切り出した跡がいくつも残る。



文中写真3 旧百三十銀行行橋支店

城を本拠とする。

寛政9年（1632）には細川氏が肥後国熊本54万石に転封となり、代わりに小笠原忠真が、播磨国明石から豊前国企救・田川・京都・仲津・築城郡と上毛郡の一部計15万石を与えられ、幕末までこの地を治めた。

小倉藩は、「手永制」という十数～二十数ヶ村を一つの手永とし、地方支配のための行政区画を設けた。京都郡には、久保・黒田・延永・新津の4つの手永をおき、京都郡代の支配のもと、手永内の村々の民政を行っていた。

長崎川（江戸時代は行事川・大橋川と称される）の河口である京都郡行事村・仲津郡大橋村は、江戸時代初期まで半農半漁の村落にすぎなかったが、長崎川と中津街道（中津往来）、田川郡に至る東西道が交わる場所であることから、その後大橋御茶屋や御藏所、手永宿、高札場など様々な公的施設が設けられ、小倉城下を除けば領内屈指の在郷町として発展する。

この在郷町には、行事村の飴屋と新屋、大橋村の柏屋などの在郷商人が、藩から許可を得て、米や綿実、櫻蝋、酒、醤油などを商うことで、小倉藩を代表する豪商に成長し、郡内通用の私札の発行さえも許されている。特に行事村の飴屋は、小倉藩屈指の豪商であり、現在もその屋敷跡には領内視察の際に小倉藩主を迎えるために建てられた旧飴屋門（文中写真2）があり、ありし日の姿を伝える。

このように在郷町として栄えた当時の行橋には、儒学者・漢詩人である村上佛山が天保6年（1835）に開いた、全国的に知られた私塾「水哉園（仏山塾）」がある。「水哉園」には、九州をはじめ全国各地から約1300人余りの入門者があり、現在も「仏山塾跡（水哉園跡）」として塾関係資料とともに県指定を受け、保存されている。

さらに周防灘を望む沓尾には、「水哉園」で学び、初代塾長を務め、その後大庄屋、区長、県会議員として干拓事業など地域の発展に力を尽くした守田養洲の旧宅が「守田養洲旧居」（市指定史跡）として、当時の趣を伝えている。また「守田養洲旧居」の裏山にあたり、長崎川河口に位置する沓尾山は古くから石切り場として利用され、江戸時代初期には小倉藩主の命令によって、沓尾山から切り出された石材の一部は、船で大坂まで運ばれ、大坂城の石垣の一部に使用された。現在も沓尾山には石を切り出した跡がいくつも残る。

近現代

明治4年（1872）、廃藩置県により豊津（小倉）藩は豊津県となり、同年11月には豊津県は小倉県、明治9年（1876）には福岡県となった。明治11年（1878）に京都郡仲津郡役所が当時の行事村に置かれるが、明治22年（1889）の町村制施行により延永村が成立し、昭和29年（1954）10月に行橋町、蓑島村、今元村、仲津村、泉村、今

川村、稗田村、延永村、椿市村の9町村が合併し、行橋市が誕生した。現在、行橋市は京築地域の中 心都市として発展している。

明治時代になっても行事村や大橋村は地域商業 の中心で、柏屋の柏木勘八郎が明治11年（1878）に第八十七国立銀行を設立する。また大阪に本店 を置いた百三十銀行の行橋支店として、辰野金吾 が設計に関わった、大正3年（1914）竣工の煉瓦 造りの建物である旧百三十銀行行橋支店（県指定 建造物）は、本地域の近代化の歴史を物語る重要 な遺産であり、現在は市民ギャラリーとして利用 されている（文中写真3）。

また明治28年（1885）には九州鉄道株式会社の鉄道が開業し、町の発展に大きな役割を果たした。 なお現在でも今川に架かった鉄橋の赤レンガ橋台は使用されている。

戦時中には、旧染城海軍航空隊基地に隣接していたため、周防灘沿いの稻童地区には敵の空襲か ら軍用機を守る格納庫である掩体壕や地下通信司令部壕（文中写真6）などの軍事施設が建設され た。また掩体壕は、大型・小型、天井の有無等で分類されるが、市指定史跡の稻童1号掩体壕は、 鉄筋コンクリート製の大型の有蓋掩体壕で、旧日本軍の大型爆撃機である「銀河」や「一式陸上攻 撃機」、夜間戦闘機「月光」が格納されていたとされる（文中写真4）。

【引用・参考文献】

- 行橋市史編纂委員会 2006 『行橋市史 中・下巻』 行橋市
行橋市教育委員会 2007 『行橋市の文化財』 行橋市教育委員会
行橋市歴史資料館 2009 『明治の元勲を感動させた男 守田義洲』
行橋市教育委員会・(財)行橋市文化振興公社
行橋市歴史資料館 2010 『生誕二百年記念 村上佛山』 行橋市教育委員会・(財)行橋市文化振興公社
行橋市歴史資料館 2011 『周防灘沿岸の掩体壕と戦争遺跡 写真展』
行橋市教育委員会・(財)行橋市文化振興公社
行橋市歴史資料館 2013 『在郷町を彩った人々』 行橋市教育委員会・(財)行橋市文化振興公社
行橋市文化遺産活性化実行委員会・行橋市教育委員会 2014 『行橋の歴史遺産 ゆくはし歴史ガイドブック』



文中写真4 稲童1号掩体壕
(行橋市指定文化財)



文中写真5 稲童無蓋掩体壕



文中写真6 稲童地下通信司令部壕

III 発掘調査の記録

1 遺跡の概要

延永ヤヨミ園遺跡は、福岡県行橋市大字延永・吉国に位置し、平尾台カルストから東西方向に伸びた、東・南を長崎川、北を小波瀬川によって形成された砂礫台地である中位～低位段丘上に立地する。昭和22年撮影の空中写真（『延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ区I』参照）や試掘・確認調査から、遺跡のすぐ北側には小波瀬川の支流と想定される旧河川があり、本遺跡南側は現在の数倍の川幅が想定される山崎川、西側には現在より大きくなっている長崎川が流れ、かつて丘陵三方は河川や湿地帯で囲まれた状況であったと考えられる（第132図）。

本遺跡は、福岡県文化財地図（福岡県教育委員会 1976『福岡県遺跡等分布地図（行橋市・京都郡）』）ではヤヨミ園遺跡（県登録番号 140140・140141）、文化庁遺跡地図（文化庁文化財保護部 1984『全国遺跡地図 福岡県』）ではヤヨミ園遺跡 I・II と登録されていたが、平成21年度に刊行された行橋市内遺跡等分布地図（伊藤昌広・中原博 2010『行橋市内遺跡等分布地図』行橋市文化財調査報告書第37集 行橋市教育委員会）では、市登録番号 14115010 の延永ヤヨミ園遺跡として登録された。

本遺跡は丘陵の先端部に位置するが、周知の遺跡の分布からこの丘陵のビワノクマ古墳付近まで弥生～古墳、中世の集落跡が広がっていることが推測される。

2 延永ヤヨミ園遺跡及び関連遺跡の既往の調査

●延永ヤヨミ園遺跡 I 区

東九州道自動車道建設に伴い、平成19～22年度に福岡県教育庁総務部文化財保護課が発掘調査を行った。

弥生時代末～古墳時代前期、古墳時代後期を中心とする竪穴住居跡74棟以上等を検出した。調査区内における標高が高い部分の竪穴住居跡はほとんどが削平され、残っている竪穴住居跡も非常に浅いものが多く、本来は丘陵頂部を中心に濃密に竪穴住居跡が営まれていたと想定される。

集落の変遷においては、I区54号竪穴住居跡が弥生時代後期後半まで遡ることが確認された。また出土遺物では、I区25号竪穴住居跡から河内産と思われる庄内型甕數点が出土し（第5図）、I区45号竪穴住居跡から新羅系陶質土器のつまみ付き蓋が出土したことは注目される。

・飛野博文編 2013『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告-9- 福岡県行橋市延永ヤヨミ園遺跡 I 区の調査』

九州歴史資料館

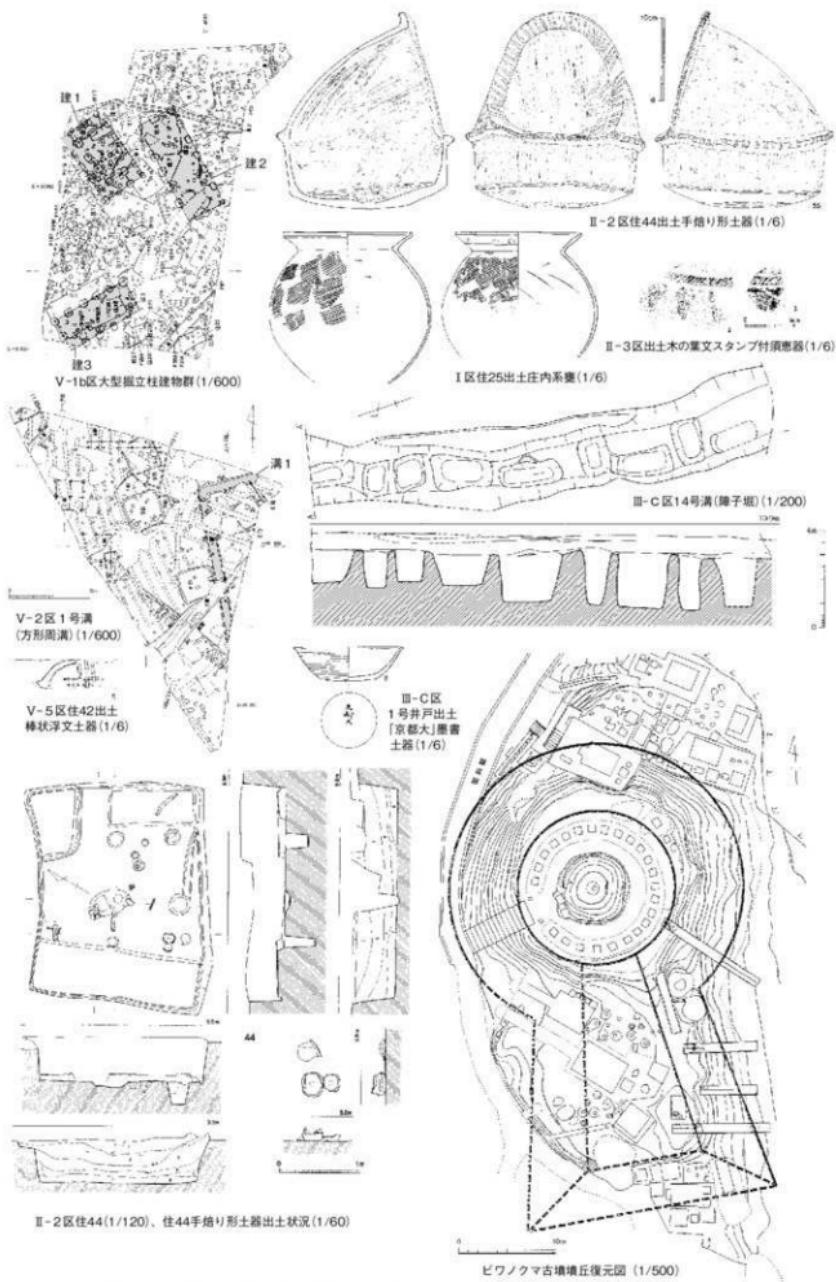
○延永ヤヨミ園 I 区の2：今年度報告。

●延永ヤヨミ園遺跡 II 区

東九州道自動車道建設に伴い、平成20～24年度に福岡県教育庁総務部文化財保護課・九州歴史資料館が発掘調査を行った。

○II-1区

弥生時代末～古墳時代前期、古墳時代後期を中心とする竪穴住居跡26棟以上等を検出した。波板状痕跡及び帶状硬化が認められる道路状構造や、井戸と考えられるII-1区8号土坑からは京都郡



第5図 延永ヤヨミ園遺跡等関係図 (1/6、1/60、1/120、1/200、1/500、1/600)

大領であった物部氏に関係する可能性がある「京都物太」銘墨書須恵器壺身が出土した。同じく井戸と考えられる12号土坑からは、馬骨1頭分が出土した。

- ・城門義廣編 2012『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告-2- 福岡県行橋市延永ヤヨミ園遺跡II区の調査1』
九州歴史資料館

○II-2～4区

弥生時代末～古墳時代前期、古墳時代後期を中心とする堅穴住居跡174棟等を検出した。

古墳時代前期前半のII-2区44号堅穴住居跡は、深さが約12m残る、非常に深く掘られた堅穴住居跡で、住居内からは吉備系の土器や手焙り形土器が出土した（第5図）。

弥生時代後期末～古墳時代前期前半のII-2区の10・13号溝と庄内系壺が出土した同時期のII-2区7号溝は、南北36m以上×東西20m以上の「ヒ」字形を呈し、方形周溝の中に区画溝を持つ構造となる。区画内部の同時期の主な遺構は堅穴住居跡1棟のみであり、同時期の堅穴住居跡は区画外に造られる。本遺跡は弥生時代後期末～古墳時代前期前半に集落内に複数の方形周溝を持つ構造であることが判明しており、注目される。

また古墳時代中期前半のII-2区30号堅穴住居跡は、カマドはないものの、多孔式瓶が出土しており、土師器としては非常に珍しい土師器樽形甌も出土した。

II-2区2号掘立柱建物跡は、2×5間以上で、V-1区1・2号建物跡とほぼ主軸が揃うため、一連の建物群になると考えられる。また2号建物跡を切る方形区画溝となる8世紀の20号溝を検出したが、同時期の溝内部施設は不明である。II-3区11号堅穴住居跡と19号溝からは、木の葉文スタンプのある壺胴部片が出土した（第5図）。

- ・城門義廣編 2014『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告-11- 延永ヤヨミ園遺跡II区2』 九州歴史資料館

●延永ヤヨミ園遺跡III区

国道201号行橋インター関連建設に伴い、平成20～25年度に福岡県教育庁総務部文化財保護課・九州歴史資料館が発掘調査を行った。

○延永ヤヨミ園遺跡III-C区

弥生時代末～古墳時代前期、古墳時代後期を中心とする堅穴住居跡17棟等を検出した。

8世紀の1号井戸からは京都郡大領を示すと思われる「京都大」銘墨書土師器壺が出土した（第5図）。また中世前期の14号溝は障子堀であり、中世屋敷地の区画溝として注目される（第5図）。

- ・大庭孝夫編 2013『延永ヤヨミ園遺跡III区1』 国道201号行橋インター関係関連埋蔵文化財調査報告第1集

九州歴史資料館

○延永ヤヨミ園遺跡III-A・B・C区：今年度報告

●延永ヤヨミ園遺跡IV区

国道201号行橋インター関連建設に伴い、平成21～23年度に福岡県教育庁総務部文化財保護課・九州歴史資料館が発掘調査を行った。

今年度2分冊で報告。

●延永ヤヨミ園遺跡V区

県道直行橋線バイパス建設に伴い、平成21～24年度にかけて、福岡県教育庁総務部文化財保護課・九州歴史資料館が、約5,700m²を発掘調査を行った。

○V-1～3区

弥生時代末～古墳時代前期、古墳時代後期を中心とする竪穴住居跡49棟等を検出した。V-2区1号溝は、調査区内でL字状に屈折する古墳時代前期前半の南北20m以上×東西10m以上となる方形周溝で、土層から溝外側土墨が想定されている。Ⅲ-A・B区で検出された陸橋を持つ方形周溝との関係が注目される（第5図）。またV-2区2号竪穴住居跡では、古墳時代中期の土器がまとまって出土した。

V-1区では、7世紀後半と考えられる2×3間三面庇の1号掘立柱建物跡、2×6間の2号掘立柱建物跡、2×5間の3号掘立柱建物跡が検出された（第5図）。ほぼ直角に配される2・3号建物跡と1号建物跡は時期差が指摘されている。また1号建物跡に併設されたと想定される大型土坑の1・2号土坑内からは、畿内系暗文土師器が出土した。

・岡田諭編 2013『延永ヤヨミ園遺跡－V区－1・2・3区－』福岡県文化財調査報告書第238集 九州歴史資料館

○V-4～7区

弥生時代末～古墳時代前期、古墳時代後期を中心とする竪穴住居跡100棟以上を検出した。集落の変遷については、V-5区44・82号竪穴住居跡は弥生時代後期後半まで遡ること、調査区から5世紀代の初期須恵器片が少数出土しており、古墳時代中期にも小規模ながら継続して集落が営まれていたこと、本遺跡の竪穴住居跡の下限となる7世紀後半のV-5区15号竪穴住居跡を確認したことなどが明らかになった。出土遺物では、古墳時代前期前半のV-5区42号竪穴住居跡から、近江系と思われる棒状浮文が付く壺が出土した（第5図）。

・飛野博文編 2014『延永ヤヨミ園遺跡－V区－4～7区－』福岡県文化財調査報告書第244集 九州歴史資料館

●ビワノクマ古墳（福岡県指定史跡）

本遺跡東の独立丘陵上に立地する。昭和30年に墓地造成時に竪穴式石室が発見され、九州大学の鏡山猛氏らが石室及び一部墳丘の発掘調査を行った。未盜掘の石室内からは銅鏡・刀剣・鞍・鉄鎌・甲冑小札等の副葬品、墳丘下部からは古墳築造以前のものと思われる箱式石棺や土坑、銅鏡片が発見された。本地域の歴史を考える上で重要な古墳（円墳）として、同年中に福岡県指定史跡に指定されている。

その後古墳の範囲と形状を把握するため、平成20～23年度にかけて、行橋市教育委員会が墳丘のトレンチ調査を実施した。墓地や樹木のためかなり制約を受けたトレンチ調査であったものの、前方部トレンチから墳丘積土が確認されたこと、前方部墳裾と思われる地山成形の傾斜変換点を検出したことから、全長50m程度の前方後円墳である可能性が指摘されている（第5図）。また報告書では副葬品から4世紀末まで遡らせる意見もあることから、本遺跡との関係が注目される。

・鏡山猛 1959「福岡県行橋市琵琶隈古墳」『日本考古学年報8』 日本考古学協会

・山口裕平 2013『ビワノクマ古墳』行橋市文化財調査報告書第47集 行橋市教育委員会

3 IV-B 2区の遺構と遺物

延永ヤヨミ園遺跡は、京都平野に突き出すように東に延びる丘陵の先端部に位置するが、今回調査を行った付近で丘陵は二股に分かれている。

この二股に分かれた北側丘陵からその南の谷部分がⅢ区、南側丘陵から南斜面～谷をIV区として大きく区分けし、Ⅳ区は丘陵上を東西に走る道路及び斜面・谷を隔てるコンクリート壁で、北からA・B・C区と小区分けを行った（第3図）。さらに、調査年度及び調査担当者が交代したことから、平成23年度に主に調査を行った南東部をIV-B 2区（本報告）、平成22年度に主に調査を行った部分をIV-B 1区（報告は『延永ヤヨミ園遺跡IV区 I』）とし、分けて報告する（第6図）。

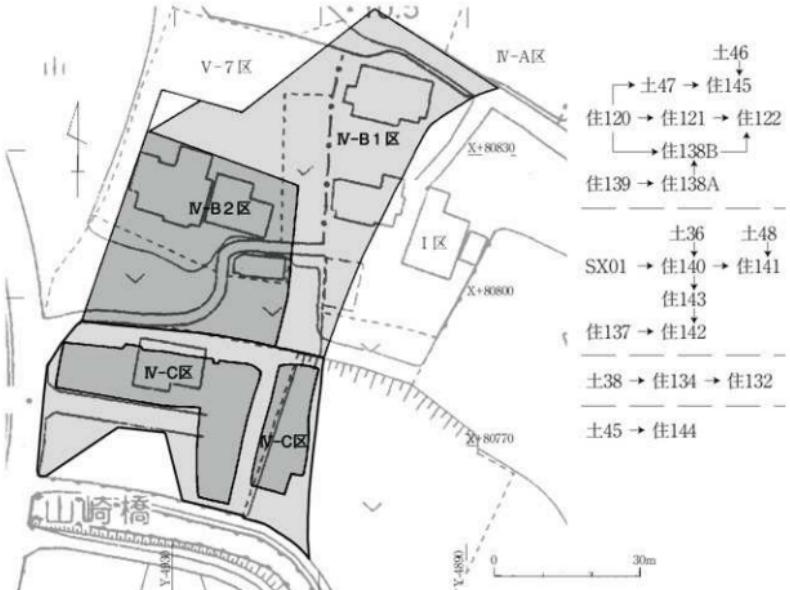
なお、以下で報告する遺構名の前には、いずれも区名を明示しているが、IV-B 1・2区は通し番号で調査を行い、遺構が重複することはないため、報告する遺構名には「IV-B区」のみ付けて報告することとしたい。

（1）調査の経過

先述したように、本報告に関係する平成23年度の調査の経過のみ以下で記述する。

平成23年4月に機構改革があり、本事業の調査担当部署が福岡県教育庁総務部文化財保護課調査第二係から九州歴史資料館文化財調査室文化財調査班になり、調査担当者もこれまでの下原に加え、新たに大庭が担当することになった。

平成23年度のIV-B区の発掘調査は、5月10日にプレハブ・機材搬入等を行い、開始した。しかし、平成22年度に調査終了したⅢ-C区の排水処理の関係で、地元との調整に手間取り、実際の掘削作業は6月22日から開始した。その間、5月22日に安全パトロールがあり、西谷正九州歴史資料館



第6図 延永ヤヨミ園遺跡IV-B・C区区割図(1/1,000)、IV-B2区遺構切り合い関係図



第7図 延永ヤヨミ園遺跡IV-B2区全体図(1/200)

長、荒巻俊彦教育次長、今田義雄総務部長、伊崎俊秋文化財保護課長他の来訪を受けた。

まず調査にあたっては、表土剥ぎのみ終了していた南西部の遺構検出と、あわせて平成22年度からの継続調査である古代道路の調査を開始した。遺構検出から始めた南西部も遺構密度が高く、遺構検出に手間取ったが、7月14日からピット、7月15日からは131～134号竪穴住居跡の掘削を開始した。古代道路については、7月5日から調査を再開したが、溝状に深く掘りこんでいるため、度々雨水がたまり、調査は難航した。7月25日には佐賀大学重藤輝行准教授、26日には九州大学辻田淳一郎准教授の来訪を受けた。

8月17日には九州歴史資料館で行った発掘報告会での報告を受け、平成22年度に調査を行ったⅢ-C区の木製導水施設の記事が毎日新聞朝刊の一面に、8月18日には西日本新聞に記事が掲載された。8月18日には、元第一経済大学教授の田中正日子氏が来訪された。8月19日に道路工事の関係でプレハブ等の作業ヤードをIV-A区からⅢ-C区の調査終了地に移動した。9月7日には、延永小学校3年生60名が体験発掘を行った。10月8日に東亜航空技研による空中写真を撮影した。10月17日には福岡大学武末純一教授の来訪を受けた。

その後、IV-B区の補足調査及び実測作業をⅢ-A・B区の調査と並行して行い、平成24年3月26日に埋め戻しを含めて調査が終了した。

(2) 調査区の概要

今回報告する延永ヤヨミ園遺跡IV-B2区は、南側丘陵の南斜面に位置し、南の谷部はIV-C区にあたる。IV区で検出された遺構はいずれも後世の田畠及び宅地造成により削平を受けており、標高が高いIV-B1区よりは総じて遺構の残りは良いものの、壁の残りが5cm程度の竪穴住居跡も存在するため、本来はさらに多くの遺構が存在したものと推測される。特に竪穴住居跡については斜面に位置すること及び後世の削平により、遺構北側の残りが良く、南側の残りは悪い。

検出した遺構は、調査区中央付近では切り合うが、南側及び南西側では切り合いが少ないとから、集落の南端にあたることが確認できた。

今回報告するのは、竪穴住居跡21棟、掘立柱建物跡1棟、土坑14基、井戸1基、不明遺構(SX)1基、ピット多数である。遺構及び遺物は、概ね弥生時代後期後半～古墳時代前期、古墳時代後期、古代、中世に分かれ、他の調査区の傾向と同一である。

以下に、遺構ごとの報告を行うが、調査担当者の大庭・下原に加え、城門義廣・岩橋由季も執筆しているため、文末に筆者名を付している。

区	遺構種	報告時 遺構名	調査時 遺構名	備考(名前は 報告者名)
IV-B	住居	住居120	住居120	下原
IV-B	住居	住居121	住居121	下原
IV-B	住居	住居122	住居122	下原
IV-B	住居	住居130	住居130	下原
IV-B	住居	住居131	住居131	大庭
IV-B	住居	住居132	住居132	大庭
IV-B	住居	住居133	住居133	大庭
IV-B	住居	住居134	住居134	大庭
IV-B	住居	住居135	住居135	大庭
IV-B	住居	住居136	住居136	大庭
IV-B	住居	住居137	住居137	大庭
IV-B	住居	住居138A	住居138	大庭
IV-B	住居	住居139B	住居138	大庭
IV-B	住居	住居139	住居139	大庭
IV-B	住居	住居140	住居140	大庭
IV-B	住居	住居141	住居141	大庭
IV-B	住居	住居142	住居142	大庭
IV-B	住居	住居143	住居143	大庭
IV-B	住居	住居144	住居144	大庭
IV-B	住居	住居145	住居145	大庭
IV-B	住居	住居146	住居146	下原
IV-B	建物	建物9	名称無し	大庭
IV-B	土坑	土坑29	土坑29	下原
IV-B	土坑	土坑31	土坑31	下原
IV-B	土坑	土坑32	土坑32	下原
IV-B	土坑	土坑33	土坑33	大庭
IV-B	土坑	土坑34	土坑34	大庭
IV-B	土坑	土坑35	土坑35	大庭
IV-B	土坑	土坑36	土坑36	大庭
IV-B	土坑	土坑37	土坑37	大庭
IV-B	土坑	土坑38	土坑38	大庭
IV-B	土坑	土坑43	土坑43	大庭
IV-B	土坑	土坑45	土坑45	大庭
IV-B	土坑	土坑46	土坑46	下原
IV-B	土坑	土坑47	土坑47	下原
IV-B	土坑	土坑48	土坑48	大庭
IV-B	井戸	井戸4	井戸4	下原
IV-B	SX	SX01	落ち2	大庭

第3表 延永ヤヨミ園遺跡IV-B2区
遺構一覧・対照表

なお、出土遺物の年代観については、以下の論考を参考にしたが、もし各遺構・遺物の年代観に誤りがあれば筆者の責任である（大庭）。

弥生土器：武末統一・上田龍児 2006「弥生土器の編年と地域間交流」「行橋市史 資料編 原始・古代」行橋市
古墳時代土器：宇野惣敏 2006「豊前北部の土器と編年」「行橋市史 資料編 原始・古代」行橋市

古墳・古代の須恵器：小田富士雄・長直信 2006「豊前の須恵器生産」「行橋市史 資料編 原始・古代」行橋市
古墳・古代の須恵器・土師器：佐藤浩司 1995「豊前の6～9世紀の土器」「古文化談叢」第34集 九州古文化研究会

中世土器：山本信夫・山村信榮 1997「中世食器の地域性－九州・南西諸島－」

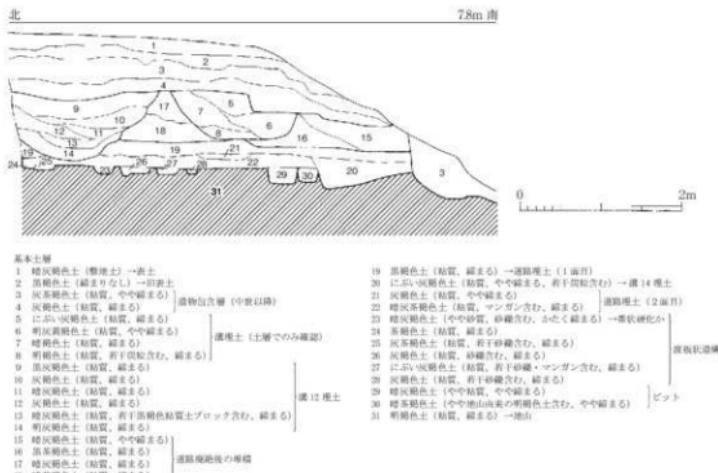
『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 国立歴史民俗博物館

基本土層（図版2、第8図）

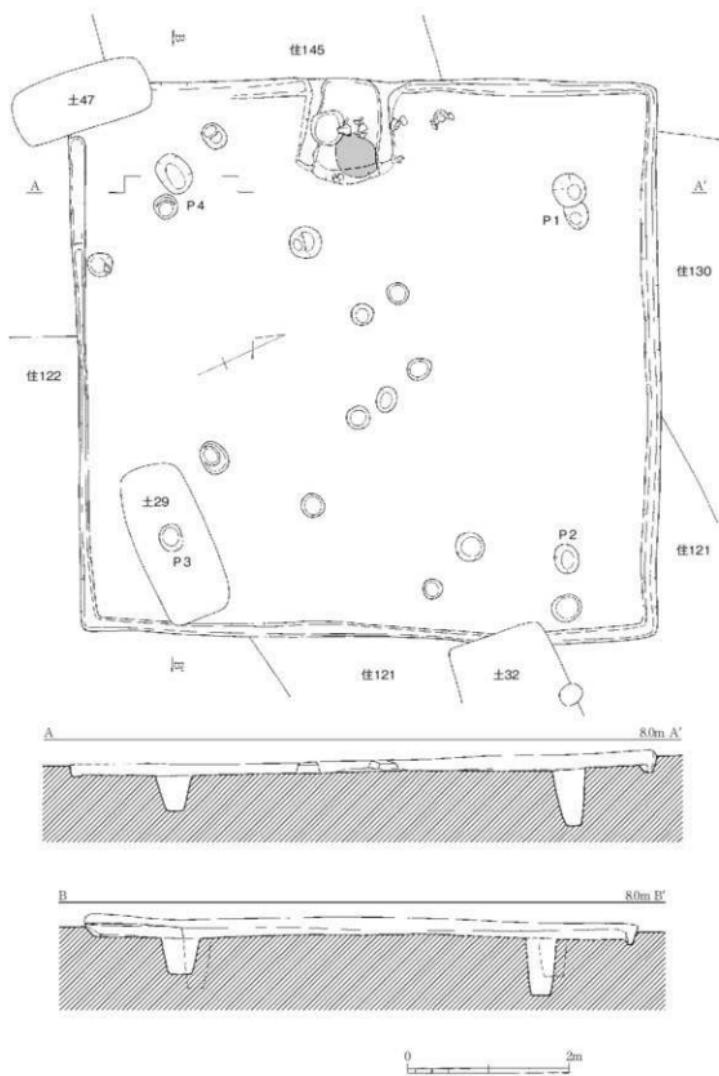
基本土層を示した箇所は、本来なら「IV区I」の範囲となるIV-B1区の南東壁際にあたるが、斜面に形成された当区の状況をより明確に示すと考えられるため、本報告に掲載した。

調査区南東部の東壁によって基本土層を記述する。現地は低層住宅の宅地造成の際に表土を失っていたが、土層で示す箇所には表土まで残っていた。表土の下は旧表土（2層）で、その下に近世から現代にかけての整地層（3・4層）があり、これを除いたところが中世期の遺構面となる。この面では12号溝（9～14層）やこれと並行するとみられる溝（5～8層）が掘りこまれていたが、19層以下の古代の遺構面上に堆積した中世の遺物包含層（15～18層）に切り込むものであった。

中世の包含層の下に古代以前の遺構面（19層上面）があり、この土層を作成した箇所では古代道路があったため、道路内の堆積土がみられた。ただし、古代道路のない部分では同じ標高で茶褐色から明褐色の地山となり、この面が弥生～古墳時代、そして古代にかけての遺構面といえる。IV-B1区の北側半分については弥生・古墳時代の住居の床面付近まで削平が及ぶほどに造成されており、中世の遺物包含層は既に失われていた（下原）。



第8図 延永ヤヨミ園遺跡IV-B区基本土層（1/60）



第9図 IV-B区120号竪穴住居跡実測図 (1/60)

(3) 堪穴住居跡

120号堪穴住居跡 (図版2、第9図)

調査区の北東側に位置し、121・122・130・138B号・145住居跡を切り、29・32・47号土坑に切られる。規模は東西6.7m、南北7.24mで、深さは0.18mほどが残る。主柱は4本柱で、やや外寄りの位置に柱穴があり、南東側の主柱穴は29号土坑による削平のため下部のみが遺存していた。北西壁の中央にカマドを備え、カマド以外の壁際には幅10~15cmほどの壁溝が巡る。貼り床はなかった。遺物は住居全体から出土したが、カマド付近からの出土が目立つ。

埋土から仕上げ砥石1点 (第62図12) 及び台石 (第63図21) が出土した。

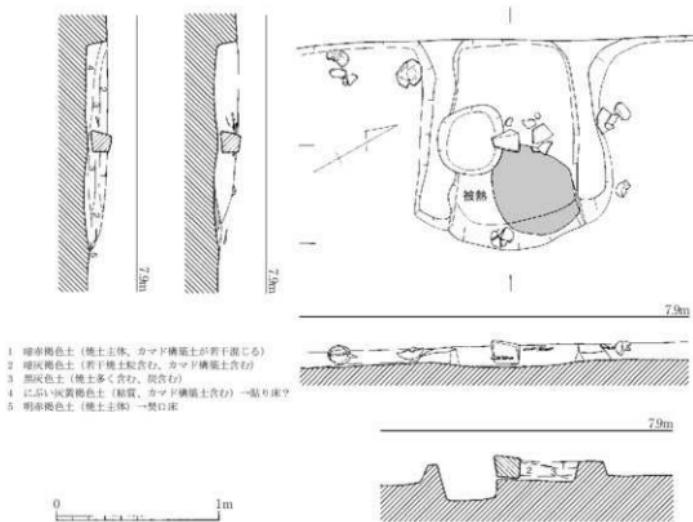
カマド (図版2、第10図)

北西壁の中央に位置し、右袖1.13m、左袖1.18mを測る。既に上部を削平されていることは、左袖脇に残る土器器窓の底部からも窺える。燃焼部の中央に長さ15.6cm・幅18.3cm・高さ11.4cmの箱形に近い斑岩系石材が据えられていた。本来は台石であったものをカマド支脚として転用したものとみられ、表面にはわずかに被熱痕跡を残す。その石材の手前側の床面にのみ被熱により赤変した範囲が広がることも支脚であるとの傍証となる。カマドが構築された範囲のみ僅かに掘り窪められて、カマド構築土である黄灰色土を含むにぶい灰黄褐色土で平坦に均されており、前述の石材はその面に据えられていた。

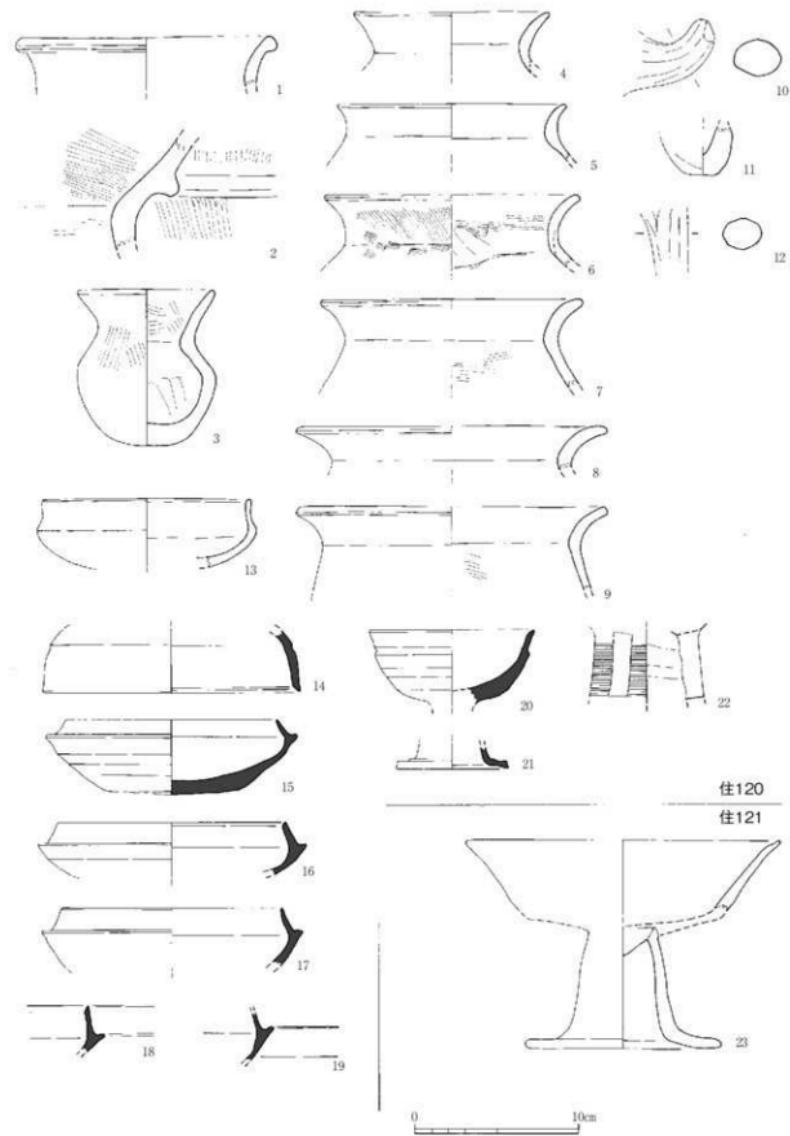
カマド構築土内から滑石製の不明石製品1点 (第62図7) が出土した。

出土遺物 (図版19、第11図1~22)

1~3は土器器窓である。1は口縁部片で、端部を丸く肥厚させる。内外ともヨコナデである。径に対して、やや厚手の印象を受ける。2は大型壺の頸部付近の破片で、口縁部が屈曲する形態と考えられ、屈曲する付近に突帯を貼り付ける。外面はタテハケ、内面はヨコハケによる調整である。



第10図 IV-B区 120号堪穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第11図 IV-B区120・121号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)

3は小型の丸底壺である。全体的に厚手である。体部はナデ調整で、外面上半のみタテハケ調整を行う。口縁部は内面にハケ調整を行った後に、ヨコナデで仕上げる。

4～9は土師器壺の口縁部片である。4は小型で、口縁部がやや直線気味に広がる。内外の調整は磨滅により不明であるが、口縁部はヨコナデによる仕上げである。5は頸部付近が肥厚し、口縁端部に向かって薄くなり、緩やかに外反する。内外の調整は磨滅により不明である。6は器壁がほぼ一定で、口縁部が緩やかに外反する。外面はタテハケ、内面はヨコハケで、頸部付近のみナデを行う。7も器壁はほぼ一定であるが、6に比べて若干厚手である。磨滅により調整が不鮮明であるが、胴部内面はヨコハケの痕跡が残る。8も7と同様に若干厚手であるが、口縁部が急激に外反して開く。内外とも磨滅が著しい。9はやや薄手で、器壁もほぼ一定の厚さである。内外とも磨滅しているが、胴部内面にヨコハケの痕跡が残る。

10は瓶の把手である。断面梢円形で、上方に向かって緩やかに反る。11は手捏ねのミニチュア土器で、厚手である。12は120号住居跡周辺で出土した足鍋の脚部の破片で、明らかな混入資料である。ナデで仕上げている。13は須恵器模倣土師器の壺の破片で、口縁部を屈曲させる。内外とも磨滅により調整は不明である。

14～19は須恵器壺である。14は壺蓋で、天井部と口縁部との境に僅かな段を有し、口縁端部も段をなす。内外とも回転ナデである。15は壺身で、16～19に比べて口縁部の立ち上がりが短い。底部は回転ヘラケズリを行う。16は壺身の口縁部片で、立ち上がりはやや高めで、端部の内側に若干の面をつくる。外底部の調整は不明である。17もやや高めの立ち上がりであるが、端部は丸く収めている。外底部の調整は不明である。18は口縁部の小片であるが、立ち上がりはほぼ垂直で、端部内面に段を有する。19は120号住居跡周辺の検出で出土した資料であるが、17などと同様の形態になると考えられる。

20～22は須恵器高壺である。20は無蓋高壺の壺部片である。口縁部付近に凹線を廻らせることで段を作り出している。壺部外底部は回転ヘラケズリで、その他は回転ナデで調整する。21は小型高壺の脚端部片である。薄い作りで、脚端部を嘴状につまむ。内外とも回転ナデである。22は高脚高壺の脚部片である。外面にカキメを施した後に、長方形透かしを三方に穿っている。

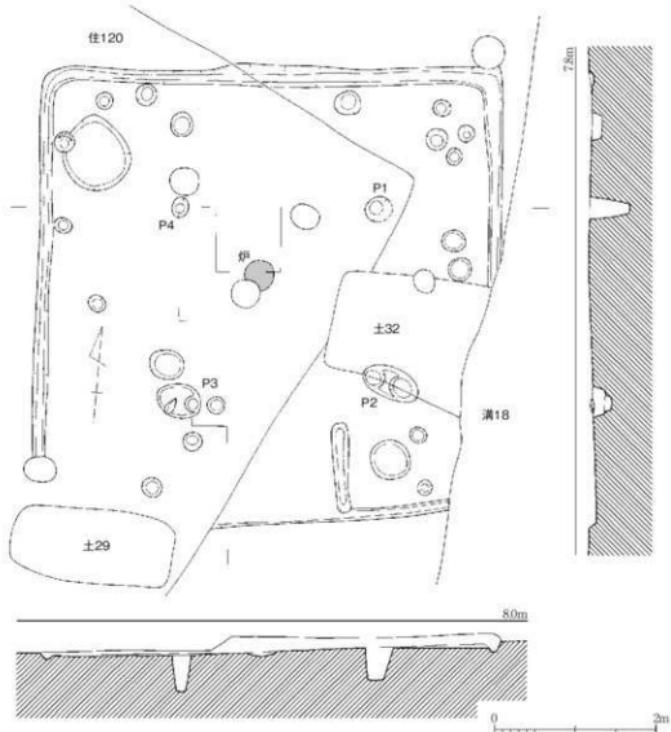
住居の切り合いや出土遺物から、時期は古墳時代後期後半に位置づけられる（下原）。

121号竪穴住居跡（図版2、第12図）

調査区の北東側に位置し、122号住居跡を切り、120・130号住居跡、32号土坑、18号溝に切られる。規模は東西5.66m、南北5.65mで、深さは残りの良い北東部で0.12mである。主柱は4本柱で、柱痕跡は確認できなかったが、柱穴の規模から柱径は10～15cm程度に復元できよう。壁際には幅10～15cmほどの壁溝が巡り、南壁のやや東寄りの位置から北に1.1mほど溝が掘られている。中央に径35cmほどの被熱痕跡があり、炉跡と考えられる。住居の埋土は黒褐色土で、貼り床はなかつた。削平が著しかったこともあり、図化できる遺物は少なかった。

出土遺物（図版19、第11図23）

23は土師器高壺で、同一個体とみられる口縁部片と脚部片により図示した。壺部は逆台形で、底部は不明であるが、口縁部は直線的に外上方に開き、端部付近を僅かに外反させる。脚部は中膨らみ状の筒部で、裾部は平坦気味のラッパ状に広がる。壺部との接合は充填法である。



第12図 N-B区 121号竪穴住居跡実測図 (1/60)

僅かな遺物しかないが、住居の切り合いやカマドを持たない点などから、時期は古墳時代中期前半ごろと推定される（下原）。

122号竪穴住居跡（巻頭図版1、図版3、第13図）

調査区の北東側に位置し、120・121・138B号住居に切られる。規模は東西6.66m、南北5.07m、深さ0.27mで、南西側は住居の切り合いによって失われている。南壁の中央付近を除いてベッド状遺構が巡るが、西壁側の中央には南北1.18m、東西0.7m、深さ0.06mの土坑状の掘り込みがある。主柱は2本柱で、柱穴の間に東西0.64m、南北0.78mほどの炉があり、炉内は底面を中心にして被熱により赤変していた。炉の北西側にも焼土の分布が認められたが、炉との関係は不明である。南壁沿いの中央には東西0.62m、南北0.55



文中写真7

122号住居跡出土状況①（南から）



文中写真 8

122 号住跡出土状況②（西から）

上方へ伸びる。胴部はほぼ球形であるが、若干肩部に張りがあり、底部は僅かながら平底気味である。内面は磨滅しているが、外面はタテハケ調整である。外面肩部付近に黒斑がある。2は小型の壺胴部で、断面形は扁平気味の楕円を呈し、やや上方に最大径がくる。外面はハケメの後、底部のみ手持ちヘラケズリを行う。内面は底部に工具調整の痕跡を認めることが出来るが、基本的にナデ調整で仕上げる。3は中型の壺で、頸部にキザミを施した突帯を廻らせる。肩部は緩やかで、外面はタテハケ、内面はヨコハケの後部分的にナデで仕上げる。4・5は複合口縁壺である。4は口縁部片で、頸部から外反して立ち上り、一度強く屈曲して口縁端部まで外反する。内外とも剥離や磨滅が著しく調整は不明瞭である。5は口縁部から胴部中位にかけての資料で、頸基部に突帯を有し、大きく外反する口縁部が先端付近で一度強く屈曲して端部へと至る。屈曲部は突帯状に張り出しが、口縁端部の貼り付け位置が内側気味になっているためである。肩部から胴部中位までは緩やかな球形で、外面にタテハケ調整がみられる。内面は剥離等により調整が不明瞭である。6は球形壺である点を考慮し、壺として報告する。口縁部は短く直立気味で、端部を丸く収める。胴部は若干縱長の球形を呈し、底部は丸底である。胴部は内外ともタテハケ調整で、内面上半はヨコハケで調整する。口縁部はヨコナデである。口縁部外面および底部外面に黒斑が認められる。

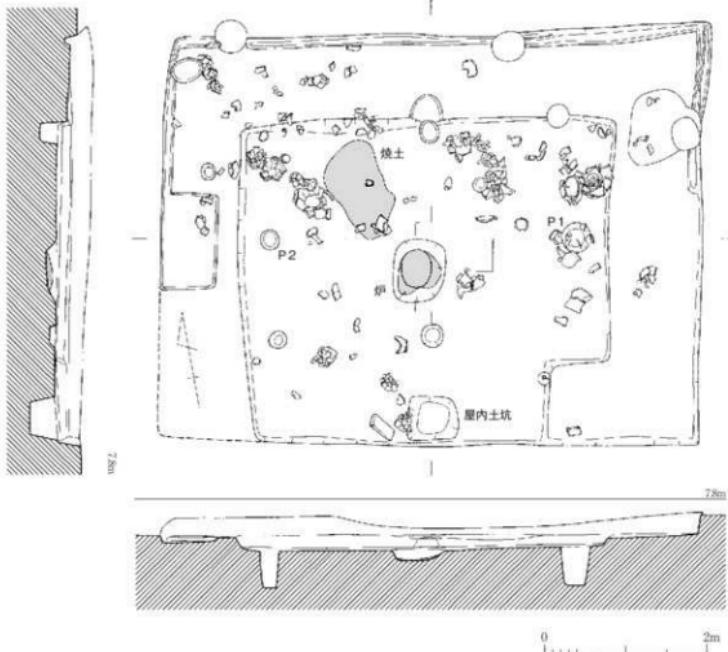
7～22は壺で、7～13は小型壺、14～22は中型壺である。7は口縁部の小片で、薄い器壁のまま外反して端部に至る。8は頸部の締まりが比較的緩やかで、全体に薄手である。口縁部は緩やかに外反し、体部は縱に伸びる。内外ともタテないしナナメのハケ調整で、胴部外面に黒斑が認められる。9は8よりも頸部に締まりがなく、若干厚手である。内外とも磨滅が著しいが、工具による縱方向の調整痕が僅かに認められる。口縁部には指頭痕も残る。胴部下半の外面には煤が少し付着している。10は口縁部の開きに対して、胴部が細身である。口縁部はほぼ直線的に開くが、端部付近は僅かに内湾する。外面はタテハケないしナナメハケで、内面はヨコハケで仕上げる。11は頸部から底部の破片で、10と同じく胴部最大径よりも口縁部径のほうが大きいとみられ、底部は尖り気味である。外面は磨滅しているが、内面にはナナメハケの調整痕が残る。外底部付近に黒斑が認められる。12は口縁部が直線的に伸びて広がる。外面はタテハケ、内面は胴部下半をナナメハケ、胴部上半から口縁部にかけてヨコハケを主体に行う。13は外面に粗い平行タタキを行う資料である。頸部に締まりがなく、口縁端部まで薄い作りのまま外反する。胴部は長胴気味で、底部は若干平底である。外面は粗いタタキを行った後、下半部のみタテハケで仕上げる。胴部下半の

m、深さ 0.34 m の屋内土坑を備える。住居の埋土は黒褐色土で、貼り床はなかった。遺物は他の住居に比して多量であるが、半数ほどは床面よりも 10 cm 以上浮いており、最終的な埋没に伴う遺物とみられる。

埋土から、持ち砥 1 点及び置き砥 1 点、計砥石 2 点（第 62 図 13・14）が出土した。

出土遺物（図版 19・20、第 14～20 図）

1～6 は壺である。1 は広口壺で、口縁部と胴部に分かれ接合しなかったが、一括して出土しており同一個体とみられる。口縁部は僅かに外反しながら



第13図 IV-B区122号竪穴住跡実測図(1/60)

外面には黒斑が認められる。

14は口縁部が平坦気味に外反する。胴部外面は平行タタキ、内面はヨコハケないしナナメハケで調整する。胴部の一部に黒斑がある。15はほぼ完形に近い資料である。胴部は長胴気味で、底部は尖りながらも平底状である。胴部外面は平行タタキ、内面はタテハケである。口縁部内面は外面をタテハケ、内面をヨコハケで仕上げる。外面の肩部と底部の付近に黒斑があり、外面には二次被熱による赤変部分が認められる。16は底部片であるが、外面に平行タタキの痕跡があり、内面は底部をナデ、胴部をタテハケで調整する。

17は口縁部から胴部上半にかけての資料で、直線的に広がる口縁部に、肩の張らない胴部が接合する。内外ともハケ調整である。18はやや薄手で、口縁部は直線的に伸び、端部側を外反させる。内外ともハケ調整の痕跡が明瞭に残る。口縁部と胴部の一部に黒斑がみられ、胴部外面には僅かに煤が付着する。19はやや厚手の作りであるが、器壁の厚みは全体的に均一である。口縁部はヨコナデで、胴部の外面がタテハケ後下半のみヘラケズリで、内面はヘラ状工具による搔き上げである。

20は胴部下半の破片で、外面はハケ状工具による縦方向のナデ調整、内面はタテハケによる調整である。21は略完成品で、口縁部は外上方へ真っ直ぐ伸び、胴部は卵型を呈する。内外とも磨滅が著しいがハケ調整とみられ、外面にはタテハケの痕跡が窺える。外底部には黒斑がある。底部は尖り気味の丸底である。22は他の資料に比べかなり長胴であるが、器高の割には胴部最大径は

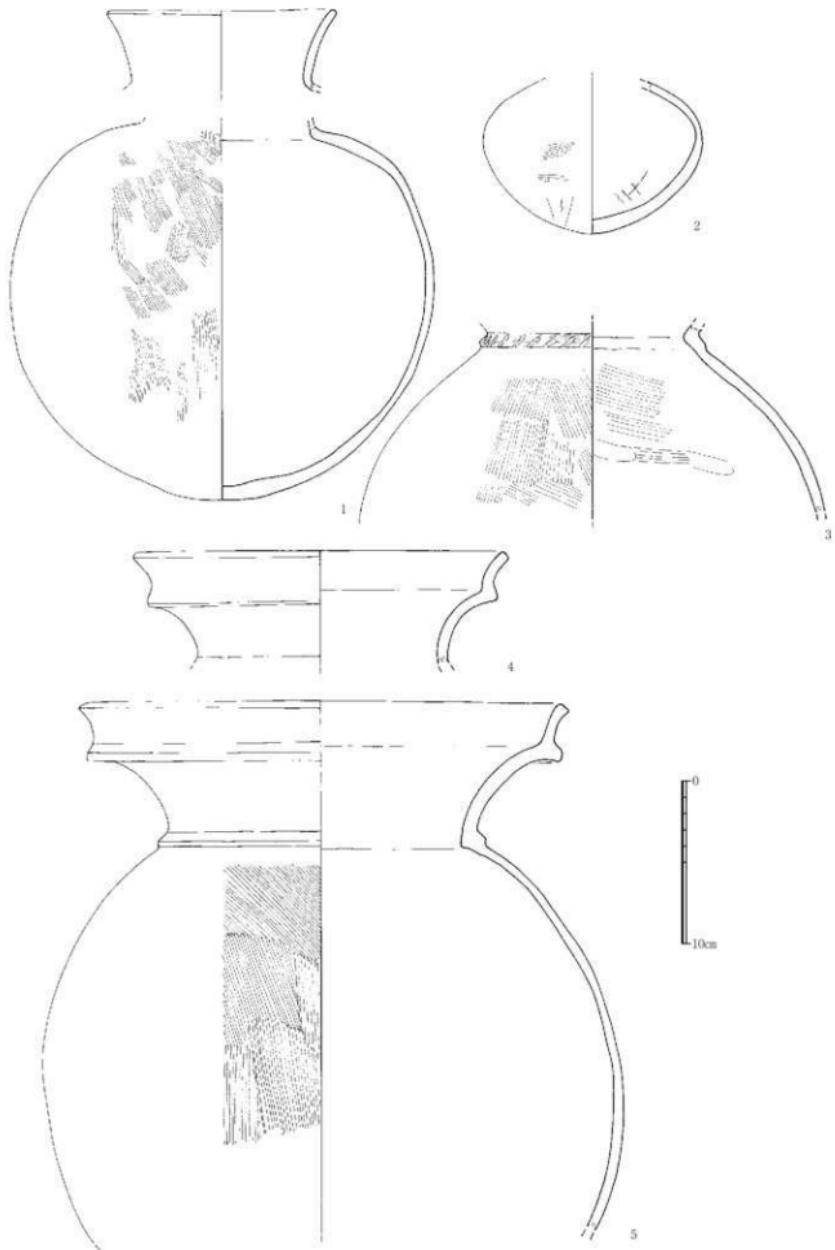
他の資料とほぼ同じで、中型の範疇で捉えられるだろう。底部は欠損するが尖り底になる可能性が高い。内外ともハケ調整で、胴部の下半部はタテハケ、上半部はナナメハケで仕上げている。

23～32は高坏である。23は鉢状の坏部が特徴で、浅い皿状の底部に、直線的に外上方へ伸びる口縁部が付く。内外ともナデ調整とみられるが、内面底部には放射状のミガキの痕跡が残る。口縁端部付近には黒斑が認められる。24も鉢状の坏部であるが、口縁部が直立気味に伸びる点が異なる。内外とも磨滅が著しく調整が不鮮明であるが、ミガキによる調整が行われていた可能性がある。外面の一部には黒斑が認められる。25は有段高坏で、坏底部の法量は23・24と近似するが、口縁部が大きく直線的に広がる。内外とも摩滅が著しいが、外面には僅かにタテハケ調整とみられる痕跡が残る。脚部はほとんど欠損しているが、内面には工具による調整痕がみられ、坏部との接合は付加法である。26は25と同じ有段高坏であるが、僅かに厚手である。内外とも磨滅が著しいが、口縁部外面に放射状のミガキ、坏部内面に横方向のミガキの痕跡が認められる。27は有稜高坏で、浅く広がる坏部に外反する口縁部が付加される。脚部は中実の柱状で、裾部がラッパ状に広がる。裾部との境付近に二段の円孔を三方向に穿っており、配置からすると四方向であった可能性もある。内外ともハケ調整を行い、坏部は放射状のミガキ、脚部はタテ方向のミガキで仕上げている。なお、脚部の頂部には坏部との接合のためのキザミが行われている。口縁部内面と脚部外面の一部に黒斑が認められる。

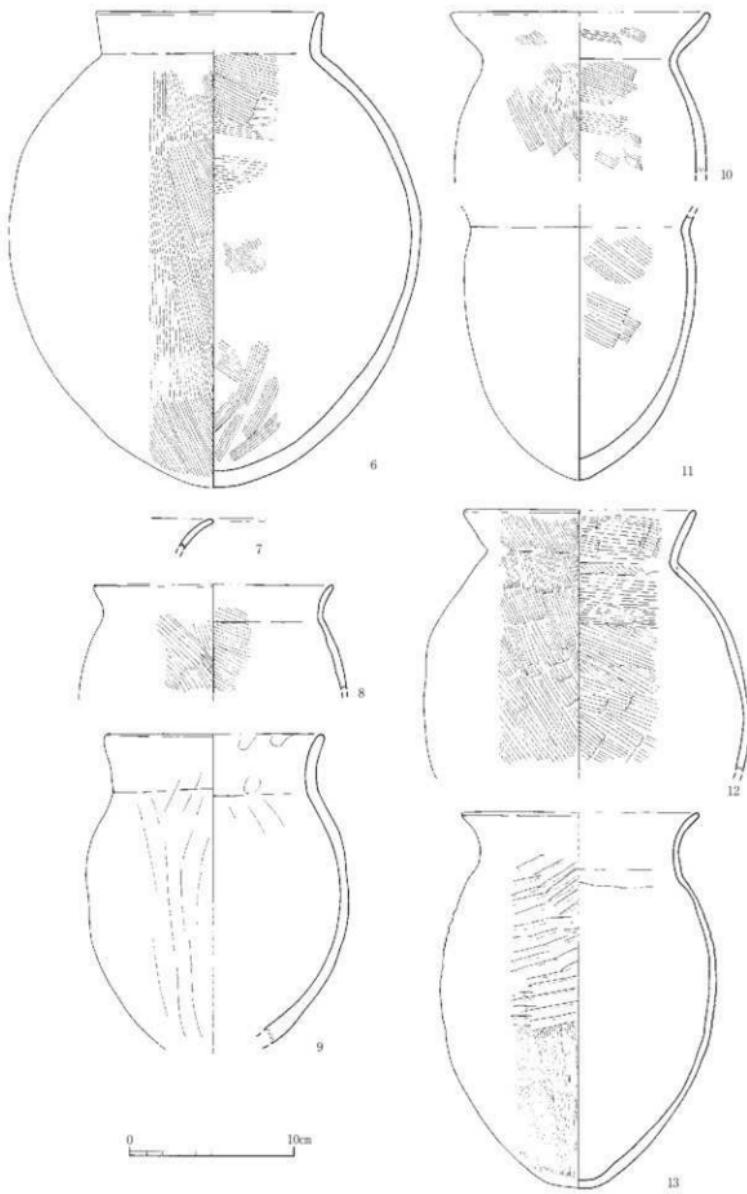
28は低脚高坏の脚部である。脚部は短く筒状に伸び、裾部はラッパ状に広がる。円孔が三方向に穿たれ、内外ともハケ調整が行われる。脚基部には坏部との接合のためのキザミがみられる。裾部の一部に僅かに黒斑がみられる。29も低脚高坏の脚部で、中膨らみ気味の筒状部に強く屈曲して外に広がる裾部が伸びる。外面は磨滅のため調整は不鮮明であるが、筒状部の内面には工具によるケズリの痕跡が残る。30は長脚高坏の脚部である。裾部へと移行する付近には三方向に円孔が穿たれている。脚部の内面は工具によるナデ、外面はタテハケの後に継方向のミガキで仕上げる。坏部には内外ともミガキの痕跡が残る。31は長脚高坏の脚部で、中実気味の筒状部から裾部がラッパ状に広がる。内面は工具によるナデとみられるが不鮮明である。外面はタテハケである。裾部との境付近に三方向に円孔が穿たれている。裾部外面の一部に黒斑がみられる。32は長脚高坏の脚部で、細長く柱状に伸びて脚端部に向かってラッパ状に広がる。裾部との境付近には円孔を三方向に穿っている。外面はタテハケの後に継方向のミガキで仕上げ、内面は筒状部をナデ、裾部をヨコハケで調整する。裾部付近には黒斑がみられる。

33～35は杯である。33はほぼ完形の小型杯で、器壁も薄めである。内外ともナデ調整を行い、外面には黒斑が顕著にみられる。34は33より一回り大きな杯で、器壁が厚い。内面は磨滅しているが、外面にはハケ状工具による調整の痕跡が認められる。外面に黒斑がある。35は法量や器壁が34と近似する資料で、口縁部を欠く。外面はナデ調整とみられ、内面は指ナデの痕跡が部分的に残る。

36～38は鉢である。36は直口の鉢で、扁平な体部にほぼ垂直に立ち上がる口縁部が付く。内外とも磨滅が著しいが、外面にはミガキとみられる痕跡が僅かに残る。37は小形甕の可能性も考えたが、平底であることから鉢とした。底部に向かって器壁が厚くなり、口縁部側は欠損する。内外ともタテハケ調整である。38は台付鉢である。鉢部は椀状を呈し、口縁部は緩やかに外反し、端部を丸く収める。台部分は直線的に外側に向かって伸びる。内外とも磨滅が著しいが、胴部外面



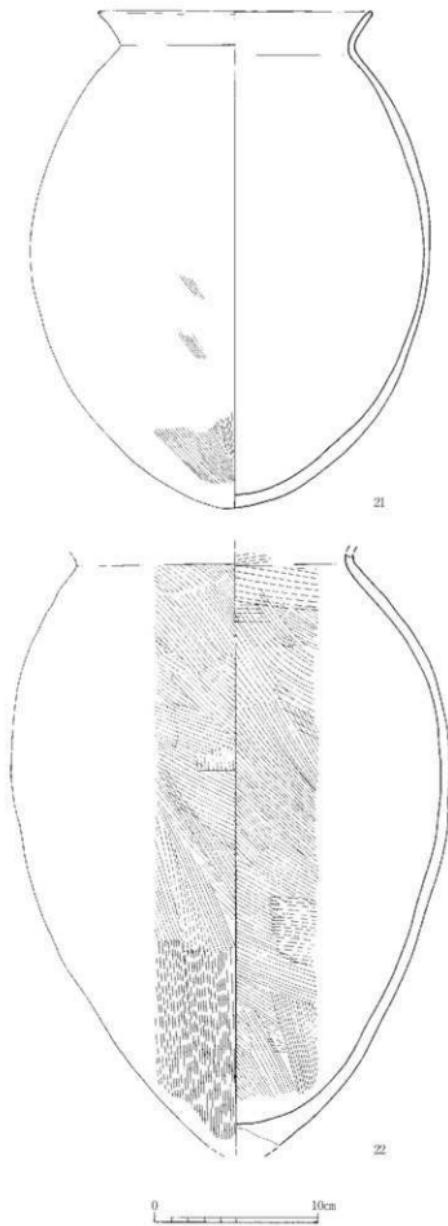
第14図 IV-B区122号竪穴住居跡出土遺物実測図① (1/3)



第15図 N-B区122号竪穴住居跡出土遺物実測図②(1/3)



第16図 IV-B区122号竪穴住跡出土遺物実測図③ (1/3)



第 17 図 IV-B 区 122 号竪穴住居跡出土遺物実測図④(1/3)

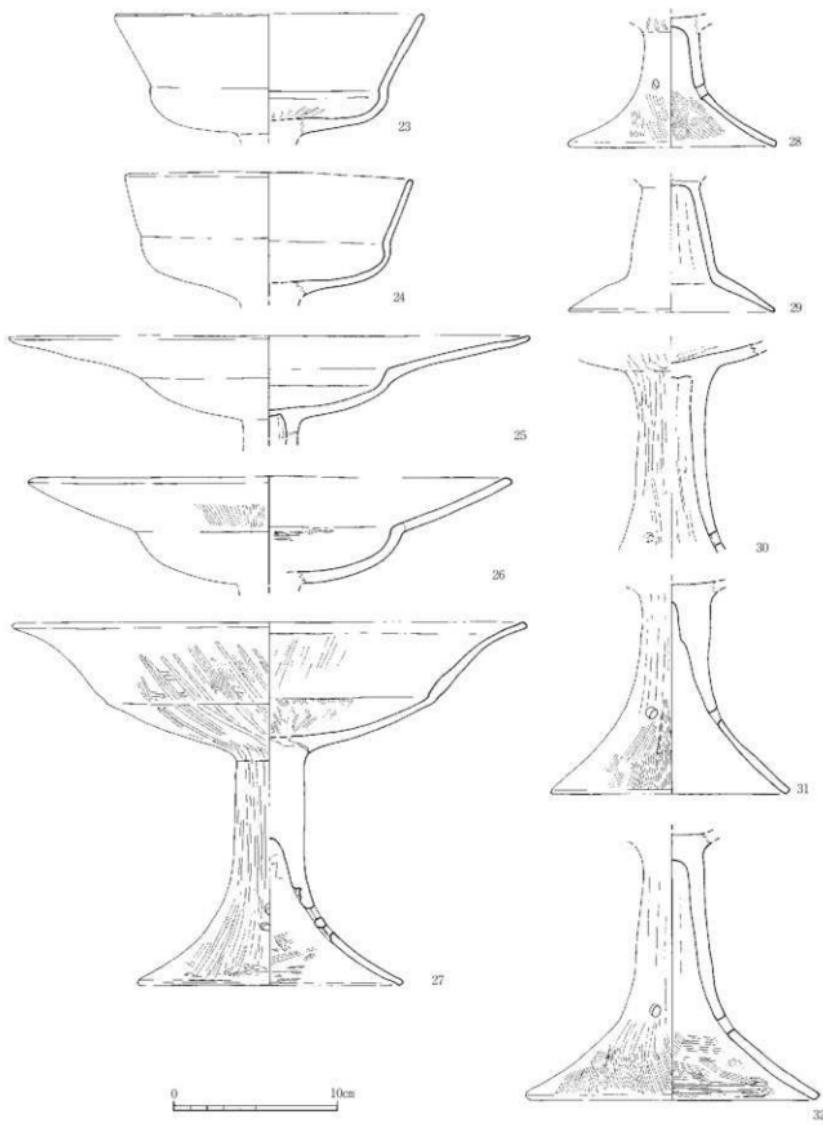
にはタテハケの痕跡が僅かに残る。

39 は支脚、40 ~ 42 は器台である。39 は小型であるが、完形品である。全体的に器壁が厚く、上面は斜めながらも平坦で、一方向に突出箇所がある。内面は工具によるナデ、外面はナデ調整である。上面には焼成後に円孔を穿っている。40 は大型器台で、一方にやや丸味のある V 字状の抉りがある。外面はタテハケ調整で、内面は下半部をハケ状工具による横方向のナデ、上半部は縦方向のナデの後、ヨコナデで仕上げる。口縁部および下端部付近に黒斑が認められる。41 も 40 と同様の器台であるが、法量は一回り小さい。上半部が欠損しているが、抉りの一部が残っている。内外とも細かなハケ調整の痕跡があり、下端部のみヨコナデを行う。42 は抉りを持たない器台で、下端部に向かってやや内湾気味に広がる。外面は単位の広い叩きを行った後、上半部のみ縦方向のヘラケズリを行う。内面はヨコハケである。

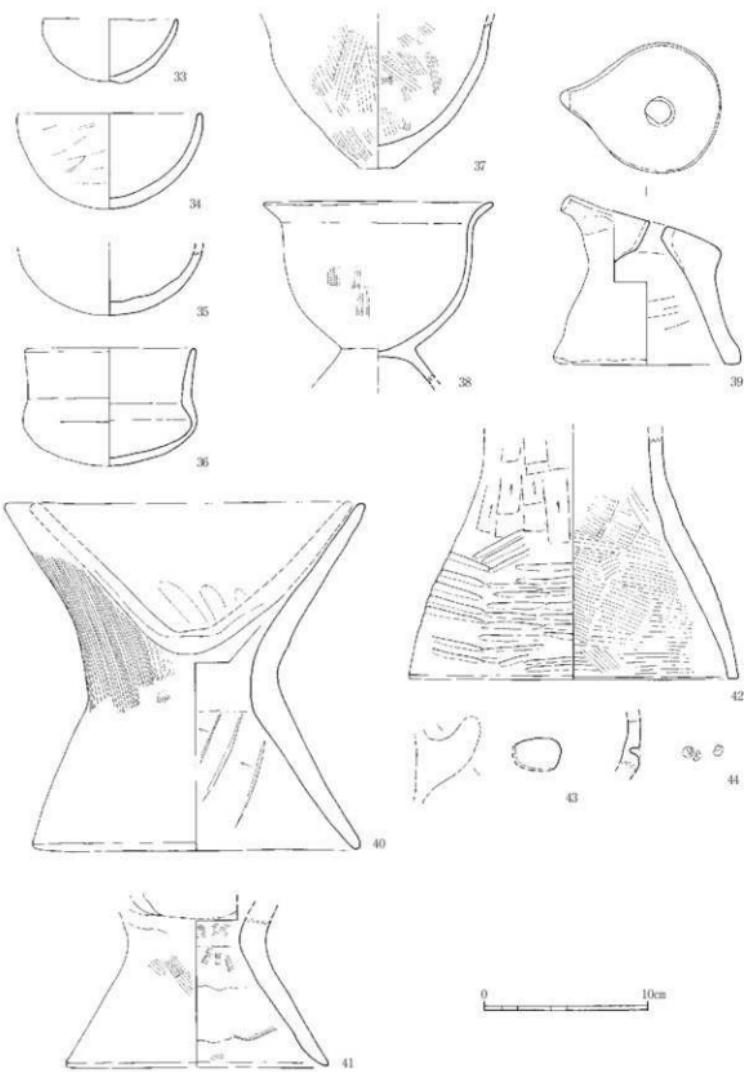
43 は甌の把手で混入品とみられる。断面は長楕円形を呈し、上方に向かって折れ曲がる。

44 はミニチュア土器とみられるが、全体の器形は不明で、現状では鉢形になると推定される。外面には工具による刺突がみられるが、いずれも貫通はしていない。

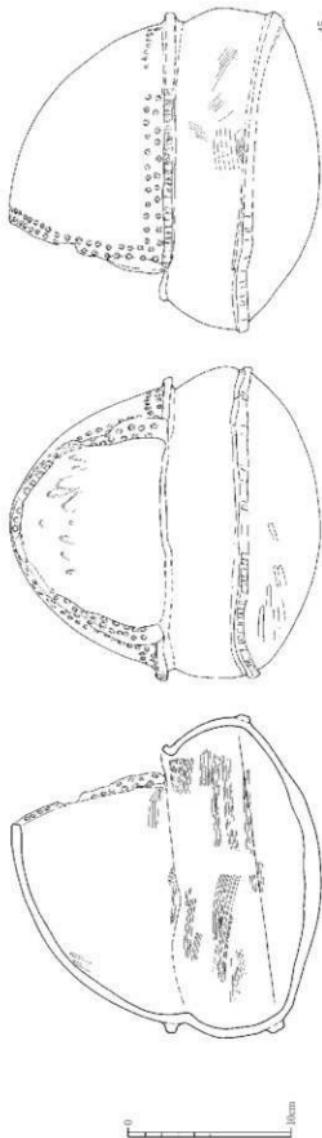
45 は手焙り型土器の完形品である。覆い部は正面からみると少し山高で、正面は短く折り曲げて面とする。体部は下膨りに広がり、屈曲して底部に至る。体部の上端はく字形に折り曲げ、折り曲げた内面に覆い部を接合している。底部は若干丸味のある平底である。



第18図 IV-B区 122号竖穴住居跡出土遺物実測図⑤ (1/3)



第19図 N-B区122号竪穴住居跡出土遺物実測図⑥(1/3)



覆い部と体部の境、そして体部の中ほどに突帯を廻らせ、キザミを施す。面と面に沿った位置に2条の竹管文が施され、体部との境にある突帯の際まで連続して施文されている。覆い部は内外ともナデ調整し、内面には部分的にハケ状工具の痕跡がみられる。体部は内外ともヨコハケで、外面のみミガキの痕跡が残る。体部内面に僅かに煤の付着が認められ、覆い部外面と底部外面に黒斑がある。

住居の切り合いや出土遺物から、時期は弥生時代終末期に位置づけられる（下原）。

130号竪穴住居跡（図版2、第21図）

調査区の北西側に位置し、後世の削平によって住居の範囲は不明確ながら、121号住居跡を切り、120号住居跡に切られることは間違いない。位置関係から95号住居跡とも切り合い関係があるとみられるが、新古は不明である。

規模は西壁の一部が残るのみであるが、主柱の位置から東西、南北とも1辺5mを超える程度と推定される。主柱は4本柱で、北側の柱穴2基が段掘り状になつておらず、抜き取りがあった可能性もある。西壁に沿つてカマドが設けられていた。

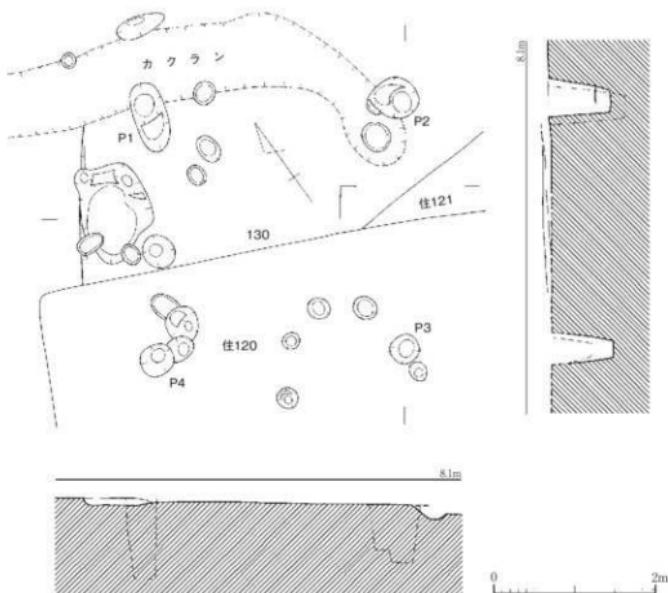
カマド

西壁の中央に位置し、ほとんど床面付近まで削平が及んでいる状況にあって焼土や黄灰色のカマド構築土の分布が認められた。カマド本体が僅かながら遺存しているのではないかと期待したが、両袖とも失われ、支脚も認められなかった。しかし、カマドの想定範囲のみ3cmほど浅い皿状に掘り窪めていたことから、構築に伴う床貼り部分と考えられる。

出土遺物はなかったが、住居の切り合いなどから古墳時代後期後半と推定される（下原）。

131号竪穴住居跡（図版4、第22図）

調査区の中央西寄りに位置し、住居南西部は後世のカクランを受け失っている。規模は東西4.22m×南北4.77m、深さ5cm程度の、やや南北に長くなる隅



第21図 IV-B区130号竪穴住居跡実測図(1/60)

丸方形住居跡で、残りは悪い。主軸方位はG.N.より6°西に傾く。

北壁ほぼ中央にカマドを付設し、深さ5cm程度を測る壁周溝が東壁の一部のみ巡る。住居壁に接していないため不安が残るが、暗灰褐色粘質土の埋土から当住居に伴うと想定される屋内土坑を住居南西部で検出した。床面ではピットを多数検出したが、P1・2は深さと位置から確実な主柱穴で、南東部のP3・4のいずれかが主柱穴となる4本柱の住居跡である。住居ほぼ前面で床下掘り込みを確認した。住居埋土は暗灰褐色粘質土に炭が多く混じる土である。床面直上で土器が出土したが、図化できなかった。またP2とP7近くできれいな白色粘土を確認した。

住居周囲で住居跡外ピット列を検出し、当住居の補助柱であった可能性があるため、深さを示す。

埋土から緑色片岩製の勾玉1点(第62図2)が出土した。

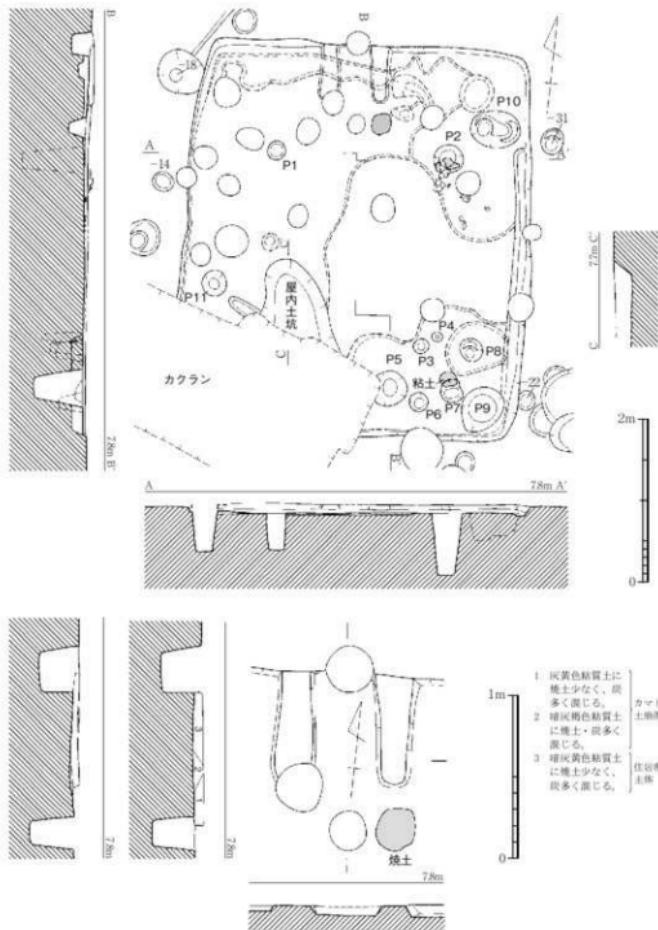
カマド(図版4、第22図)

住居跡のほぼ北壁中央で検出したが、カマド左袖先端及び燃焼部奥壁は後世のピットにより失う。いずれも袖は灰黄色粘土に暗灰褐色粘質土が30%混じる土で構築し、壁から0.7m直線的に突出する。袖間は壁から55cmを測る位置で幅38cmと狭い。

燃焼部床面では明確な焼面は検出できなかったが、カマド右袖先端から13cm手前で硬化面を確認した。カマド埋土は1・2はカマド天井部崩落土が主体となる土で、3は住居埋土と同質の土が主体であるため、住居廃絶時に流入した土と考えられる。カマド下層掘り込みは検出できなかった。

出土遺物(第23図1~6)

1・2は土師器壺である。1は強く外湾する小型壺口縁部である。2は胴部中位が屈折部する壺



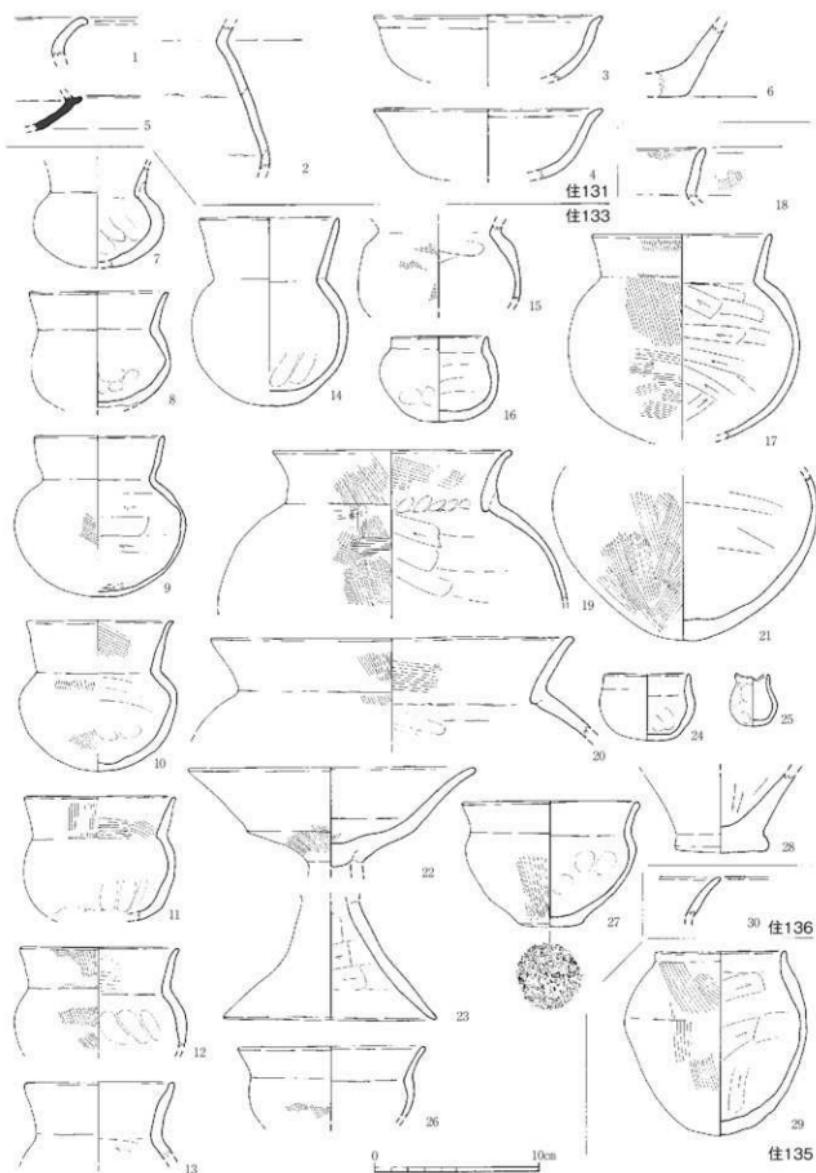
第 22 図 IV-B 区 131 号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60, 1/30)

胴部。3・4は口縁端部を短く外反させる土師器高环坏部である。3の外面には二次被熱痕とススあり。5は須恵器坏身の受け部である。6は底部が弱い凸レンズ底の弥生後期後半の壺底部である。外面は二次被熱痕が顯著である。床下掘り込み出土で、混入品。

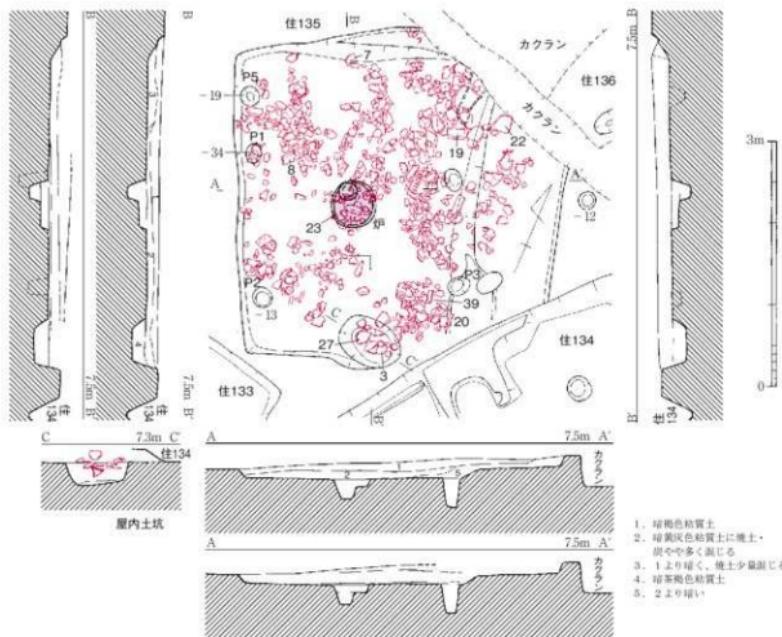
出土遺物から、7世紀前半に属すると考えられる（大庭）。

132 号竪穴住居跡（図版 4・5、第 24 図）

調査区の南西隅に位置し、134・136 号住居跡に切られ、133・135 号住居跡とも切り合い関係を持つ可能性があり、出土遺物から 133・135 号住居跡に切られる。



第23図 IV-B区 131・133・135・136号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



第24図 IV-B区132号竪穴住居跡・屋内土坑実測図(1/60)

規模は東西3.95m×南北4m、竪穴部で深さ最大0.25mの正方形住居跡である。北壁のテラスは掘り間違えで、下の段が本来の壁である。主軸方位はG.N.より24°西に傾く。

住居東壁のみに幅1.2m、高さ0.1mのベッド状造構を付設する。竪穴部は中央には径0.55mの円形を呈する炉があり、埋土は暗灰黄褐色粘質土に焼土・炭が多く混じる。竪穴部南壁は中央では、0.4m×0.27m、深さ0.18mの楕円形を呈する屋内土坑を検出し、土坑内からほぼ完形の豊前系高坏(27)が出土した。住居埋土はレンズ状堆積を示し、土質や色調、埋土及び多数出土した土器片から当住居は比較的短時間に埋没したと予想される。なお埋土からは多数の破片状態の土器片が主に1層から出土し、床面直上の出土土器はない。

竪穴部四隅に配されたP1～3は深さ・位置から主柱穴と思われ、北東側の主柱穴は検出できていないが、4本柱の住居跡となるか。住居床下掘り込みは1ヶ所確認した。

埋土からすり石2点(第62図16・17)、台石2点(第63図19・20)が出土した(大庭)。

出土遺物(図版20、第25～27図)

1～5は複合口縁壺である。1・2は口縁部が短く立ち上がる。1は口縁部が内傾し、やや内湾気味に立ち上がる在地系である。口縁部外面には、ハケ状の工具で文様を刻んでいる。2の口縁部は直線的に立ち上がる。頸部外面には下から上に向かって斜め方向のハケが施される。外面頸部附近に黒斑が認められる。3は口縁部が内傾内湾する在地系である。口縁上部は欠損するが、残存部からは端部が外に開く形であることがうかがえる。頸部はやや内傾しつつ立ち上がる。口縁部・頸



文中写真9 132号住居跡出土状況（南東から）

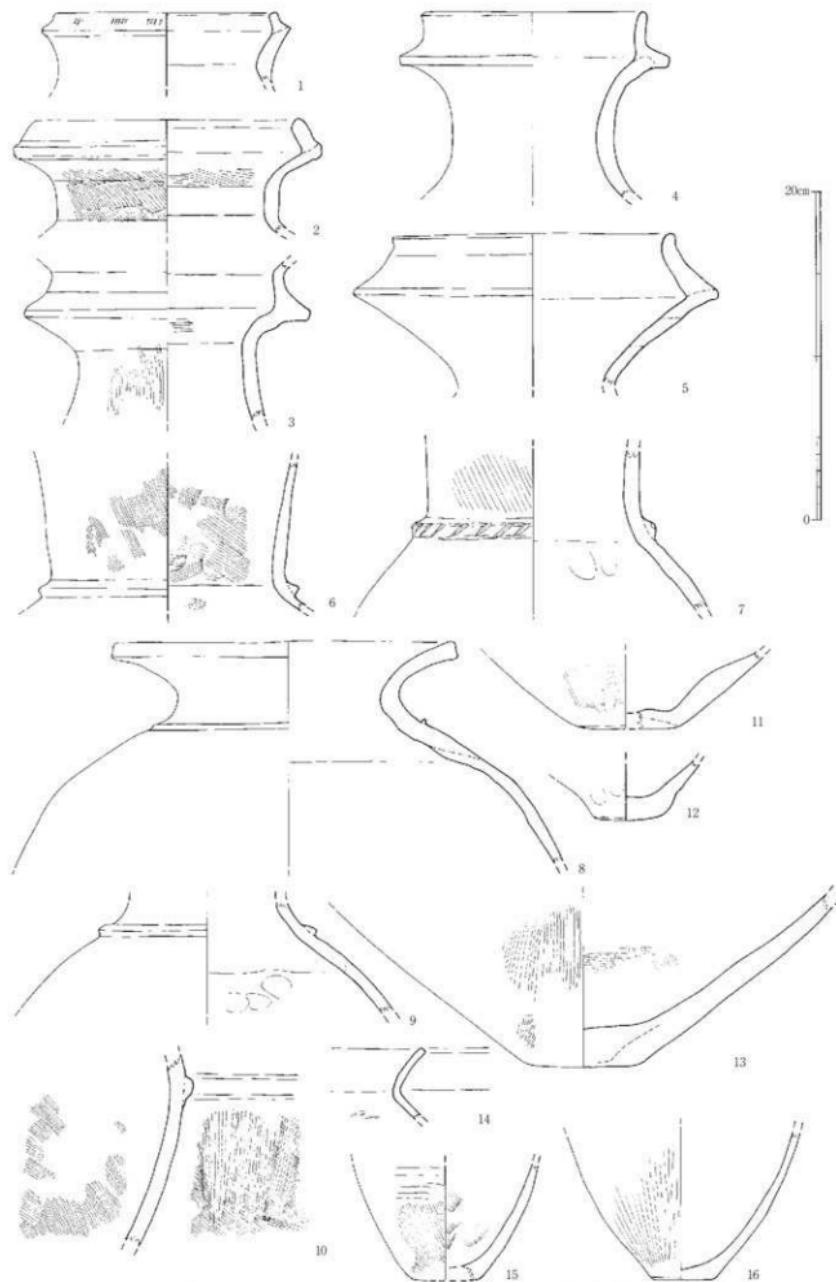
部の外面には、上下ほぼ同じ位置に黒変が認められる。焼成は良くなく、器表が剥落している。4・5はいずれも口縁部が内傾・内湾する在地系複合口縁壺である。4の口縁部は長く、ほぼ直立する。頸部内面には黒斑が認められる。焼成は悪く、器面が剥落している。5の頸部は付け根から外に開くもので、口縁部は内湾し長く伸びる。頸部の数ヶ所と口縁屈曲部で粘土接合痕がみられる。

6・7は直口壺である。いずれも口縁部は直線的に立ち上がり、頸部に断面三角形の突帯を貼り付ける。6は外面ともに斜め方向のハケを施す。外面には黒斑が認められる。7は外面突帶上部にハケ、突帶下部には工具によるナデを施す。内面にはナデを施している。突帶にはヘラ状の工具による右上がりの長いキザミを施す。内面の一部には黒変が認められる。8は壺で、頸部に細い突帯を貼り付ける。突帶下部で粘土接合痕が確認される。二次被熱により一部赤変し、器面が剥落している。9は壺の頸部から胴部である。頸部には断面三角形の突帯を貼り付けており、その下部には粘土接合痕がみられる。焼成はあまり良くなく、器表が剥落している。10は壺の胴部である。断面四角形の突帯は胴部に斜め方向のハケを施した後に貼り付けられており、その後ナデで成形されている。外面の突帶以下には縦方向のハケを、内面にはハケの後ナデを施す。

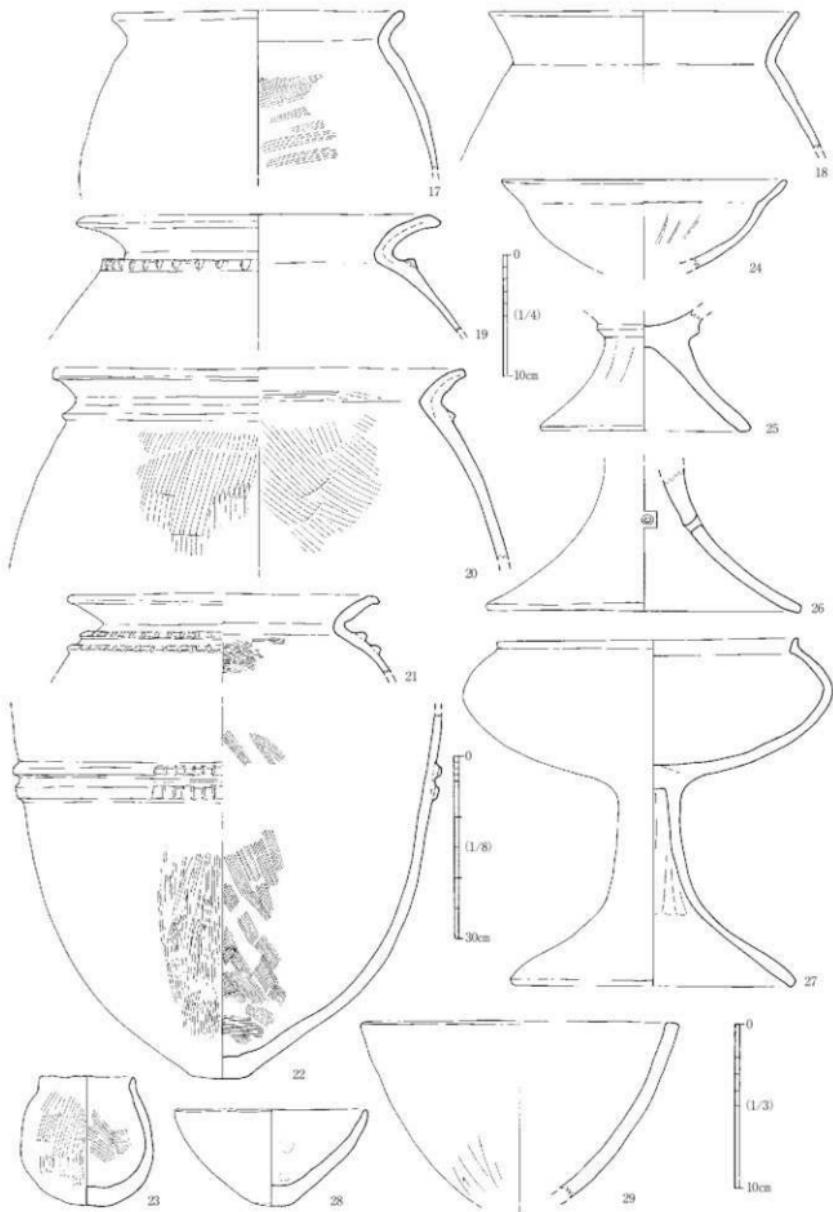
11～13は壺の底部で、いずれも凸レンズ状を呈する。11・12は底部付近の外面に黒斑が認められる。13は胴部に黒変が確認される。焼成はあまり良くない。14は壺の口縁部であり、く字形に屈曲する。口縁部付近内面には黒変が認められる。15・16は壺の底部であり、いずれも凸レンズ底を呈する。15は外面にタタキを施した後、底部付近を中心に斜め方向のハケを施している。胴部に黒斑が認められる。16は磨滅が著しいが、外面には縦方向のハケを施すようである。外面底部付近に黒斑が認められる。焼成はあまり良くなく、器表が剥落している。

17・18は壺の口縁部から胴部である。口縁部はくの字形に屈曲し、17はやや外反気味に、18は直線的に伸びる。胴部以下の形状は不明であるが、いずれも胴部最大径は口径を上回る。19～22は大型の壺であり、21・22は同一個体と考えられる。19～21の口縁はいずれもく字形に屈曲する。19は肩が張り、おそらくは長胴になるものと考えられる。肩部に一条の断面三角形の突帯を持ち、そこに棒状工具によるキザミを施す。焼成は良くなく、器表の剥落が認められる。20はあまり肩が張らない。19と同様、長胴になるとを考えられる。肩部には一条の断面三角形の突帯を持つ。内外面ともに下から上に向かってハケを施す。21・22は肩が張る長胴の壺で、底部は凸レンズ状を呈する。肩部に断面三角形の二条の突帯を、胴部には断面四角形の二条の突帯を持ち、いずれにもヘラ状工具によりキザミを施す。器面は磨滅が著しいが、胴部外面には縦方向のミガキを、内面にはハケを施す。胴部外面に黒斑が認められる。23は小型の壺である。内外面にハケを施しており、内面の底部付近ではナデが観察される。

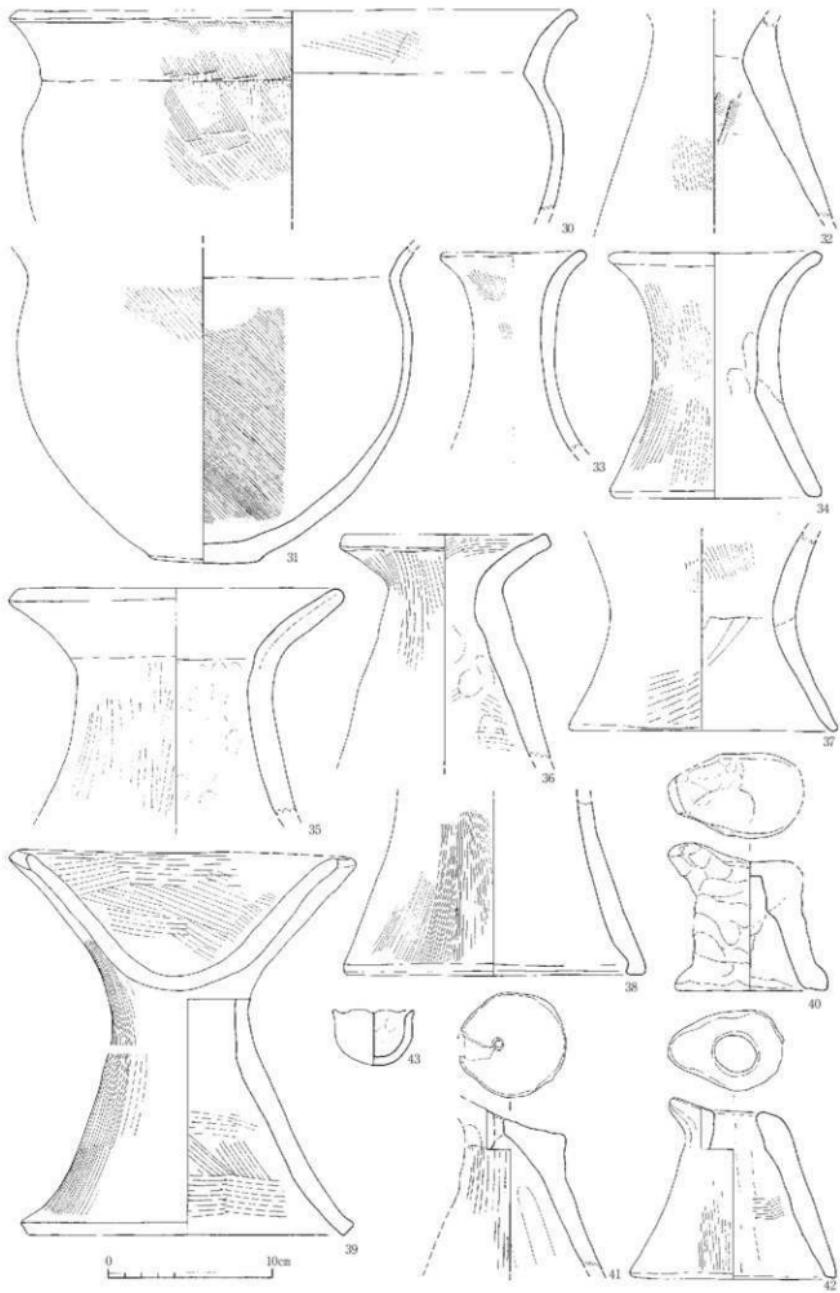
24～27は高壺である。24の壺部は内湾しつつ端部付近で屈曲し、屈曲部から先はやや内湾して短く伸びる。内面にはミガキを施す。25は脚部がハの字形に開くもので、壺部と脚部の間に断面



第25図 IV-B区132号竪穴住居跡出土器実測図① (1/3)



第26図 IV-B区132号竪穴住居跡出土土器実測図② (19・20は1/4、21・22は1/8、その他は1/3)



第27図 IV-B区 132号竪穴住居跡出土土器実測図③ (1/3)

三角形の突帯を付す。26の脚部は内湾しつつ裾が聞くもので、穿孔を施す。穿孔は全周の3分の1ほどの残存部の中で同じ高さに2ヶ所認められ、本来は一周4ヶ所に施されていたものであろう。焼成は良くなく、器表が剥落している。27は坏部が内湾する豊前地域特有の高坏である。口縁端部は鋤先状を呈する。脚部は下半からラッパ状に聞く。坏部と脚部の接合は挿し込み技法である。器面は剥落しており、坏部外面端部付近に黒斑が認められ、内面にも黒変が観察されることから、焼成はあまり良くないといえる。

28・29は鉢である。28は口縁端部を丸くおさめ、底部は凸レンズ状を呈する。内面の一部に指押さえが確認される。外面底部付近には黒斑が認められる。29は口縁端部が方形をなし、外面下半にケズリ後ナデを施す。外面の一部で黒斑が観察される。30・31は大型の鉢である。いずれも頭部がくの字形に屈曲し、口縁部は内湾しながら外に聞く。30の外面のハケは、屈曲部以下に下から上方向に施した後、屈曲部から上に上から下の方向に施す。その後、口縁の一部にはヨコナデを施す。31は特に外面の磨滅が著しいが、内外面共にハケを施す。外面底部付近には黒斑が観察される。同じく外面底部付近には被熱による赤変と器表の剥落が認められる。

32～39は器台である。33・34・37は胴部中央付近が最も括るもの、32・35・36は胴部上半で括り、上方がラッパ状に聞くものである。外面は縦方向のハケを、内面はナデを施すものが多い。32の内面にはハケ先を用いた押圧整形の跡が一部認められる。焼成は良くなく、器表が剥落している。35の内面は指押さえを施す。36の内面には一部ハケが認められ、下半部はハケの後にナデを施している。37は外面下半部にタキキを、内面下半部には浅いケズリの後にナデを施す。38は下半部がハの字状に聞く。下端部付近の外面には黒斑が認められる。これとほぼ同じ部位で、二次被熱による赤変が認められる。器表は全体に剥落している。39は上方が大きく抉られた豊前地域特有の器台である。外面には縦方向のハケを、上部と下部の内面には横方向から斜め方向のハケを施す。

40～42は支脚である。いずれも一方向のみ上方に突出する形態で、被熱による赤変が観察される。40は粘土を付加して上方の突出部を作り、その周辺を指押さえで成形している。それ以下は全体にナデで成形する。41は上面に直径5mmほどの孔を穿っている。外面には縦方向のハケ、内面には縦方向のナデを施す。外面には黒斑が認められる。42も上面に穿孔する。外面は縦方向のハケ、内面は上部に縦方向のナデ、中程に横方向のハケを施し、下半部にはハケ工具による工具痕が残る。突出部にはナデが施されている。43はミニチュア土器で、指押さえで成形する。

出土遺物は弥生時代後期に属すると考えられる。特に、複合口縁壺や高坏、器台に所謂豊前型の器種が含まれること、壺は長胴で凸レンズ底を呈するものが主体であること、鉢の一部にも凸レンズ状の底をもつものが認められることから、後期の中でも後半に位置づけられる（岩橋）。

133号竪穴住居跡（図版6、第28図）

調査区の南西隅に位置し、9号建物跡に切られる。132・134号住居跡と接するため、切り合い関係を持つと考えられるが、出土遺物から132号住居跡より新しく、134号住居跡より古いと考えられる。規模は東西3.82m×南北3.6m、深さ最大0.32mとほぼ正方形住居跡である。主軸方位はG.N.より5°西に傾く。

北壁はほぼ中央にカマドを付設する。住居中央2ヶ所で粘土塊、カマド東側で台石を検出した。床

面ではP1～3を検出したが、いずれも浅く主柱穴は不明である。

住居南東側の床面直上で、土師器小型丸底壺を中心とする多数の土器を確認した。壺が多くを占めることと出土状況から、住居廃絶時に意図的に置かれたものと推測される。

住居中央～東側で床下掘り込みを確認した。住居埋土はレンズ状堆積を呈する。

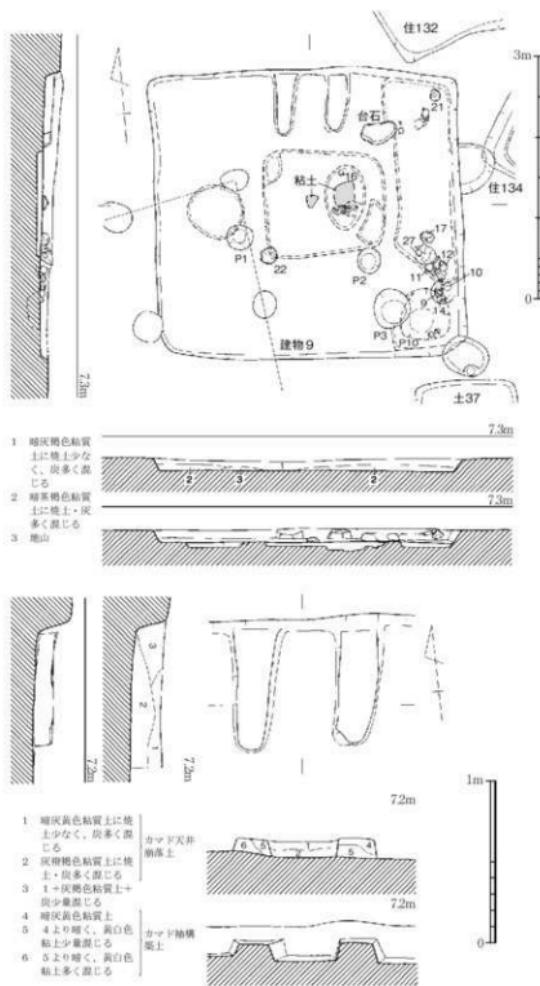
カマド（図版6、第28図）

住居跡のはば北壁中央で検出した。粘土が主体ではない土で構築された両袖は、壁から0.8m直線的に突出する。袖は床面から高さ10cmのレベルでやっと検出できたため、住居廃絶時にこのレベルまでカマドを壊していた可能性が高い。袖間は、壁から60cmの箇所で40cmと狭い。燃焼部床面では明確な焼面は検出できなかった。

カマド埋土は、1・2がカマド天井部崩落土が主体となる土で、3は住居埋土と同質の土が主体であるため、住居廃絶時に流入した土と考えられる。カマド下層掘り込みは検出できなかった。

出土遺物（図版20、第23図7～28）

7～16は住居南東部からまとめて出土した土師器小型丸底壺である。7は内外面ナデ調整で、胴部内面にはナデの跡が残る。8・11・12の外面上には黒斑あり。8の外面上は顯著な二次被熱のため、器表が荒れており、調整不明。内面底部には指おさえ痕あり。9の口縁部はわずかに内湾し、器壁が非常に薄いもの。胴部内面中位にはケズリ、内面底部には工具痕が認められる。復元口径8cm、復元高9.9cmを測る。10の胴部外面上にはハケのチナデを施す。胴部内面にはナデの跡が残る。11の



第28図 IV-B区133号竖穴住居跡・カマド実測図(1/60, 1/30)



文中写真 10 133号住居跡出土状況
(北西から)

の内外面はハケのちナデを施す。

19～21は土師器壺である。19の外面胴部上位には、縦ハケのち不定方向の短いハケを施し、内面頸部には接合時の指おさえ痕が明瞭に残る。口縁部内外面はハケのち横ナデを施す。外面には黒斑あり。胎土は精良である。20は口縁部が逆「く」の字状に屈折し、胴部内面にはナデの稜が残る。口縁部内面には黒斑あり。21の底部は尖底で、内面には工具痕が残る。

22・23は土師器高杯である。22は屈折部の稜が明瞭でないもので、口縁端部は弱く肥厚する。杯部外面はハケのち横ナデを施し、杯内面底部には工具痕が残る。23は「ハ」の字状にそのまま開く脚部である。24・25は土師器手づくね土器である。24は完形品で、口径5.3cm、器高4.1cmを測る。25はほぼ完形の壺状の手づくね土器である。口径2.1cm、器高3.2cmを測る。

26～28は混入品である。26は口縁部が弱く肥厚する土師器外反口縁鉢である。27は凸レンズ底の弥生後期外反口縁鉢で、外面はハケのち横ナデを施す。底部には木の葉痕がある。外面には黒斑があり、内面は黒化する。28は弱い凸レンズ底を呈する弥生後期壺底部である。内面には工具痕があり、外面には黒斑が認められる。

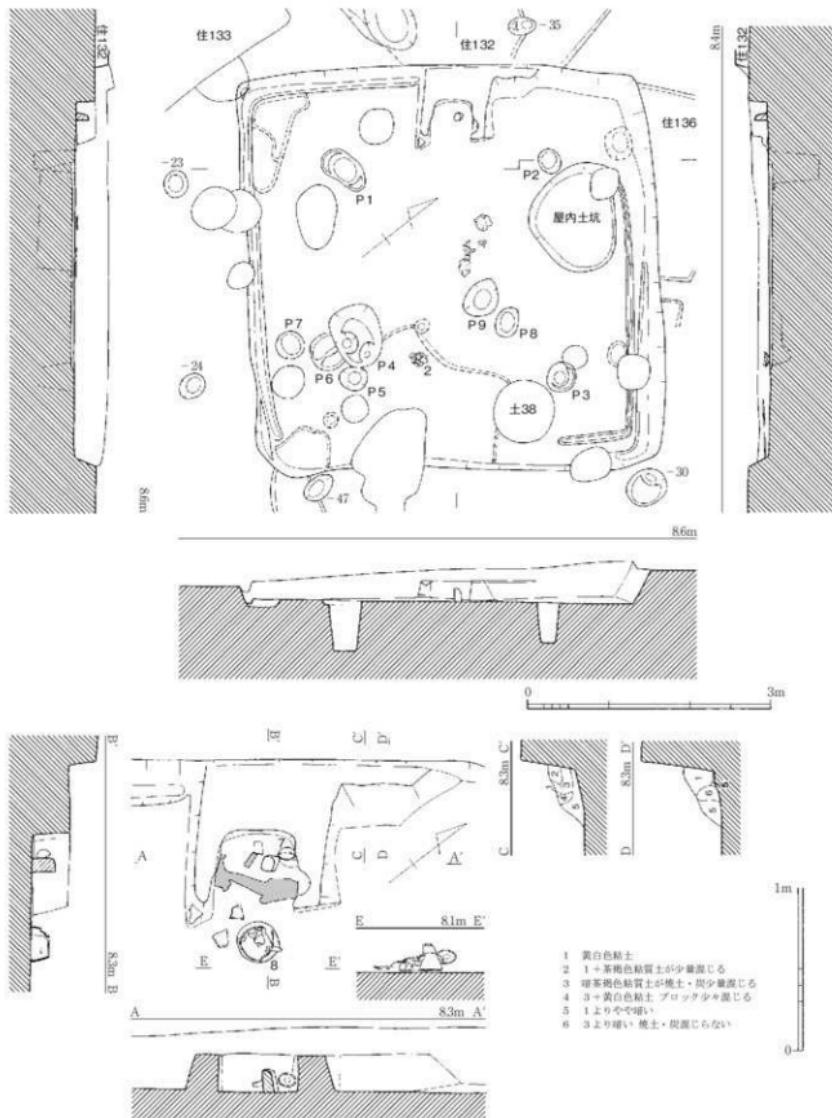
出土遺物及び住居形態から、古墳時代後期前半～中頃に属すると考えられる（大庭）。

134号竪穴住居跡（巻頭図版2、図版7、第29図）

調査区の南西に位置し、38号土坑に切られ、132・136号住居跡を切る。133号住居跡と接するため、切り合い関係を持つと考えられるが、出土遺物から133号住居跡より新しいと想定される。規模は東西5.1m×南北4.95m、深さ最大0.42mとほぼ正方形住居跡で、当区では残りが良い住居跡である。主軸方位はG.N.より51°西に傾く。

西壁ほぼ中央にカマドを付設し、壁周溝は南壁と西・北・東壁の一部に巡る。住居北壁から少し離れた位置で、埋土から当住居に伴うと考えられる屋内土坑を検出した。この屋内土坑の規模は1.35m×1.08m、深さ0.41mで梢円形を呈し、埋土は灰褐色粘質土に黄褐色粘質土が少量混じる。床面ではピットを多数検出し、位置と深さからP1～4が主柱穴となる4本柱の住居跡である。また床面直上で土師器壺（2）が出土した。

住居埋土は上層が暗灰褐色粘質土、下層が灰黄色粘質土で、レンズ状堆積である。住居全体的に床下掘り込みを確認した。



第29図 IV-B区134号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60、1/30)



文中写真 11 134 号住居跡屋内土坑(北から)

両袖とも壁から 105cmほど直線的に突出するが、右袖の方が幅は広い。また袖も床面から高さ 25 cm残存し、残りは良いカマドである。燃焼部奥壁から 15cm手前という非常に近く、かつ燃焼部の中軸線よりやや北側にずれた位置に石製支脚を置き、その部分で袖間は 50cmを測る。支脚前面で横方向に長くまとった焼土塊を検出し(トーンで示す)、その上面に黄白色粘土が厚さ 5 cm程度存在していたことから、天井部がそのまま崩落した状態を示していると考えられる。

支脚から 33cmほど手前の床面直上で天地逆の土師器多孔式瓶(8)を確認した。底部以外は完形で、かつ床面直上であることから、カマド廃絶時に意図的に置かれたものと推測される。また燃焼部内支脚右奥でも完形の土師器鉢(7)が出土し、同じくカマド廃絶時に意図的に置かれたものと推測される。燃焼部床面では明確な焼面及び硬化面は検出できなかった。

またカマドから壁沿いに粘土が L字状に延びる状況を確認した。当初は煙道部が住居隅まで延びるオンドル状煙道を持つカマドになると想定したが、燃焼部から L字形部分まで確実に煙道が延びないこと、断面である D-D' の 6 はトンネル状の煙道部にみえたが、C-C' ではトンネル状の煙道にはならないことから、D-D' で確認できた 6 は粘土を積んだ単位と考えられ、オンドル状煙道を持つカマドではないと判断した。

このような例は、本遺跡では当区 137 号住居跡やⅢ-A・B 区 23 号住居跡、Ⅱ 区 8・28 号住居跡などに類例があり、カマド廃絶時にカマドから住居右隅に向かって粘土で被覆するカマド封じの一種であると考えられる。この類別について、V 章 3 (p177-179) で検討しているので参照いただきたい。



文中写真 12 134 号住居跡カマド検出状況(東から)

住居周囲で住居跡外ピット列を検出し、当住居の補助柱であった可能性があるため、深さを示している。

埋土下層から泥岩製の不明石製品(第 62 図 6)が出土した。

カマド(巻頭図版 2、図版 7、第 29 図)

住居跡のほぼ西壁中央で検出したカマドで、黄白色粘土を逆「U」字状に構築して造り出し、特にカマド奥壁部分の粘土は厚さ 40cm という非常に厚く構築することが特徴である。

支脚から 33cmほど手前の床面直上で天地逆の土師器多孔式瓶(8)を確認した。底部以外は完形で、かつ床面直上であることから、カマド廃絶時に意図的に置かれたものと推測される。また燃焼部内支脚右奥でも完形の土師器鉢(7)が出土し、同じくカマド廃絶時に意図的に置かれたものと推測される。燃焼部床面では明確な焼面及び硬化面は検出できなかった。

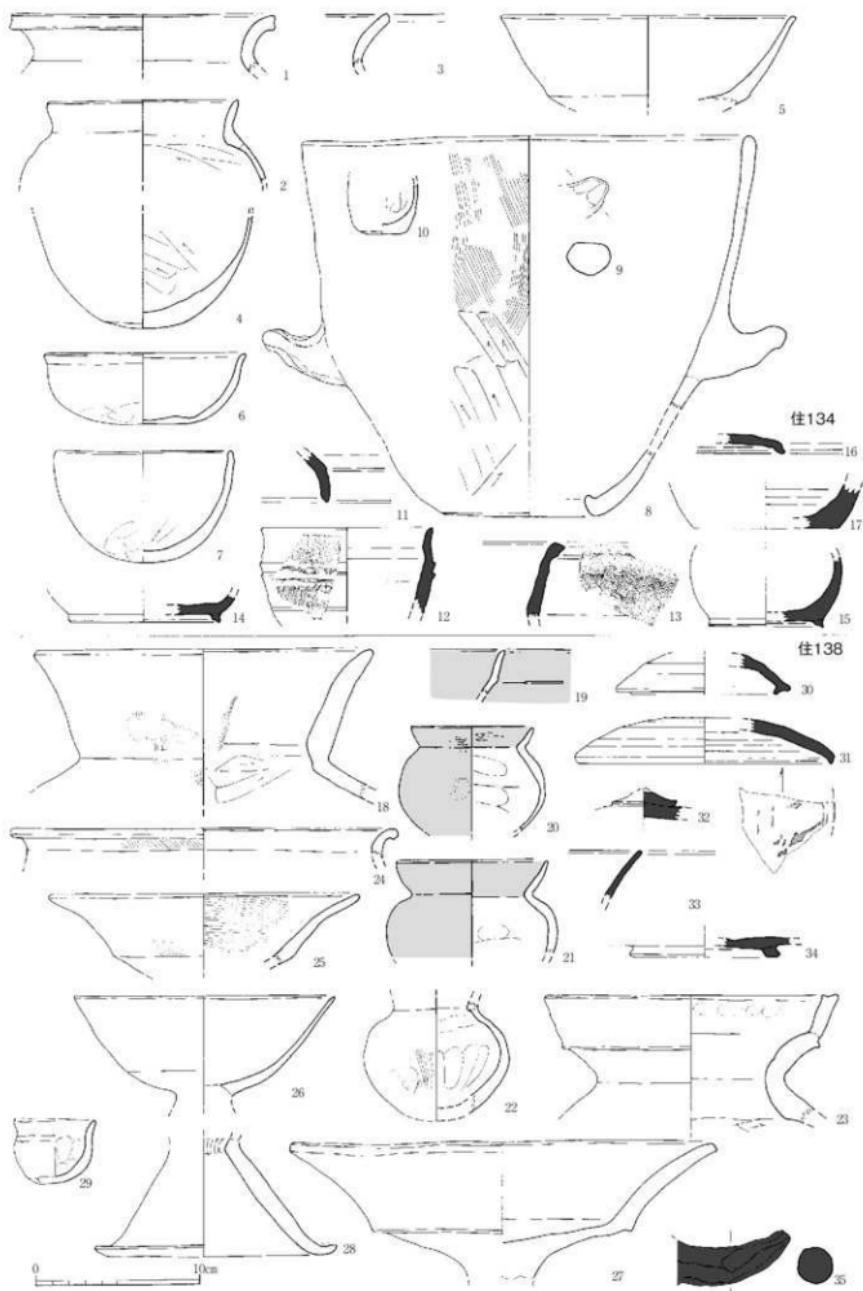
またカマドから壁沿いに粘土が L字状に延びる状況を確認した。当初は煙道部が住居隅まで延びるオンドル状煙道を持つカマドになると想定したが、燃焼部から L字形部分まで確実に煙道が延びないこと、断面である D-D' の 6 はトンネル状の煙道部にみえたが、C-C' ではトンネル状の煙道にはならないことから、D-D' で確認できた 6 は粘土を積んだ単位と考えられ、オンドル状煙道を持つカマドではないと判断した。

このような例は、本遺跡では当区 137 号住居跡やⅢ-A・B 区 23 号住居跡、Ⅱ 区 8・28 号住居跡などに類例があり、カマド廃絶時にカマドから住居右隅に向かって粘土で被覆するカマド封じの一種であると考えられる。この類別について、V 章 3 (p177-179) で検討しているので参照いただきたい。

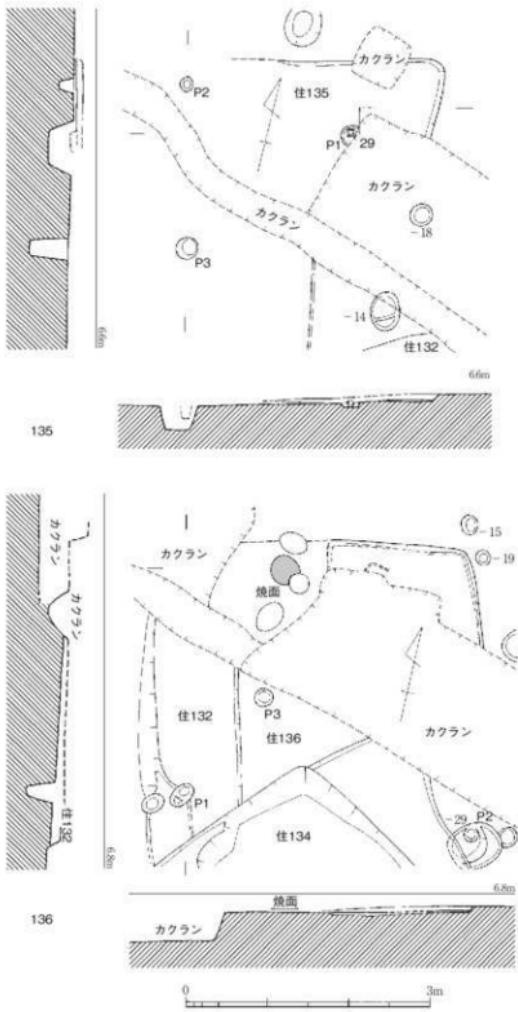
出土遺物(図版 20、第 30 図 1~17)

1~4 は土師器甕である。1~3 は甕口縁部である。1 の口縁端部はナデにより凹線状に窪む。器壁は厚い。2 は直口気味のもので、内面頸部近くまでケズリを施す。外面には二次被熱痕が認められる。4 の外面には黒斑あり。

5 は屈折部に鈍い稜が認められる土師器高坏坏部である。6・7 は土師器坏である。6 は口縁端部が嘴状の椀状坏で、外面底部には手持ちヘラケズリを施す。外面には黒斑及び二次被熱痕が認められる。



第30図 IV-B区 134・138号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



第31図 IV-B区 135・136号竪穴住居跡実測図 (1/60)

型の須恵器壺底部である。内面にはナデによる凹凸が顕著に残る。

出土土器及び住居形態から、古墳時代後期末に属すると考えられる（大庭）。

135号竪穴住居跡（第31図）

調査区の南西に位置し、132号住居跡と近く、切り合いを持つ可能性があるが、出土遺物から132号住居跡を切る。

痕あり。7は外面底部にはヘラケズリ痕、内面下位には工具痕が認められる。口縁部内面には丁寧なナデを行う。完形品で、口径10.9cm、器高6.9cmを測る。

8は土師器多孔式瓶で、底部には径1.8cmほどの孔を多数開けたと考えられるが、底部の残りが悪く、孔数は不明である。外面中位以下はハケのちケズリ状の工具ナデを施す。復元口径28cmを測る。口縁部外表面には黒斑あり。9はボタン状の把手である。どの器種に付けたものかは不明である。10は平底の土師器手づくね土器で、黒斑あり。

11は器壁が厚めの須恵器壺蓋で、天井部との境には鈍い稜が認められる。口縁内端部は工具によるナデを施した際の段がある。12は須恵器壺で、ナデにより作り出した二条の突帯状の段の下には十一条程度の櫛描波状文を密に施す。13は須恵器壺口縁部で、四角形に肥厚させた口縁部下には四条の櫛描波状文を施す。口縁部内面にはナデによる凹凸あり。

14～17は混入品。14は高台付須恵器壺身。15は高台付の須恵器小壺で、外面上位には薄く自然釉が付着する。16は口縁端部が嘴状になる須恵器壺蓋。17は小

住居として検出できたのは、高さ5cm程度の北東部分の壁とピット3基のみである。規模は東西3.3m以上、南北2.5m以上の隅丸方形住居跡である。主軸方位は、G.N.より13°西に傾く。P1から土師器無頸壺(29)が出土し、P2・3は位置から主柱穴となると考えられ、P1を含めて4本柱の住居跡となるか。住居埋土は、灰褐色粘質土に橙褐色粘質土(地山)が30%混じる土である。

出土遺物(図版20、第23図29)

出土遺物で図示できたものは、P1から出土した29のみ。29はほぼ完形に近い土師器無頸壺で、口径8cm、器高11.3cmを測る。内面頸部までケズリを施す。外面は二次被熱痕が顕著で、黒斑もある。内面胴部上位にはコゲが明瞭に残る。

住居形態及び出土遺物から、古墳時代前期前半に属すると考えられる(大庭)。

136号竪穴住居跡(第31図)

調査区の南西に位置し、134号住居跡に切られ、132号住居跡を切る。住居として検出できたのは、高さ5cmほどの北東壁の一部、床面上でカマド焼面と思われる径35cm程度の弱い焼面及びピット3基である。規模はカマド焼面が北壁中央に位置していたとすると、東西4.6m程度、南北は3.3m以上の隅丸方形住居跡となるか。主軸方位は、G.N.より12°西に傾く。

P1・2は深さと位置から主柱穴の可能性が高く、北側の主柱穴列は不明であるが、おそらく4本柱の住居跡になるとと考えられる。住居埋土は灰褐色粘質土である。

床下掘り込みは住居北側で確認した。

出土遺物(第23図30)

出土遺物で図示できたものは、30のみ。30は土師器小型壺口縁部である。

住居形態及び出土遺物から、古墳時代後期に属すると考えられる(大庭)。

137号竪穴住居跡(卷頭図版3、図版8、第32図)

調査区の中央に位置し、142号住居跡を切り、138B号住居跡とは接するため、切り合ひ関係を持つ可能性が高いが、出土遺物から当住居跡が新しい。住居北西壁は少し掘りすぎてしまったが、規模は東西4.35m×南北4.25m、深さ最大0.38mのはば正方形住居である。主軸方位は、G.N.より20°西に傾く。

北壁はば中央にカマドを付設し、西壁には深さ5cm程度の壁周溝を巡らす。住居床面では多数のピットを検出し、P1~4が位置と深さから主柱穴となる4本柱の住居跡である。



文中写真13 137号住居跡出土状況①(南から) 文中写真14 137号住居跡出土状況②(西から)



文中写真15 137号住居跡カマド断ち割り①
C-C'（南東から）



文中写真16 137号住居跡カマド断ち割り②
j-j'（南西から）

cm程度突出する。

燃焼部奥壁から50cm手前に天地逆にした、土師器高坏（10）を転用した支脚があり、この支脚部分で袖間は42cmを測る。支脚周囲には弱い焼面が広がるが（トーンで示す）、硬化面はより手前の上層ピットで壊された部分に存在した可能性がある。

カマドの袖自体の高さは手前で10cm以下、奥で5cm以下しか残存していない。ちょうどこのカマド袖上面レベルで土師器高坏部（7）及び土師器壳が灰黄色粘土に覆われた状態で出土したことから、カマドをこのレベルまで壊し、その後灰黄色粘土で覆う行為を行っていたと予想される。特にカマド袖奥側は袖痕跡がほとんど残らないほど徹底的に壊している。

カマドを覆う灰黄色粘土は住居北東隅まで壁沿いは30cmほどと厚く、手前にかけて傾斜するようになくなる。その粘土下で幅30cm、深さ3cm程度の浅い溝状の掘り込みを確認した。この溝状掘り込みを粘土で被覆していること、また掘り込み内に焼土及び炭も混じっていないことから、L字状カマドの煙道ではないと判断した。なお、この掘り込みはカマド廃絶段階で床面上に存在したのは確実であるが、その機能は不明である。

以上のことから、カマド廃絶時にはまずカマドの袖をほとんど壊し、その上を粘土で被覆し、カマド封じ的な行為を行っていると推測できるが、なぜ住居北東隅まで粘土で覆っているのか、また粘土下の掘り込みの役割は不明である。このカマド封じ的な行為についての検討は、V-3 (p177-179) で行っているのでご覧いただきたい。

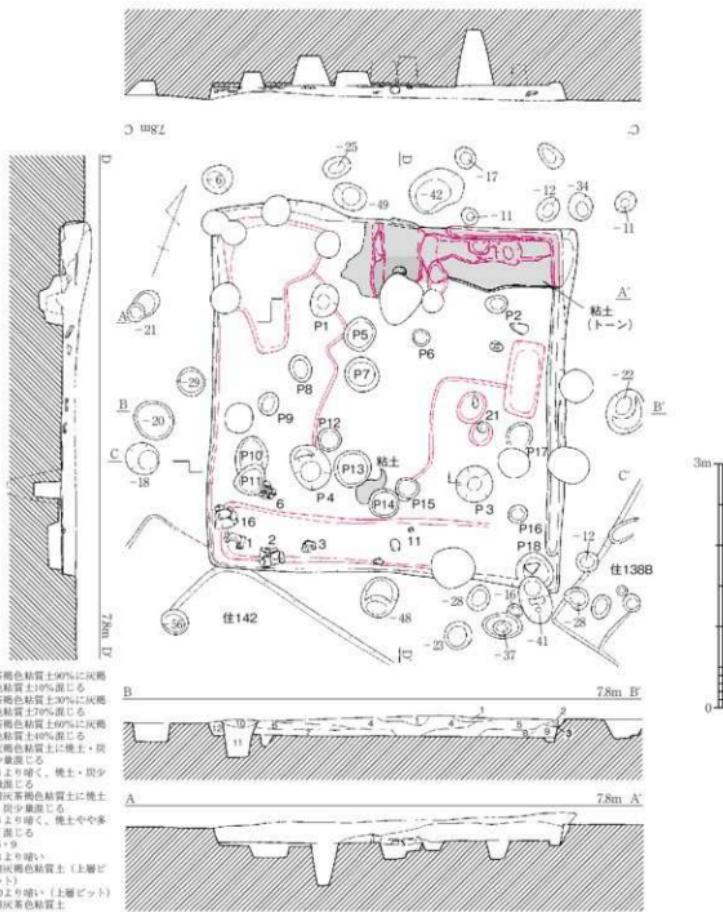
また住居南西床面直上で多数の土師器が出土したが、床面直上でかつ南西隅に集中していることから、居住時にこの空間がカマド右側と並び、土器などの物置であったことを示す可能性がある。住居中央やや南寄りの床直上で白色粘土塊を検出した。住居埋土はレンズ状堆積を示し、住居床下掘り込みは4ヶ所確認した。

住居周囲で住居跡外ピット列を検出し、当住居の補助柱であった可能性があるため、深さを示している。

埋土下層から石包丁1点（第62図4）、砥石1点（第62図11）が出土した。

カマド（巻頭図版3、図版8、第33図）

検出当初は灰黄色粘土が住居北東に広く広がっていたため、どの部分がカマドであるか確認するのに非常に手間取った。カマド自体は北壁のほぼ中央にあり、燃焼部及び袖の先端部は上層ピットとカマド廃棄行為により大きく壊されるが、かろうじて基底部が残っていた。黄白色粘土で構築された両袖は、壁から直線的に95

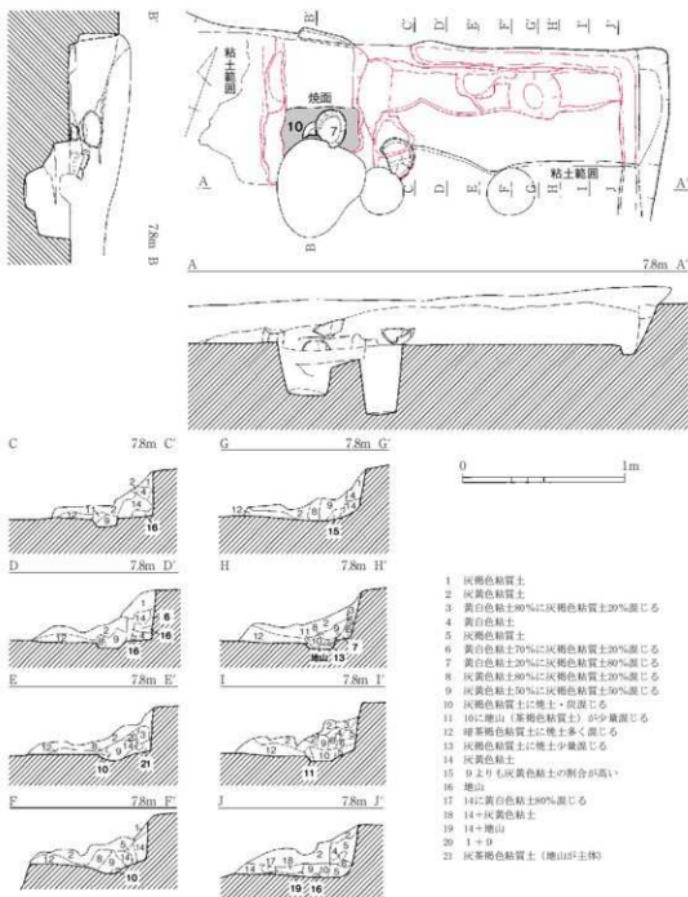


第32図 IV-B区137号竪穴住居跡実測図(1/60)

出土遺物 (図版21、第34図)

1は肩が張る胴部で、口縁部は強く内湾しながら直立し、口縁端部は強く水平に折り曲げた、「S」字状を呈する珍しい形態の土師器壺である。復元口径は14.7cmを測り、胎土は精良である。2~6は土師器壺で、3~5の外面には二次被熱痕、2・3にはススが付着する。2は長胴に逆「く」の字状に短く折れ曲がる口縁部が付く。胴部外面はハケを施しているが、摩滅のため残りが悪い。3は張りのない長胴の胴部に長めに外反する口縁部が付く。4は頸部の綺まりがない、素口縁のもの。5の内面にはコゲが付着する。6の口縁端部はナデにより凹線状に窪み、胴部外面はハケのち丁寧なナデを施すが、頸部付近にはハケ工具痕が残る。内面は頸部までケズリを施す。

7~11は土師器壺である。7は口径22.6cmを測る大型品で、ほぼ水平の壺底部から長い口縁

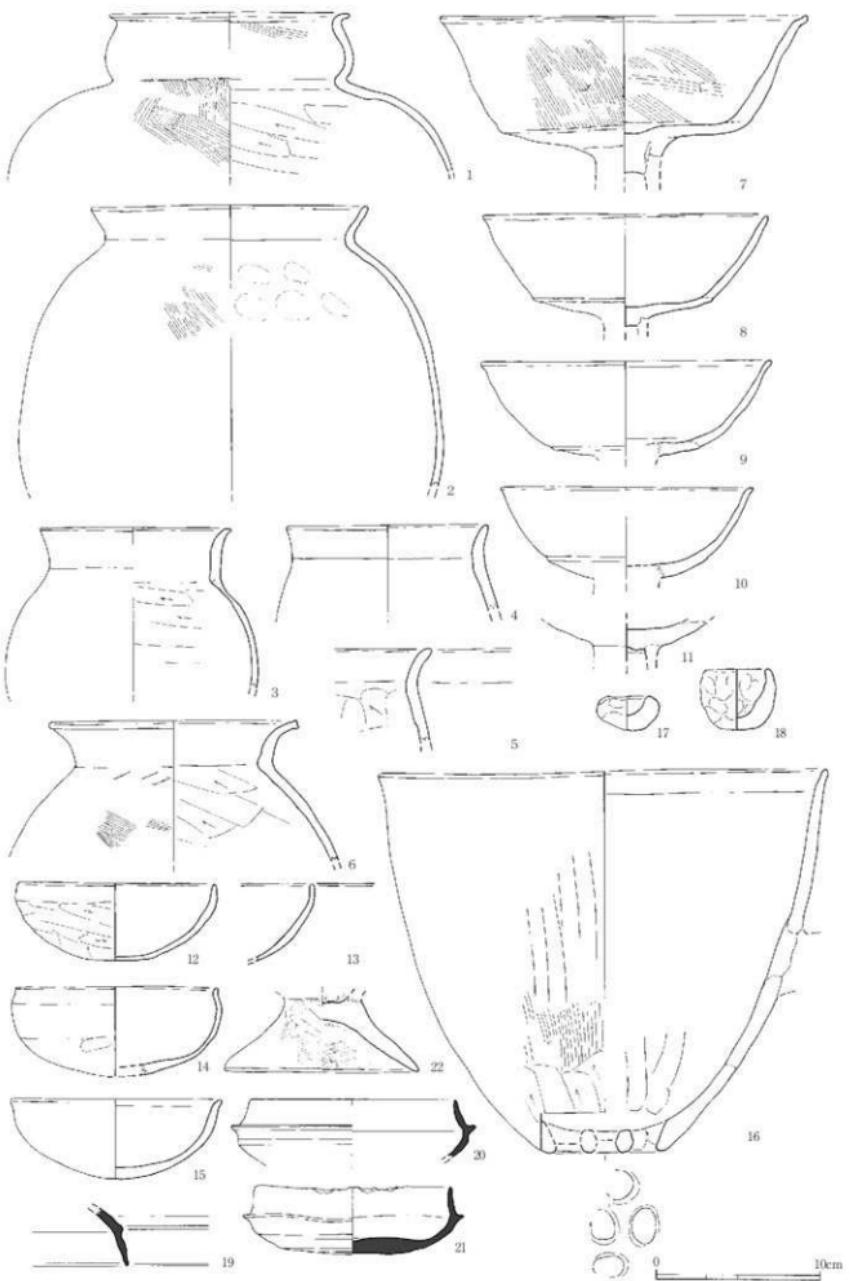


第33図 IV-B区 137号竖穴住居跡カマド実測図 (1/30)

部が緩やかに外反しながら立ち上がる、深さのある坏部。口縁端部は上方につまみ出し、内外面ともハケのち横ナデを基調とする。脚部との接合は充填法である。

8～10は椀状の坏部で、いずれも口縁端部をわずかに外反させ、屈折部には突帯状の鈍い棱が認められる。またいずれも外面は二次被熱を受けており、器表が荒れ、調整は不明である。8は黒斑あり。11の坏部割れ口は擬口縁で、坏部内面には工具紋り痕が残る。

12～15は椀状の土師器坏である。12・14の外面下位には手持ちヘラケズリを施す。12は口縁部近くまで手持ちヘラケズリを施すもので、外面には黒斑あり。復元口径12cmを測る。14は口縁部が直立気味で、端部のみ短く外反させるもの。胎土は精良である。15も口縁端部のみ短く外反させるもので、器表が荒れ、調整不明である。



第34図 IV-B区137号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)

16は土師器多孔式壺で、底部の孔は6つで復元できる。復元口径27.3cm、器高は23.5cmである。把手は外れているが、把手を挿入することにより体部と接合する。外面は全面をハケのち下位はケズリ、上位は縦ナデ、口縁部は横ナデを施す。外面には黒斑あり。17・18は手づくね土器である。17は完形に近いもので、口径27cm、器高2.1cmを測る。

19は天井部との境に鈍い棱を持つ須恵器壺蓋である。天井部は稜近くまで回転ヘラケズリを施す。焼成は甘い。20・21は須恵器壺身である。20の底部は回転ヘラケズリを受け部近くまで施す。外面受け部以下は自然釉が厚くかかる。小片のため、径に自信がない。また二次被熱痕あり。21は口縁端部を打ち欠きされたもので、歪みが顕著である。底部には回転ヘラケズリを施すが、底部中央のみその後ナデを施す。復元口径は12cmである。

出土遺物から、古墳時代後期末に属すると考えられる（大庭）。

138 A号竪穴住居跡（図版9、第35図）

調査区中央の東寄りに位置し、139号住居跡、47号土坑に切られ、138B号住居跡を切る。調査当初は当住居跡の存在に気付かず、138A・B号住居跡を一つの住居跡として掘削したが、当住居南でカマドと考えられる焼面、138B号住居跡に伴うベッド状遺構、主柱穴、主に2時期に分かれる出土土器から、新旧2つの住居が切り合うと判断した。

規模は東西2.86m×南北4.06m、深さは先述のとおり住居壁は掘り失い、ほとんど下端しか検出していないが、ちょうど上層ピットのベルト部分にかかっていた南東隅で壁残存高0.15mを測る、南北に長い長方形住居跡である。方位はG.N.より157.5°西に傾く。

当区では唯一の、南壁はば中央にカマドを付設する南カマドである。138B号住居跡とは床面がほぼ同じレベルであるため、138A・B号住居跡に伴うピットを同一面で検出した。位置と深さからP1～3が主柱穴となる可能性が高いが、北西隅主柱穴は検出できなかった。住居埋土は灰黄褐色粘質土に焼土・炭が少量混じる。

カマド付近から鉄片1点（第64図22）が出土し、当住居に伴うと考えられる。

カマド（図版9、第35図）

住居跡のはば南壁中央で検出したカマドで、径30cmの弱い焼面を検出したが、袖はカマド廃絶時に壊されたためか痕跡も全く検出できなかった。カマド北側は139号住居跡により壊される。

カマド内に落ち込んだカマド天井部粘土（薄いトーン）と硬化面及び焼面（濃いトーン）の位置から、袖間は44cm程度、袖も直線的に突出する可能性が高い。カマド支脚は土師器高杯を天地逆



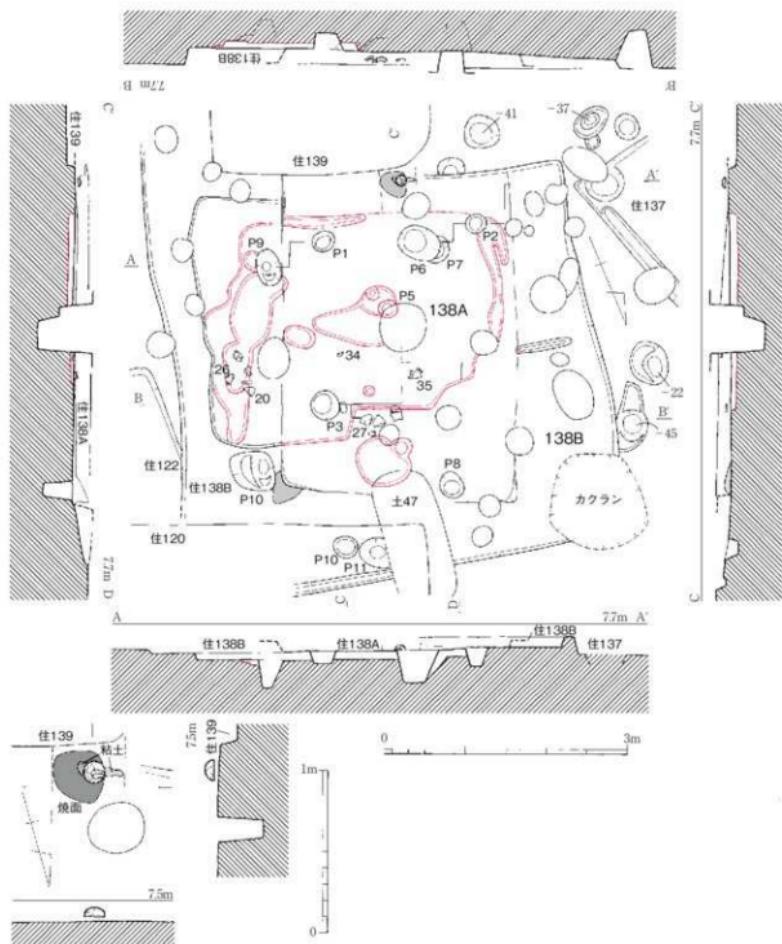
文中写真17 138A号住居跡カマド（東から）

にして転用するが、この高杯は整理段階で行方不明となり、今回報告できていない。

138A・B号出土遺物（図版20、第30図18～35）

先述したように、調査最終段階で重複する2つの住居跡と認識できたため、出土遺物は混ざってしまった。そのため、138A・B号住居跡出土遺物として合わせて報告する。

18は器壁が厚い土師器直口壺である。口縁部内外面にはハケのち横ナデを施す。内面は頭部



第35図 IV-B区138A・B号竪穴居跡・138A号カマド実測図(1/60、1/30)

までヘラケズリを施す。外面には黒斑あり。

19～22は土師器小型丸底壺で、19～21の外面及び口縁部内面にはスリップを施す。19は二重口縁壺口縁部。20は外面及び口縁部内面はハケのちミガキを施す。内面胴部中位以下にケズリを行ふ。20・21は内湾する口縁部である。20の外面はハケのちミガキ、内面胴部下位はケズリ、その上にはナデを施す。21・22の胴部内面下位にはナデの後が明瞭に残る。21の外面はナデ調整。22は頸部の締まるもので、外面胴部下位は不定方向のハケ、胴部上位はハケのちナデを施す。外面には黒斑あり。23は器壁の厚い二重口縁壺で、口縁端部はナデによる面取りにより窪む。口縁

部外面は布による横ナデを施す。内面は頸部近くまでヘラケゼリを行う。24は口縁端部を丸く折り曲げた土師器甕口縁部で、小片のため復元径に不安が残る。胎土は精良。

25～28は土師器高坏である。25の屈折部は鈍い稜で、外面はハケのち横ナデ、内面には横ハケが明瞭に残る。26は深さのある坏部で、付加法で脚部と接合させる。外面は二次被熱が顯著なため、剥離が進む。大型品である27は屈折部が突帯状に突出し、口縁部は強く開くもの。器壁は厚く、復元口径26.3cmを測る。内外面ナデ調整である。28は「ハ」の字状に開く脚部で、脚裾部を上に屈曲させるもの。内面上位には脚部と接合しやすくするためにハケ工具で刻目を施す（図版20）。29はほぼ完形品の口縁部が少し外反する土師器手づくね土器。口径5cm、器高4cmを測る。

30はかえりのある、小型の須恵器坏蓋である。回転ナデのみ施す外面には厚く自然釉が付着する。31は口縁端部が若干嘴状になる須恵器坏蓋で、器壁は厚めである。天井部の一部のみ回転ヘラケゼリを施す。内面には墨痕及び滑らかな磨面が確認できることから、後に転用窯として使用されたものと考えられる。32は低平な宝珠つまみのある須恵器坏蓋。焼け歪みは顯著である。33は須恵器坏か高坏の口縁部である。34は高台付須恵器坏身で、高台端部には重ね焼き痕が認められる。35は珍しい須恵質の把手で、焼成はやや甘い。なお、須恵器はいずれも混入品である。

出土遺物の時期は、古墳時代中期前半が20～23・25・27・28、古墳時代後期後半が18・24・26、古代が30～34の3時期に分かれる。現在は行方不明であるものの、カマドの支脚として転用した土師器高坏は古墳時代後期後半であることから、138A号住居跡は古墳時代後期後半、138B号住居跡はベッド状遺構を付設するため、古墳時代中期前半に属すると考えられる（大庭）。

138B号竪穴住居跡（図版9、第35図）

調査区中央の東寄りに位置し、120・138A・139号住居跡、47号土坑に切られ、122号住居跡を切る。先述したように、調査当初は138A・B号住居跡を一つの住居として掘削したが、調査最終段階で2つの住居が切り合っていることを確認した。

規模は東西5.4m×南北4.8m、深さ0.2mのやや平面形が歪む方形住居跡である。住居南東隅は削平のため、壁を検出できなかった。赤線は当住居跡竪穴部の可能性がある掘り込みで、竪穴部とすると4方向にベッド状遺構が付く構造となるが、東・南側のベッド状遺構の幅は狭くなり、また後述する主柱穴と考えられるP8・10がベッド状遺構内に存在することになり、竪穴部として位置づけるには不安が残る。竪穴部西と南壁の一部には深さ3cmほどの浅い壁周溝が巡る。

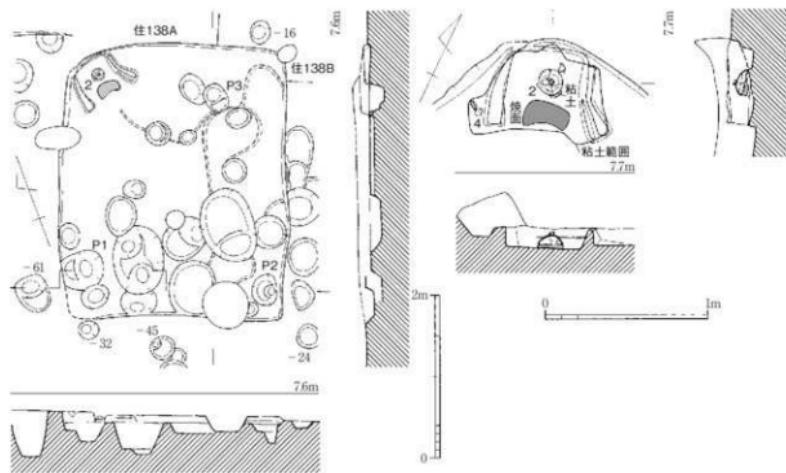
138A号住居跡とは床面レベルがほぼ同じであり、両住居跡に伴うビットを同一面で検出したが、位置と深さからP6・8～10が主柱穴となる4本柱の住居跡になるか。中央のP5には炭が少量混じることから炉と考えられる。ベッド状遺構では、西側中央で住居内仕切り溝と考えらえる深さ5cmほどの細い溝と北東部で弱い焼面を検出した。住居埋土は暗茶褐色粘質土である。

住居周囲には住居外ビットが並び、当住居の補助柱の可能性があるため、深さを示す（大庭）。

139号竪穴住居跡（図版9、第36図）

調査区中央の東寄りに位置し、138A・B号住居跡を切る。規模は東西2.85m×南北3.35m、深さ最大0.15mを測る、南北に長い小型長方形住居跡である。主軸方位はG.N.より20°東に傾く。

当区では唯一の住居北西隅にカマドを付設する。床面では多数のビット検出し、位置・深さから



第36図 IV-B区139号竪穴住居跡・カマド実測図(1/60、1/30)

P1・2が南側の主柱穴列になると思われるが、北側の主柱穴についてはP3が可能性はあるが、北西部の主柱穴は不明である。埋土は灰黄褐色粘質土である。

住居周囲には住居外ピットが並び、当住居の補助柱の可能性があるため、深さを示した。

カマド(図版10、第36図)

住居跡の北西隅に位置する隅カマドで、カマド全体を灰黄色粘土で被覆した状態で検出した。カマド両袖と燃焼部をちょうど被覆する粘土は、カマド燃焼部で厚さ8cmを測り、残存する両袖レベルと同じ高さで施す。なお、カマド燃焼部埋土は灰褐色粘質土に焼土・炭が混じる土である。

明灰黄色粘土で構築した両袖は、壁から47cm程度直線的に突出させる。北西隅壁から17cm手前で土師器高杯を天地逆にして転用した支脚(2)があり、厚さ2cmの灰褐色粘質土(薄いトーン)で下を固定していた。その部分で袖間は50cmである。またその手前で28×14cmの楕円形の弱い焼面(濃いトーン)を確認した。

出土遺物(図版21、第38図1~8)

1・2は土師器高杯である。1は直立気味の口縁部から端部が短く外反するもの。内面にはミガキが残るため、外面にもミガキを施したと考えられるが、外面は二次被熱のため、器表が荒れ、調整は残っていない。2はカマド支脚として転用されたため、二次被熱により器表が荒れ、調整は不明である。復元口径は14.3cmを測る。胎土は精良である。

3~5は須恵器高杯である。3・4は天井部との境に鈍い稜を持つ。4の口縁端部は嘴状で、天井部には回転ヘラケズリを施すが、中央部にはヘラ切り痕が残る。5は器壁が厚く、端部を丸く收めるもの。混入品。6・7は須恵器高台付杯身である。混入品。8は土師器高台付杯である。当住居上面出土で、混入品。

出土遺物から、古墳時代後期後半に属すると考えられる(大庭)。

140号竪穴住居跡（巻頭図版4、図版10・11、第37図）

調査区中央の南寄りに位置し、36号土坑、SX01に切られ、141～143号住居跡を切る。規模は東西5.65m×南北5.6m、斜面に位置するため、深さは北壁で47cm、南壁で3cmを測る正方形住居跡である。南東隅は削平され、下端のみ検出できた。主軸方位はG.N.より12°西に傾く。

北壁はほぼ中央にカマドを付設し、南東及び南西の一部以外は深さ5cm程度の壁周溝を巡らす。床面では多数のビットを検出したが、位置・深さからP1・3・4・5が主柱穴となる4本柱の住居跡である。なお、主柱穴と想定したビット周辺のP2・6・7～11は主柱穴となりうるビットであり、住居の建て替えを示す可能性がある。

住居内出土土器のうち、土師器椀状壺（17）と土師器甕（2）が床面直上出土で、土師器高坏部（5）は南側の壁周溝内にちょうど置いたような状態で出土した。埋土は灰黄褐色粘質土である。住居床下掘り込みは6ヶ所確認した。

埋土から碧玉製管玉1点（第62図3）、埋土下層から砥石1点（第62図8）が出土した。

カマド（巻頭図版4、図版11、第37図）

住居跡のはば北壁中央で検出したカマドで、左袖は壁から80cm、右袖は壁から85cm、直線的に突出する。カマド燃焼部奥壁部分で熱を受けて明茶褐色に変色したカマド壁体の一部を検出し（濃いトーン）、カマド奥壁部分ではカマド本体の高さが20cm程度であったことがわかる。また両袖とも高さ20cm程度残ることから、ドーム形天井部であったとしても袖の残りも良いものである。両袖とも灰白色粘土で構築する。

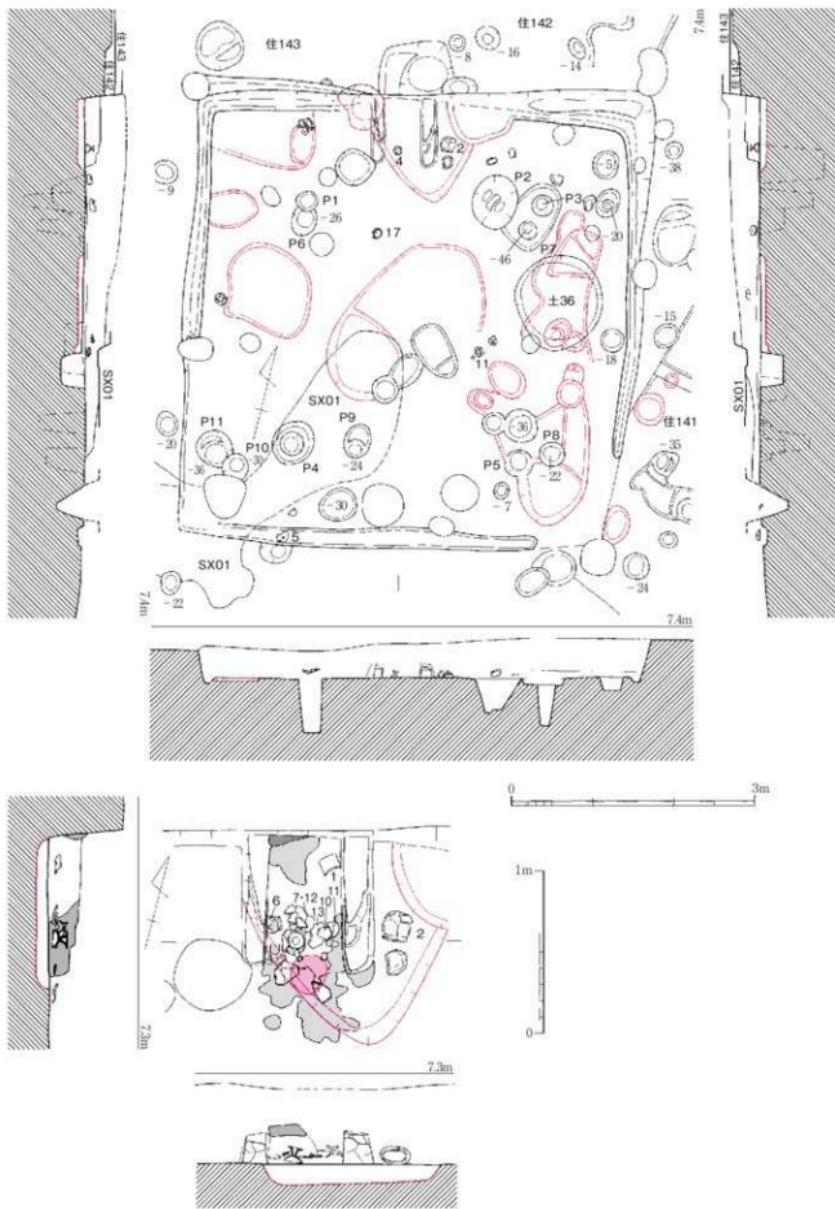
燃焼部内にはカマド天井部を構成していた壁体が落ち込む（薄いトーン）。その壁体下では土師器高坏6個体分がまとまって出土した。カマド中心軸からやや西にずれた位置に土師器高坏を天地逆にして転用した支脚（4）を確認した。この支脚は壁から55cmの位置にあり、その部分での袖間は46cmを測る。支脚前面で25cm程度の円形を呈する硬化面（赤トーン）を確認した。また支脚部分の両袖壁は非常に良く焼けており、赤変する。カマド右袖外の床面直上で完形の土師器甕（2）が出土した。またカマド下層掘り込みを確認した。

出土遺物（図版21、第39図）

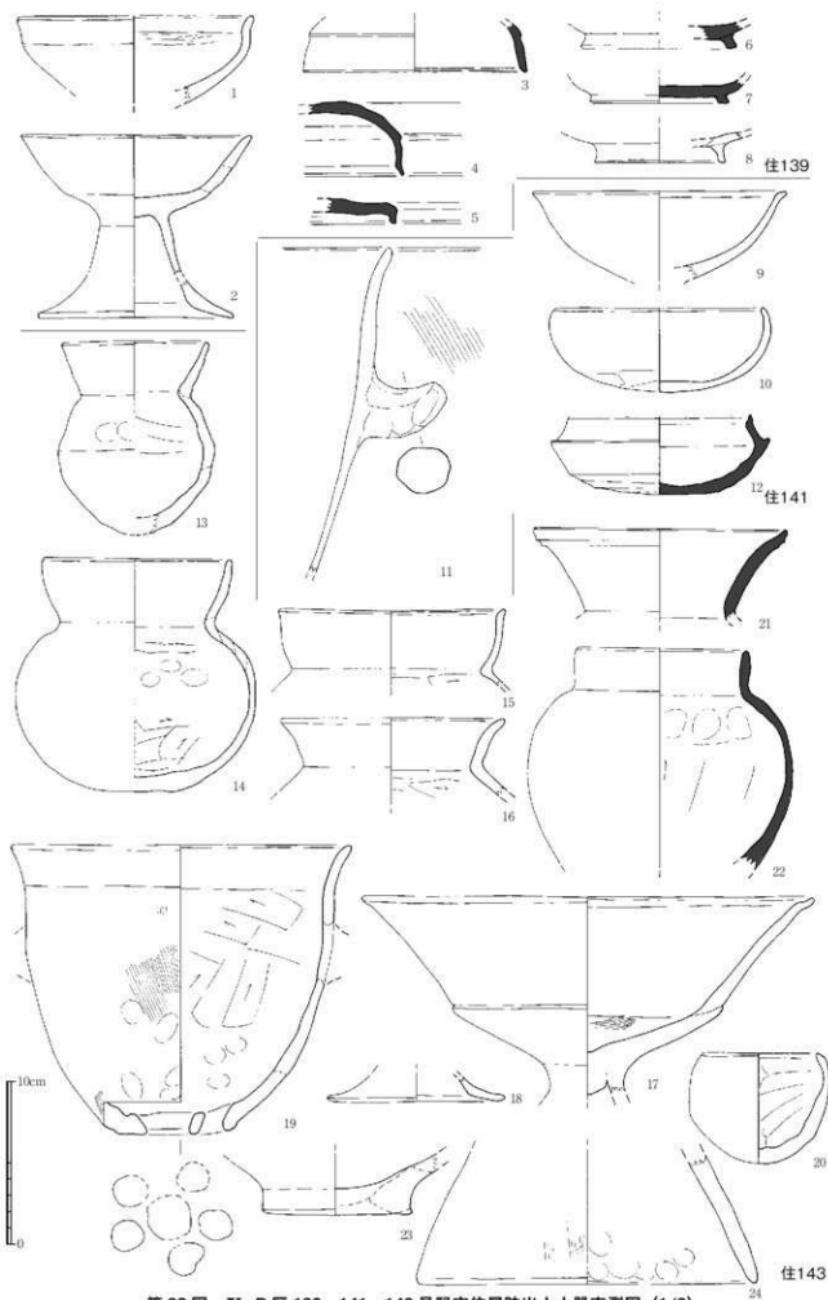
1は逆「ハ」の字状に広がる土師器直口壺である。外面には黒斑あり。2は底部以外は完形に近い土師器甕で、口径13.6cmを測る。外面は強い二次被熱を受け、器表がボロボロである。内面には粘土繼ぎ目痕が残り、底部にはコゲが付着する。3は土師器甕である。口縁部外側にはハケのち横ナデを施す。内面は頸部までケズリを施す。外面にはススが付着する。

4～14は土師器高坏である。4～6は屈折部が鈍い稜になるもの。4はカマド支脚として転用された完形品で、口径15.7cm、底径10.8cm、器高11.5cmを測る。坏部は内外面とも横ナデかナデで、脚柱部外面は継ナデ、内面はケズリを施す。外面は強い二次被熱を受け、口縁部には黒斑あり。5は内外面剥離が顕著で、調整は不明である。脚部内面には絞り痕が残る。6の内面は器表の荒れが顕著である。内外面ともスリップを塗布する。外面には黒斑あり。7の屈折部は鈍い突帯状の稜である。器表は荒れており、調整は不明。8・9は脚裾部がほぼ水平の脚部である。10・11は脚裾部が内湾気味のもの。いずれも器表の荒れにより調整は不明。11の外側には黒斑あり。

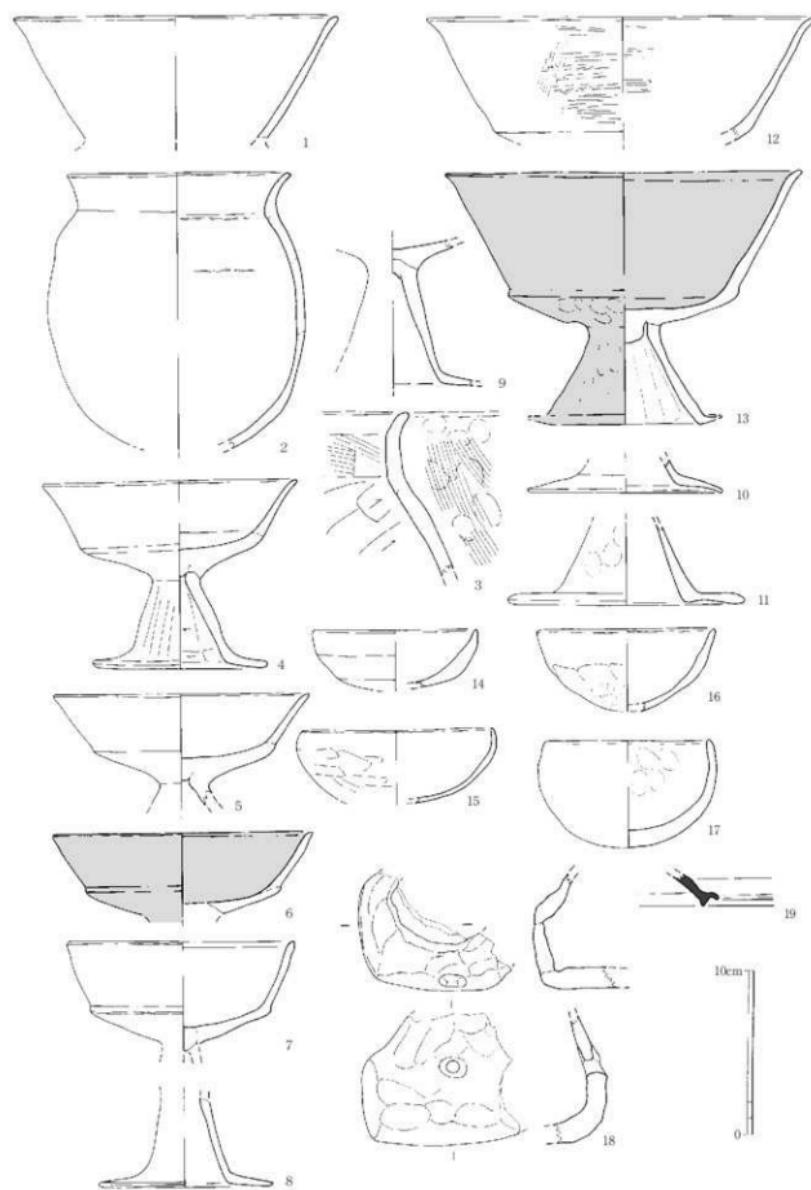
12・13は大型品で、いずれも水平の坏底部に長い口縁部が付き、口縁端部は短く外反する。12の外側はハケのち横ミガキ、内面には横ミガキを施す。外面には黒斑あり。13は口径22cm、器高



第37図 IV-B区 140号竖穴住居跡・カマド実測図 (1/60、1/30)



第38図 IV-B区 139・141・143号竪穴居跡出土土器実測図 (1/3)



第39図 IV-B区140号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)

15.2cmに復元されるもので、坏部に比べ、脚部が低く小さいもの。脚裾部は上に跳ね上がり、脚柱部外面には縦ナデの稜が、内面にはケズリが残る。外面全面及び坏部内面にはスリップを塗布し、坏部内面にはスス、坏部外面には二次被熱痕が認められる。14は浅い土師器高坏部か。外面には二次被熱痕あり。

15・17は土師器椀状坏。15・16はいずれも外面中位まで手持ちヘラケズリを施す。16はケズリ後一部にハケを施す。外面には黒班あり。17は丸い鉢状のもので、外面には黒班あり。歪みのある完形品で、口径9.8～10.5cm、器高6.5cmを測る。

18は円筒状の胴部に1ヶ所焼成前穿孔し、口縁部がそのまま開く特異な器形の土師器。須恵器樽形甌に近い形状になるか。円筒状の胴部は両端を円盤状の粘土で塞ぐ（図版21）。内外面ともナデ調整で、指押さえ痕が残る。19はかえりのある須恵器坏蓋である。混入品。

出土遺物及び切り合い関係から、古墳時代後期後半に属すると考えられる（大庭）。

141号竪穴住居跡（図版11・12、第40図）

調査区の南東に位置し、140号住居跡、48号土坑に切られる。斜面に位置するため南壁は削平を受け残っていないが、床下掘り込みの存在から、規模は東西5.75m×南北5m程度のやや南北に長い方形住居跡になると思われる。主軸方位はG.N.より77°西に傾く。

西壁ほぼ中央にカマドを付設し、東壁の一部で深さ4cmの壁周溝を検出した。床面には多数の中世ピットが切り込むが、位置・深さからP1～3が主柱穴の4本柱の住居跡である。なお、P1内で土師器瓶片を確認したが、柱を抜いた後に体部片を置き、その後把手が付いた口縁部片を把手の位置をずらして重ねているという特徴的な埋納方法を確認した。このP1の埋土は暗茶褐色粘質土である。カマド手前で出土した土師器椀状坏（10）は床面直上にあったものと考えられる。住居埋土は灰黄褐色粘質土で、住居西半分と南東側で床下掘り込みを確認した。

埋土からすり石1点（第62図15）が出土した。

カマド（図版12、第40図）

住居跡のはば西壁中央で検出したカマドであるが、左袖は削平のため全く痕跡も確認できなかつた。白灰褐色粘質土で構築した右袖は、壁から85cm直線的に突出し、高さは最大5cm程度である。壁から55cm手前で天地逆にした土師器高坏（9）を転用した支脚があり、その手前で赤褐色で広がる焼面（薄いトーン）と硬く焼けた硬化面（濃いトーン）を検出した。支脚部分で反転すると、袖間は55cm程度となるか。カマド埋土は茶褐色粘質土に焼土と炭が多く混じる土である。

出土遺物（図版21、第38図9～12）

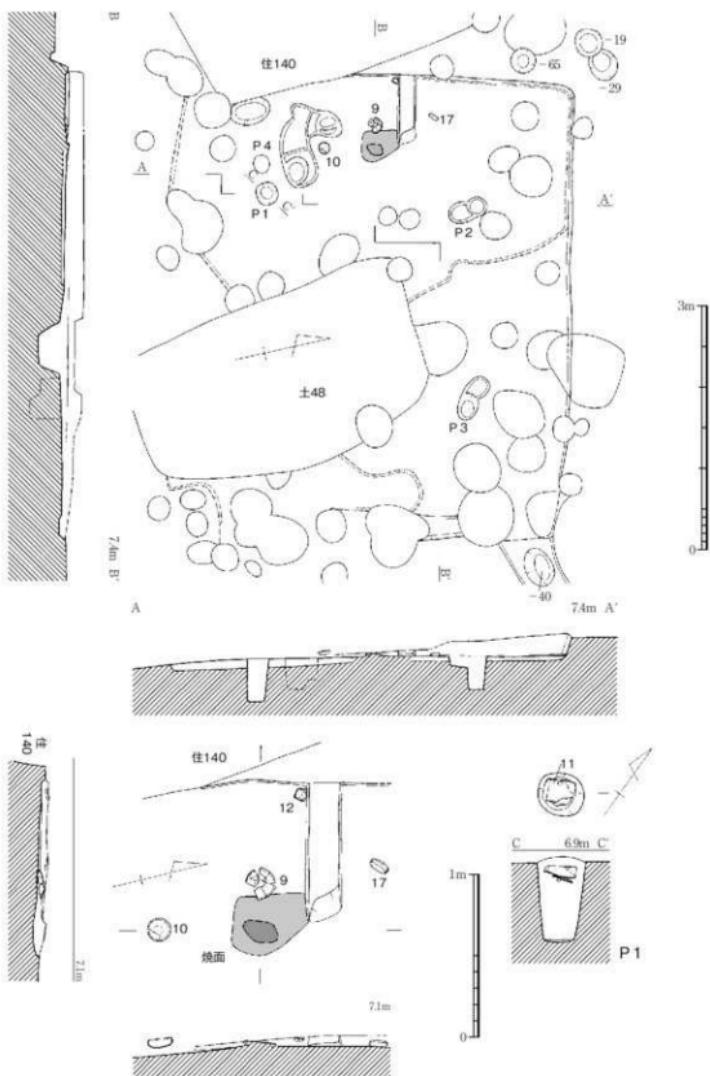
9は口縁端部を短く外反させた土師器高坏である。器表が荒れており、調整は不明である。10は完形の土師器椀状坏で、口径12.7cmを測る。底部には手持ちヘラケズリを施す。11は土師器瓶で、P1内に意図的に置かれたもの。内面は器表が荒れており、調整は不明。

12は口縁端部を上方につまみ出した須恵器坏身で、底部には反時計回りのヘラケズリを施す。

出土遺物から、古墳時代後期後半に属すると考えられる（大庭）。

142号竪穴住居跡（第41図）

調査区の中央に位置し、137・140・143号住居跡に切られる。規模は東西5.2m、南北は屋内土



第40図 IV-B区 141号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60, 1/30)

坑が南壁に付設していたとすると 4.5 m 程度となり、深さは竪穴部で 0.45 m の長方形住居跡になるか。主軸方位は G.N. より 11° 東に傾く。

住居東・西壁には、高さ 6 ~ 8 cm のベッド状遺構を付設するが、東のベッド状遺構は上層の 143 号住居跡の影響により折れ曲がっているが、本来は壁に並行していたと考えられる。

竪穴部床面ではピット 4 基及び屋内土坑を検出したが、ピットはいずれも浅く主柱穴は不明で、炉も不明である。屋内土坑は 50cm × 33cm、深さ最大 23cm の方形を呈する。

住居内では多くの土器が出土したが、そのほとんどが埋土上層の灰褐色粘質土に伴うもので、住居内に遺棄したものである。住居埋土下層の灰茶褐色粘質土に伴う土器は器台（20）のみである。床下掘り込みを 1 ヶ所確認した。

埋土から砥石 1 点（第 62 図 10）が出土した。

出土遺物（図版 21、第 42・43 図 1 ~ 24）

1 は逆「ハ」の字状に強く聞く、瀬戸内系広口壺口縁部である。口縁端部には径 0.9cm 前後の円形浮文を約 2 cm 間隔で貼り付ける。口縁内端部は若干上につまみ上げる。2 は在地系複合口縁壺で、屈折部は稜になる。外面には二次被熱痕があり、かつ一部は黒変する。3 は頸部が締まる在地系壺であるが、器形は瀬戸内系の影響を受けた可能性があるもの。胴部内面にはナデの稜が残る。

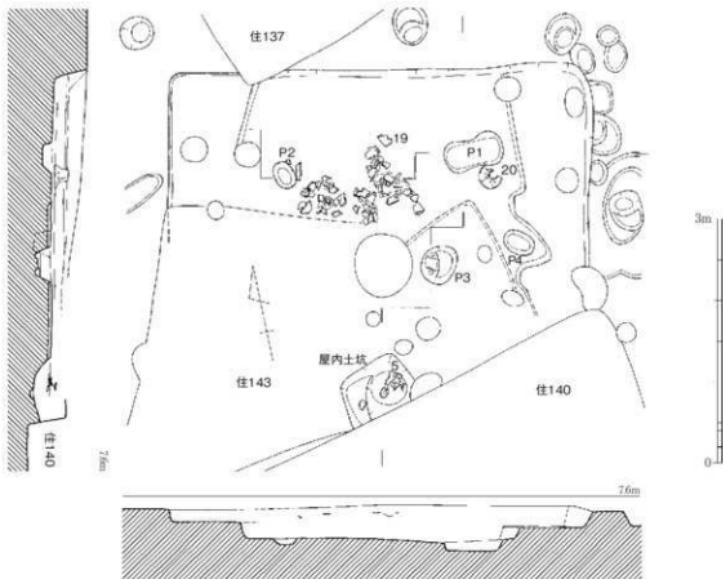
4 ~ 11 は在地系甕で、4 ~ 7・10・11 の外面には黒斑あり。5・10 の外面にはスヌ、5・11 の内面にはコゲが付着する。8・10・11 の外面には二次被熱痕あり。5 は屋内土坑出土で、口縁端部は若干肥厚させる。復元口径 18.6cm、復元器高 25cm を測る。7 は口縁端部が細くなるもので、胴部外面には工具痕が残る。8 は胴部の張りがなく、器壁が薄いもので、焼成も甘い。9 は口縁外端部を若干つまみ出すもの。10・11 はほぼ丸底に近い凸レンズ底の底部である。

12 は瀬戸内系甕で、器形と胎土から搬入品の可能性が高いもの。口縁外端部には、線が一定しないこと及び切れ目が確認できることから、ヘラ工具で回転により施されたものではなく、一筆書きで施されたと考えられる三条の細い凹線を巡らす。頸部外面にはヘラ工具による刻みを浅い列点文状に施す。内面頸部までケズリを行う。色調は黄橙褐色を呈する。13 は弱い凸レンズの弥生後期甕底部。外面にはスヌが付着する。若干時期が古いもの。

14 ~ 16 は在地系高坏である。14 は口縁端部を内側に丸く折り曲げた、豊前系高坏である。外面は顕著な二次被熱のため、調整は不明である。15 はほぼ乾燥時に外→内に穿孔を 2 つ程度施したもので、外面は工具ナデ、内面はナデで調整する。16 はほぼ乾燥時に外→内に 3・6・9 時の 3ヶ所に穿孔を施したもの。外面は磨滅のため、調整は不明。

17 は在地系脚付鉢である。胎土は精良である。18・19 は在地系器台である。18 は上部端部にハケ工具による浅い刻みを施し、外面はタタキのちハケ調整を基調とする。胎土は精良で、焼成もきわめて良いもの。19 は下部片で、外面はタタキのちごく一部にハケを施す。外面には顕著な二次被熱痕あり。

20 は搬入品の可能性が高い西部瀬戸内系の器台である。下部の孔はほとんど乾燥時に外→内に径 0.6cm、孔間 23cm の 2 個セットを 4 ヶ所施す。上部の孔は 1 ヶ所のみ残っているため、何個セットで何ヶ所施されたかは不明である。上部孔下には等間隔であることから、櫛状工具により施されたと考えられる浅く巡る七条の凹線を施す。下部端部にも一部三条になるものの、基本二条の櫛状工具による浅く巡らせた凹線を施している。外面は横ナデ、内面も柱部は継ナデ、下部内面は横ナ



第41図 IV-B区142号竪穴住居跡実測図(1/60)

デを施す。外面全体にはスリップを塗布する。下部端部には黒斑あり。生地は橙褐色である。

21～23は在地系支脚である。21はほぼ完形で、上部径4.5cm、下部径10.4cm、器高9.9cmを測る。上部中央に穿孔を施すもので、外面はタタキのちナデ、内面にはハケを施す。外面にはスス及び二次被熱痕あり。22もほぼ完形品で、上部径6.4cm、下部径11cm、器高10.9cmを測る。外面はタタキ痕、内面はナデのちハケを施す。外面には顯著な二次被熱痕あり。筒形の23は内外面指押さえ痕が顯著に残る粗製のもの。外面には顯著な二次被熱痕が残る。24はやや上げ底の弥生中期甕底部である。混入品である。

出土遺物から、弥生時代後期終末に属すると考えられる(大庭)。

143号竪穴住居跡(第44図)

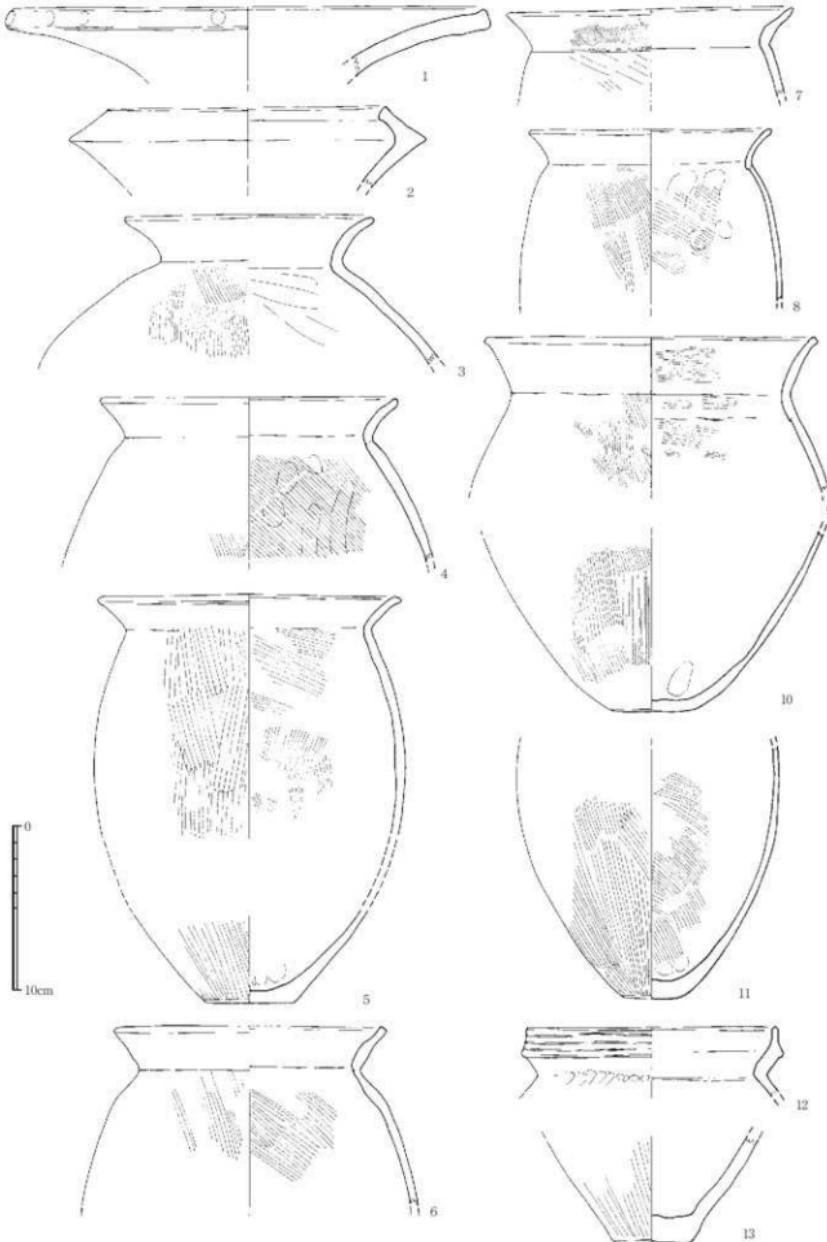
調査区の中央に位置し、142号住居跡を切り、140号住居跡に切られる。142号住居跡との前後関係を誤り、北壁と東壁の一部は掘り失い、南壁は削平され残っていない。規模は現状で南北4.7m以上、カマド中心軸で反転すると南北幅5.5m程度となる方形住居跡で、深さは最も残りの良い北西部分で0.3mを測る。主軸方位はG.N.より69°西に傾く。

住居西壁はほぼ中央にカマドを付設する。住居床面ではピット7基検出し、深さと位置からP1～3が主柱穴になると思われ、P7は規模から屋内土坑となる可能性がある。

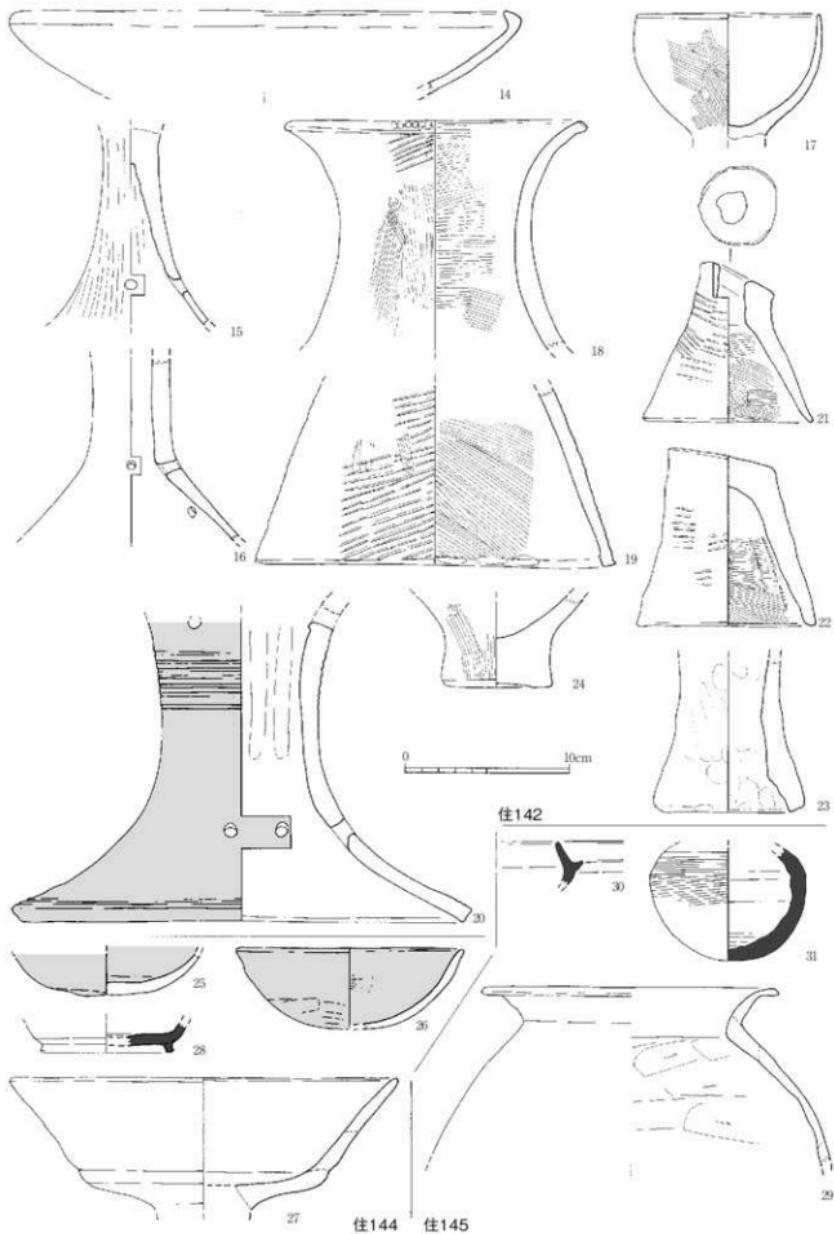
住居埋土は灰褐色粘質土である。住居大部分で床下掘り込みを確認した。

カマド(図版12・13、第44図)

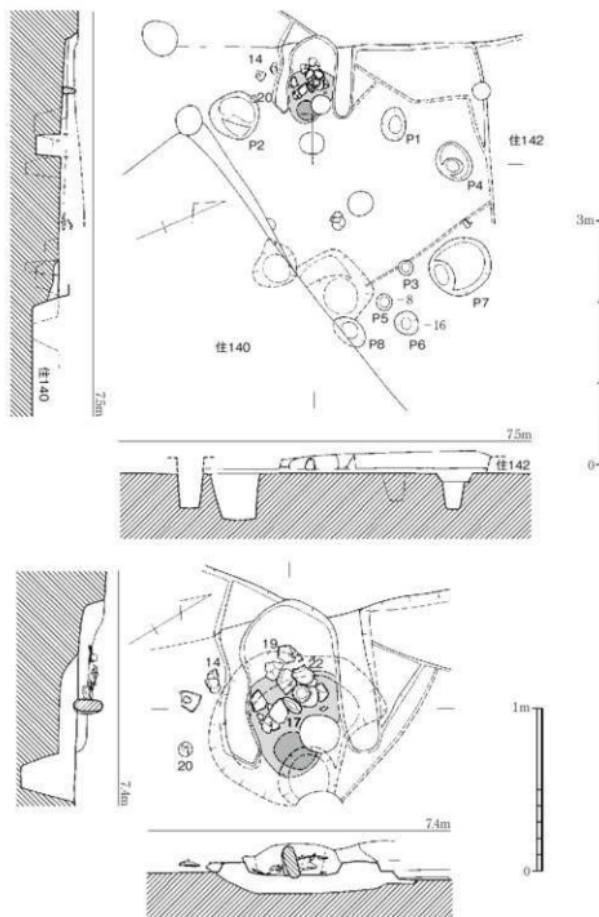
住居西壁はほぼ中央に付設されたと考えられるカマドである。暗灰茶褐色粘質土で構築した両袖と



第42図 M-B区142号竪穴住居跡出土土器実測図① (1/3)



第43図 IV-B区 142②・144・145号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)



第44図 IV-B区143号竖穴住居跡・カマド実測図 (1/60、1/30)

には黒斑あり。14は外面全面及び口縁部内面まで二次被熱を受けた中型壺で、口縁部は弱く内湾する。胴部は偏球状で、外面はナデ、内面下位にはケズリを施す。内面上位には粘土漬ぎ目痕が残る。外面底部にはスス、内面下位にはコゲが付着する。15は内湾する口縁部の直口壺である。内面は頸部までケズリを施す。16は土師器壺で、外面は丁寧なナデを行い、内面頸部までケズリを施す。17・18は土師器高坏である。17は口縁端部を内清気味に強く折り曲げる。屈折部は鈍い稜で、粘土接合痕も確認できる。基本的に内外面は横ナデであるが、坏部内面のみナデ前のハケが残る。内面に黒斑があり、内外面には二次被熱痕が認められる。

19は小型の土師器多孔式瓶で、口径20.9cm、底径7.6cm、器高18cmに復元できる。口縁部は弱く

も壁から85cm突出するが、左袖先端は掘りすぎている。

燃焼部は逆「U」字状に10cm壁を掘り込み、その奥壁から60cm手前に石製支脚を置く。石製支脚は少し掘り窪めて設置し、粘土で固定していた。支脚前面では硬化面を確認した。

支脚周辺で土器がまとまって出土し、須恵器壺もあることから、カマド廃絶時に意図的に廃棄されたものと想定される。カマド埋土は灰褐色粘質土に焼土・炭を多量に含む。またカマド下層掘り込みを確認した。

出土遺物（第38図13～24）

13～15は土師器壺である。13は外外面粗めのナデ調整を施し、胴部が窄まった小型丸底壺。外面

外反させ、把手は外れているが、体部に挿入する形態で、2ヶ所に付いていたと考えられる。底部には2cm程度の孔を6ヶ所外→内に焼成前穿孔を行っている。外面はハケ、口縁部内外面は横ナデ、内面体部中位はケズリ、内面体部下位はナデを施す。外面には黒斑、二次被熱痕があり、内面下位にはコゲが付着する。20は手づくりね土器で、内面にはナデの稜が残る。

21は須恵器壺口縁部である。口縁端部にはナデ凹線を施す。22は須恵器直口壺である。全体的にシャープなつくりではない。胴部内面には工具痕及び指押さえ痕が認められる。焼成も不良。23・24は混入品である。23は弱い凸レンズ底の弥生後期壺底部。外面には黒斑あり。24は弥生後期器台下部片である。外面には黒斑あり。

出土遺物及び切り合い関係から、古墳時代後期後半に属すると考えられる（大庭）。

144号竪穴住居跡（図版13、第45図）

調査区の中央南端に位置し、45号土坑に切られる。住居南側の大半は削平を受けるが、規模は東西5.6m以上、南北は西壁中央にカマド硬化面があったとすると44m程度の、長方形住居跡になるか。深さは北西隅で0.25mを測る。主軸方位はG.N.より54°西に傾く。

西壁から90cm手前で、径50cmほどの硬化面を検出し、カマドが存在していたと考えられる。床面ではビット5基検出し、位置と深さからP1・2が主柱穴の4本柱の住居跡になるか。北東隅で天地逆で出土した土師器壺（26）は、本来床面直上にあったと考えられる。住居埋土は灰黄褐色粘質土で、住居床下掘り込みを1ヶ所確認した。

出土遺物（第43図25～28）

25・26は土師器壺状坏で、いずれも外面底部には手持ちヘラケズリを施し、内外面にはスリップを塗布する。26の内面には横ミガキを施す。27は土師器高坏部で、屈折部の稜は鈍い。外面には黒斑あり。脚部とは付加法により接合するものである。28は高台付須恵器壺身で、混入品。

出土遺物から、古墳時代後期後半に属すると考えられる（大庭）。

145号竪穴住居跡（第45図）

調査区中央の北東寄りに位置し、120号住居跡、46・47号土坑に切られ、138B号住居跡を切る。138B号住居跡とは切り合い関係を誤り、先に138B号住居跡を掘削してしまった。壁として検出できたのは北壁のみで、深さは0.1mを測る。規模は東西4.2m以上×南北3.9m以上である。

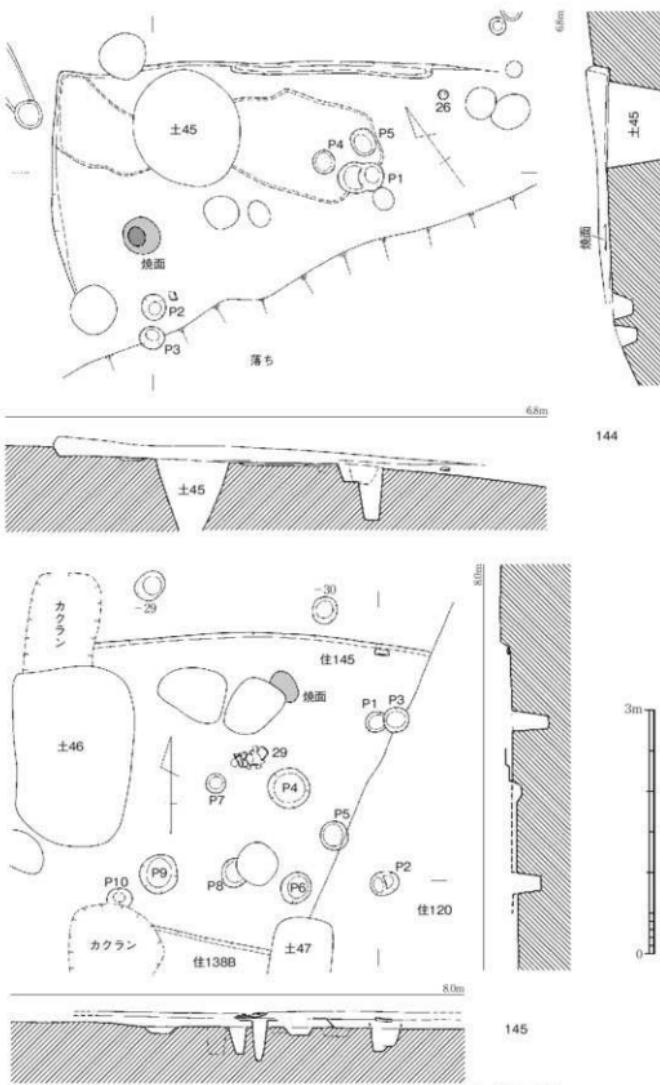
床面ではビット10基を検出し、位置と深さからP1・2が東側の主柱穴列となると思われるが、西側の主柱穴は不明である。住居北側で焼面を検出し、カマドが存在した可能性がある。住居埋土は灰褐色粘質土である。

出土遺物（第43図29～31）

29は土師器壺である。頸部は締まり、口縁端部はさらに水平方向に屈折させ、口縁端部はナデ



文中写真18 144号住居跡付近（南から）



第45図 IV-B区144・145号竪穴住跡実測図(1/60)

により壅む。内面は頭部までケズリを施す。外面には黒斑があり、スヌも付着する。

30は須恵器坏身口縁部で、外面には厚く自然釉が付着する。31は須恵器體で、体部上位には粗いカキ目を巡らす。

出土遺物から、古墳時代後期末に属すると考えられる(大庭)。

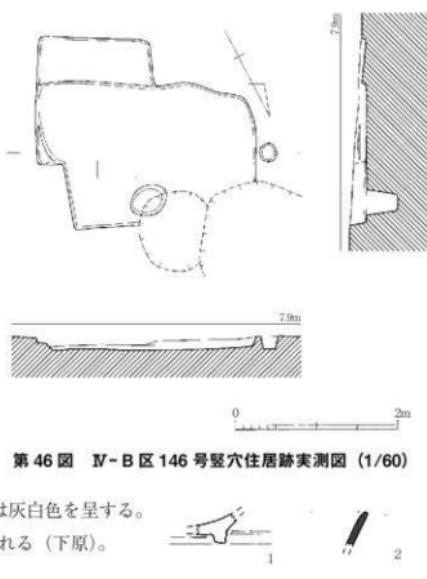
146号竪穴住居跡（第46図）

調査区の北西側に単独で位置する。規模が小さく不整形であるが、他の土坑とも形態が異なることから、ここでは住居として報告する。平面形はL字形を呈し、東西2.71m、南北2.3m、深さ0.2mを測り、南東側が僅かながら一段高くなる。床面ではピットを確認したが、主柱穴になるかどうかは不明である。ごく少量の遺物が出土した。

出土遺物（第47図）

1は土師器高台付窓の高台片で、高台は断面方形を呈する。胎土は精良で、焼成はやや良好である。色調は黄白色を呈する。2は須恵器壺の口縁部の小片である。胎土は精良で、焼成も良好である。色調は灰白色を呈する。

出土遺物から、時期は8世紀前半と推定される（下原）。



第46図 IV-B区146号竪穴住居跡実測図(1/60)

(4) 掘立柱建物跡

9号掘立柱建物跡（第48図）

調査区の南西隅に位置する。規模は2×2間の総柱建物で、柱間の心々距離で桁行3.09m×梁行3mである。当初は建物跡となることに気付かず、ピットとして掘削したため、柱痕跡は平面ではとらえていないが、北西のピット3基で柱痕跡の一段深い掘り込みが認められる。柱穴は径0.25m～0.4m、深さ0.1～0.3m前後の円形のピットで構成される。方位はG.N.より10°西に傾く。柱穴埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物で図示できるものはないが、埋土及び主軸から、近世以降に属すると考えられる（大庭）。

(5) 土坑

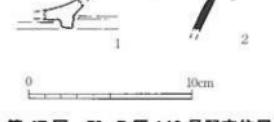
29号土坑（第49図）

調査区の北東側に位置し、120・122号住居跡を切る。長さ1.99m×幅0.86m、深さ0.35mを測る。埋土は暗灰褐色土である。特に目立った出土遺物もなかったが、規模や形態などから土壙墓の可能性もある。

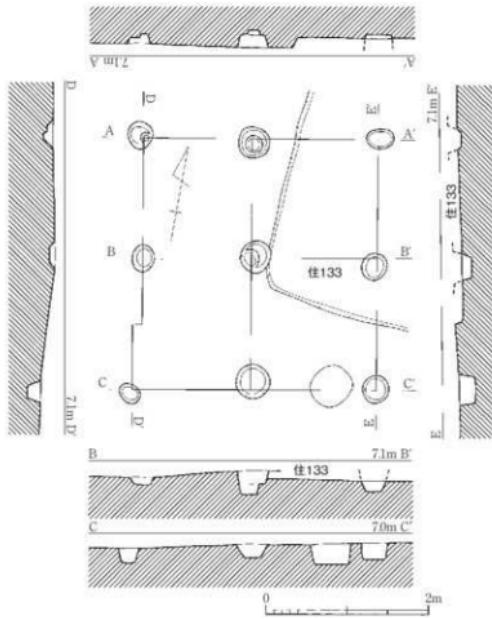
出土遺物（第50図1・2）

1は土師器短脚高壺の脚部片である。筒状部は裾広がりで、裾部との境付近で割れている。内外とも磨滅し、調整は不明瞭である。本来は120号住居跡に伴っていた土器が、土坑の掘削に伴い混入したものと考えられる。2は瓦質の擂鉢で、口縁部内面を肥厚させる。外面はナデ調整、内面はタテハケ調整の後に7本を単位とする摺り目を刻んでいる。

時期は、僅かな遺物から12世紀から13世紀頃と推定される（下原）。



第47図 IV-B区146号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/3)



第48図 IV-B区9号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

る。5は龍泉窯系青磁碗の小片で、外面は櫛描文、内面は劃花文を施し、釉は緑灰色を呈する。

出土遺物は僅かであるが、時期は12世紀後半から13世紀前半頃と推定される（下原）。

32号土坑（図版2、第49図）

調査区の北東部に位置し、120・121号住居跡を切り、18号溝に切られる。規模は長さ1.94m以上×幅1.58m、深さ0.12mを測る。底面では20cm大の礫が落ち込んだビットを検出したが、直接関係ある遺構かどうかは不明である。

出土遺物（第50図6～8）

6は土師器高坏の坏底部片で、脚部は接合面で剥離している。坏部は水平で、口縁部は斜め上方へ真っ直ぐ伸びる。外面にタテハケ調整がみられ、内面はナデ調整である。混入品である。7は瓦質の擂鉢で、底部の小片のみが遺存する。焼成が不良で、やや土師質気味である。外面は摩滅しているが、内面はナデ調整後、5本を単位とする擂り目を施している。8は施釉陶器の底部片で、胎土は明灰色を呈し、内外とも薄い透明釉が掛かり、色調はやや暗い灰緑色を呈する。内外に胎土目の痕跡が4つずつ残る。

時期は遺物が少なく判断に苦しむが、12世紀から13世紀頃であろうか（下原）。

33号土坑（図版14、第51図）

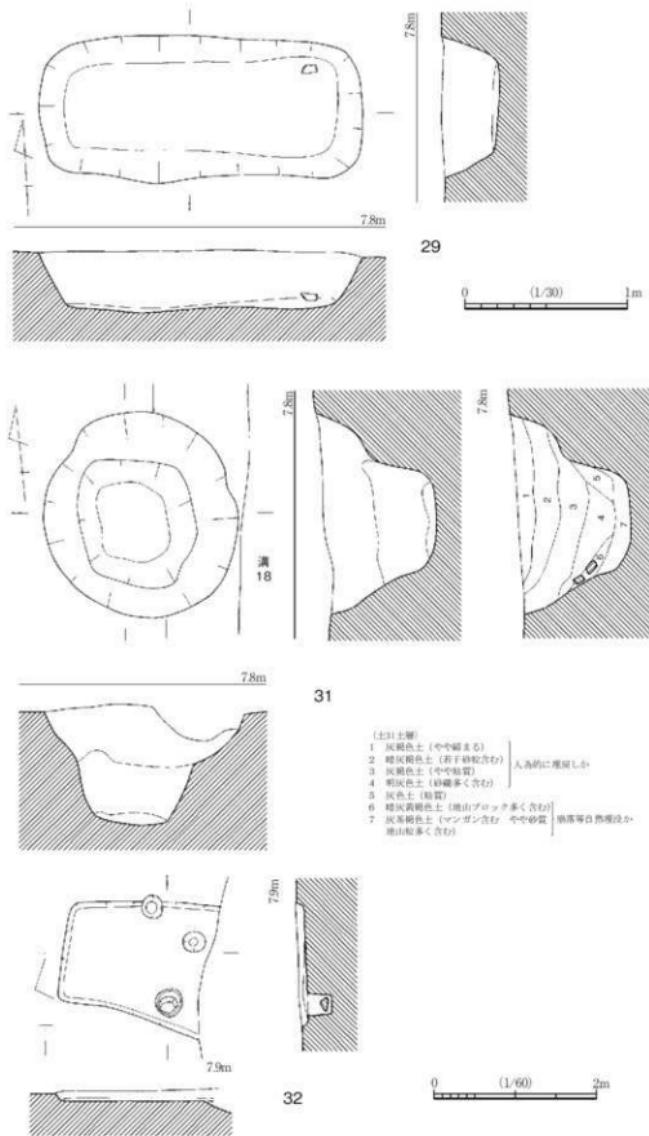
調査区の中央やや東寄りに位置する。規模は1.2m×0.8m、深さ0.16mを測る楕円形土坑である。

31号土坑（図版13、第49図）

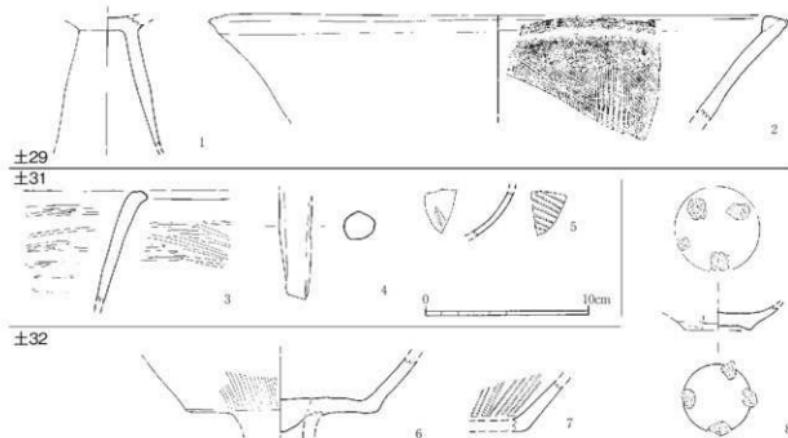
調査区の東側に位置し、18号溝に切られる。規模は東西2.4m×南北2.52m、深さ1.49mを測り、最初に擂鉢状に掘削し、さらに中央を径1.5mほどの範囲で深掘りする段構造を呈する。井戸枠などの痕跡はなく、湧水も認められなかったが、溜め井状になっていた可能性もあり、18号溝とも無関係ではないか。深掘りされた部分が底面を含め方形を志向していることも何らかの構造物を伴っていた可能性を示すのかもしれない。

出土遺物（第50図3～5）

3は土師質の鉢とみられ、焼成は堅緻である。内外ともヨコナデ後、横方向のミガキを施す。4は防長系の足鍋の脚部片で、焼成は瓦質である。縦方向のナデ調整で仕上げてい



第49図 IV-B区 29・31・32号土坑実測図 (1/30, 1/60)



第50図 IV-B区29・31・32号土坑出土遺物実測図(1/3)

埋土は灰褐色粘質土に赤褐色粘質土が混じる土である。

出土土器で図示できるものはないが、土器片から古墳時代前期前半に属すると考えられる(大庭)。

34号土坑(図版14、第51図)

調査区の中央西端に位置する。規模は $1.37\text{m} \times 1.27\text{m}$ 、深さは 0.25m の楕円形土坑である。壁はいずれも緩やかに立ち上がる。埋土は灰褐色粘質土である。

出土土器で図示できるものはないが、土器片から中世に属すると考えられる(大庭)。

35号土坑(図版14、第51図)

調査区の中央の東端に位置する。規模は $1.41\text{m} \times 0.79\text{m}$ 、深さ 0.98m の楕円形土坑である。短軸側断面はフラスコ状で、壁は内傾しながら立ち上がる。南側に三日月状のテラスを持つ。埋土は地表から 0.4m までは暗橙褐色粘質土が主体の土坑を埋め戻し土で、その下は灰褐色粘質土である。

出土遺物(第52図1)

1は口縁端部を内側に折り曲げ、丸く収めた瓦質擂鉢口縁部で、外面にはハケのち炭素を吸着させる。内面には横ハケのち七条の櫛目を一定間隔で施す。

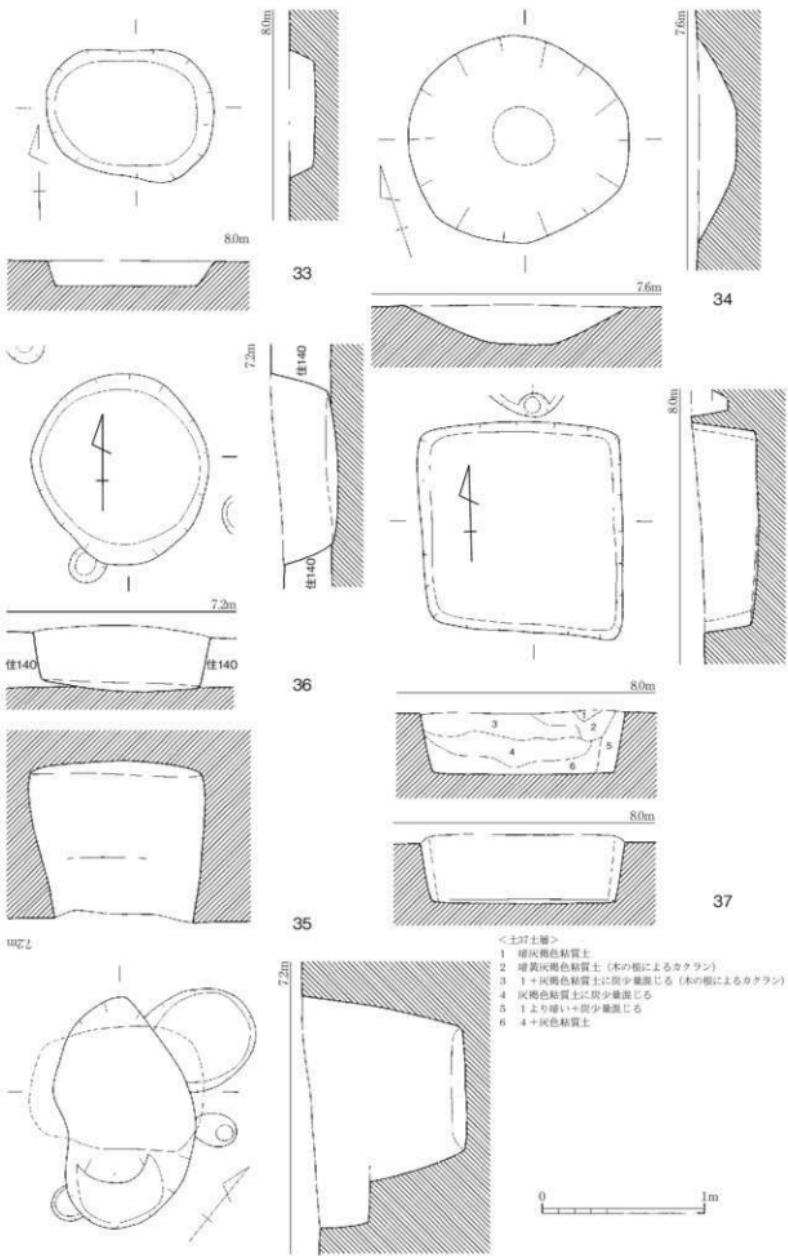
出土遺物から、15世紀前後に属すると考えられる(大庭)。

36号土坑(図版15、第51図)

調査区の中央南端に位置し、140号住居跡を切る。規模は $1.17\text{m} \times 1.09\text{m}$ 、深さ 0.4m の円形土坑である。埋土は暗灰褐色粘質土である。

出土遺物(第52図2)

2は大型の土師器鉢で、内面下位には工具痕が残る。外面下位は黒変する。



第51図 IV-B区 33~37号土坑実測図 (1/30)

出土遺物から、古墳時代後期～古代に属すると考えられる（大庭）。

37号土坑（図版15、第52図）

調査区の南西に位置する。規模は $1.3\text{m} \times 1.25\text{m}$ 、深さ 0.38m の方形土坑である。壁の立ち上がりは急である。埋土は $1\sim 3$ が木の根によるカクランを受け、 $4\sim 6$ はいずれも土質が近いことから、短期間に埋めたものと考えられる。

出土遺物（図版21、第52図3～5）

3・4は高台付土師器皿である。3は内外面とも剥離が顕著である。復元口径は 13.5cm を測る。5は高台付土師器碗である。

出土遺物から、10世紀前後に属すると考えられる（大庭）。

38号土坑（図版15、第53図）

調査区の南西に位置し、134号住居跡を切る。規模は $0.76\text{m} \times 0.73\text{m}$ 、深さ 1.06m であるが、134号住居跡掘削時に土坑の存在に気付いたため、本来はさらに深さがある小型円形土坑になる。テラスは4ヶ所持つ。埋土は灰褐色粘質土である。

出土遺物（第52図6・7）

6は小型の土師器高环坏部か。7は須恵器罐で、体部中位には生乾き時に外→内に穿孔を1ヶ所施す。体部中位以上には厚い自然釉、内面底部にも自然釉が付着する。

出土遺物から、古墳時代後期末に属すると考えられる（大庭）。

43号土坑（図版15、第53図）

調査区の南東端に位置する。4基ピットが切り込むが、いずれも当土坑より新しいものである。規模は $1\text{m} \times 0.82\text{m}$ 、深さ 0.13m の不整形土坑である。床面から 3cm ほど浮いた状態で高台付土師器碗（10・11）と土師器坏（8）が出土した。埋土は灰黒色粘質土である。

出土遺物（第52図8～12）

8は土師器坏で、底部はヘラ切りのままである。外面は二次被熱を受け、器表はボロボロである。9～12は高台付土師器坏である。10は丸みを帯びた体部にやや高めの高台が付く。体部外面はナデによる凹凸が顕著である。復元口径 14.2cm 、復元器高 5.8cm を測る。11は器壁が厚めである。12は高台及びその底径が小さいもの。

出土遺物から、10世紀前後に属すると考えられる（大庭）。

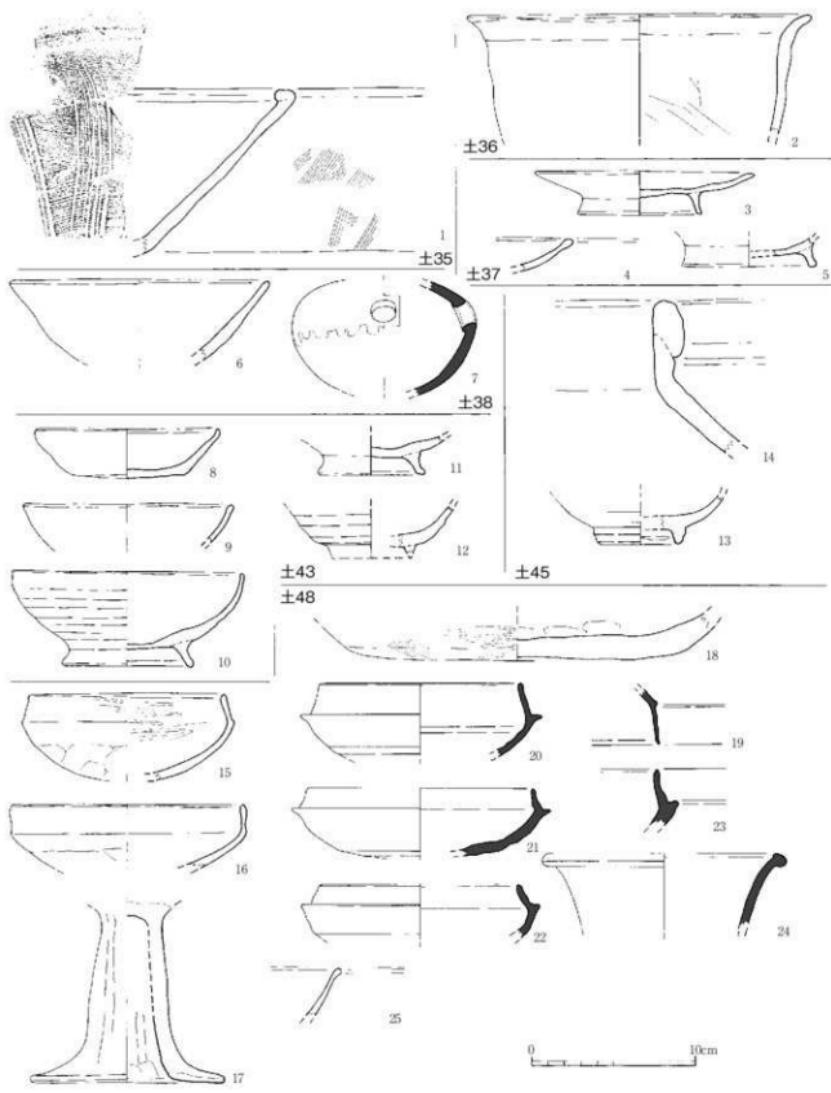
45号土坑（図版16、第53図）

調査区の中央南端に位置する。144号住居跡を切るが、切り合い関係を誤り、先に144号住居跡を掘削してしまったため、本来は少なくとも深さ 0.9m 以上は残っていたと考えられる。規模は $1.1\text{m} \times 0.97\text{m}$ 、深さは現状で 0.73m である。埋土は灰黄色粘質土に炭少量混じる。

埋土下層から刀形木製品1点（第64図35）が出土した。

出土遺物（図版21、第52図13・14）

13は陶器碗で、釉は未発色で白黄色を呈するが、高台内見込みは露胎である。14は備前系大壺



第52図 IV-B区 35～38・43・45・48号土坑出土土器実測図 (1/3)

口縁部である。外面は自然釉が付着する。

出土遺物から、15世紀前後に属すると考えられる（大庭）。

46号土坑（図版16、第54図）

調査区の北側に位置する。当初は単純な土坑状の掘り込みになると想定していたが、底面に2ヶ所の円形の掘り込みを確認した。別個の遺構が重複している状況も想定したが、ほぼ同規模の掘り込みで埋土も共通すること、それぞれ鉄器が出土したことから、一連の遺構と考えた。規模は長さ2.19m、幅1.35mで、深さ1.0mほど掘り下げた面で南北2カ所に円形の掘り込みを行う。円形掘り込みは、北側が東西1.28m・南北1.14m・深さ0.66m、南側が東西1.18m・南北1.1m・深さ0.58mを測り、遺構検出面からの深さは最大1.62mに達する。北側からは不明鉄製品1点（第64図34）、南側からは鉄製斧（第64図31）及び不明鉄製品（第64図32）が1点ずつ出土した。埋土中に焼土塊や炭化物を含むことから、生産関連遺構や火葬遺構の可能性も考えたが、とくに被熱痕跡や骨片は認められなかった。遺構の性格は不明である。

埋土から、上述の鉄製品3点以外に、鉄釘と思われるもの1点（第64図29）、鉄製鋤先1点（第64図33）が出土した。

出土遺物（第55図）

1は土師器梶の口縁部片で、焼成はやや瓦質気味ではあるが土師器と判断した。非常に堅緻で、全体に作りが薄く、内外とも横方向のミガキで仕上げる。2は須恵器蓋の小片で、扁平な宝珠形のつまみを貼り付けている。内面は回転ナデ、外面は頂部側を回転ヘラケズリしている。混入品である。

3は須恵製擂鉢の口縁部片で、口縁端部の内側を肥厚させる。内外とも回転ナデ調整で、内面に六条の擂り目がみられる。4は同安窯系青磁碗の底部片。高台と高台内を除き緑灰色の釉が掛かる。高台は削り高台である。5は丸瓦片で、凸面はヨコナデ調整で、凹面には細かな布目痕が残る。

出土遺物から、時期は12世紀後半頃と考えられる（下原）。

47号土坑（図版16、第54図）

調査区の北側に位置し、120・138B号住居跡を切る。規模は長さ1.73m、幅1.53m、深さ0.86mを測る。埋土には全体的に地山由來の明褐色土が粒状に混じり、2層中に炭化物が混じる以外は特筆すべき所見はない。規模などから土壤墓の可能性もある。図化できる遺物はなかった（下原）。

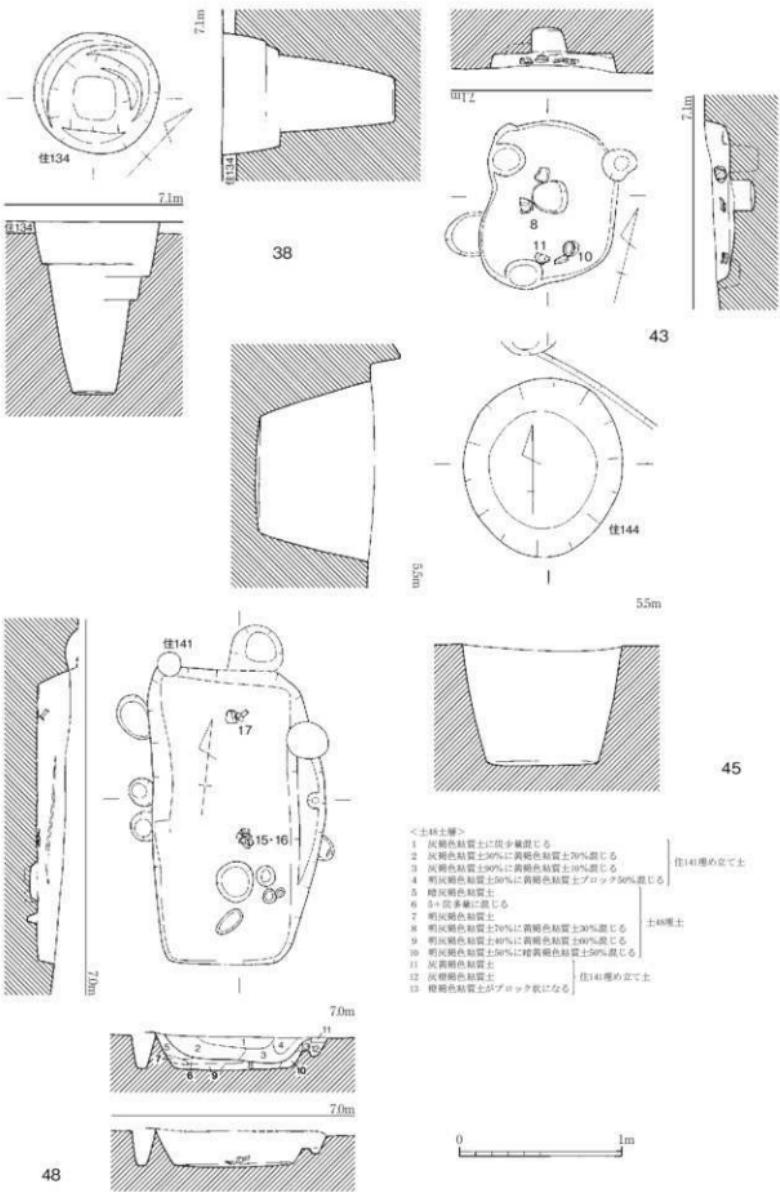
48号土坑（図版17、第53図）

調査区の中央南端に位置し、141号住居跡を切る。規模は1.8m以上×1.04m、深さ2.2mの長方形土坑である。床面はほぼ水平で、浅いピットが5基認められる。土坑北と中央の床面直上で土師器高坏（17）と坏（15・16）が出土した。

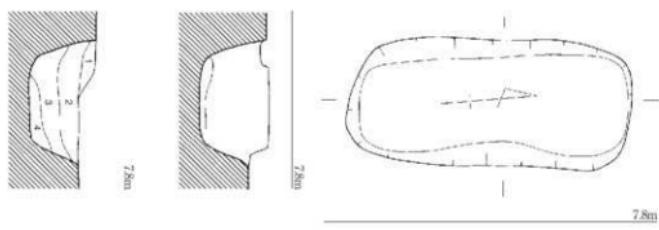
埋土は1～4、11～13が上層の141号住居跡を造る際に埋めた土で、5～10が本来の土坑堆積土である。

出土遺物（第52図15～25）

15・16は土師器模倣坏身で、いずれも外面下位には手持ちヘラケズリを施し、黒斑が認められる。15の外面受け部上位及び内面全体にミガキを施す。16は口縁部が直立する。17は長脚の土師



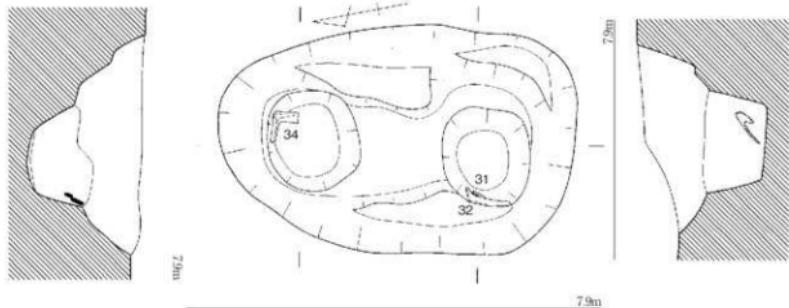
第 53 図 N-B 区 38・43・45・48 号土坑実測図 (1/30)



<土47土着>
 1 塗褐色土(黄褐色土含む)
 2 灰褐色土(炭目立つ)
 3 明灰褐色土(やや砂質、地山粒状に含む)
 4 灰茶褐色土(地山粒状に含む)

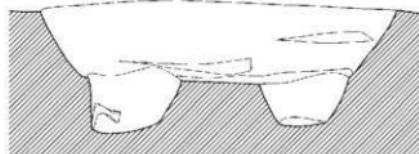
47

7.8m



7.9m

7.9m



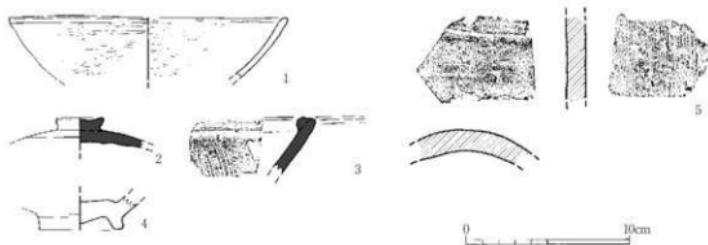
7.9m

<土46土着>
 1 明灰褐色土(地山塊含む、炭含む)
 2 塗灰褐色土(地山塊、炭含む)
 3 明灰褐色土(地山小ブロック、地山塊含む)
 4 灰褐色土(地山塊多く含む)
 5 灰色土(地山粒多く含む、炭粒含む)
 6 明灰褐色土(地山ブロック含む)
 7 明灰褐色土(地山ブロック少しある)
 8 灰黄褐色土(地山ブロック含む)

46



第54図 IV-B区 46・47号土坑実測図 (1/30)



第 55 図 IV-B 区 46 号土坑出土遺物実測図 (1/3)

器高坏脚部である。外面には綫ナデ、内面にはケズリを施す。18は平底の土師器大甕底部である。外面はハケ、内面は工具ナデを施す。

19は器壁が薄い須恵器坏蓋である。天井部との境には鈍い稜、口縁内端部はナデにより窪む。外面には自然軸が付着する。20～23は須恵器坏身である。20～22の底部には回転ヘラケズリが認められる。21の焼成は不良である。復元口径は14cmを測る。23は口縁内端部はナデにより窪む。外面は薄く自然軸が付着する。24は玉縁状口縁部の須恵器壺である。

25は玉縁状口縁の龍泉窯系椀口縁部で、釉は薄い深緑色、胎土は灰色である。混入品。

出土遺物から、古墳時代後期末に属すると考えられる（大庭）。

(6) 井戸

4号井戸（図版 17、第 56 図）

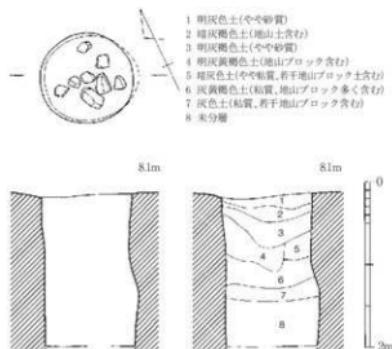
調査区の北側に位置し、径1.10～1.13m、深さ1.82m以上を測る。最下部に近いところまで掘削した段階で湧水があったことから、井戸と判断した。底面より少し浮いた位置に数点の礫がまとまって出土したが、井戸棒等に関わるものではない。遺物はほとんど出土しなかった（下原）。

(7) 不明遺構（SX）

SX01（図版 18、第 57 図）

調査区の中央南端に位置し、140号住居跡を切る。規模は東西7.6m×南北5.2m以上、中央部で深さ0.22m、最大0.3mを測る。地形が傾斜しているため、南壁は一部を除き削平されてしまっており、検出できていない。

遺構の形状は現状でS字状を呈する。北東部は浅い窪みに土師器高台付椀が多く廃棄されていたが、南西側は溝が弯曲する形状となり、土器も少ない。特に東側で土師器高台付椀がまとまって出土した。土器の出土状況から、北東部の土器が集中する箇所は、意図的に土器が割られて廃棄されており、祭祀に関わる遺構であつ



第 56 図 IV-B 区 4号井戸実測図 (1/60)

た可能性が考えられる。埋土は灰褐色粘質土である。

埋土から鉄釘 2 点（第 64 図 27・28）、銅製品パイプ 1 点（第 64 図 30）が出土した。

出土遺物（図版 21・22、第 58・59 図）

1～24 は土師器椀状壺である。1・2・4・6～11・13～17・19・20 は内外面中位以下は指押さえ痕が残る。1～11 は直口、13～20 は口縁部を外反させるもの、21～24 は底部が平底に近いもので分類し、口径の小→大の順で割り付けている。1 で口径 11.2cm、11 で口径 13.4cm を測る。1 は深さがあるもの。4 は器表の凹凸が顕著なもので、胎土は精良である。5・6 はほぼ完形品で、5 の口径は 12.8cm。5 の底部はヘラ切り後ナデを施す。6 の口径は 12.9cm。7 の外面には黒斑あり。8 の底部はヘラ切り後ナデを施す。9 もほぼ完形品で、口径 13cm。口縁端部が玉縁状になる 10 の底部は、ヘラ切りのままである。12 は底部が小さく、口縁部が逆「ハ」の字状に聞くもの。

13～20 は口縁部を外反させるもので、13 で口径 12.2cm、20 で口径 13cm を測る。13 は完形に近いもの。15 の器壁は薄い。18 は口縁端部を強く外反させ、内外面には二次被熱痕あり。19 の底部はヘラ切りのままである。20 は直立気味の口縁部から端部を弱く外反させ、外面には黒斑あり。

21～24 は底部が平底に近いもので、21 は口径 13cm、24 は口径 14cm、底径 7.4cm、器高 4.5cm を測る。また 22～24 の底部はヘラ切りのままである。23・24 は口縁部が逆「ハ」の字状に強く開き、深さもあるもの。23 の内面はナデによる凹凸が顕著である。24 はほぼ完形品で、凸レンズ状の底部となる。32～43 に高台がない器形である。

25～27 は土師器皿である。底部は、25 はヘラ切りのちナデ、27 はヘラ切りのままである。25 の口径は 13.4cm、27 の口径は 15cm を測る。28～30 は高台付土師器皿である。30 は口径 14.8cm、底径 7.8cm、器高 2.8cm を測る。31 は小型の土師器高台付壺である。

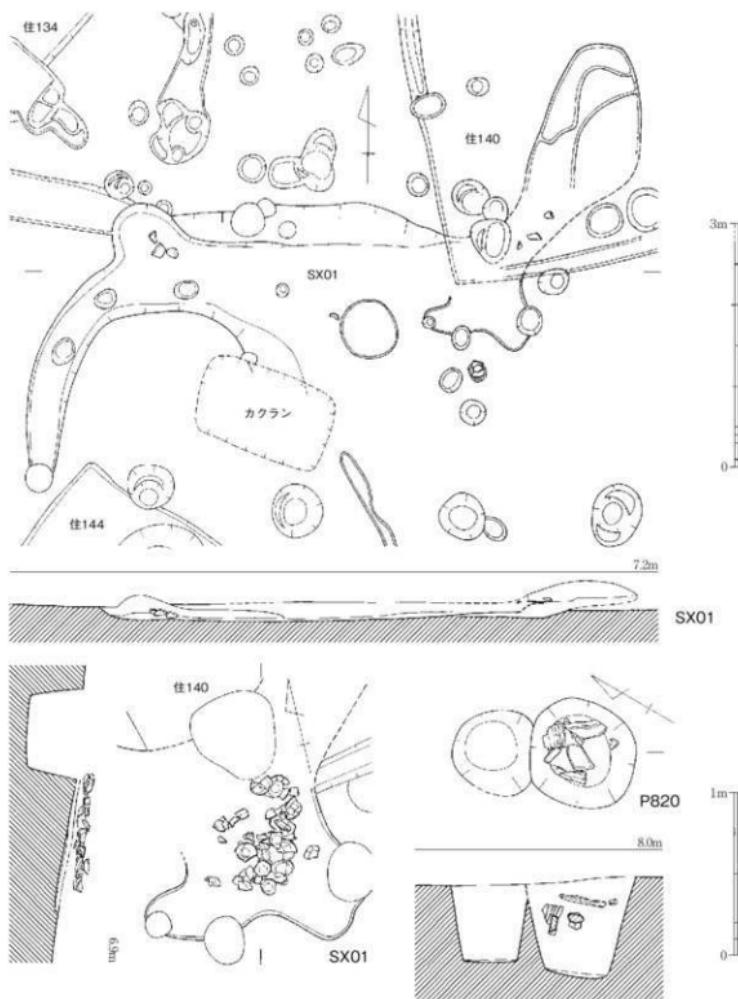
32～43 は土師器高台付壺である。32～37 は高台が直立気味のもの、38～43 は外傾するもので分類した。32 の底径は 8.2cm、36 の底径は 8.4cm で、底径が小→大の順で割り付けを行った。32 の復元口径は 13.4cm である。33 の壺部外面下位には回転ヘラケズリ痕が残る。34 は器壁が厚いもの。35・36 の内面見込みはヘラ切り後ナデを施す。37 は壺部が椀状に丸味を帯びるもので、高台端部も丸く収める。

38～43 は高台が外傾するもの。39～43 は壺部が特に丸味を帯び、39 の底径は 8cm、42 の底径は 8.6cm で、底径が小→大の順で割り付けを行った。38 は壺部外面下位に回転ヘラケズリ痕が残る。復元口径 13cm で、口縁端部は肥厚させる。39 の内面はナデによる凹凸が顕著である。43 は復元口径 14.5cm、底径 8.2cm、器高 6.5cm を測る。壺部外面はナデによる凹凸が顕著である。44・45 はボタン状つまみ付の土師器壺蓋である。いずれも天井部一部のみ回転ヘラケズリを行う。

46～49 は土師器甕である。46 は復元口径 24cm を測り、張りのない長胴の胴部外面には継タタキ痕が残る。外面にはススが付着する。47～49 は小型品で、48・49 は二次被熱痕あり。49 の胴部外面には密な継タタキ痕が残る。

50 は須恵器壺身で、天井部との境には鋭く突出する稜があり、口縁内端部にはナデにより窪む。51 は須恵器高台付壺身である。52 は生焼けの須恵器高壺脚部である。53 は高台付の須恵器壺底部である。54 は畿内系と思われる綠釉陶器椀である。口縁端部は外反させ、釉は綠黃灰色、胎土は須恵質である。

55・56 は手づくね土器である。56 はほぼ完形で、口径 3.1cm を測る。



第57図 IV-B区 SX01、820号ピット実測図 (1/60, 1/30)

57・58は内面に布目のある製塩土器である。57は丸底の底部片である。57は外面に指押さえ痕が認められるもので、顕著な二次被熱痕あり。

出土遺物から、10世紀前後に属すると考えられる（大庭）。

(8) ピット

820号ピット（図版18、第57図）

調査区の中央北端に位置する。規模は径0.65m、深さ0.6mの円形ピットである。ピット埋土中位から片岩系の石材がまとまって出土したことから、柱を固定する石材であった可能性もある。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物はないが、埋土から中世に属すると考えられる（大庭）。

ピット出土遺物（図版22、第60図）

1は弥生後期の高坏脚部である。坏部との接合部はきれいに整形されており、後に何かに転用されたと考えられる。P 851出土。2は器壁が薄く、直立する体部に、六条以上のような突帯を巡らす。壺になるか。外面には丹塗りを施す。胎土は弥生土器にしてはきわめて精良であり、弥生土器にするには躊躇するが、器種が不明であるため、ここでは弥生土器として報告する。P 742出土。

3は復元口径が36cmを測るきわめて大型の土師器壺である。肩が張らない胴部から口縁部が強く屈曲し、口縁端部はナデで面取りを施す。外面にはハケを行い、口縁部外面にはハケ工具端が明瞭に残る。口縁部内面はハケのちナデ、胴部内面は頸部までケズリを行う。P 1050出土。

4・5は土師器高坏で、いずれも外面には黒斑があり、P 851出土。4は器壁の厚いもので、口縁端部は丸く收める。坏部外面下位はハケのちナデ、口縁部外面及び坏部内面はナデを施す。5は器表が荒れており、調整は不明である。

6は三角形を呈する高台付土師器坏で、内面見込みにはヘラ切りの痕跡が残る。P 774出土。7は高台付須恵器坏である。外面には自然釉が付着する。8は内面に炭素を吸着させた黒色土器Bである。P 664出土。9は瓦質土器足鍋の足である。内面は黒化する。P 904出土（大庭）。

(9) 遺構面等

遺構面等出土土器（図版22、第61図）

1は高台付土師器皿である。2は須恵器坏身である。外面には自然釉が付着する。3～7は高台付須恵器坏身である。5の高台との境には回転ヘラケズリ痕が残る。6の内面見込みはヘラ切り痕が残る。7は高台がかなり潰れたもので、深さがないもの。8は平底の須恵器壺底部である。底部外面はヘラ切り後ナデを施す。9は短口縁の須恵器壺で、口縁端部はナデで面取りする。胴部外面は左回りの継タキ、内面は同心円文タキを施す。

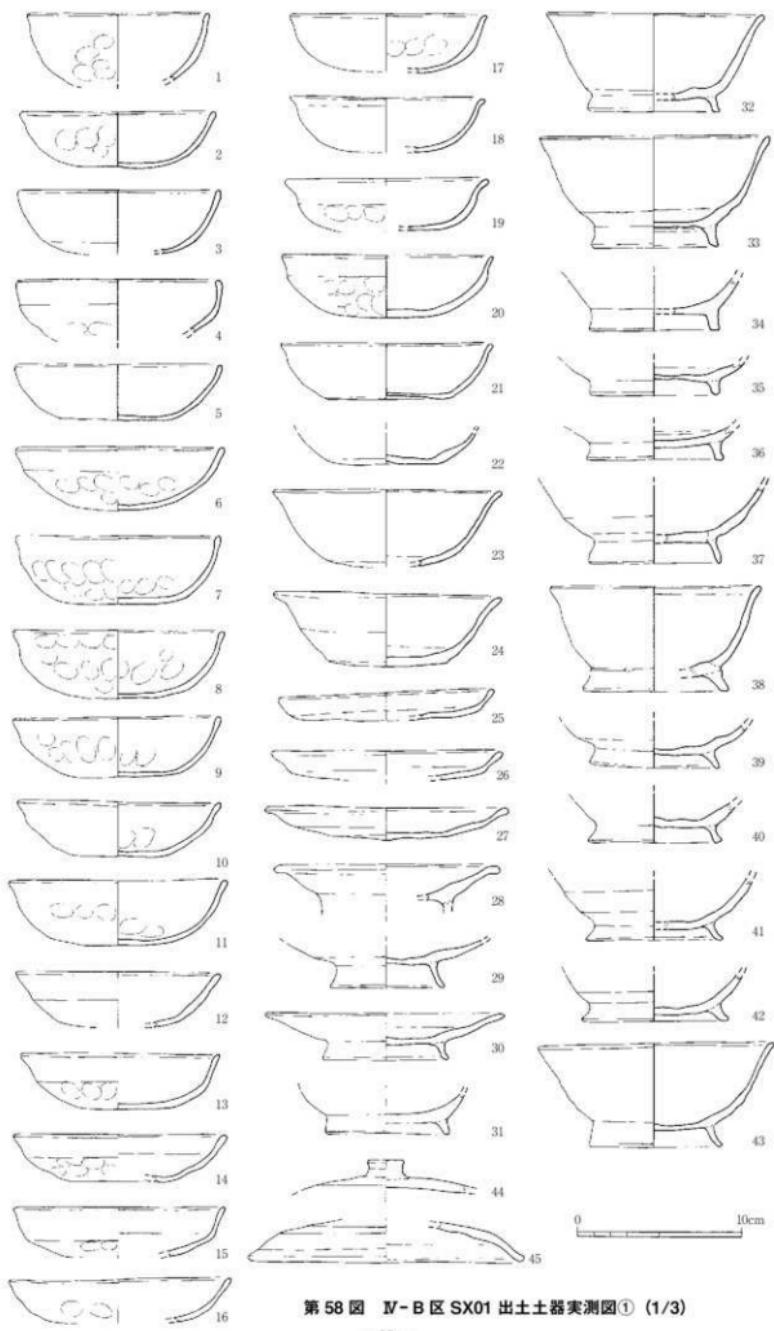
10の胎土は軟質の土師質であることから、防長產と思われる綠釉陶器碗である。外面には丁寧なケズリ痕が残る。11・12は手づくり土器である。11はほぼ完形のもので、口径3.1cmを測る。12の外面には黒斑あり。13・14は土錘である。13は長さ2.7cm、幅1.3cm、孔径0.5cm、重さ2.93gを測る。外面には黒斑あり。14は長さ2.85cm、幅1.15cm、孔径0.5cm、重さ2.94gを測る。

15～19は製塙土器で、いずれも内面に布目痕あり。15は三角状の口縁部である。16は器壁の薄い体部片で、外面には二次被熱痕あり。17は丸みを帯びた底部片。18・19は体部片であるが、小片であるため、天地に自信がない。20は繩目タタキのある平瓦片。内面には布目痕あり（大庭）。

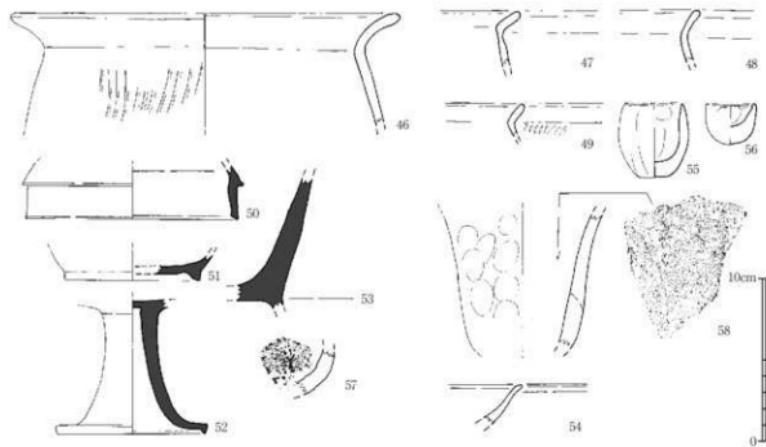
(10) 特殊遺物（図版22、第62～64図）

石製品

1は打製石鎌である。凹基式で抉り0.6cmを測る。安山岩製。遺構面出土。2は勾玉である。径0.1



第58図 IV-B区 SX01 出土土器実測図① (1/3)

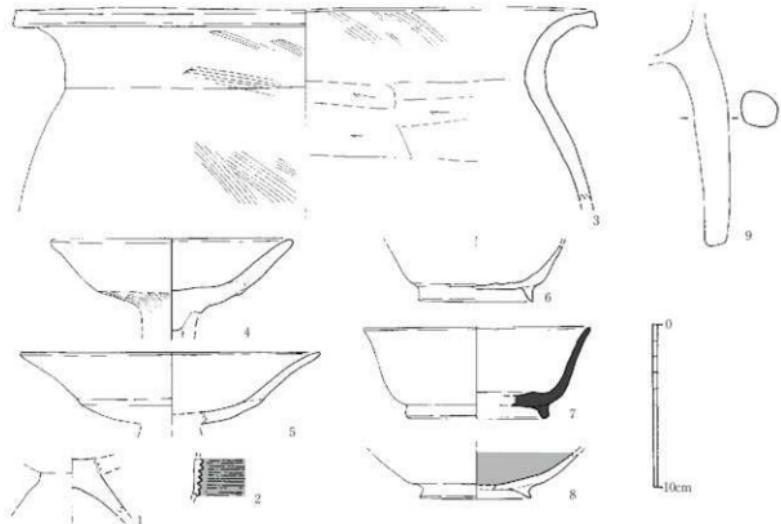


第59図 IV-B区 SX01出土土器実測図② (1/3)

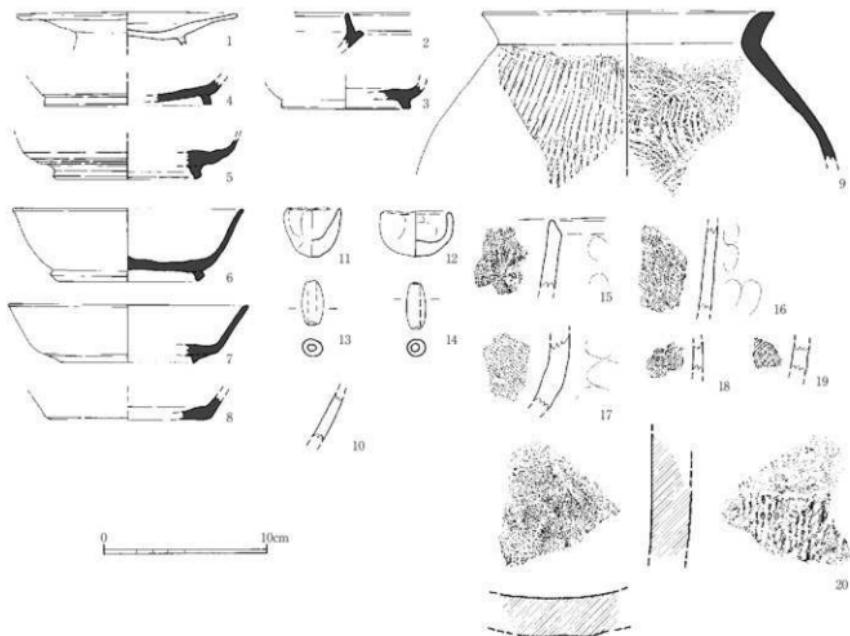
cmの孔を穿ち、両面に研磨によって平坦面が形成される。緑色片岩製。131号竪穴住居跡覆土出土。3は管玉である。孔径0.3cmを測る。質の悪い碧玉製。140号竪穴住居跡覆土出土。4は石庵丁である。背部と孔の一部のみが遺存する。復元孔径0.5cm、背孔1cmを測る。凝灰岩製。137号竪穴住居跡覆土出土。5～7は不明石製品である。5は径0.2cmの孔を穿ち、ややずれた位置に穿孔途中の凹みが見られる。上面中央に紐擦れと考えられる擦痕が認められ、垂飾品と考えられる。緑色片岩製。P 733出土。6は一部にのみ幅4mmほどの研磨痕が認められ、砥石として使用したと考えられるが、対象物など詳細は明確でない。泥岩製。134号竪穴住居跡南東覆土下層出土。7は孔が5つほど穿たれる。孔が接している部分も認められ、詳細は不明である。滑石製。120号竪穴住居跡カマド構築土内出土。

8～14は砥石である。石質と大きさから14は置き砥の仕上げ砥、他は持ち砥の仕上げ砥と考えられる。8は上面のみ砥面とする。硬質砂岩製。140号竪穴住居跡覆土下層出土。9は小片で2面を砥面とする。金属製刀刃の研磨痕が認められる。硬質砂岩製。遺構面出土。10は断面偏五角形を呈し、5面を砥面とする。粘板岩製。142号竪穴住居跡覆土出土。11は4面を砥面とし、中央が使用のため凹む。白色頁岩製。137号竪穴住居跡覆土出土。12は欠損するが4面が砥面として残る。砂岩製。120号竪穴住居跡覆土出土。13は大きく欠損するが、2面が砥面として残る。粘板岩製。122号竪穴住居跡覆土出土。14は3面が砥面として残る。使用痕は明確には認められない。粘板岩製。122号竪穴住居跡覆土出土。15～17はすり石である。15は両端部を磨り面とし側面にも一部磨りの痕跡が見られる。花崗岩製。141号竪穴住居跡カマド内出土。16は上面のみ磨りの痕跡が見られる。凝灰岩製。132号竪穴住居跡覆土出土。17は上面および側面に磨りの痕跡が見られる。凝灰岩製。132号竪穴住居跡覆土出土。

18～21は台石である。18は擦痕等は不明瞭だが、長大な台石となるか。鞍山岩質凝灰岩製。SX01出土。19は中央がやや凹んでおり、磨り台と考えられる。凝灰岩製。132号竪穴住居跡覆土出土。20は上面に磨り一部叩きの痕跡が見られる。花崗岩製。132号竪穴住居跡覆土出土。21は大型の



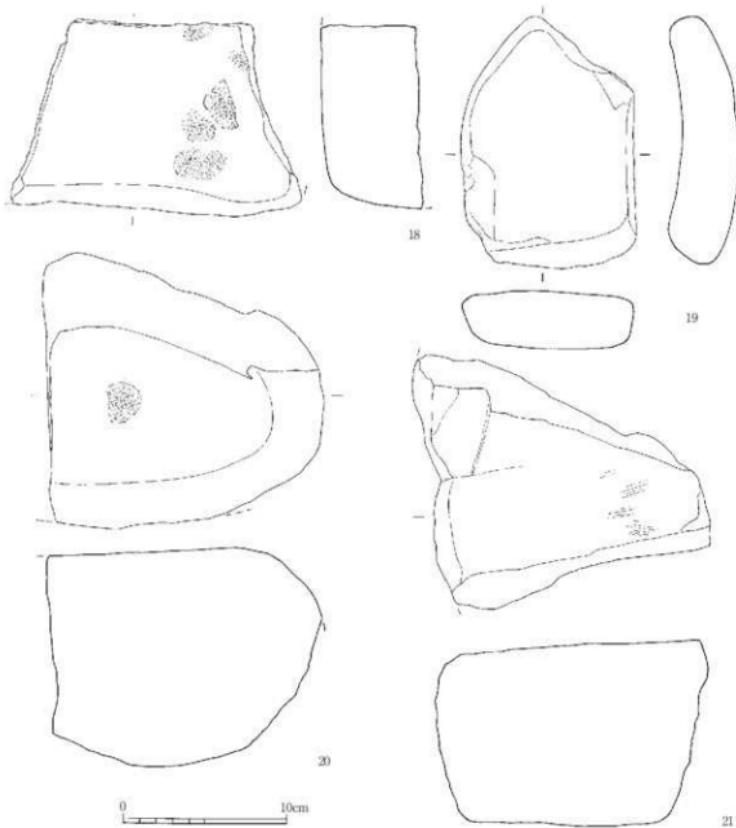
第60図 IV-B区ピット出土土器実測図 (1/3)



第61図 IV-B区構造面等出土土器実測図 (1/3)



第62図 IV-B区出土特殊遺物実測図① (1~3は2/3、4~9は1/2、10~17は1/3)



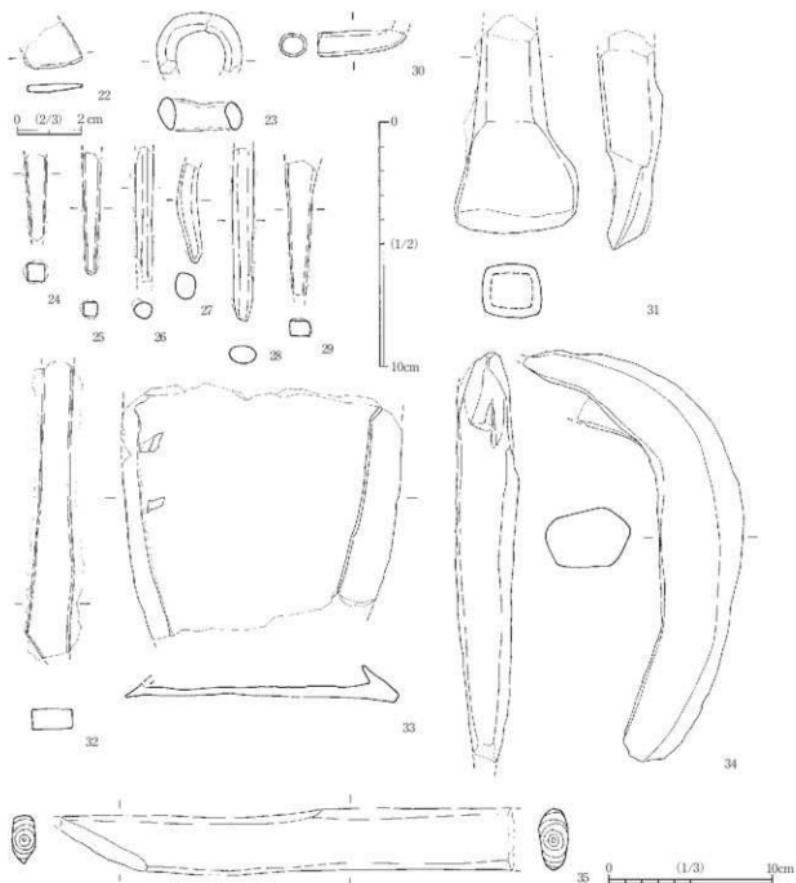
第63図 IV-B区出土特殊遺物実測図② (1/3)

台石で上面にわずかに擦痕が認められる。斑岩系石材製。120号竪穴住居跡覆土出土。

金属製品

22は不明鉄片である。厚さからは鉄鎌と考えられるが、刃部の形成は認められない。138A号竪穴住居跡カマド付近出土。23は不明鉄製品である。耳環状に屈曲する。46号土坑出土。24・25は鎌ないしは釘か。断面方形で下に向かって幅を減ずる。24はP 792出土。25はP 838出土。26～29は釘か。断面円形に近い。26は遺構面出土。27・28はSX01出土。29は46号土坑出土。30はパイプである。内径0.9cmを測る。SX01出土。31は斧か。鋒が著しいがX線撮影によりソケット部があることがわかった。32は不明鉄製品である。断面四角形の棒状を呈し、一部が屈曲する。33は鎌先である。木製の鎌に差込み刃部とするもので、1cm程が上方に突出する。鋒が著しく、木質等は確認できなかった。34は不明鉄製品である。鞍状に緩やかに屈曲し、先端が尖る。他の部材と接合できるような構造は認められず、用途は不明。31～34は46号土坑出土。

木製品



第64図 IV-B区出土特殊遺物実測図③ (22は2/3、23~29・35は1/2、31~34は1/3)

35は刀形木製品である。先端付近が遺存しており、両面から削ることで先端部分のみ刃付がなされる。芯材を用いる。45号土坑出土(城門)。

(11) 小結 IV-B 2区のまとめ

以下では、当区の調査成果のまとめを行うが、内容的にはV-1で行うIV-B 2区、IV-C区の構造変遷の検討と重複する部分が多いことから、ここでは概要のみ述べるにとどめたい。

まずこれまでの調査及び刊行された報告書から本遺跡のおおまかな変遷をみてみると、調査区内から弥生時代中期前半の土器が少量出土するものの、この時期の遺構自体は発見されていない。おそらく調査区外の丘陵に弥生時代中期の小規模な集落が存在した可能性が考えられる。

集落は弥生時代後期後半に成立し、それ以降古墳時代前期までに一度目の盛期を迎える。古墳時代

博団	図版番号	区	出土遺構	種類	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	残存	備考
62-1	図版22	IV-B	道溝面	石製品	打削石器	2.75	(1.85)	0.50	(1.34)	0.8	安山岩
62-2	図版22	IV-B	往131段土	石製品	勾玉	2.65	1.70	0.60	3.94	1	緑色片岩
62-3	図版22	IV-B	往140段土	石製品	管玉	2.10	0.80	0.80	2.40	1	碧玉
62-4		IV-B	往137段土下層	石製品	石盾丁	(2.50)	(2.60)	0.60	(4.38)	0.1	灰岩
62-5	図版22	IV-B	P233	石製品	不明	4.20	3.25	1.20	34.46	1	緑色片岩
62-6		IV-B	往134段土下層	石製品	不明	4.10	2.85	(2.10)	(31.78)	0.8	碧玉
62-7		IV-B	往120カマド模擬土内	石製品	不明	(3.20)	(3.45)	(1.90)	(16.00)	0.1	滑石
62-8		IV-B	往140段土下層	石製品	透石	5.30	(3.10)	1.90	(42.72)	0.5	透明白砂岩
62-9		IV-B	東風溝面	石製品	透石	(3.70)	(2.70)	(2.20)	(38.57)	0.1	透明白砂岩
62-10		IV-B	往142段土	石製品	透石	(19.00)	(4.70)	(4.70)	(260.00)	0.4	粘板岩
62-11		IV-B	往137段土	石製品	透石	(8.80)	5.85	4.40	(213.70)	0.5	白色頁岩
62-12		IV-B	往120段土	石製品	透石	(6.00)	(4.20)	1.60	(51.12)	0.5	砂岩
62-13		IV-B	往122段土	石製品	透石	(6.70)	(6.05)	(3.60)	(178.88)	0.1	粘板岩
62-14		IV-B	往122段土	石製品	透石	(17.45)	(7.10)	(4.70)	(768.00)	0.7	粘板岩
62-15		IV-B	往141段土	石製品	透石	12.40	6.00	4.80	543.00	1	花崗岩
62-16		IV-B	往132段土	石製品	透石	29.30	7.75	6.30	1285.00	1	透明白砂岩
62-17	図版22	IV-B	往132段土	石製品	透石	11.85	8.20	5.10	700.00	1	透明白砂岩
63-18		IV-B	SX01	石製品	白石	(17.80)	(12.00)	(6.30)	(2100.00)	0.3	安山質凝灰岩
63-19	図版22	IV-B	往132段土	石製品	白石	15.49	10.70	3.50	976.00	1	凝灰岩
63-20		IV-B	往132段土	石製品	白石	(16.85)	(17.30)	(13.90)	(4900.00)	0.4	花崗岩
63-21		IV-B	往120段土	石製品	白石	(15.60)	(18.30)	(11.40)	(3700.00)	0.3	斑岩系
64-22		IV-B	往138Aカマド付近	鐵製品	鉄片	(1.35)	(1.80)	(0.90)	(0.90)	0.1	
64-23		IV-B	土46	鐵製品	不明	(2.50)	3.50	1.30	(8.01)	0.5	
64-24		IV-B	P792	鐵製品	鐵の釘?	(3.90)	(0.90)	0.75	(4.22)	0.2	
64-25		IV-B	P838	鐵製品	鐵の釘?	(4.95)	(0.80)	(0.80)	(5.06)	0.2	
64-26		IV-B	道溝面	鐵製品	釘?	(9.60)	0.75	0.75	(5.48)	0.3	
64-27		IV-B	SX01	鐵製品	釘?	(4.00)	1.05	1.05	(6.44)	0.3	
64-28		IV-B	SX01	鐵製品	釘?	(7.00)	0.90	0.90	(12.45)	0.4	
64-29		IV-B	土46	鐵製品	釘?	(5.55)	(1.35)	0.65	(8.25)	0.7	
64-30		IV-B	SX01	陶製品	パイプ	3.60	1.10	1.10	(3.31)	0.8	
64-31	図版22	IV-B	土46	鐵製品	片?	(13.40)	7.70	4.00	(418.00)	0.8	
64-32	図版22	IV-B	土46	鐵製品	不明	(18.15)	3.00	1.30	(294.00)	0.7	
64-33	図版22	IV-B	土46	鐵製品	圓孔	(15.70)	(17.20)	2.20	(250.00)	0.7	
64-34		IV-B	土46	鐵製品	不明	(13.50)	(25.20)	3.90	(641.00)	不明	
64-35	図版22	IV-B	土45	木製品	刀形木製品	(18.70)	2.60	1.25	-	0.3	

() は残存値

第4表 IV-B 区出土特殊遺物一覧表

中期には一旦衰えるものの、古墳時代後期に一度目以上の盛期を迎えるという、二度の盛期が確認されている。一度目の盛期のピークは弥生時代後期終末～古墳時代前期前半で、南北丘陵に多くの堅穴住居が認められ、丘陵北側には地域首長の居館機能を持ったと想定される方形周溝が少なくとも3ヶ所存在する。このピーク時期より若干時期が遅れる可能性があるが、中央谷部には木製導水施設が設置されている。また本遺跡と同一丘陵に位置するビワノクマ古墳が古墳時代前期後半の築造と推測される。このことから、本遺跡は弥生時代後期終末～古墳時代前期には地域首長の拠点集落であったと考えられる。

二度目の盛期である古墳時代後期後半～末には、南北丘陵に密集して堅穴住居が造られるが、7世紀前半になると集落は急速に衰える。7世紀後半にはV-1、II-2区で官衙的配置が認められる大型掘立柱建物群が確認され、特に丘陵北側は官衙的な建物が配置された空間になる。ほぼ同時期に丘陵と谷部を繋ぐように丘陵を巡る道路状遺構が検出されており、中でも南側谷部へのアクセス道路となるIV-B 1区で検出された道路状遺構は注目される成果である。中世になると、丘陵のあちこちで区画溝が掘削され、屋敷地として機能していたと考えられる。

以上がこれまで判明した本遺跡の様相であるが、当区においても弥生時代後期後半～古墳時代前期及び古墳時代後期後半～末の二時期に堅穴住居が集中しており、特に古墳時代後期後半の堅穴住居は住居新旧セット関係、粘土で被覆するカマド廐絶方法及び住居内空間の在り方が類推できるものなどの調査成果が確認された。また調査区南端で10世紀の土坑群がまとまって確認されたことは、10世紀段階においても当地が集落として機能していたことを示すものである。

中世段階で検出できた当区の遺構は土坑のみで、丘陵上に比べ集落としての利用度は低くなっていると考えられる。以上先述したように、当区の詳細は、V-1で検討していただきたい（大庭）。

4 IV-C区の遺構と遺物

IV-C区は、二股に分かれた丘陵の南裾部に位置し、国道201号に伴う調査区では最も南端にある。調査範囲はIV-B区から緩やかに続く丘陵裾部から、現在の山崎川に挟まれた区間で、大部分は谷である。この谷の北側の丘陵上には主に弥生時代後期～中世にかけての大規模な集落が展開しており、そこから落ち込んだ、多量の遺物を含む層が厚く堆積していた。

以下では、IV-C区の報告を行うが、多量に出土した木製品を含む特殊遺物の執筆は城門義廣、木簡積文については酒井芳司、その他は進村真之が執筆した。城門及び酒井の執筆分には文末に執筆者名を付している。

(1) 調査の経過

平成21年(2009)8月24日より重機による表土掘削を開始した。8月25日、古墳時代から古代を中心とする土器が出土。元北九州市自然史・歴史博物館の藤丸詔八郎先生、視察。9月7日、調査区西端部にトレーナーを設定。古代を中心とする土器・木器が大量に出土。転用硯が出土する。9月9日、木簡出土。文字は判読できない。9月10日、文化庁記念物課清野孝之文化財調査官、視察。9月16日、「天平六年十月十八日」銘木簡が出土。9月18日、長崎外国語大学の木本雅康先生が視察。10月5・6日、延永小学校3年生体験発掘。10月13日、太宰府市教育委員会の井上信正氏、視察。10月14日、九州歴史資料館長の西谷正先生、視察。10月22日、新たな調査区、重機による掘削を開始する。11月9日、1号井戸の木棒を検出。11月12日、「符」木簡が出土。12月16日、福岡市教育委員会の山口譲治氏による木器の調査指導。12月24日、1号井戸、重機による断ち割り。12月25日、重機による現場埋戻し後、調査を終了する。

区	遺構種	報告時 遺構名	調査時 遺構名	備考 (名前は 報告者名)
IV-C	土坑	土1001	土1001	進村
IV-C	土坑	土1002	土1002	進村
IV-C	土坑	土1003	土1003	進村
IV-C	土坑	土1004	土1004	進村
IV-C	土坑	土1005	土1005	進村
IV-C	土坑	土1006	土1006	進村
IV-C	土坑	土1007	土1007	進村
IV-C	土坑	土1008	土1008	進村
IV-C	土坑	土1009	土1009	進村
IV-C	土坑	土1010	土1010	進村
IV-C	土坑	土1011	土1011	進村
IV-C	土坑	土1012	土1012	進村
IV-C	土坑	土1013	土1013	進村
IV-C	土坑	土1014	土1014	進村
IV-C	土坑	土1015	土1015	進村
IV-C	土坑	土1016	土1016	進村
IV-C	井戸	井戸1	井戸1	進村
IV-C	井戸	井戸2	井戸2	進村
IV-C	溝	溝11	溝11	進村

第5表 IV-C区遺構一覧・対照表

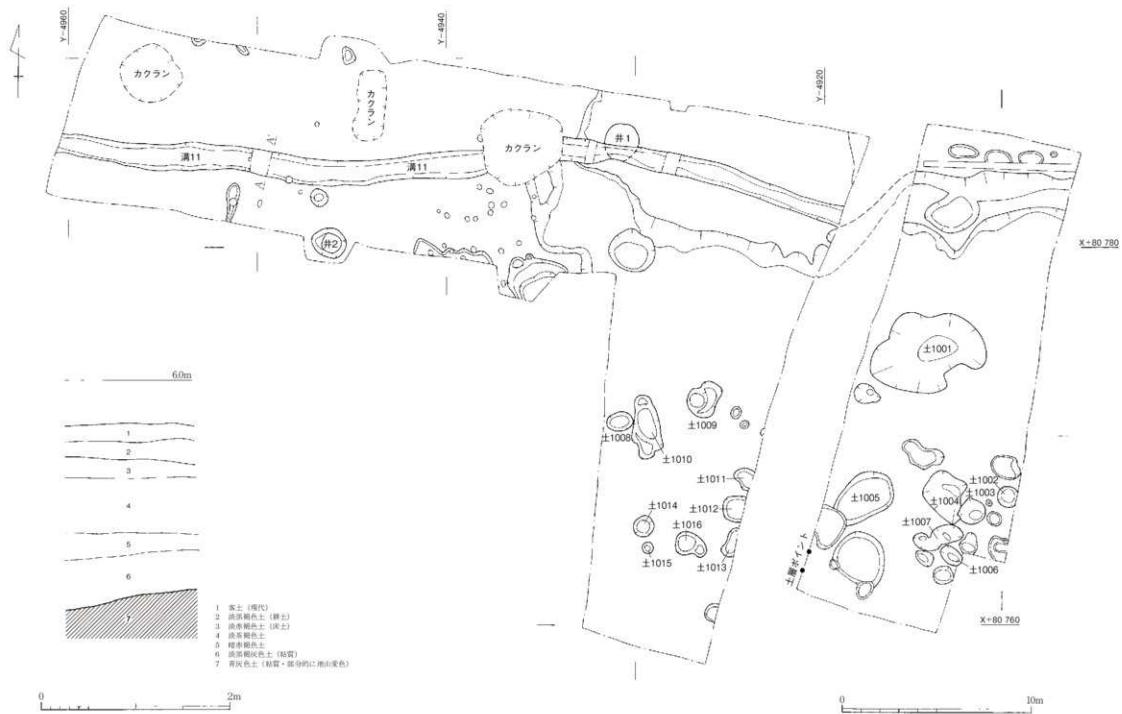
(2) 調査区の概要

IV-C区は山崎川に向かって南に傾斜する地形の最下部に位置する。標高約5mの落ち際で井戸2基と溝1条を検出した。さらに下部には弥生時代から古代にかけての遺物包含層が厚く堆積していた。また、遺物包含層の途中から掘り込まれたと考えられる土坑16基を検出した。土坑の多くは木製品の未製品を水漬けするためのものであったと考えられる。遺構・遺物の時期は弥生時代後期～中世にかけてのものである。

(3) 土坑

1001号土坑(第66図)

調査区の東側中央付近で検出した。規模は4.5m×6.1mの不整形な楕円形である。深さは0.25mで中心にかけて緩やかに深くなっている。遺物は木製の鋤(第86図1)、下駄(第86図2)、ねずみ返し(第



第65図 延永ヤヨミ園遺跡IV-C区全体図 (1/40, 1/200)

86図3)が出土している。遺構の時期は金属の刃部を装着する形状の鎌が出土していることから古墳時代後期以降と考えられる。

1002号土坑(図版24、第66図)

調査区の東側南寄りで検出した。規模は1.1m×1.1mのほぼ円形である。深さ約0.3mで、底面は平らである。遺物は、木製のねずみ返し(第87図1、第88図1)と結界杭の可能性のある棒状製品(第88図2)が出土している。時期は不明である。

1003号土坑(図版25、第66図)

調査区の東側南寄りで検出した。1004号土坑を切る。規模は1.4m×1.3mのほぼ円形である。深さ0.3mで、床面は平らである。遺物は須恵器、土師器の他、木製の棒状器具材(第88図3)が出土している。時期は、須恵器甕の胴部片から古墳時代後期以降である。

1004号土坑(第66図)

調査区の東側南寄りで検出した。1003号土坑に切られる。規模は2.0m×2.5mの不整形な方形である。深さは約0.2mである。遺物は土師器甕と木製の棒状器具材が出土している。遺構の時期は古墳時代後期である。

出土遺物(図版33、第67図1)

1は土師器の甕で口径16.8cm、胴部最大径25.5cm、器高30.5cmである。器形は比較的球形に近い。外側の調整は粗いハケメ、内側の調整はケズリである。口縁付近はナデ調整を施す。

1005号土坑(第66図)

調査区の東側南寄りで検出した。規模は2.2m×3.3mの楕円形である。深さは約0.3mで床面は平らである。遺物は木製の壺鏡(第88図4)の破片が出土している他、板状や棒状の木製品が出土している。時期は不明である。

1006号土坑(第66図)

調査区の東側南寄りで検出した。規模は0.8m×1.2mの楕円形である。深さは約0.4mである。遺物は板状器具材(第89図1)や木製の棒状製品が出土している。時期は不明である。

1007号土坑(第66図)

調査区の東側南寄りで検出した。規模は1.0m×2.6mの不整形な長楕円形である。深さは約0.4mである。遺物は土師器の碗が出土している。遺構の時期は古墳時代後期である。

出土遺物(第67図2)

2は土師器の碗である。口径13.7cm、器高5.2cmである。丸底で口縁付近が一度すぼまつた後に



文中写真19 1005号土坑木製品出土状況
(南東から)

小さく外反する。外面の調整は底部付近がケズリ、その他の部分はミガキである。内面の調整はミガキである。

1008号土坑（図版25、第68図）

調査区の中央付近で検出した。規模は1.0m×1.2mの梢円形である。深さは約0.4mである。遺物は土師器壺の他、連結したまま製作中の農具未製品（第90図1・2）、井戸杵？（第89図2）が出土している。遺構の時期は古墳時代中期である。

出土遺物（図版33、第67図3）

3は土師器の壺である。口縁はわずかに内湾し、胴部は球形に近い。外面は丁寧なハケメ調整、内面はケズリである。外面に多量のススが付着する。口径16.0cm、胴部最大径26.6cm、器高29.9cmである。

1009号土坑（図版25、第68図）

調査区の中央付近で検出した。規模は1.7m×3.3mの長梢円形である。深さは約0.5mで中央部分が一段深くなっている。遺物は土師器の他、木製の杵（第91図2）、札状の木製品（第118図8・9）、鍔の未製品（第91図1）、竹箕状の製品が出土した。遺構の時期は古墳時代前期である。

出土遺物（図版33、第69図）

1～5は小形壺である。1はつくりが精緻であるが、外面にはハケメが明瞭に残る。口径9.0cm、胴部最大径8.0cm、器高7.4cmである。2の内面は横方向のケズリである。外面底部に黒斑が付着する。口径10.0cm、胴部最大径10.7cm、器高10.5cmである。3の口縁内面にはハケメ工具の痕跡が強く残る。外面には黒斑が広く付着する。口径11.2cm、胴部最大径10.9cm、器高8.7cmである。4の外面はハケメ、内面はケズリである。口径10.5cm、胴部最大径12.5cm、器高12.0cmである。5は外面に強い圧痕が残る。内面には粘土帯の接合痕が明瞭に残る。胴部最大径12.6cmである。6は山陰系の二重口縁壺である。口縁部と頸部との境に接合痕が残る。口径15.6cmである。7は在地形の壺である。外面はハケメ、内面はケズリと部分的にハケメを行っている。器壁は比較的薄い。外面下半のはば全体にススが付着する。口径18.0cm、胴部最大径24.2cm、器高26.3cmである。

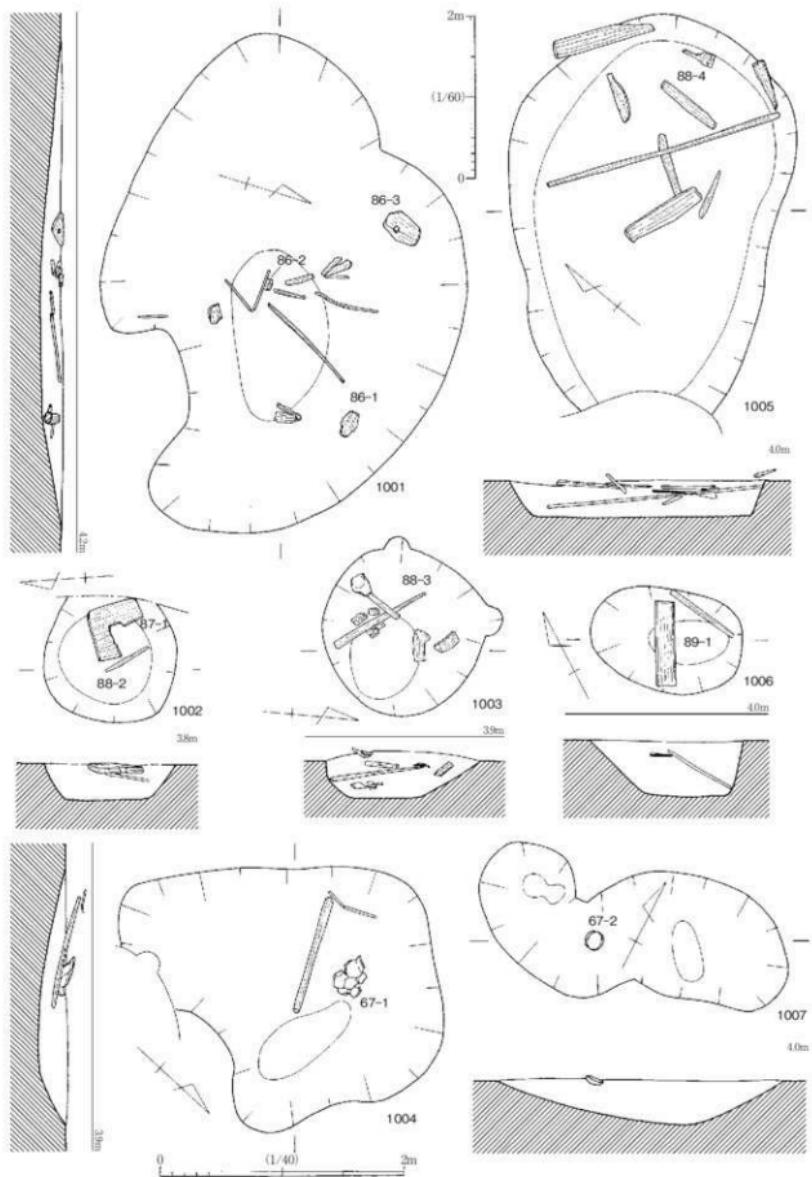
1010号土坑（図版26、第68図）

調査区の中央付近で検出した。規模は1.7m×3.3mの長梢円形である。深さは約0.5mで中央部分が一段深くなっている。遺物は土師器の他、木製の梯子？（第92図3）、鍔（第92図1・2）、板状器具材が出土している。遺構の時期は古墳時代前期である。

出土遺物（図版33、第70図）

1・2は壺である。1は口縁が大きく外反するもので、内外面の調整はともにハケメである。頸部に焼成後のかさな穿孔を施す。胴部最大径18.0cmである。2は球形の胴部で底部がわずかに残る壺である。外面過半部はケズリ、上半部はハケメ、内面の調整はハケメである。底径62cm、胴部最大径は31.3cmである。

3～5は布留系の壺である。3の外面は細かいハケメ、内面はケズリである。口径17.0cm、胴部最大径24.0cmである。4の内面はケズリ、外面および口縁内外面はハケメである。外面にはススが



第66図 IV-C区 1001～1007号土坑実測図（土1001は1/60、他は1/40）

付着する。口径 17.0cm である。5 の口径は 15.0cm である。6 は甕である。口径 12.8cm で、7 は鉢である。厚い底部から球形状に立ち上がる。口縁はいびつである。外面の調整はハケメ、内面はケズリと一部ハケメを行っている。外面にはススが付着する。口径 16.1cm、器高 11.3cm である。8 は鉢であるが、焼成前底部に穿孔を行っているため、瓶としての機能をもったものであろうか。内面の調整はケズリである。口径 14.8cm、器高 12.1cm である。外面上部にススが付着する。

1011 号土坑（図版 26、第 68 図）

調査区の南寄りで検出した。規模は 1.1m × 0.9m 以上の不整形で東側が調査区外へ延びる。深さは中央部分が一段深く、約 0.5m である。遺物は鞍橋（第 93 図 1）が出土している。遺構の時期は古代以降であろうか。

1012 号土坑（図版 26、第 68 図）

調査区の南寄りで検出した。規模は 1.3m × 1.3m 以上の円形であると考えられ、東側が調査区外へ延びる。深さは約 0.4m である。遺物は須恵器・土師器の他、木製の砧（第 93 図 2）が出土している。遺構の時期は古墳時代後期である。

出土遺物（図版 33、第 71 図 1～3）

1 は土師器の甕である。口縁部と頸部の境は不明瞭である。口径 29.0cm である。2・3 は須恵器の杯身である。2 は口径 11.6cm、器高 5.0cm である。3 は外面底部にヘラ記号を施す。口径 11.6cm、器高 5.0cm である。

1013 号土坑（図版 27、第 68 図）

調査区の南寄りで検出した。規模は 0.6m 以上 × 1.5m で東側が調査区外へ延びる。深さは約 0.4m である。遺物は土師器の甕が出土している。遺構の時期は古墳時代後期である。

出土遺物（図版 33、第 71 図 4）

4 は土師器の甕である。胴部と口縁の境は不明瞭である。外面はタタキの後、ハケメである。内面はケズリである。器壁は厚い。口径 15.1cm、胴部最大径 20.0cm、器高 20.7cm である。

1014 号土坑（図版 27、第 68 図）

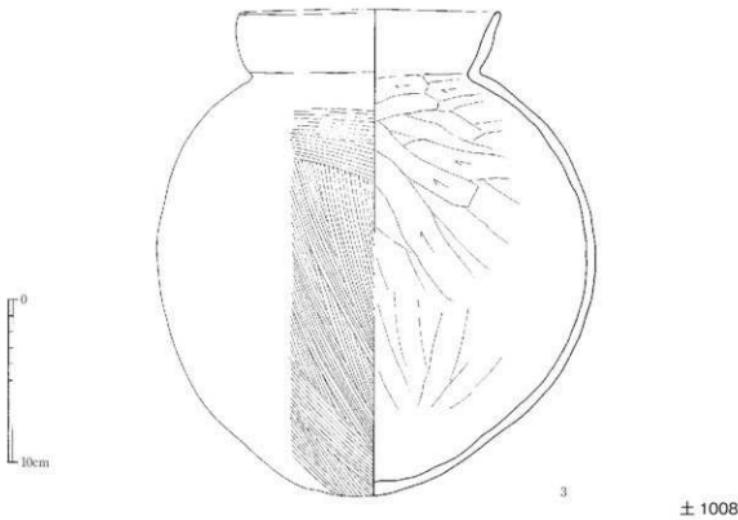
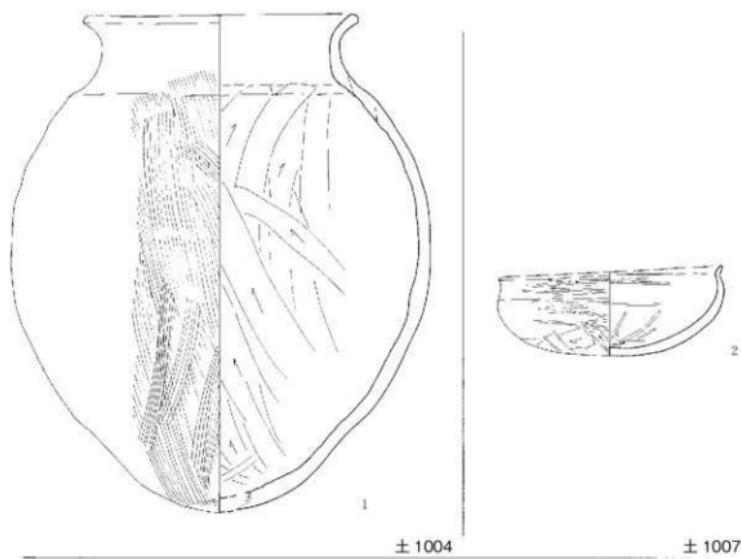
調査区の南寄りで検出した。規模は 0.9m × 1.0m の円形である。深さは 0.3m である。遺物は木製の刀形（第 93 図 4）、ヘラ状製品？（第 93 図 8）、鍬か鋤（第 93 図 3）、板状器具材（第 93 図 9・10）、棒状器具材（第 93 図 5～7・11～13）が出土している。遺構の時期は不明である。

1015 号土坑（図版 27、第 68 図）

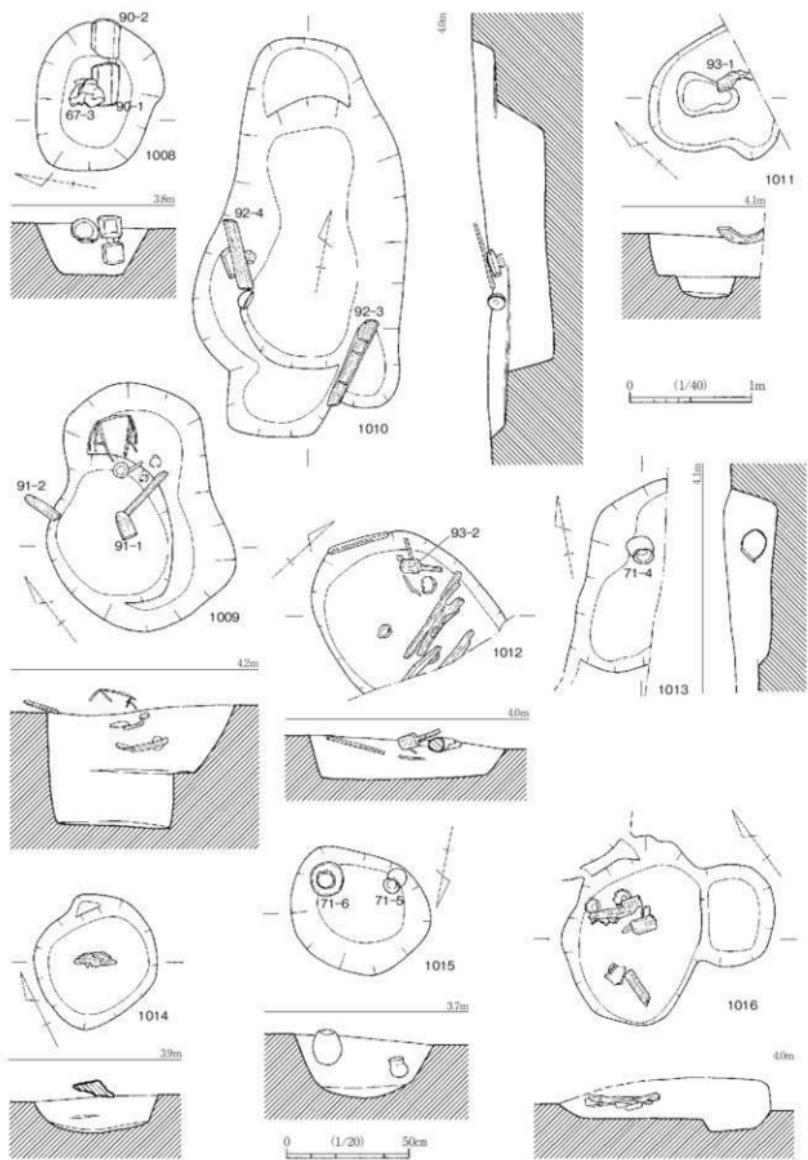
調査区の南寄りで検出した。規模は 0.5 × 0.6m の円形である。深さは約 0.3m である。遺物は土師器が出土している。遺構の時期は古墳時代前期である。

出土遺物（図版 33、第 71 図 5・6）

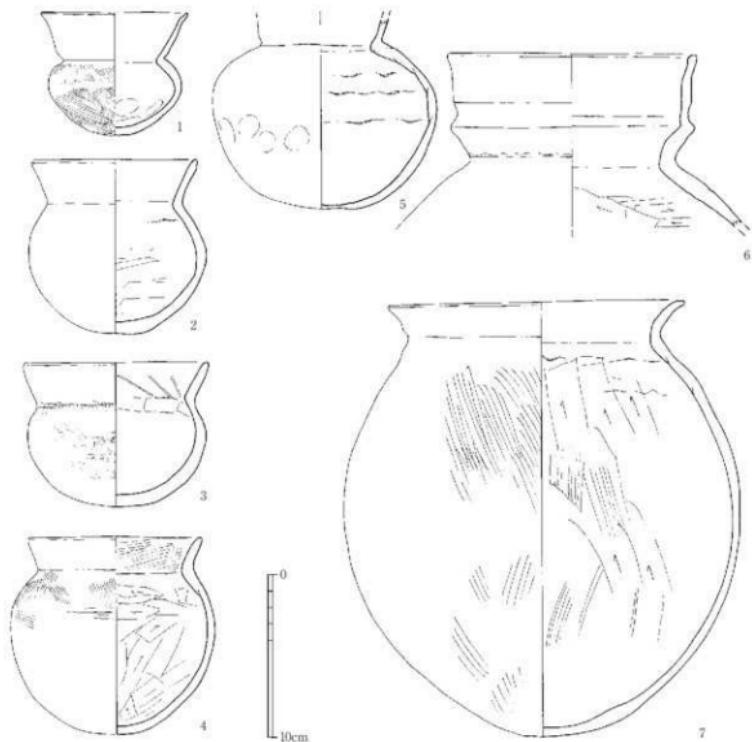
5・6 は小形の壺である。1 は薄く精緻な作りである。口径 5.0cm、胴部最大径 7.4cm、器高 8.0



第 67 図 IV-C 区 1004・1007・1008 号土坑出土土器実測図 (1/3)



第68図 IV-C区 1008～1016号土坑実測図 (1015は1/20、他は1/40)



第69図 IV-C区1009号土坑出土土器実測図(1/3)

cmである。2は口径9.0cm、胴部最大径13.1cm、器高14.0cmである。

1016号土坑(図版28、第68図)

調査区の南寄りで検出した。規模は1.3m×1.8mの不整形で、深さは約0.2mである。遺物は土器の他、木製品が出土している。遺構の時期は古墳時代であろう。

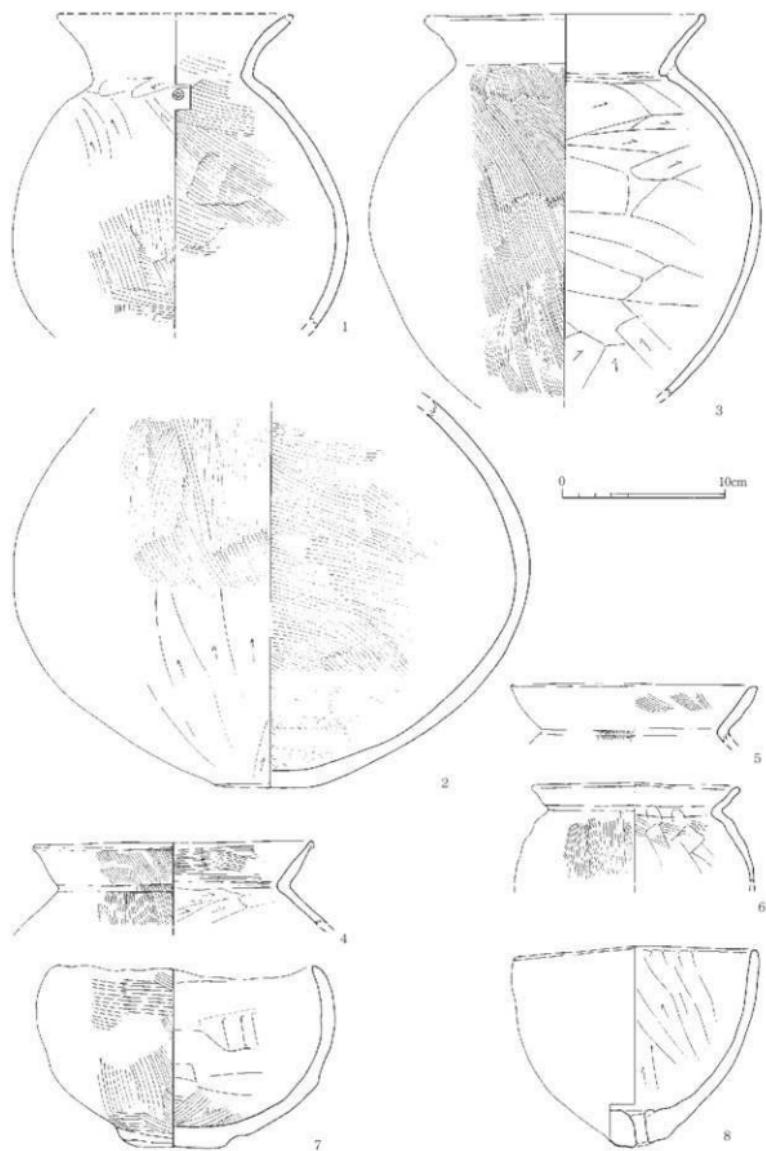
出土遺物(第71図7・8)

7は壺である。内面に粘土帯の接合痕が明瞭に残る。内外面の調整はハケメである。口径11.0cmである。8は壺の底部であろうか。外面の調整はタタキの後、ハケメ。内面の調整はハケメである。

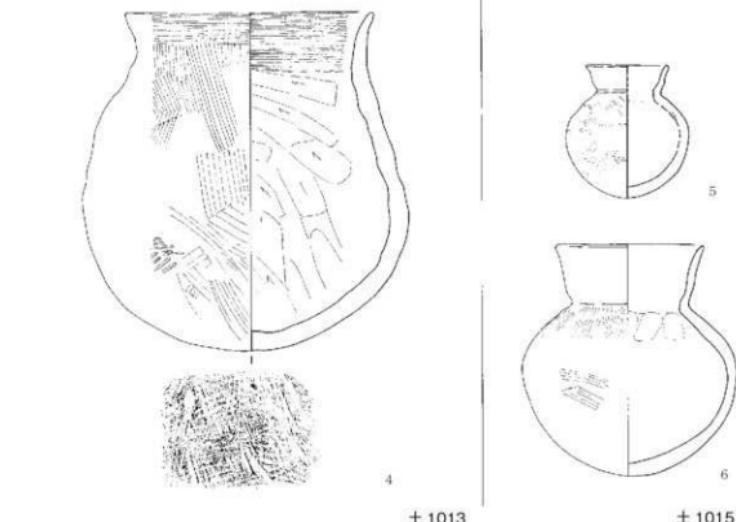
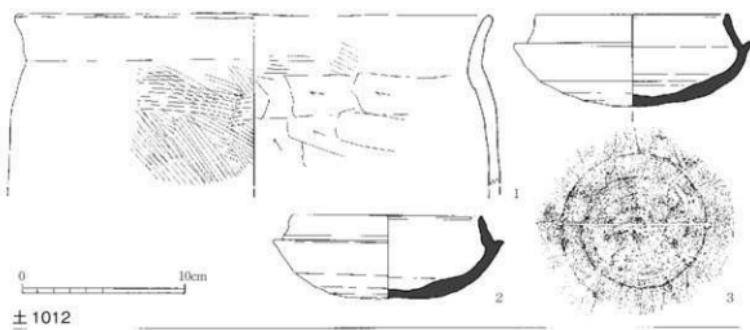
(4) 井戸

1号井戸(図版28、第72図)

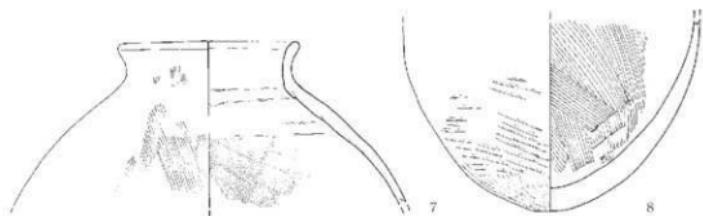
調査区の北側や東寄りで検出した。板材を正方形に組んで枠とした井戸である。11号溝に切られる。規模は2.1m×1.8mの梢円形である。深さは約4.0mで、底になるほど細くなっている。掘削して最初に曲物側板(第105図8~11)を検出し、その下部から大きく傾いた状態の組み合



第70図 IV-C区 1010号土坑出土土器実測図 (1/3)



土 1012 土 1013



第 71 図 IV-C 区 1012・1013・1015・1016 号土坑出土土器実測図 (1/3)

わせた井戸枠4段分を検出した。さらに崩れた状態で数段続くことがわかったが、これ以上掘り下げることは危険を伴うと判断し、調査の最終段階で重機による立ち割りを行い、側面から安全を確保しつつ、すべての井戸枠を取り上げた。

遺物は土師器、縁袖陶器、須恵器が出土している他、井戸枠の部材として用いられた曲物側板（第105図8～11）、組み合わせるため切り込みのある板材（第102図6）や編錘（第105図13）、板状器具材、杭（第105図12）が出土している。

最下層から出土した遺物は9世紀後半のものを中心とするが、下層付近より糸切り底の土師皿が出土していることから11世紀後半以降に埋没した可能性も考えられる。

出土遺物（図版33、第73図）

1～25は土師器である。1～3は底部の平らな杯である。1の口径12.0cm、底径7.1cm、器高3.7cmである。内外面はナデ調整で、底部は糸切り底である。2は口縁付近が大きく内湾する。底径5.8cmである。3は口径12.5cm、底径6.2cm、器高3.7cmである。4は丸底に近い器形である。口径13.4cm、器高3.5cmである。5は皿である。口径15.0cm、底径12.2cm、器高2.1cmである。6～16は底部の丸い杯である。最下層からまとめて出土しており、いずれも器表面の残りがよい。外面の調整はナデで、強い圧痕が残り、内面の調整はミガキである。6の口径は11.6cmである。7は口径12.0cm、器高3.5cmである。17～23はやや高い高台を持つ碗である。碗部はわずかに丸みを帯びている。17は高台の内側に焼成前の板状の痕跡が残る。口径12.4cmである。24は壺の口縁部である。内外面の調整はナデで、外面にタタキの痕跡が残る。25はイイダコ壺である。周防灘周辺に多い球形に近い形状をしており、側面に1ヶ所焼成前穿孔が外面から施される。外面の調整はナデである。口径7.3cm、器高7.7cmである。

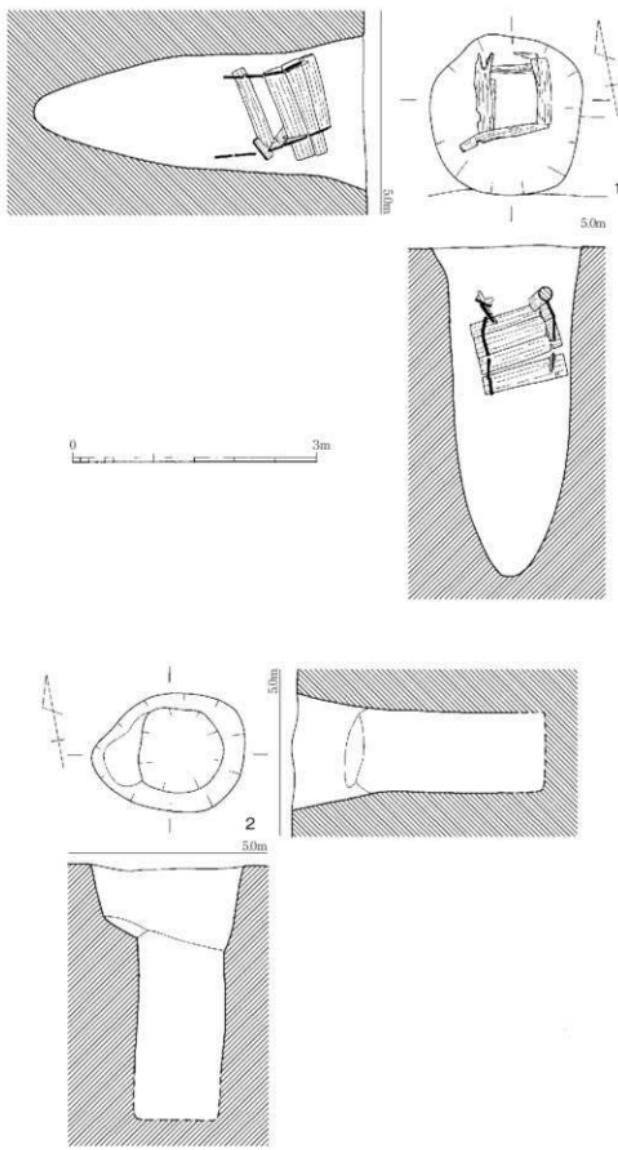
26は須恵器壺の口縁部である。内外面の調整はナデで、外側面に細かい波状文が施される。27は縁袖陶器の碗である。底径は10.4cmである。28は須恵質に近い焼成の鉢の口縁部である。片口となっており、内外面の調整はナデである。29は土師器の椀である。口縁部ヨコナデ、他はナデを施す。外面に文字不明ながら墨書が見られる。

2号井戸（図版28、第72図）

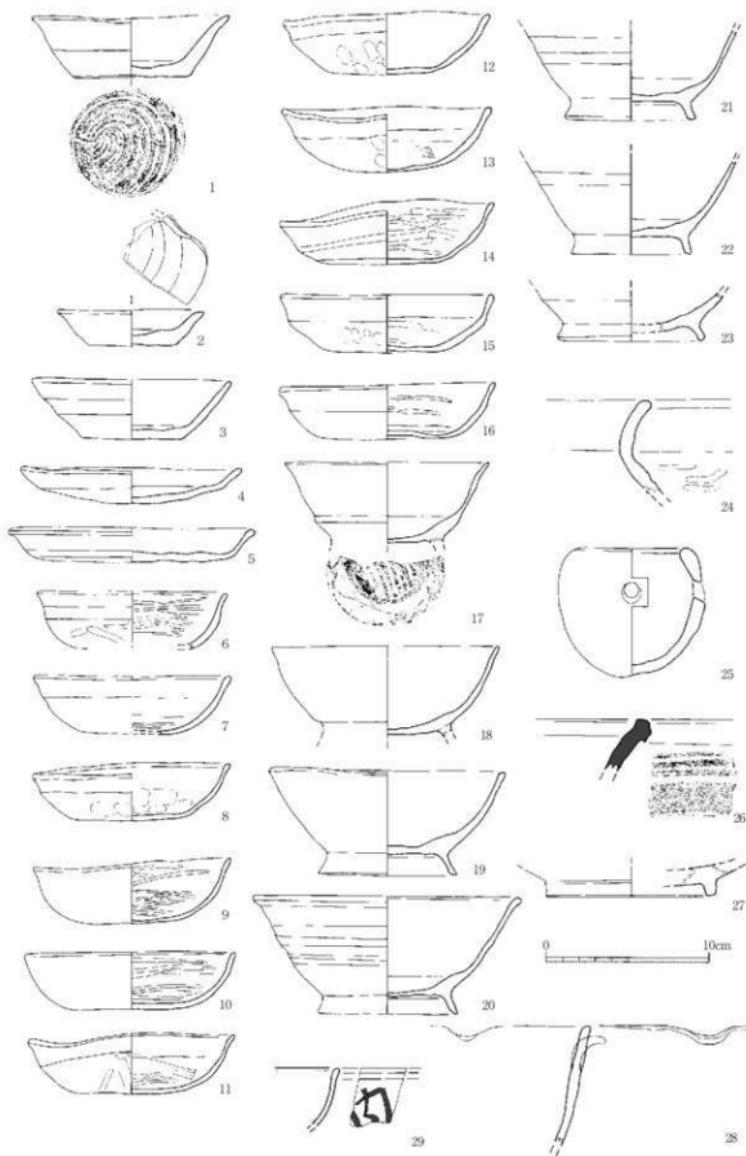
調査区の北側、西寄りで検出した。素掘りの井戸である。切り合ひ関係はない。規模は1.9m×1.4mで平面は梢円形である。深さは3.1mで約0.8mのところで西側に段をつくる。その後、ほぼ垂直に掘り込まれる。遺物は土師器、須恵器が中層を中心に出土している。また、接合しない製塩土器の破片が出土している。出土遺物は8世紀代を主体とするが、9世紀に下るものもある。

出土遺物（図版33、第74・75図）

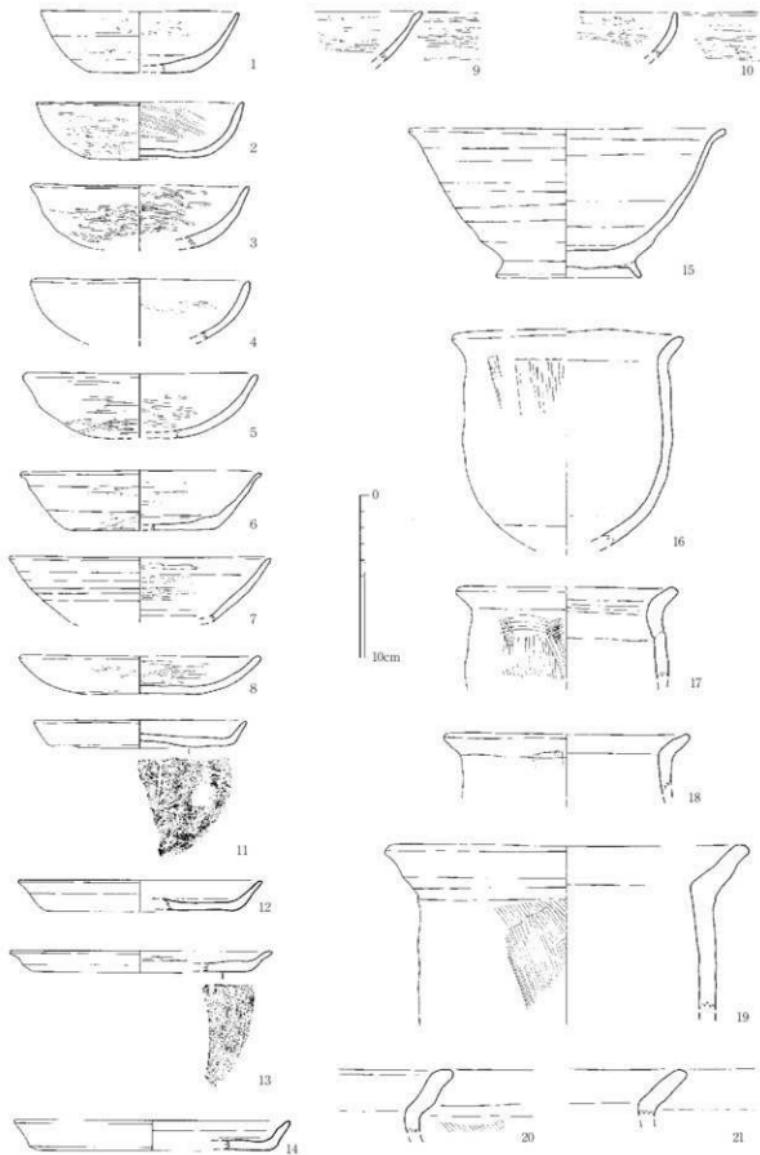
1～21は土師器である。1～10は杯である。内外面の調整はともにミガキである。1は口径12.0cm、器高3.6cmである。11～14は皿である。内外面の調整はナデである。11の口径は11.3cmである。底面にヘラ記号状のものが見られる。15は碗である。わずかに丸みを帯びた碗部であり、高台は小さく短い。内外面の調整はナデである。口径19.2cm、底径8.8cm、器高9.1cmである。16～21は壺である。16の外面はハケメである。口径14.0cmである。17は外面のハケメを弧状に施している。口径13.5cmである。18は口径15.0cmである。19・20はいわゆる農前企救型壺である。19は口径22.2cmである。22～32は須恵器の杯蓋である。いずれも口縁端部をわ



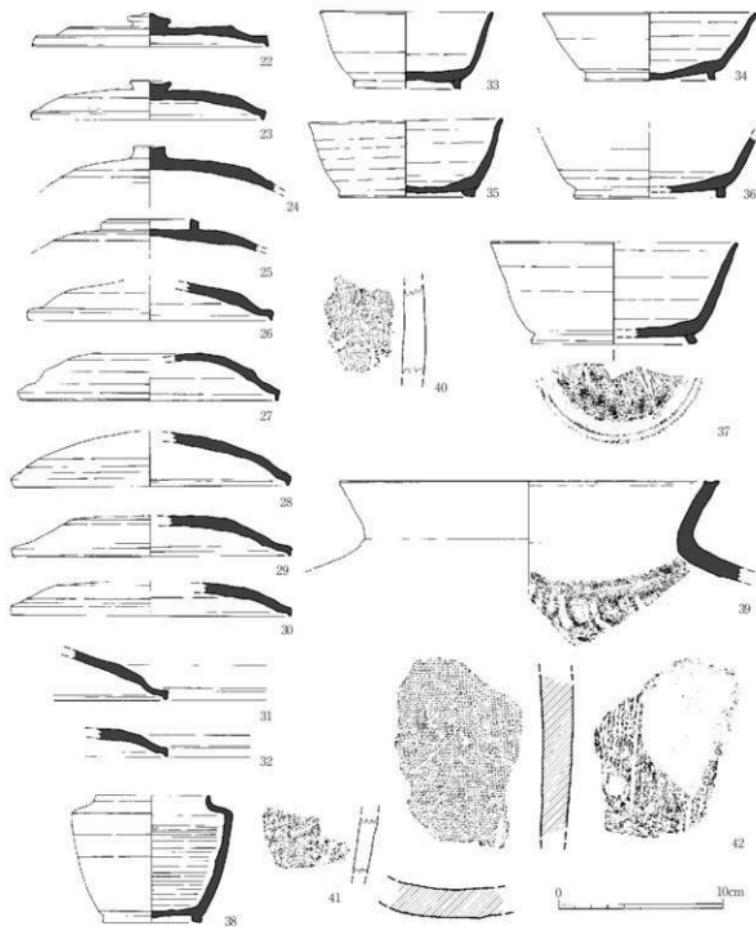
第72図 M-C区1・2号井戸実測図(1/60)



第73図 IV-C区1号井戸出土土器実測図 (1/3)

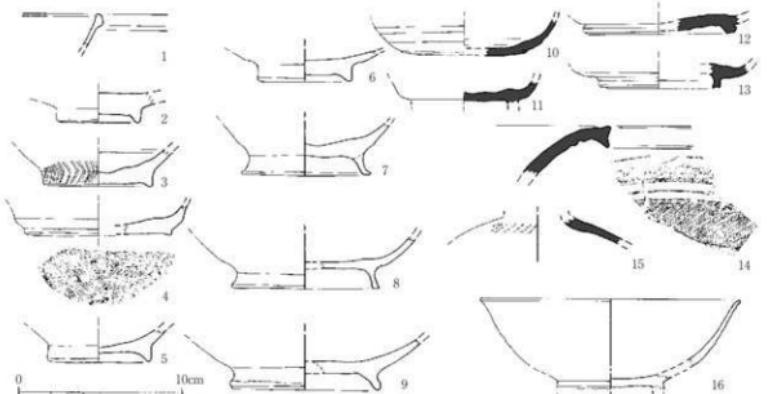


第74図 N-C区2号井戸出土土器実測図① (1/3)



第75図 IV-C区2号井戸出土土器実測図② (1/3)

すかに折り曲げるものである。25は輪状のつまみを持つものである。33～37は須恵器の杯身である。高台部分は小さく短い。37は底部外面にヘラ記号がある。38は須恵器で小形の短頸壺である。薄手で精緻な作りで、内外面の調整は回転ナデである。口径7.0cm、底径6.1cm、器高7.0cmである。39は須恵器の壺である。口径23.0cmである。40・41は製塙土器である。外面の調整はナデ、内面には粗い布目跡が明瞭に残る。42は平瓦である。内面に粗い布目跡が残り、外面にはタタキの跡が残る。



第76図 N-C区11号溝土層・出土土器実測図 (1/40、1/3)

(5) 溝

11号溝 (第65・76図)

調査区の北側で検出した東西に掘削された溝である。東側部分は包含層の堆積部分に掘られたのか、掘削時に検出できなかった。幅1.1m、深さ0.6mである。遺物は陶磁器、須恵器、土師器、緑釉陶器が出土している。遺構の時期は11～12世紀である。

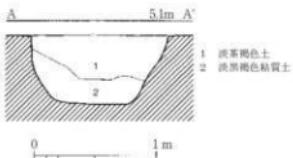
出土遺物 (第76図1～16)

1は玉縁口縁の白磁碗である。2は青磁碗の底部である。底径5.2cmである。3は白磁碗の底部である。高台を削り出しているが、その際の工具痕が連続して残る。底径6.8cmである。4～9は土師器である。4は糸切り底である。底径9.0cmである。5～9は碗の高台部分である。5は底径6.4cmである。6は底径5.8cmである。7は底径7.8cmである。8は底径9.0cmである。9は底径9.2cmである。10～15は須恵器である。10～13は杯身である。11は小さな短い高台が付くものである。底径6.4cmである。12の底径は9.4cmである。13は底径7.4cmである。14は壺の口縁部である。細かい波状文が施される。15は頸部に列点文が施される。16は緑釉陶器である。碗部と底部は接合しないが同一個体である。口径16.0cmである。

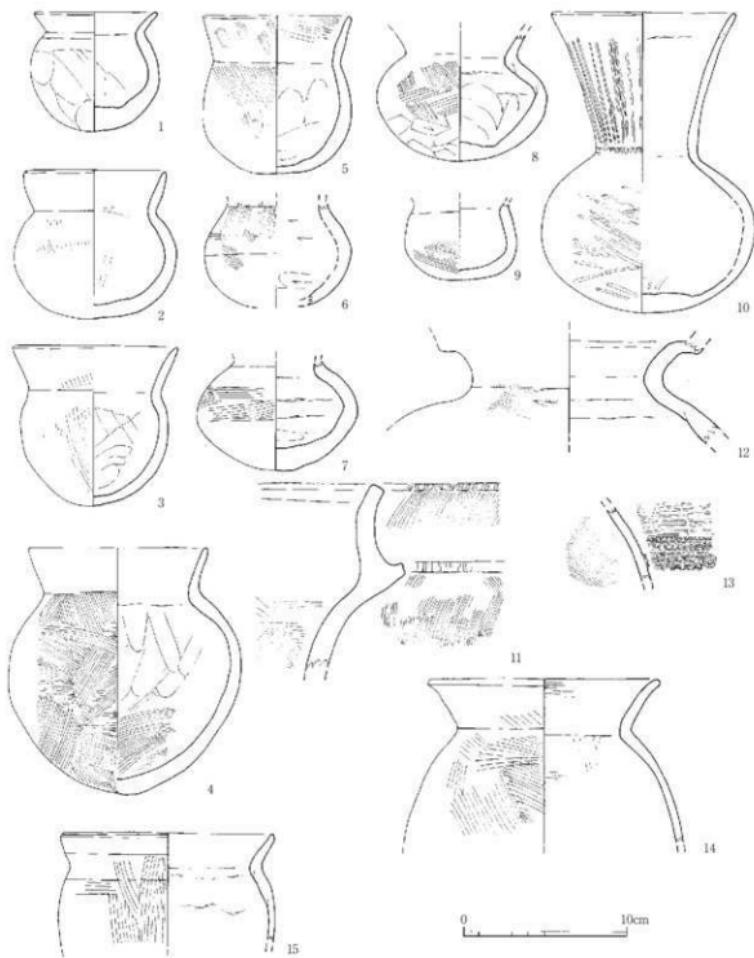
(6) 包含層

包含層出土土器 (図版33・34、第77～83図)

1～9は土師器の小形の壺である。1は底部部分が非常に厚いのが特徴である。口径7.6cm、胴部最大径8.0cm、器高7.3cmである。2の外面はハケメ、内面はケズリである。口径8.8cm、胴部最大径10.0cm、器高9.1cmである。3は頸部と胴部の境がやや不明瞭で、外面はハケメ調整、内面はケズリである。口径10.2cm、胴部最大径9.0cm、器高9.0cmである。4は外面がハケメ調整、内面下位はハケメ、上位は強い圧痕が残る。口径11.0cm、胴部最大径13.6cm、器高15.3cmである。5は大きな単位によって内面ケズリが行われる。口径9.0cm、胴部最大径9.0cm、器高9.5cmである。6は

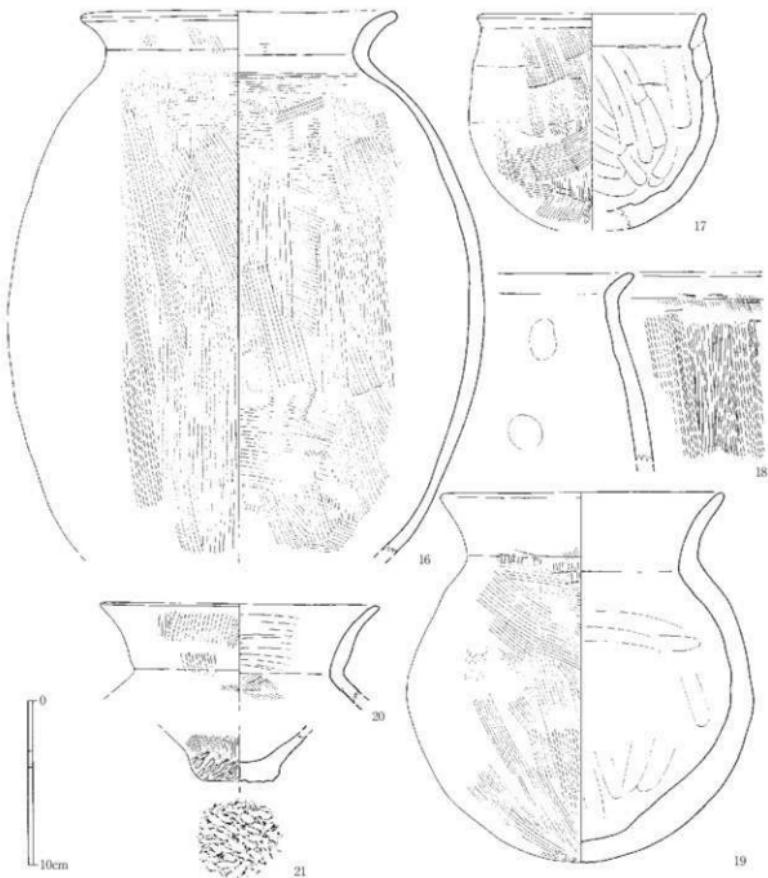


11号溝土層実測図 (1/40)



第77図 IV-C区包含層出土土器実測図① (1/3)

胴部最大径9.0cmである。7の外面は横方向にハケメを施す。底部が厚い。胴部最大径9.8cmである。8は外面底部付近を不定方向のケズリ、それより上位はハケメを施す。胴部最大径は10.2cmである。9の胴部最大径は6.8cmである。10は土師器の精製壺である。全体に薄手で、外面はハケメの後、ミガキを施す。口径11.3cm、胴部最大径13.5cm、器高18.4cmである。11は大型の二重口縁壺の口縁部である。口縁端部と屈曲した突出部に刻み目を施す。12は二重口縁壺の頸部である。外面にハケメが残る。全体に器壁が厚い。13は壺の胴部である。内外面はハケメ調整で、部分的に細かい波状文が施され、貼付浮文が見られる。14はわずかに口縁が外反する壺である。内外面の調整



第78図 IV-C区包含層出土土器実測図② (1/3)

はハケメである。口径 14.1cm である。15 は小形の壺である。内面に粘土帶の接合痕が残る。口径 13.2cm である。16 ~ 20 は土師器の壺である。16 は内外面ともにハケメ調整を施す。口径 19.4cm、胴部最大径 28.2cm である。17 は口縁部がわずかに外反する。器壁は厚い。口径 14.0cm、胴部最大径 15.2cm である。18 は外面はハケメ調整、内面には圧痕が残る。19 は器壁が厚く重い。口径 17.4cm、胴部最大径 21.0cm、器高 22.8cm である。20 は口径 17.0cm である。21 は土師器の壺の底部であろうか。底部付近に多数の刺突痕が残る。

22・23 は土師器の高杯である。22 の内面はケズリである。底径 10.6cm である。24 は碗である。内外面の調整はミガキである。口径 11.6cm、器高 5.6cm である。25 は小形の瓶等の把手の部分である。26 はコップ状の鉢で、底部付近の外面には圧痕が残る。外面はハケメ調整、内面はナデである。

底径 6.2cm である。27 ~ 37 は手捏ね土器である。27・28 は壺であろう。27 の胴部最大径 8.8cm である。28 は胴部最大径 7.6cm である。29 は鉢で、口径 7.0cm、底径 2.8cm、器高 5.5cm である。30 は高杯である。口径 6.2cm、底径 5.0cm、器高 5.5cm である。31 は口径 6.1cm、器高 3.8cm である。32 は口径 4.0cm、器高 3.5cm である。33 は口縁がわずかに外反する器形である。口径 3.0cm、器高 2.7cm である。

38 は土製の玉である。直径 3.0cm である。39 は瓶形土器の把手の部分であろうか。外面はナデ調整である。40 ~ 44 は支脚である。40 は口縁の一部を削り抜くものである。外面の調整はあまり丁寧ではなく、ハケメの後にナデ、内面はハケメ調整である。41 ~ 43 は中空で 1 ヶ所が突出し、その部分で支えるタイプのものである。41 は底径 13.2cm、器高 11.1cm である。42 は底径 10.7cm、器高 10.5cm である。43 は底径 10.8cm、器高 9.0cm である。44 は中実のものである。方形で外面の調整はナデである。

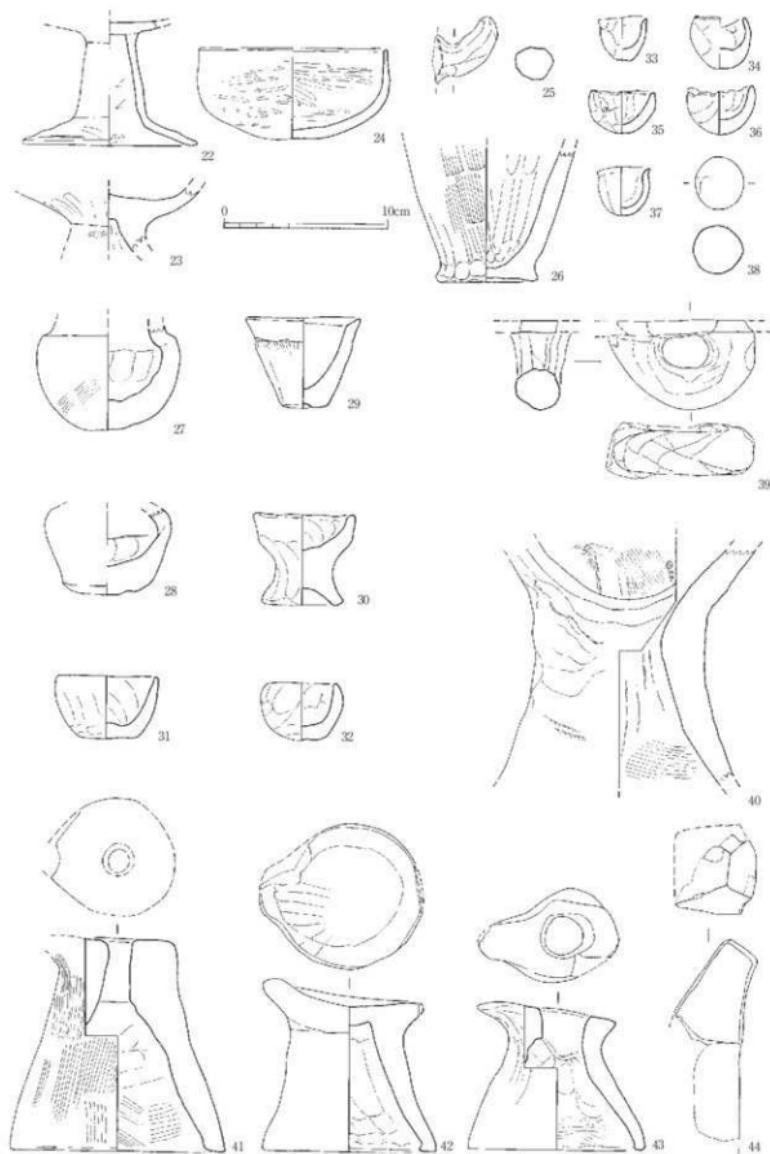
45 ~ 49 は須恵器の杯蓋である。45・46 は天井部と肩部の境及び口縁部に段がある。45 は口径 14.0cm、器高 5.1cm である。46 は口径 13.6cm、器高 4.5cm である。47 は天井部と肩部の境に段が無く、口縁が外側に広がるものである。口径 13.6cm、器高 3.0cm である。48 は小型化が進んだものである。口径 9.0cm、器高 3.1cm である。49 は口径 10.2cm、器高 3.2cm である。

50 ~ 63 は杯身である。50 はほぼ垂直に立ちあがり、口縁内部に段を持つ。口径 12.0cm、受部径 14.0cm、器高 5.0cm である。51 はやや内傾する立ち上がりで、口縁端部は段の痕跡を残す。口径 12.8cm、受部径 15.6cm、器高 5.7cm である。52 は口縁内部に段が残る。口径 12.8cm、受部径 14.6cm、器高 5.5cm である。53 は口縁端部が丸くなり、器高も浅くなる。口径 12.4cm、受部径 15.0cm、器高 4.7cm である。54 は立ち上がりが内傾し、細くなる。口径 12.2cm、受部径 15.0cm、器高 4.2cm である。55 はさらに立ち上がりが細くなる。口径 11.4cm、受部径 13.6cm、器高 4.2cm である。56 は立ち上がりが短くなっている。口径 13.2cm、受部径 15.0cm、器高 4.3cm である。57 は口径 13.0cm、受部径 14.6cm、器高 4.3cm である。58 は杯部がやや深めであるが、立ち上がりは短い。口径 13.7cm、受部径 15.8cm、器高 5.0cm である。59 は口径 12.5cm、受部径 15.0cm、器高 4.5cm である。60 は立ち上がりが短く、受部との境も不明瞭である。口径 11.7cm、受部径 13.8cm、器高 4.6cm である。61 は口径 13.0cm、受部径 15.4cm、器高 4.3cm である。62 は口径 10.9cm、受部径 13.3cm、器高 4.4cm である。63 は蓋の可能性もある。口径 10.2cm、受部径 12.0cm、器高 3.2cm である。

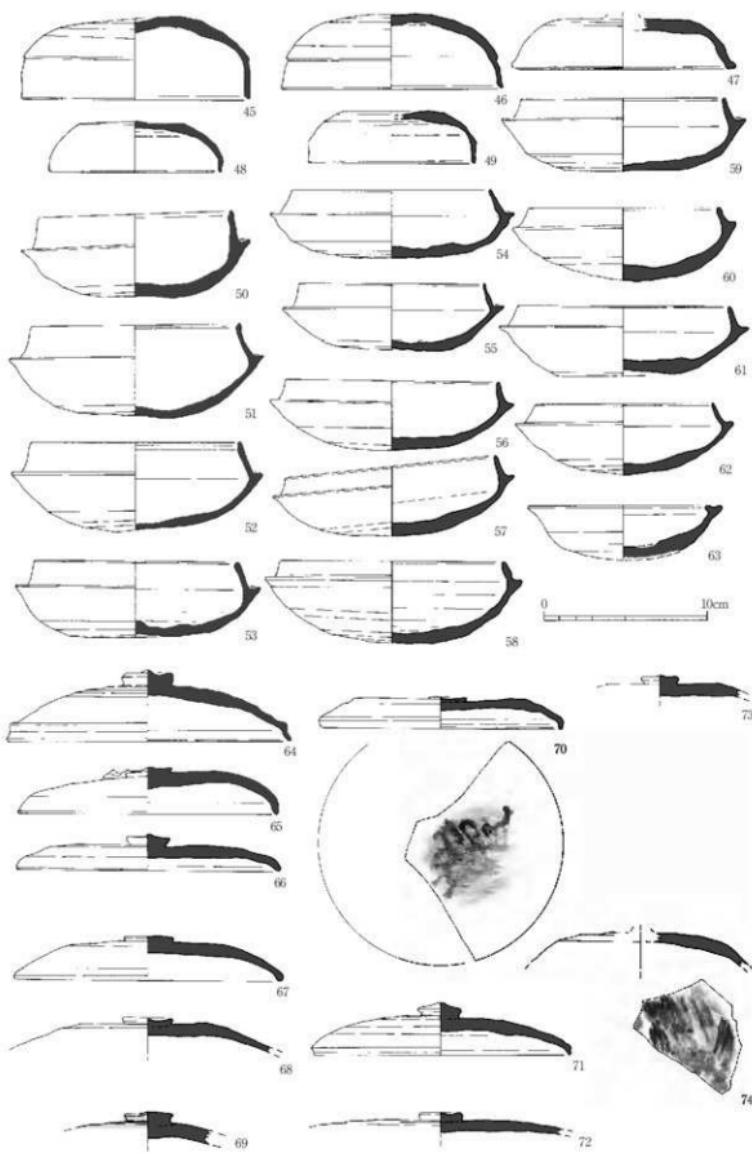
64 ~ 74 はつまみの付く杯蓋である。64 はややしっかりと口縁端部を折り曲げる。口径 12.4cm、器高 4.3cm である。65 は口縁端部をわずかに折り曲げる。天井部に重ね焼きによる他個体の破片が溶着している。口径 16.0cm、器高 2.8cm である。66 はほとんど折り曲げる痕跡が見られない。口径 16.2cm、器高 2.7cm である。67 は口径 16.5cm、器高 3.0cm である。

68 は転用硯の可能性がある。内面は滑らかで、黒色の墨と思われる物質が付着する。69 は内面に赤色顔料が付着している。70 ~ 74 は転用硯である。いずれも内面は滑らかで墨と思われる物質が付着する。70 は口径 15.0cm、器高 2.0cm である。71 は口径 15.7cm、器高 3.2cm である。

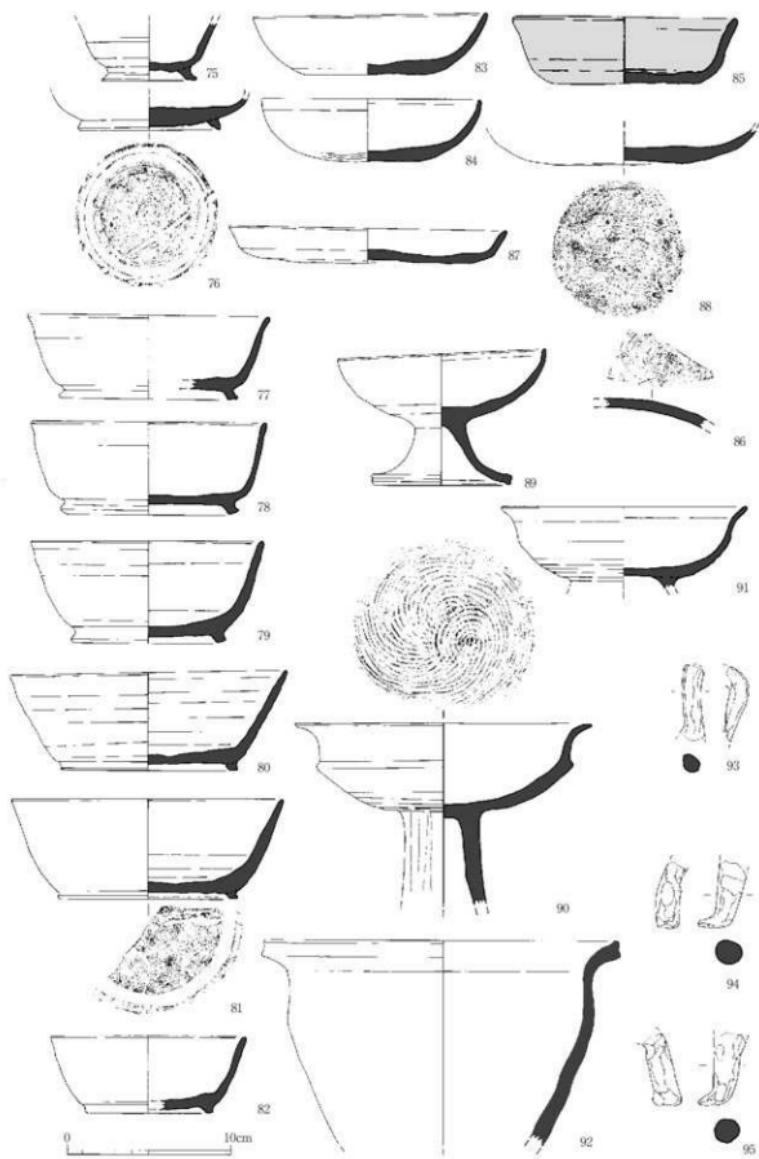
75 ~ 82 は高台の付く杯身である。75 は高台が踏ん張るものである。底径 5.8cm である。76 は底面にヘラ記号を太く施す。底径 8.7cm である。77 は口径 14.8cm、底径 10.8cm、器高 5.1cm である。78 は高台の内側のみが接地するものである。口径 14.4cm、底径 10.8cm、器高 5.6cm である。79 は口径 14.3cm、底径 9.4cm、器高 6.2cm である。80 は短い高台が付くものである。口径 17.0cm、底径 10.8cm、器高 6.2cm である。81 は底部に細くヘラ記号が施される。口径 16.6cm、底径 11.0cm、器高 6.1cm であ



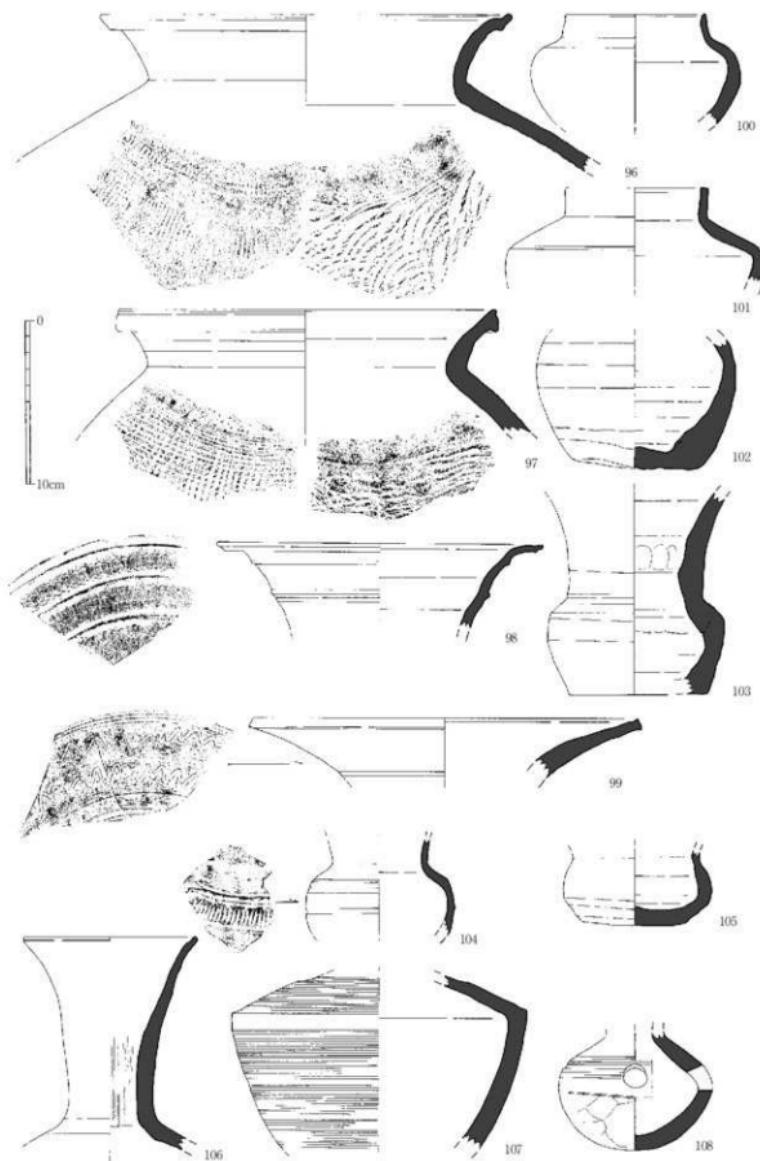
第79図 IV-C区包含層出土土器実測図③ (1/3)



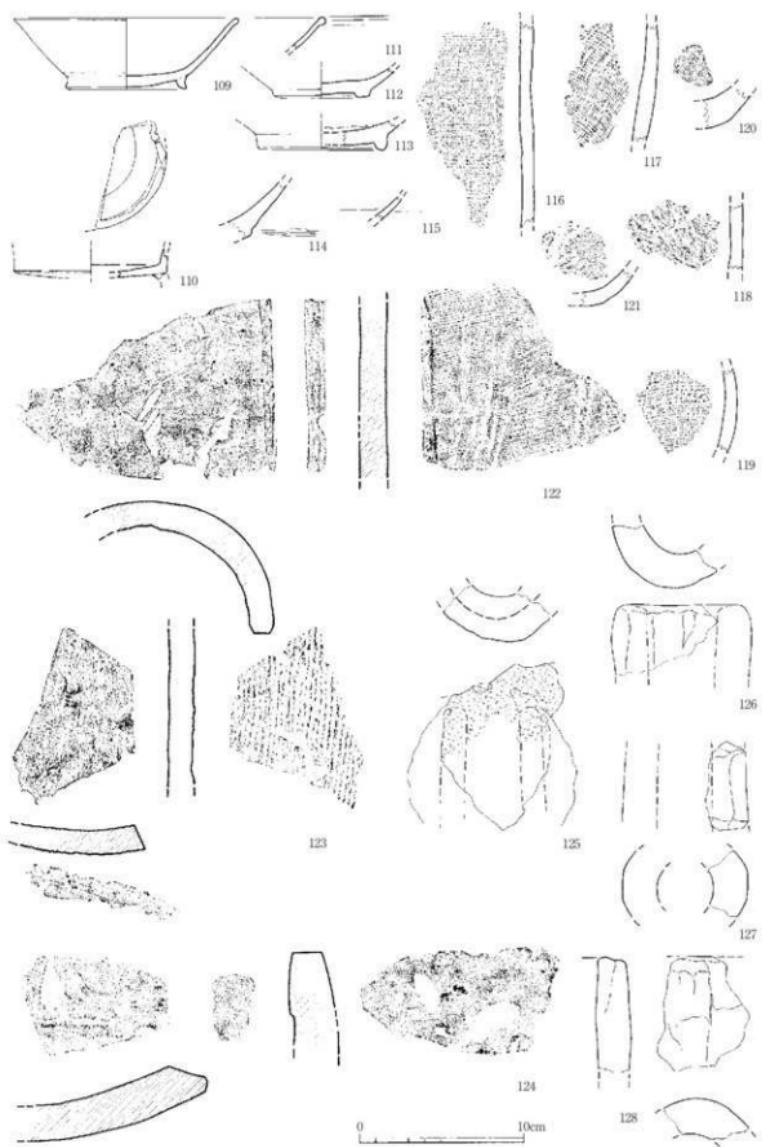
第80図 IV-C区包含層出土土器実測図④ (1/3)



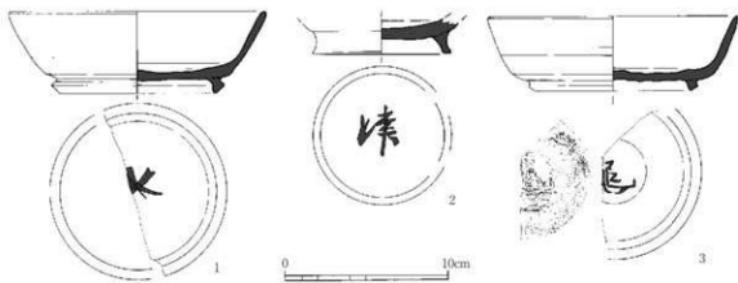
第 81 図 IV-C 区包含層出土土器実測図⑤ (1/3)



第82図 IV-C区包含層出土土器実測図⑥ (1/3)



第 83 図 IV-C 区包含層出土土器実測図⑦ (1/3)



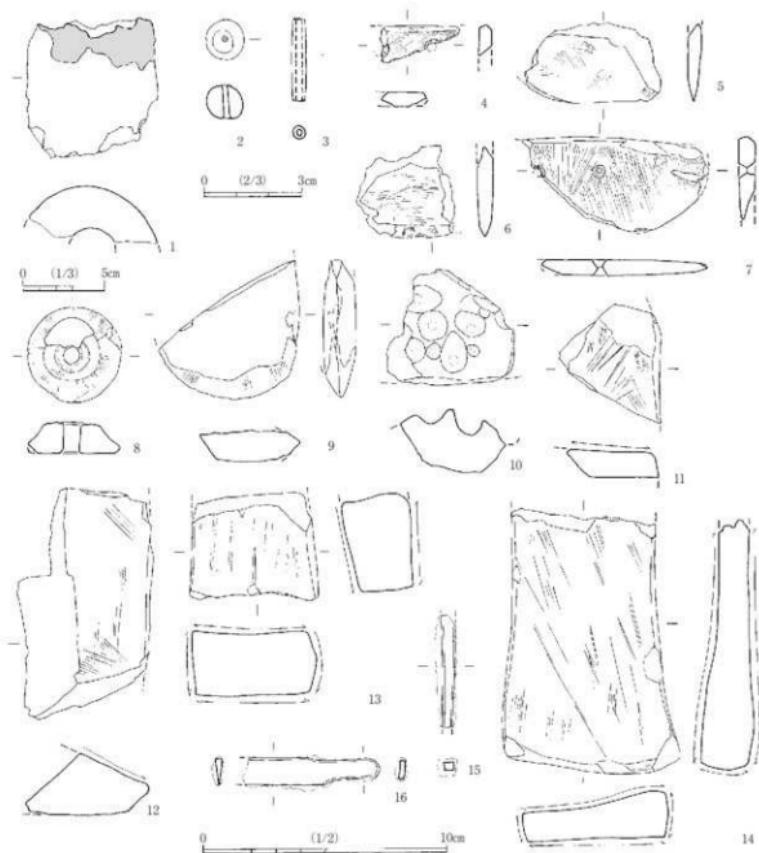
第84図 IV-C区包含層出土土器実測図⑧ (1/3)

る。82は口径12.0cm、底径7.8cm、器高4.7cmである。

83・84は杯である。いずれもやや丸みを帯びた器形である。83は口径14.4cm、器高3.5cmである。84は口径13.5cm、器高4.0cmである。85は底部から直線的に立ち上がる器形で、口径13.8cm、器高4.0cmである。内外面に赤色顔料を塗っている。86は杯蓋である。天井部外面に「×」形のヘラ記号を焼成前に刻む。87は皿である。口径17.1cm、器高2.5cmである。88は大型の碗であろうか。底部に擦過痕が残る。89は短脚の高杯である。口径12.8cm、器高8.3cmである。90は長脚の高杯で、杯部の口縁が大きく開く。杯部内面は丁寧なて具跡が残る。口径18.2cmである。91は高杯の杯部である。丸い器形で口縁部のみが外反する。口径15.1cmである。92は鉢である。口径22.0cmである。93～95は動物形の脚部であろうか。いずれも手捏ねで成形する。

96・97は壺である。96の口径は25.2cmである。97の口径は23.2cmである。98は壺の口縁部である。細い直線間に細かい波状文を施す。口径19.8cmである。99は壺の口縁部であろうか。口径や傾きは歪みのため、正確でない可能性もあるが、口径24.0cmを測る。100・101は短頸壺である。100は口径8.6cmである。101は口径8.7cmである。102は壺の胴部である。器壁が厚い。胴部最大径12.2cmである。103も器壁の厚い壺である。胴部最大径11.0cmである。104は壺であろう。胴部に連続した刺突文、頸部に波状文を施す。105は壺である。106は長頸壺の頸部である。口径10.6cmである。107は長頸壺の胴部であろう。胴部最大径18.0cmである。108は甌である。底部は手持ちケズリである。胴部最大径9.4cmである。

109～110は縁釉陶器である。109は碗である。口径13.8cm、底径7.4cm、器高5.3cmである。前面に磨きが施されたのち、施釉される。高台は貼り付けで、豊付の部分は露胎である。110は脚付容器の底部である。底径9.6cmである。脚部分には穿孔が2ヶ所施される。111～113は白磁である。111は小さな玉縁をもつ碗の口縁部であり、精良な作りである。112は碗の底部で、底径6.0cmである。見込みには目跡が1ヶ所残る。113は碗で底径7.8cmである。見込みに重ね焼きの痕跡が残る。114は越州窯系の青磁碗である。115は白磁碗の胴部である。116～121は製塙土器である。いずれも円筒形の形状を呈し、内面に粗い布目が残る。122は丸瓦である。端部はヘラ切りが行われている。外面はナデ痕、内面は粗い布目痕が残る。123・124は平瓦である。123の外面はナデ調整、内面は繩目跡が残る。124の調整は内外ともにナデ調整である。端部はヘラ切りである。125～128は輪の羽口である。125は先端に多量の鉄滓が付着する。口径6.0cmである。126は口径8.0cmである。127は直径7.2cmである。外面はナデ調整である。128は外面に圧痕が残る。



第85図 IV-C区出土土・石・鉄製品実測図 (1は1/3、2・3は2/3、その他は1/2)

擇回 図版 番号	区	出土遺構	種類	器種	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	残存	備考	
85-1	IV-C	包含層	土製品	羽口				-	0.1		
85-2	IV-C	包含層	土製品	丸玉	1.20	1.20	1.00	1.50	1		
85-3	IV-C	包含層	石製品	管玉	2.50	0.40	0.40	0.70	1	碧玉	
85-4	IV-C	包含層	石製品	石房丁	(3.20)	(1.50)	0.60	(2.90)	0.1	片岩	
85-5	IV-C	包含層	石製品	石房丁	(5.60)	(3.30)	0.60	(12.90)	0.2	緑色片岩	
85-6	IV-C	包含層	石製品	石房丁	(4.00)	(3.75)	0.70	(13.10)	0.2	片岩	
85-7	図版35	IV-C	包含層	石製品	石房丁	(7.60)	(3.90)	0.65	(22.00)	0.5	凝灰岩
85-8	図版35	IV-C	包含層	石製品	鋸鋸車	3.90	3.90	1.35	(24.60)	0.8	滑石
85-9	IV-C	包含層	石製品	石斧	(5.70)	(5.75)	(1.35)	(49.80)	0.1	緑色片岩	
85-10	図版35	IV-C	包含層	石製品	不明	(4.70)	(5.14)	(3.10)	(76.90)	0.1	斑岩系
85-11	IV-C	包含層	石製品	砥石	(4.80)	(4.20)	(1.25)	(30.30)	0.1	凝灰岩	
85-12	IV-C	包含層	石製品	砥石	(9.45)	(5.50)	(2.50)	(149.50)	0.2	片岩	
85-13	IV-C	包含層	石製品	砥石	(4.40)	5.30	(2.70)	(96.70)	0.3	細粒砂岩	
85-14	図版35	IV-C	包含層	石製品	砥石	(10.85)	7.25	2.30	(220.90)	0.7	泥岩
85-15	IV-C	包含層	鉄製品	鉄鏹	(4.60)	0.55	0.30	(5.20)	0.2		
85-16	IV-C	包含層	鉄製品	刀子	(5.60)	1.15	0.30	(5.10)	0.3		

()は残存値

第6表 IV-C区出土特殊遺物一覧表

(7) 墨書き土器

包含層（巻頭図版6、第84図）

1・2は墨書き土器である。1は須恵器で、底部外面は回転ヘラ削り、内面は不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。底部外面に墨書ならびにヘラ記号状の線刻が認められるが、文字は不明である。

2は土師器で、ヨコナデおよびナデが丁寧に施される。底部および高台部分のみが遺存し、外面に「津」の墨書きが施される。3は線刻土器である。底部外面は回転ヘラ切り、内面は不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。内面に灰被りが見られる。底部外面に線刻が施されるが、文字は不明である（城門）。

その他、1号井戸からも墨書き土器1点が出土する（第73図29）。

(8) 特殊遺物（木製品以外）

いずれも包含層からの出土である。

土製品（第85図1・2）

1は羽口である。先端付近が遺存し、被熱のため変色する。2は土製丸玉である。径0.15cmの孔を斜め方向に穿つ。

石製品（図版35、第85図3～14）

3は管玉である。孔径0.2cmを測る。碧玉製。4～7は石庵丁である。4は背部片で背孔0.8cm、孔間2.2cmを測り、外湾刃半月形を呈する。片岩製。5・6は刃部片である。6は刃部横に孔と考えられる研磨痕が認められ、再利用品と考えられる。5は緑色片岩、6は片岩製。7は外孔0.55cm、内孔0.2cm、背孔1.4cm、孔間2.6cmを測り、外湾刃半月形を呈する。凝灰岩製。8は紡錘車である。断面台形を呈し、孔径0.65cmを測る。滑石製。9は石斧である。扁平な小型の石斧で刃部に使用痕が見られる。緑色片岩製。10は不明石製品である。径0.5～1.7cm、深さ0.2～0.7cmの凹みが多数見られる。斑岩系石材製。

11～14は砥石である。11は表面のみが砥面として遺存し、側面は研磨により面取りする。凝灰岩製。12は表裏面を砥面とする。片岩製。13は表裏面を砥面とし、側面は研磨により面取りする。下面には粗い研磨を施し、表面に鉄製刃器の研磨痕が見られる。細粒砂岩製。14は表裏面を砥面とし、側面および下面は研磨により面取りする。泥岩製。いずれも石質と大きさから、持ち砥の仕上げ砥と考えられる。

鉄製品（第85図15・16）

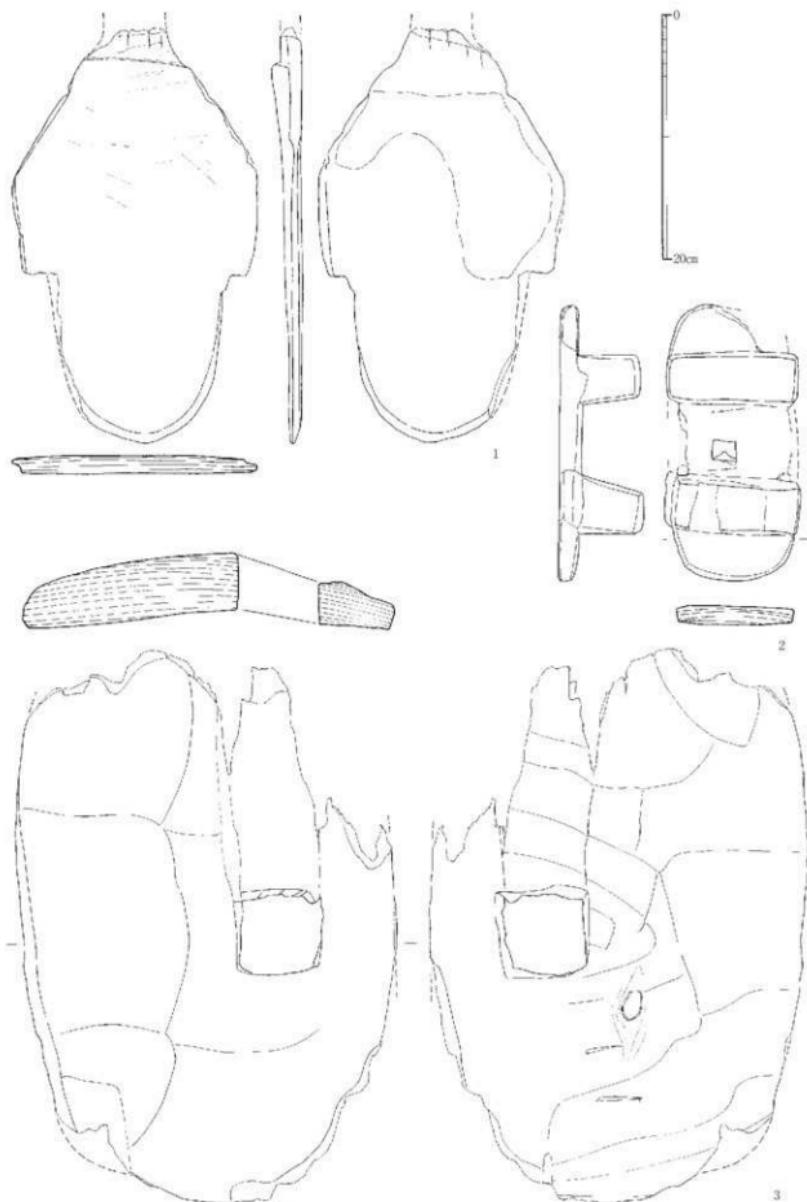
15は鉄鎌である。断面四角形を呈する長頭鎌である。16は刀子である。茎が短く、上下共にわずかに闇を持つ（城門）。

(9) 木製品

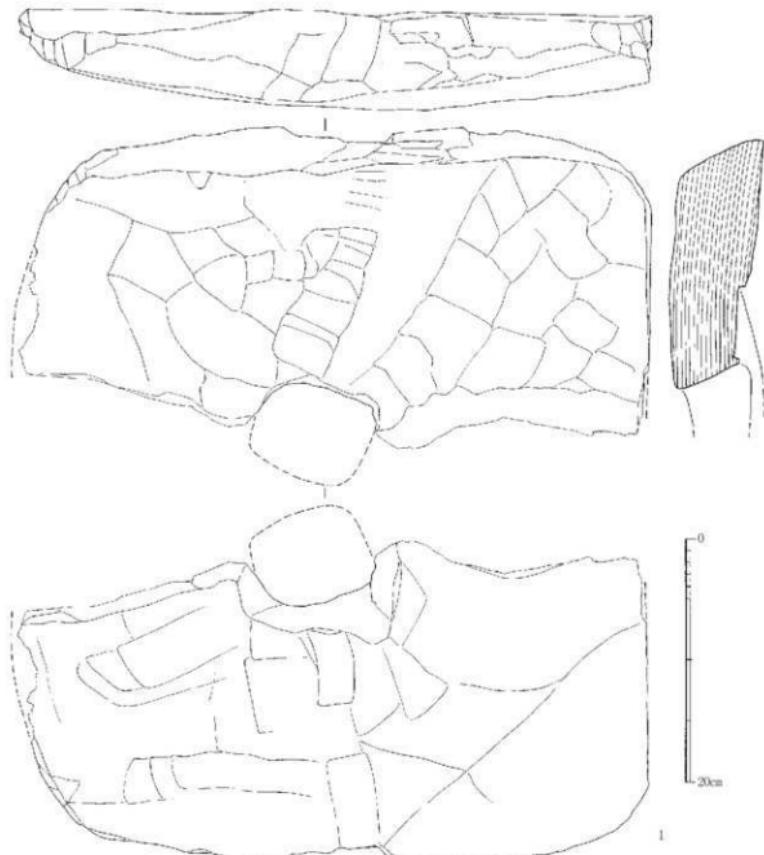
IV-C区の出土木製品については、多量であることから、特殊遺物とは別項目を立てて報告する。以下の報告は、遺構出土のものと包含層出土のものの2つに分け、木簡類は最後に報告する。

遺構出土木製品（巻頭図版5、図版35～38、第86～105図）

第86図1～3は1001号土坑出土木製品である。1は櫛である。刃部の段差部分に鉄製の歯先が差し込まれていたものと考えられる。基部は細く削りだしており、組み合わせ式の柄が付く可能性



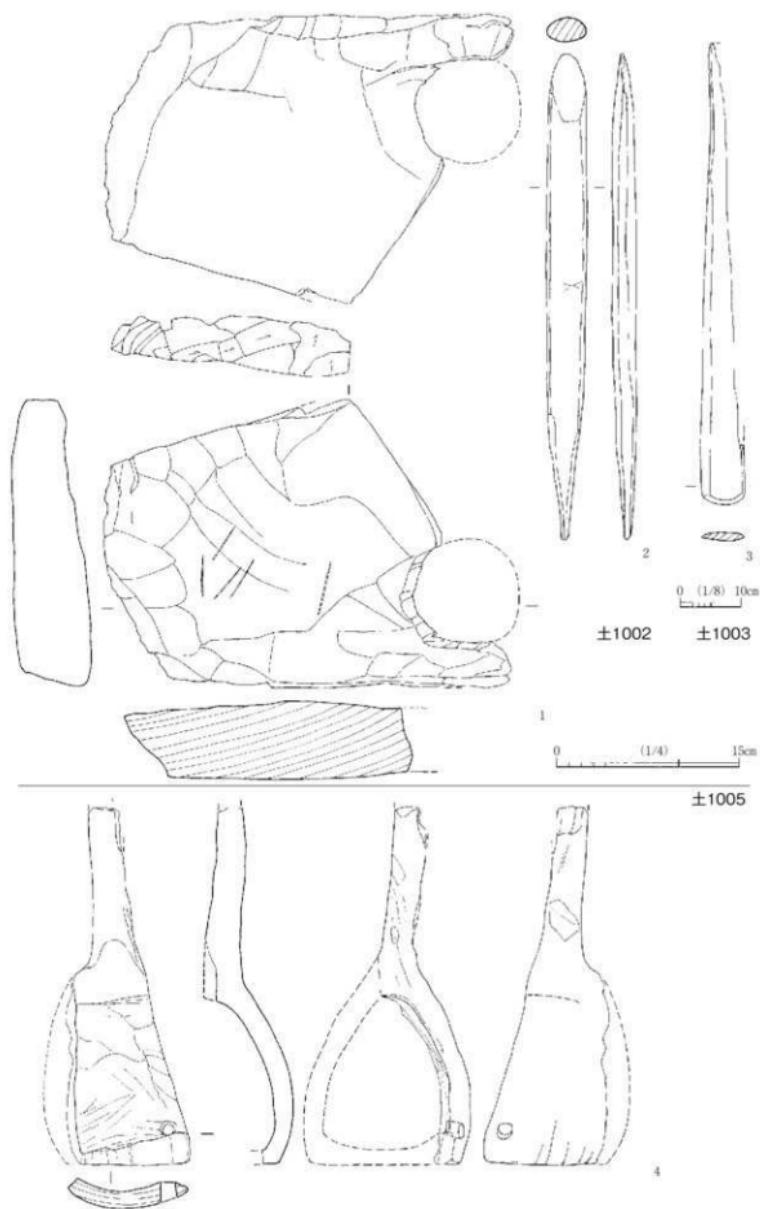
第 86 図 IV-C 区 1001 号土坑出土木製品実測図 (1/4)



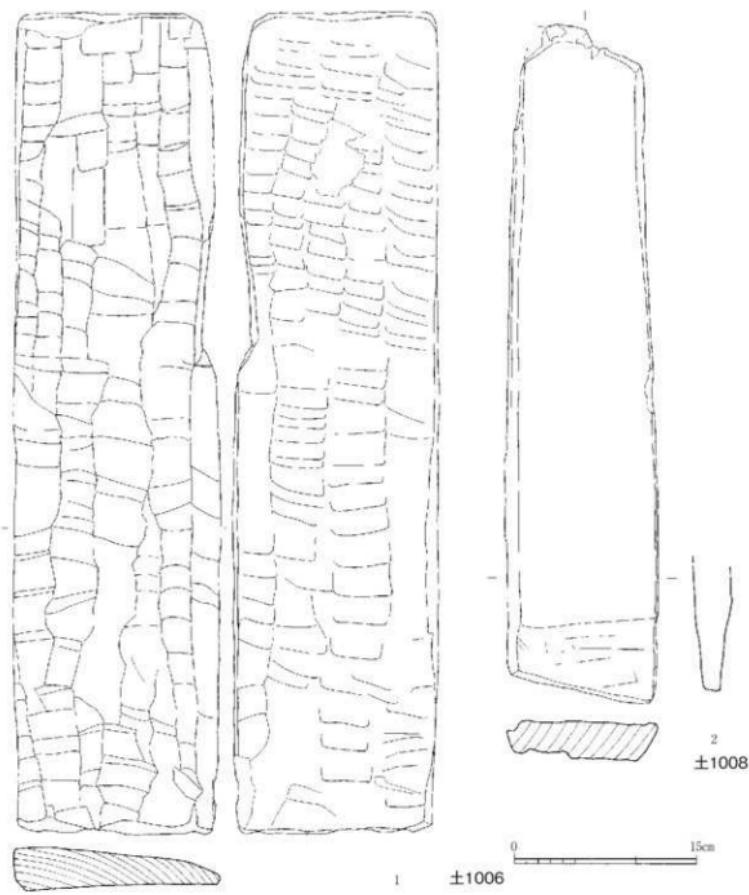
第87図 IV-C区1002号土坑出土木製品実測図① (1/4)

がある。2は下駄である。右用で、孔部分で破損する。比較的歯が高いまで遺存しており、あまり使用していないものと考えられる。3はねずみ返しである。中央の孔は $5.3 \times 6\text{ cm}$ で、大きな削り痕が全体的に見られる。

第87図1および第88図1～2は1002号土坑出土木製品である。第87図1、第88図1はねずみ返しである。同一個体だが接合できなかった。第87図1は孔部分で破損し、全面に削りが見られる。短軸方向に紐状の圧痕が連続して見られ、紐で卷いていた可能性がある。割れた断面にも同様の圧痕が認められることから、何らかの再利用をしようとしたものか。ただし、木材の性質である可能性もある。第88図1は2側面が残存する。剥落が著しく明確ではないものの、全面に削りを施していたものと考えられる。2は結界杭か。上端は丸く、細く仕上げられ、下端は杭状に尖る。中位に×字状の細い線刻が見られる。



第88図 IV-C区 1002②・1003・1005号土坑出土木製品実測図 (3は1/8、その他は1/4)



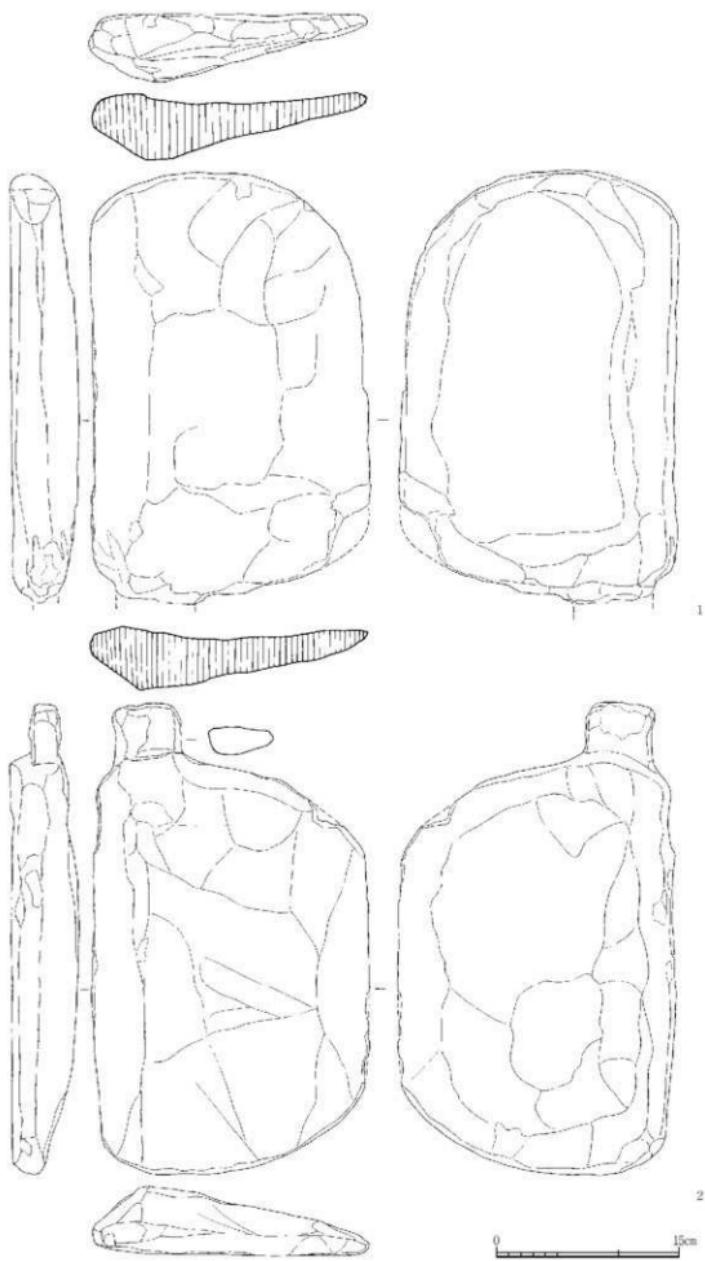
第89図 IV-C区1006・1008号土坑出土木製品実測図① (1/4)

第88図3は1003号土坑出土の板状施設器具材である。全体が薄く、表面を平滑に仕上げるが、墨痕等は見られず、上端の一部が炭化する。

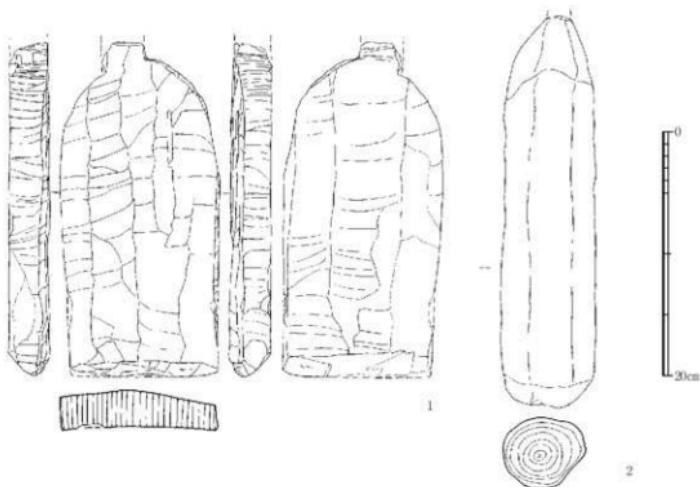
第88図4は1005号土坑出土の壺鐘である。破損しているものの、開口部は高さ12.5cm、幅5cm以上、奥行き9cm以上である。縁辺部に径1cmの孔が穿たれる。鞍へ接続するための棒状部が右方向に傾いており、左足用と考えられる。

第89図1は1006号土坑出土の板状施設器具材である。両面に細かなケズリを施す。側面の一部に浅い削り込みが見られるが、用途等は不明である。

第89図2、第90図は1008号土坑出土木製品である。第89図2は板状施設器具材で、下端部が細く削られる。差し込み式の部材と考えられる。第90図1・2は農具未製品である。出土時は2



第90図 IV-C区1008号土坑出土木製品実測図②(1/4)



第91図 IV-C区1009号土坑出土木製品実測図(1/4)

の突出部と1の割れ口で繋がっており、同一個体である。両面に粗い削りを施し、全面を整形している。泥除けなどの未製品と考えられる。

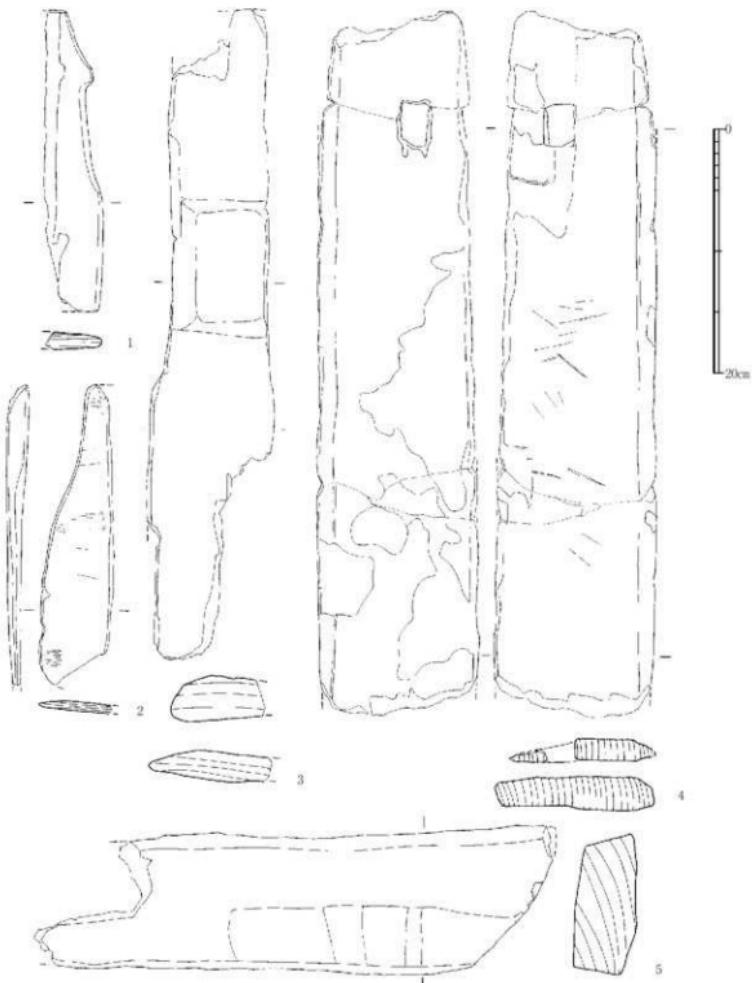
第91図は1009号土坑出土木製品である。1は農具未製品である。全面に細かい削りを施し、整形している。上端の突出部が欠損しているものの鍛の未製品と考えられる。2は柵である。状態が悪く明確ではないものの、下端は使用により潰れているものと考えられる。

第92図は1010号土坑出土木製品である。1・2は鍬である。1はナスピ形の鍬になるものと考えられる。下端が尖っておらず、未製品である可能性がある。2は上端部が厚く、下端ほど細くなる。横方向に緊縛痕状の痕跡が見られるが、先端付近にも認められる。3は梯子か。一部分が台状に厚くなるが、段差としては薄い。梯子であれば欠損していると考えられる。4・5は板状施設器具材である。4は上部の中央からややずれた位置に長方形の孔が穿たれる。左側面は幅2cmほどの範囲が薄く削られており、他の部材にはめ込むための加工の可能性がある。5は厚く、井戸枠の可能性がある。

第93図1は1011号土坑出土の鞍である。全面に丁寧な削りを施す。下から前側に抜ける軸通し孔が右3ヶ所、左1ヶ所残る。バランスから考えると左右ともに3ヶ所ずつあったものと考えられる。いくつか他に木片が出土しているが、明確な接合面は判別できなかった。

第93図2は1012号土坑出土の砧である。一本造りで、柄を含めた全面が丁寧に削られる。両面共に中央部が大きく凹む。左側面にもわずかに使用痕が認められる。表面先端近くには斜め方向の切断痕、凹み部には加工痕が見られ、再加工しながら利用していたものと考えられる。

第93図3～13は1014号土坑出土木製品である。3は鍛ないしは鍬か。側面に浅い抉り部が作り出され、表面には緊縛痕が見られる。4は刀形である。刃部・柄共に断面菱形で簡単に削りこむことによって作られる。5～8、11～13は棒状施設器具材である。5は両側を削って平坦面を作り出す。6は先端に抉りが作り出される。弓の端部の可能性がある。7・8は先端が細くなってお

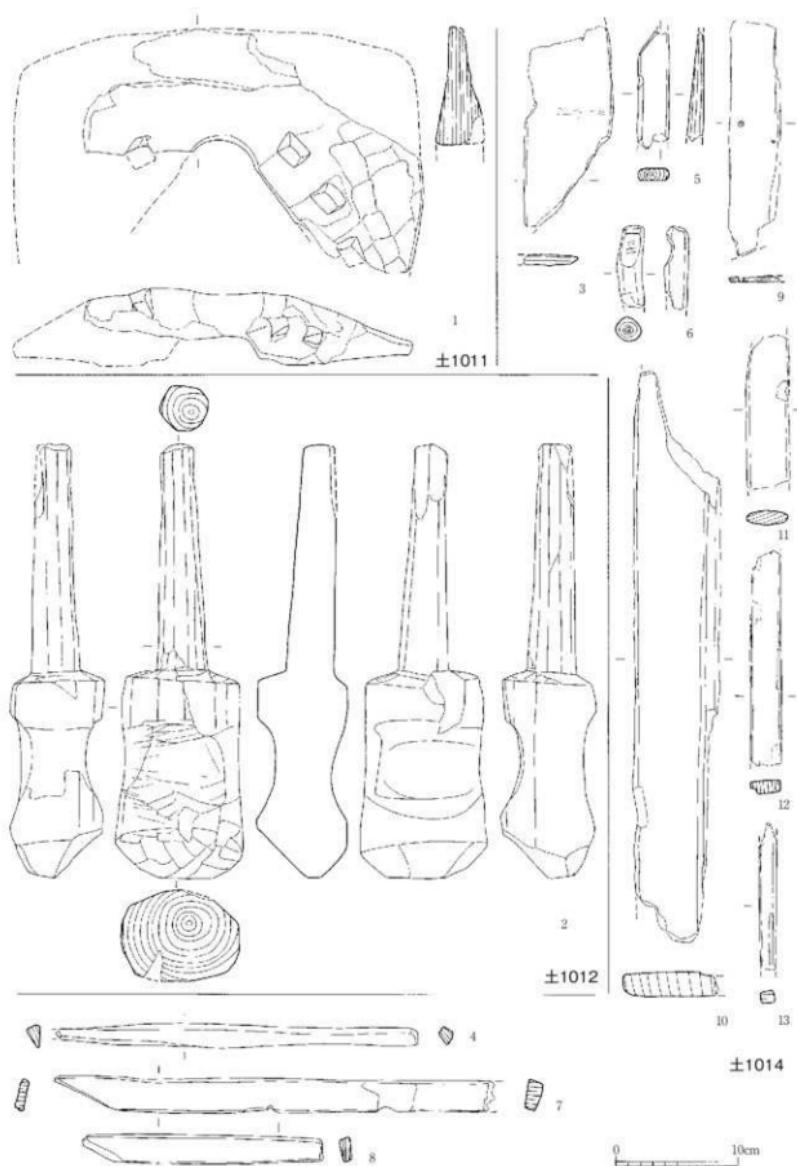


第92図 IV-C区1010号土坑出土木製品実測図(1/4)

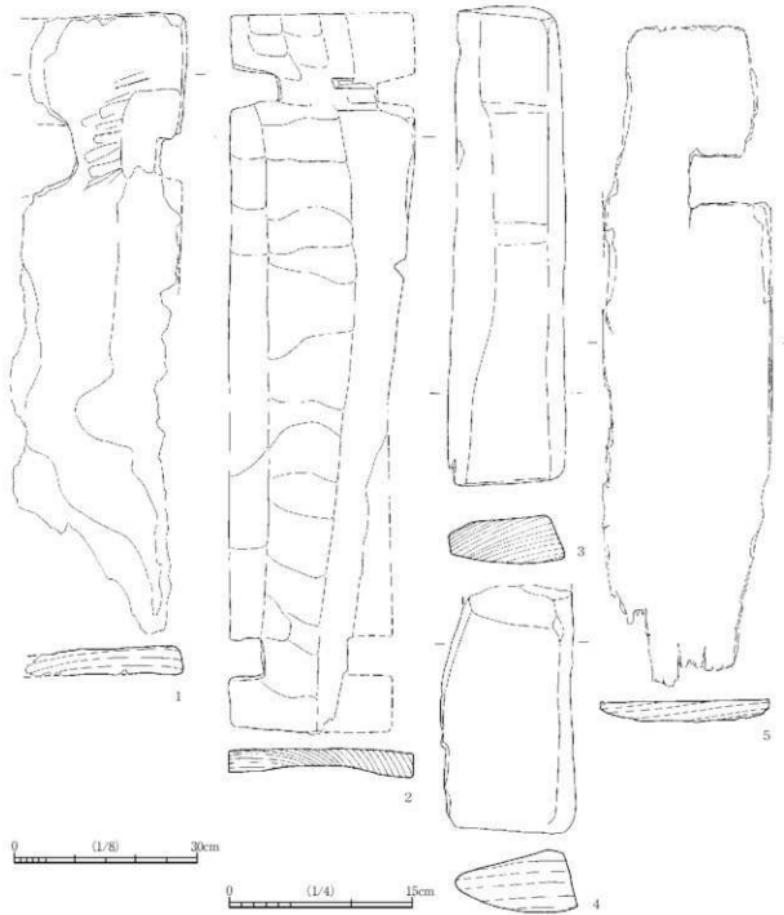
り、端部がやや薄くなる。ヘラ状製品になる可能性もある。12は側面の一部が炭化する。13は細く、箸か簪になる可能性がある。9・10は板状施設器具材である。9は2ヶ所に小さい孔が穿たれ、曲げ物板の可能性がある。10は右側縁にわずかに段が作られ、何らかの部材になる可能性がある。

第94～105図は1号井戸出土木製品である。第94～101図の3までは実際に発掘調査時に井戸枠を解体しながら取り上げていったものである。以下に組み上げられた井戸枠の上から順番に報告する。

第94図1は両側に切り込みが施され、片方のみが遺存する。2は両端部に、両側面から切り込



第93図 IV-C区 1011・1012・1014号土坑出土木製品実測図 (1/4)



第94図 IV-C区1号井戸出土木製品実測図① (3・4は1/4、その他は1/8)

みが施される。3・4は板状施設器具で、割り込みは見られない。5は片方の端部に、1ヶ所の割り込みのみが遺存している。第95図1は割れているものの割り込み部分が遺存する。2は上端に細い割り込みが上側にのみ彫られる。3は片面が欠損しているが、両側面から割り込みが施される。4は縦方向に半分欠損しており、両端部に割り込みが残る。5は両端部に両側面から割り込みが施される。第96図1・3は両端部に両側面から割り込みが施され、1の下端、右側は2段の割り込みとなる。表面も割りが明瞭に認められる。2は両端部に両側面から割り込みが施され、上部は板端部にも突出部を造り出す。

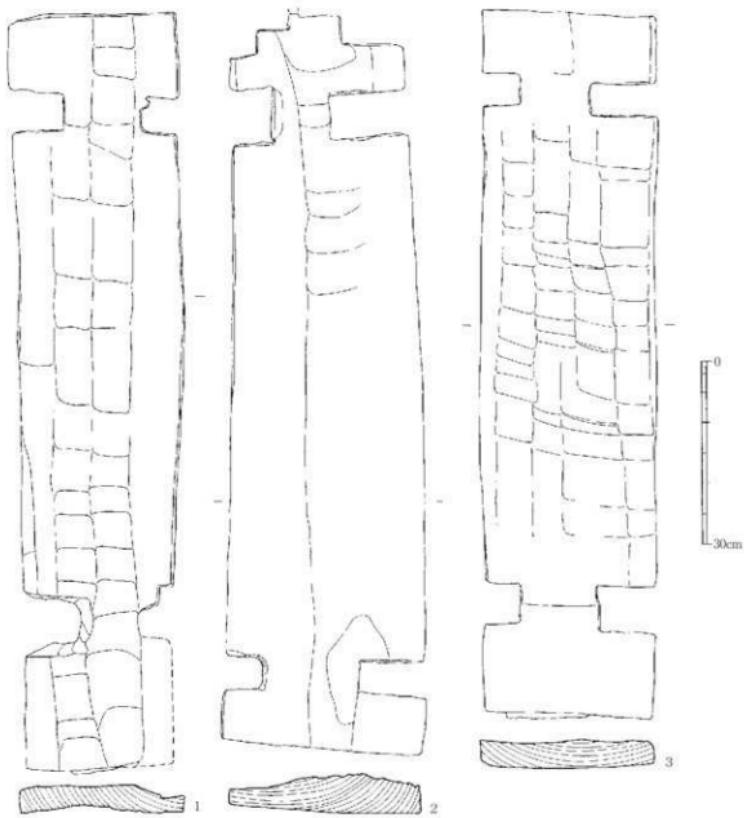
第97図1～4は両端部に両側面から割り込みが施される。2は下側の割り込みが幅広で、右側は2段の割り込みとなる。また、端部に僅かな段が造り出される。3は側縁部に樹皮が残存してお



第95図 IV-C区1号井戸出土木製品実測図② (1/8)

り、木材の周縁部を用い、中央部のみ加工したことがわかる。第98図1は腐食が著しいが、両端部に両側面から削り込みが施される。裏面に幅広い傷が見られるものの、腐食のため詳細は不明である。2は両端部が欠損し、削り込みは残らない。上位および中位に圧痕状の痕跡が認められるが、腐食が著しく、新旧は決定できない。3は板状を呈し、上端部がやや細く削られる。差し込み式となるか。4は板状を呈し、先端が細く削られており、表面には細長い圧痕状の痕跡が見られる。第99図1は両端部とともに両側面から2対の削り込みが施される。上端の右側はL字状に加工される。縁辺部にわずかに樹皮が認められる。2・3は両端部に両側面から削り込みが施される。共に加工痕が明瞭に認められる。第100図1～3は両端部に両側面から削り込みが施される。1は削り込みが斜めになる箇所で鋸による切断の際に付いたと考えられる段差が認められる。4は端部のみが遺存しており、両側面から削り込みが施される。出土位置的に3と同一個体の可能性があるが、削り込み部の幅が異なる。5・6は板状を呈し、5は端部が遺存する。削り込み等は確認できない。

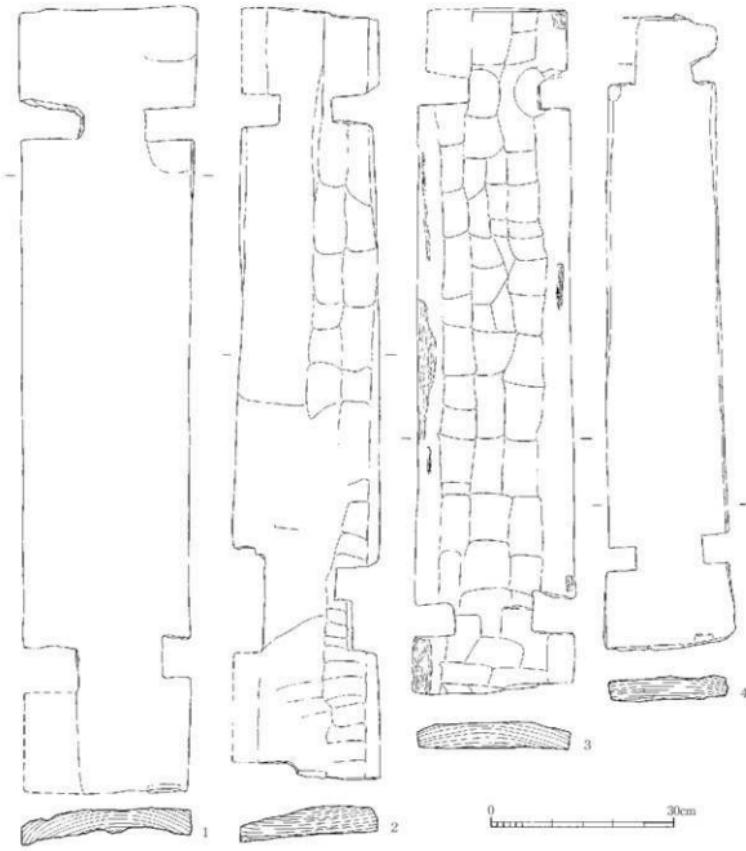
第101図1は両端部に両側面から削り込みを施す。2は両端部を突出部とし、下方には1ヶ所の



第96図 IV-C区1号井戸出土木製品実測図③(1/8)

み割り込みが施される。3は下方にのみ1ヶ所割り込みが残る。腐食が著しく加工痕等は確認できない。4・5は出土位置不明の井戸枠の一部である。共に端部が遺存しており、4は両側面から割り込み、5は突出部を造り出す。6～8および第102・103図は井戸枠ないしは井戸枠製作時の残材と考えられる板材である。6・7は端部に段差が見られ割り込み部分ないしは切断後の残材と考えられる。第102図2は上面の一部に切断痕が見られる。5は下端がL字状に加工されており、井戸枠の組み合わせ部と考えられる。6は上面に切断痕と考えられる段差が認められ、表面の半分ほどで樹皮が残る。8は両端部とともに切断痕と考えられる段差が認められる。

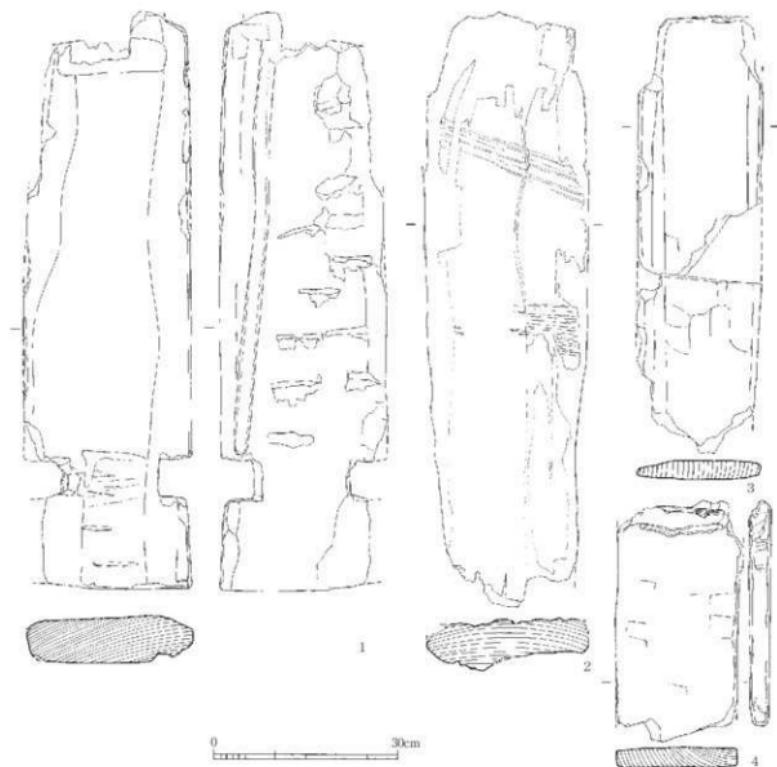
第103図1は上端部にL字状の加工が認められ、井戸枠の割り込み部と考えられる。2は表面の削りが明瞭に認められ、左側面はわずかに段差が付く。6は右端部がわずかに細くなってしまっており、表面にわずかに擦過痕が認められる。第104図および第105図1～7は板状施設器具材である。第104図1は表面が平坦となるものの裏面には段差が見られる。2・3は共に上端部にL字状の加工が1ヶ所のみ施される。井戸枠の可能性がある。4は腐食のため明確ではないものの、下端部左に



第97図 IV-C区1号井戸出土木製品実測図④(1/8)

突出部が造られ左側面部に抉りが施されるものと考えられる。8は細長い棒状を呈しており、井戸枠の支柱等の可能性が考えられる。第105図2は左側に直線的な圧痕が認められ、何らかの部材と組み合うものである可能性がある。3は中央左寄りに孔が穿たれる。何らかの部材の可能性もある。4・5は細長く、薄い板状を呈する。加工痕等は明確には見られなかった。6・7は孔が穿たれ、6は下端と側縁の2ヶ所、7は下端部に1ヶ所認められる。6は箱の可能性がある。8～11は曲げ物の側板である。曲がりをよくするための線状刻みが多数見られる。同一個体と考えられる。12は杭である。腐食のため加工痕は明確には認められない。13は編錐である。欠損するがリボン形になるものと考えられる。この他に、口部分に孔が横向きに穿たれた瓢箪の果皮が出土している。細片になっており図化できなかった。

検出された井戸枠の削り込み部は概ね角の一方が臍状に凹み、もう一方に僅かな突出部が認められることから、鋸で短軸に沿って臍を切った後、糸鋸状の工具を用いて長軸に沿って切断

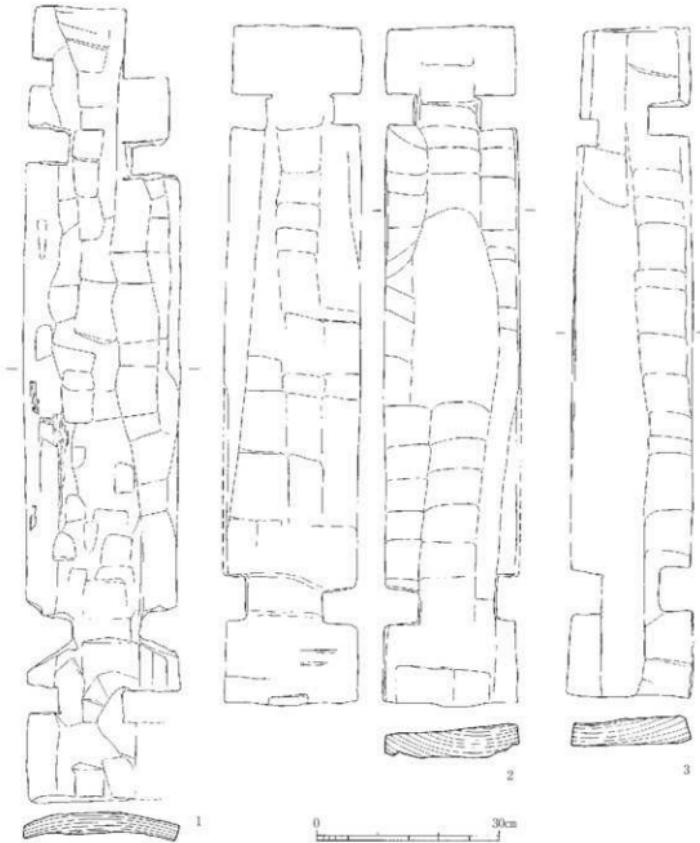


第98図 IV-C区1号井戸出土木製品実測図⑤(1/8)

し、最後の角部分は折り取ったという工程が想定される（城門）。

包含層出土木製品（図版38～43、第106～117図）

第106図1～3は楔か。1は細長く、鍵等を固定するものと考えられる。2・3は下端を削りによって尖らせる。刃こぼれ状の痕跡が見られるが、敲いた痕跡などは確認できない。4は木槌か。削りによって平坦面を作り出し、断面方形を呈する。5～7は砧である。5は一木造りで、柄を含めた全面が丁寧に削られる。両面中央が使用により凹み、擦過痕が見られる。6は柄が別作りの差込式である。加工痕や使用痕がほとんど認められない。未使用に近いものと考えられる。7は一木造りで、柄を含めた全面が丁寧に削られる。わずかに凹みと擦過痕が認められるが使用の頻度は少ないと考えられる。柄端が削りによってわずかに膨らみグリップ状を呈する。5・6も柄端部が欠損しているが、本来は同じくグリップ状をしていたものと考えられる。8は栓ないしは鍵等の楔か。中央に削りによって段差を作り出す。9は大足の一部である。方形孔と脇が彫られ、断面方形に仕上げる。10・11は大足の一部か。幅3～4cm前後の突出部が5ヶ所造り出される。接合しないものの同一個体と考えられる。12は大足の踏み板ないしは腰当か。端部が上がって舟形を呈す

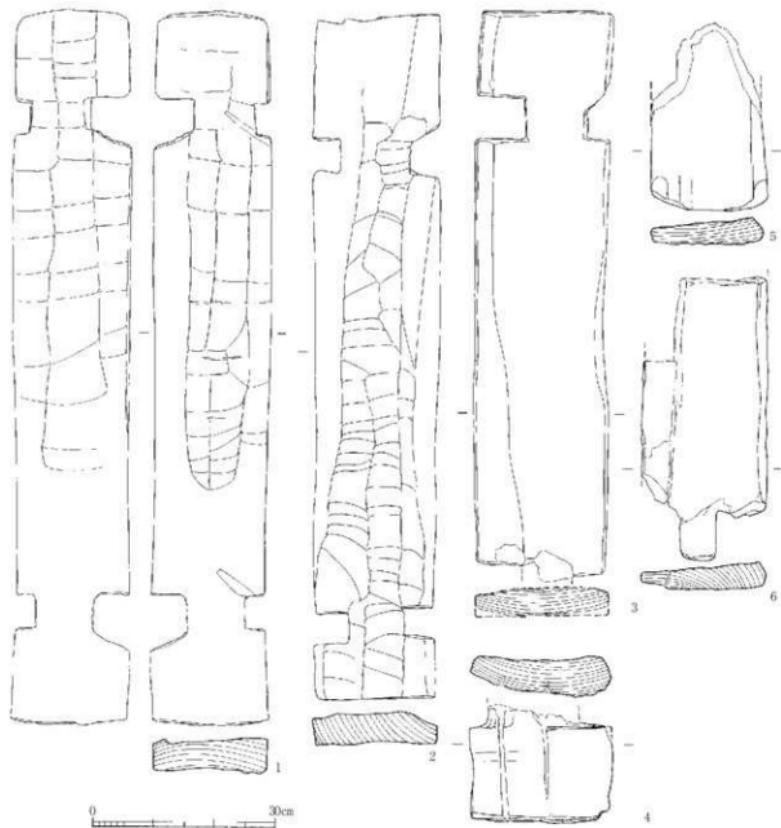


第99図 N-C区1号井戸出土木製品実測図⑥(1/8)

るものと考えられる。

第107図1は羽子板状木製品である。長方形の板に径2cm程の柄が付く。板部分の一部は炭化する。2・3は平鉤である。2は先端から9.5cmの位置で刃部にわずかな段が形成されており、幅2cm程の鉄製鉤先を装着して使用していたものと考えられる。3は中央部に方形の孔が穿たれる。欠損が著しいが2と同じく鉄製鉤先を装着していたものと考えられる。4は股鉤か。表面に緊縛痕が見られる。5・6は柄か。5は鉤の柄と考えられる。6は柄の端部で、先端が平面三角形状を呈する。7は杵である。腐食が著しく、加工痕・使用痕ともに確認できない。8は臼ないしは容器か。内面が内湾し、左側側面端部には平坦面が造り出される。

第108図1は輒か。両端に削りにより紐掛け用の抉りを造り出す。2は腰当である。中央部がわずかに凹んでおり、両側に紐掛け用の抉りを造り出す。緊縛痕は確認できなかった。3は糸巻きである。中央部が台形状に凹んでおり、両端部は細くなる。4~26は編錐である。平面形は4~16

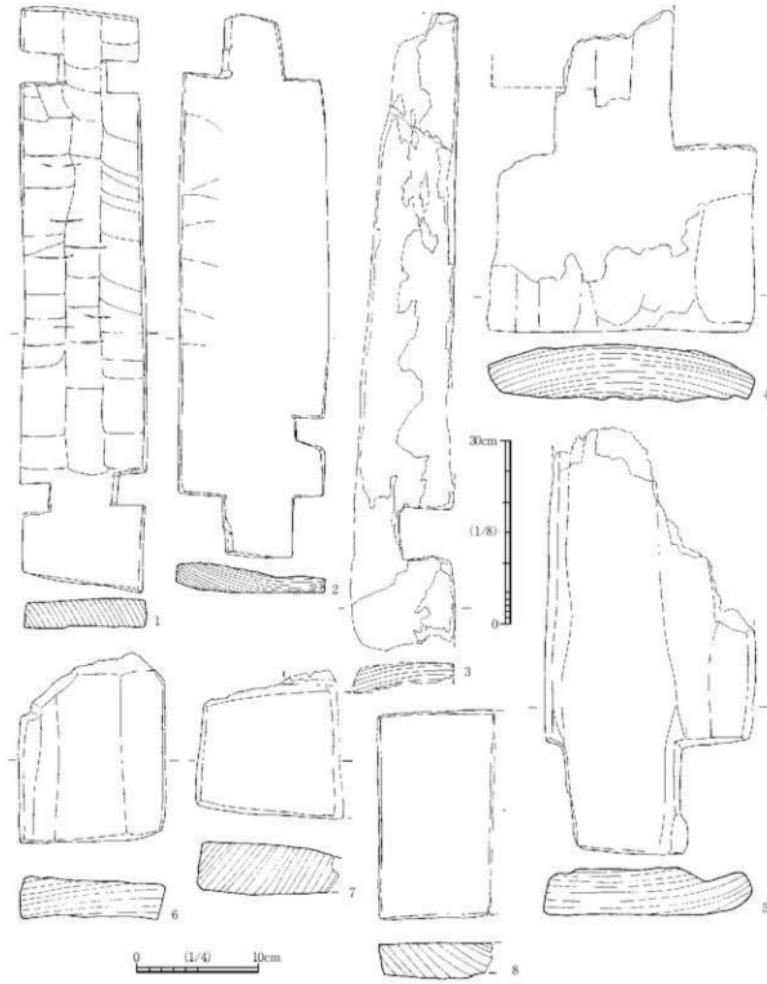


第100図 IV-C区1号井戸出土木製品実測図⑦ (1/8)

はリボン形、17～24は細長いリボン形、25・26はダンベル形を呈する。いずれも抉り部を中心として削りが施され、25・26のくびれ部には細かい削り痕跡が残る。この他にも、図化していないものの編錘の小破片が多数出土している。

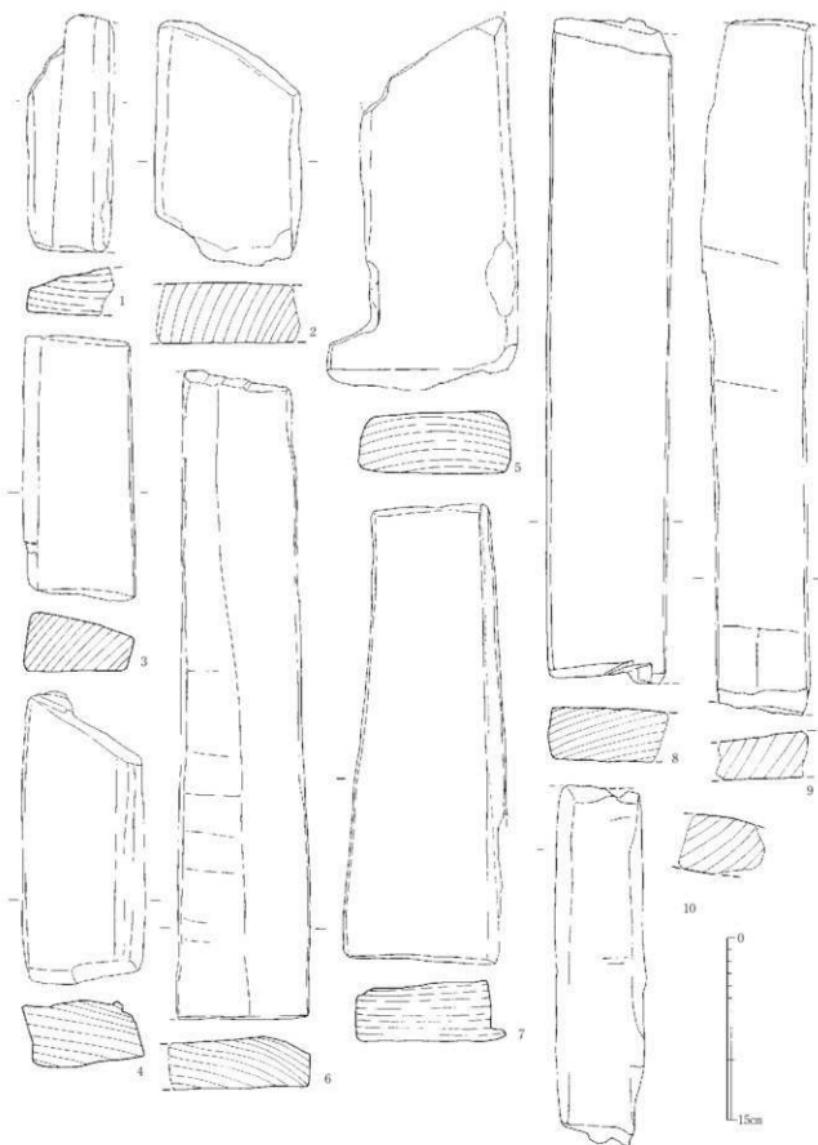
第109図1は鞍か。組み合わせ式の上面部になるものと考えられる。表面には黒漆が残存しており、全面に塗布されていたものと考えられる。2・3は鞍である。2は下から前側に抜ける鞍通し孔が2ヶ所残り、その外側には脇が左側に2ヶ所彫りこまれる。他に小破片があるものの明確な接合面は確認できなかった。3は下から前側に抜ける鞍通し孔が左右共に3ヶ所残る。洲浜方は抉りが小さい。表面に黒漆が塗布されており、一部には刷毛の一部と見られる繊維が付着している(第122図、IV-3で後述)。

第110図1は盤か。明確ではないものの全体に削りの痕跡が見られ、内面が緩やかに内湾する。2は槽である。全面に細かい削りを施し、平面六角形の脚部が2ヶ所残存する。内側は丁寧な削り

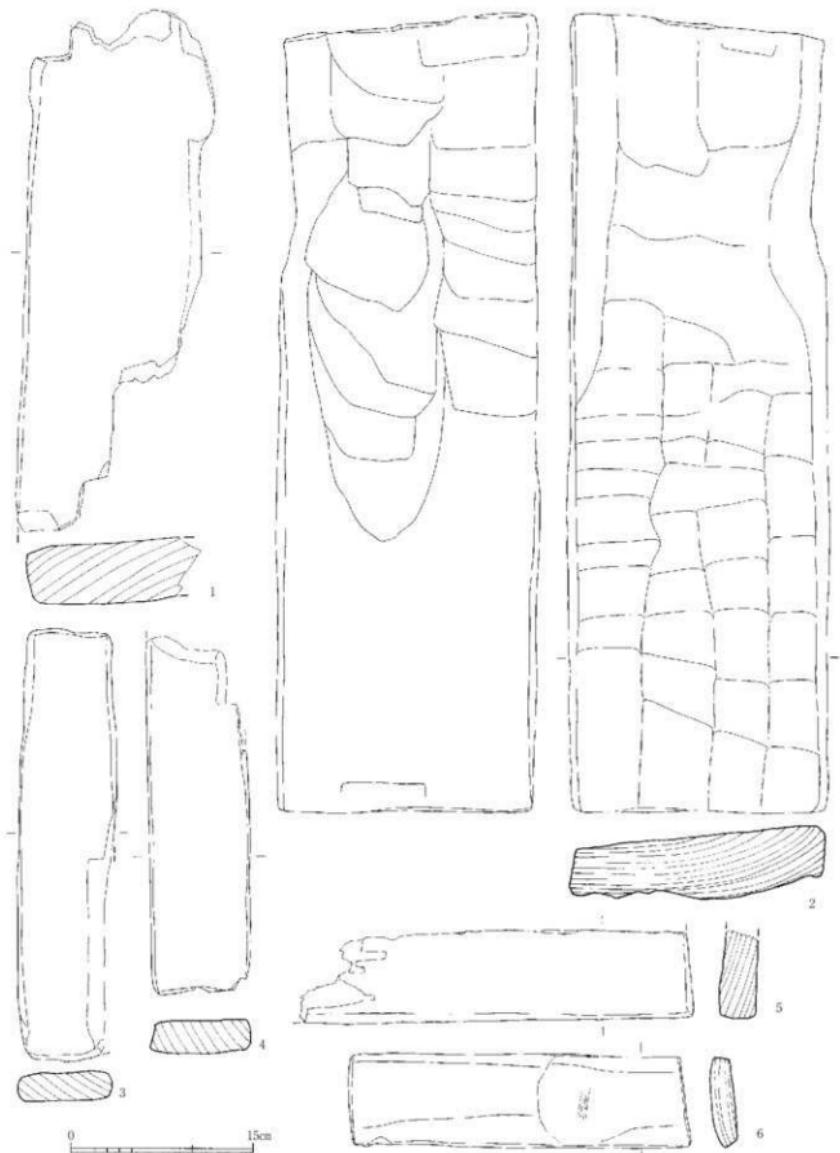


第101図 IV-C区1号井戸出土木製品実測図⑧ (1~3は1/8、その他は1/4)

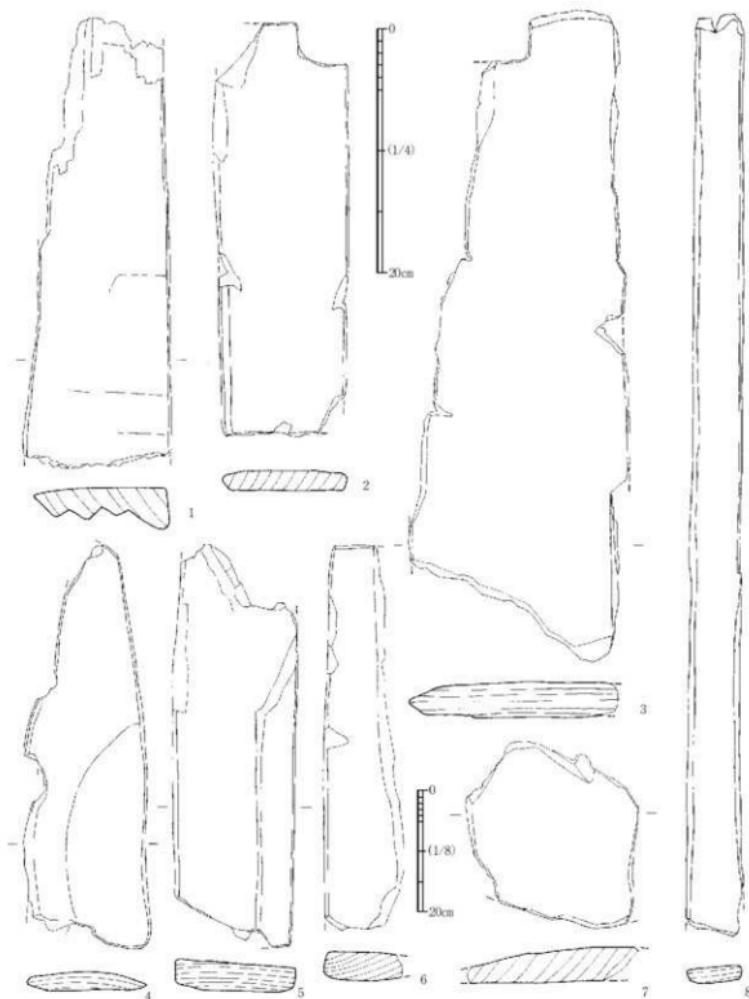
により2cm程凹む。3~13および第111図1~3は曲げ物板である。3~9は底板である。3は立板を固定するための孔が2対残存し、立板の痕跡が残る。裏面は擦過痕が見られる。4は上側に木釘が1ヶ所残存し、わずかに擦過痕が見られる。6は4ヶ所に立板を固定するための孔が見られ、1ヶ所には樹皮の紐が残存している。周縁部は幅5mm、高さ2mmほど薄くなつており、立板を設置するためのものと考えられる。裏面には擦過痕が多数見られる。7は立板を固定するための孔が2対残存し、1ヶ所に樹皮の紐が残存している。組み合わせ式の底板と考えられ、綴じ合わせのための孔が側縁に1つ残存する。立板の痕跡が見られ、裏面には擦過痕が見られる。8・9は同一



第102図 IV-C区1号井戸出土木製品実測図⑨ (1/4)

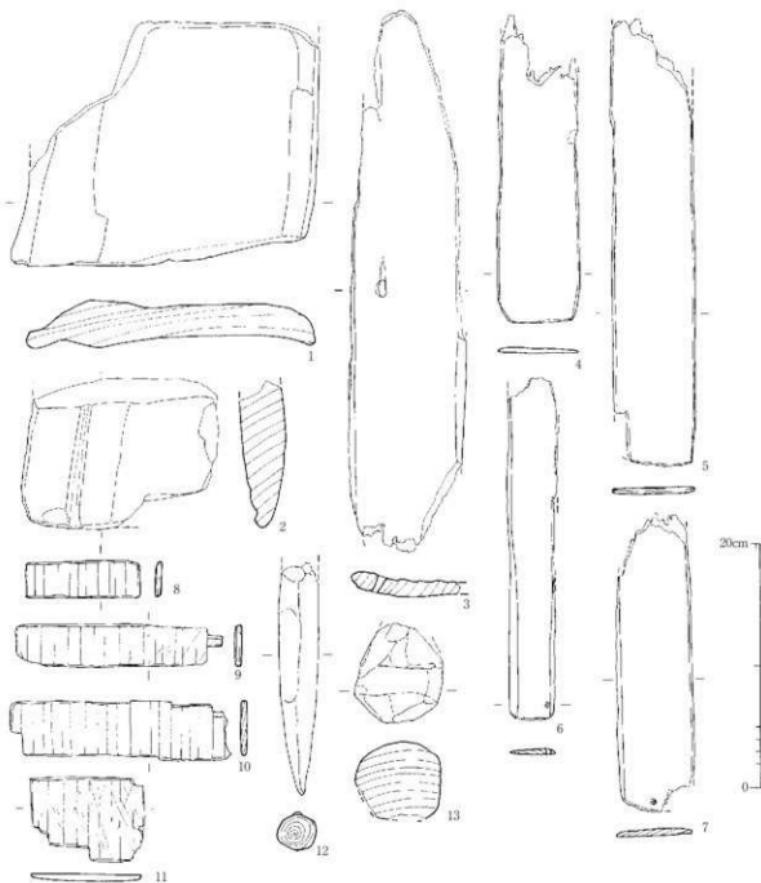


第103図 IV-C区1号井戸出土木製品実測図⑩ (1/4)



第104図 IV-C区1号井戸出土木製品実測図⑪ (4~6は1/8、その他は1/4)

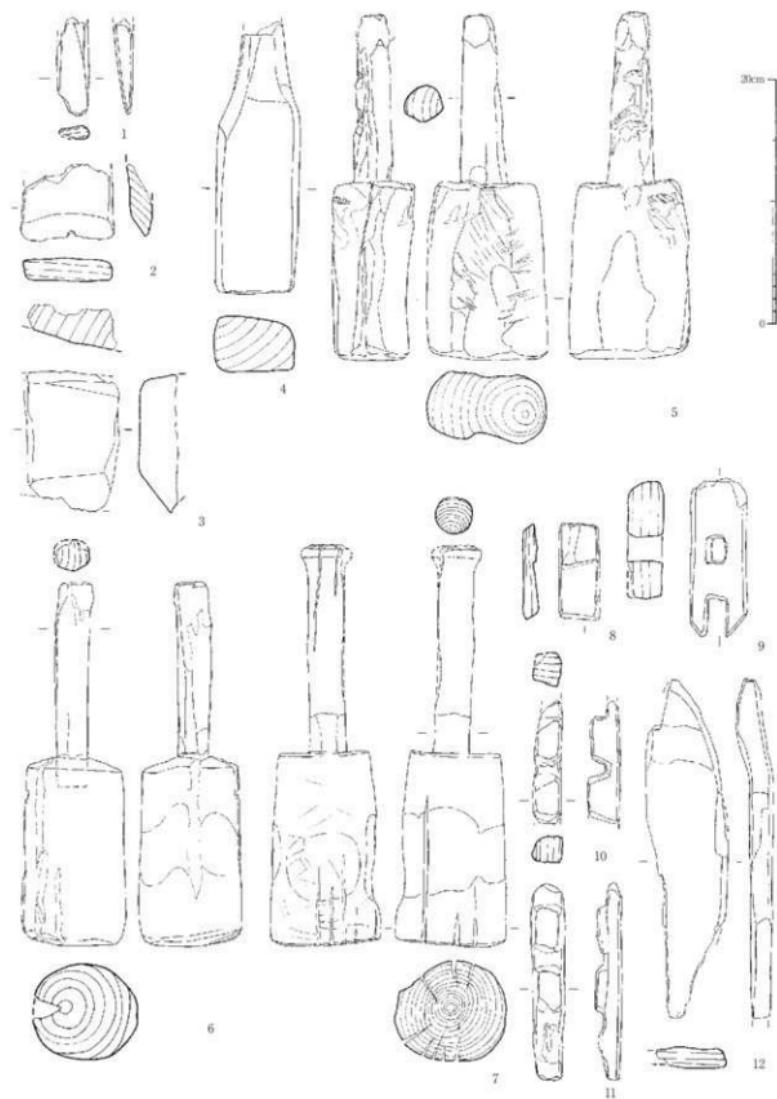
個体である。立板を固定するための孔が3対残存し、いずれも樹皮の紐が残存している。周縁がわずかに薄くなっている。立板を設置するためのものと考えられる。裏面には擦過痕が見られる。10~13は大形曲げ物の板である。いずれも1対の孔が見られ、10のみ樹皮の紐が残存する。13は孔が斜めに穿たれた。第111図1~3は周縁部が薄くなり、1には孔が1ヶ所に穿たれる。3の一部は炭化する。蓋か。4~10は小片の曲げ物板である。6は周縁部が薄くなり、底板と考えられる。8は孔が1対穿たれた。10は大形曲げ物の板か。11~12は転び箱である。11は1ヶ所に孔が穿たれた。



第105図 IV-C区1号井戸出土木製品実測図② (1/4)

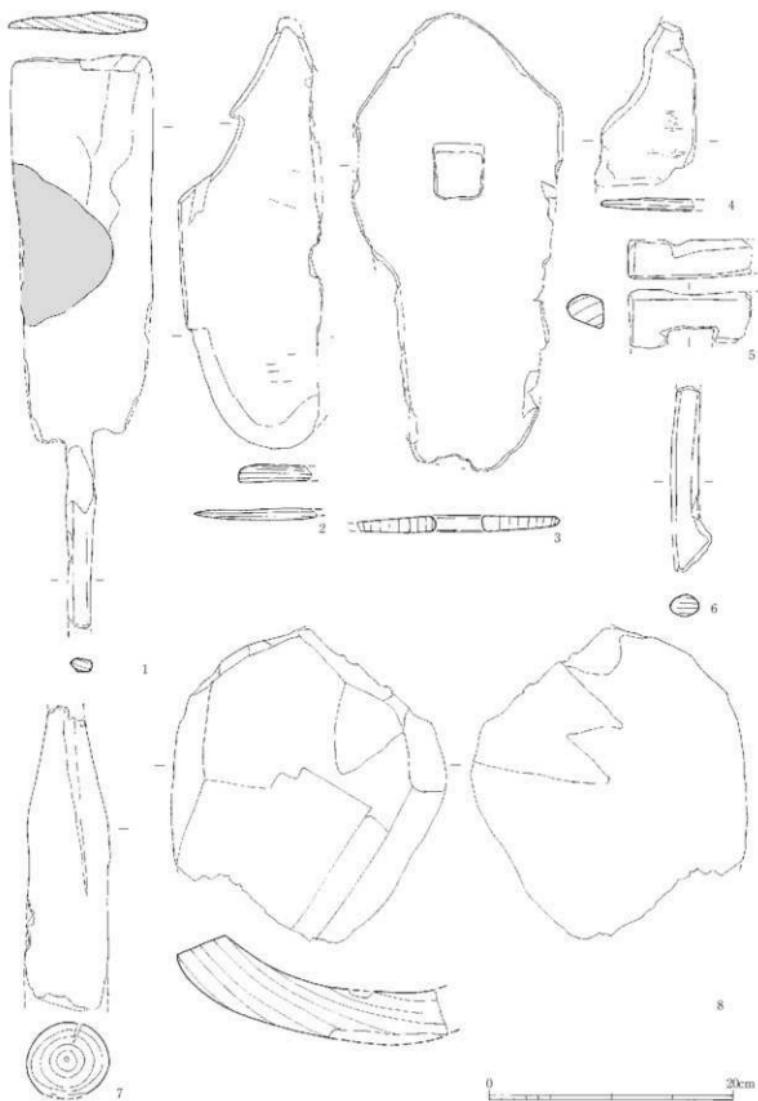
第112図1～5は燃えさしである。棒状木材の端部が炭化する。6～9は人形である。6は抉りを入れることで上端を丸くし、中央に孔が穿たれる。7は削り込みを入れ頭部を多角形状に仕上げる。8は平面八角形を呈する。9は上半が平面円形、下半が中位に抉りを入れて8字形を呈する。赤外線写真を撮影したが、いずれも墨痕等は認められなかった。

10～12は馬形か。10は丁寧に削られており、下部中央付近には下から棒状のものを差込むための勝が作られる。11は大きく欠損するが、鞍部分が残存しているものと考えられる。12は頭部を欠損するが、中央に鞍を表現したと考えられる突出部が遺存する。13は鳥形か。鳥ないしは馬形になる可能性がある。14は舟形である。細長く棒状を呈しており、舳先部分は細く仕上げる。15は剣ないしは槍形か。下位に縛縛痕が見られる。16は形代か。抉りが2ヶ所に造り出され、下端

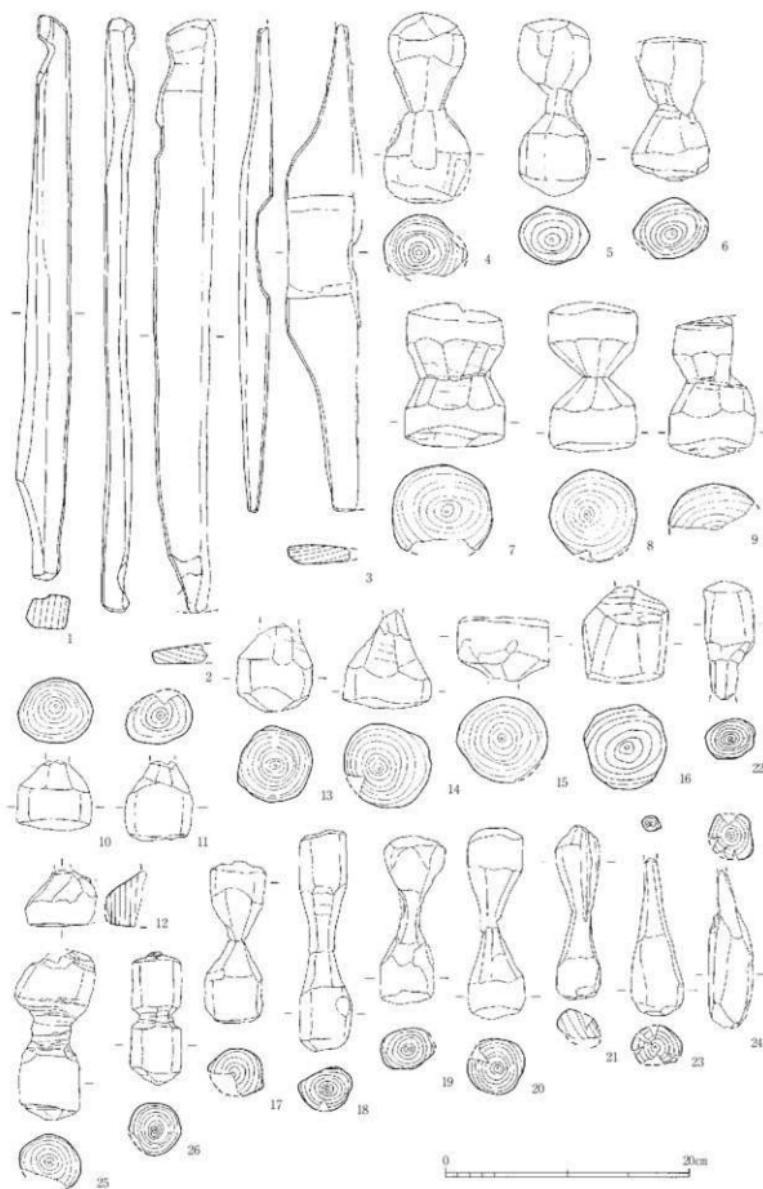


第 106 図 IV-C 区包含層出土木製品実測図① (1/4)

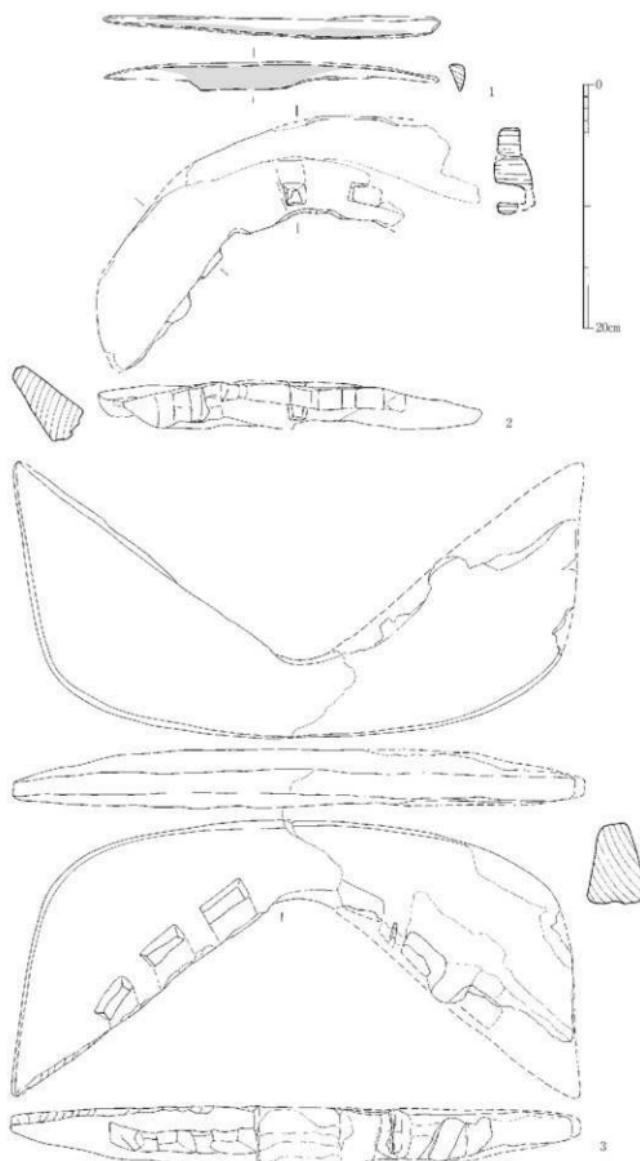
を細く仕上げる。側面の上位付近に深さ 3 mm 程の穴が穿たれる。17 は盾である。径 2 mm 程の孔が連続して穿たれ 5 列残存する。18 は衣笠の鏡板である。骨が入る孔が 9ヶ所に穿たれており、1 つには内部に径 2 mm 弱の木質が遺存している。



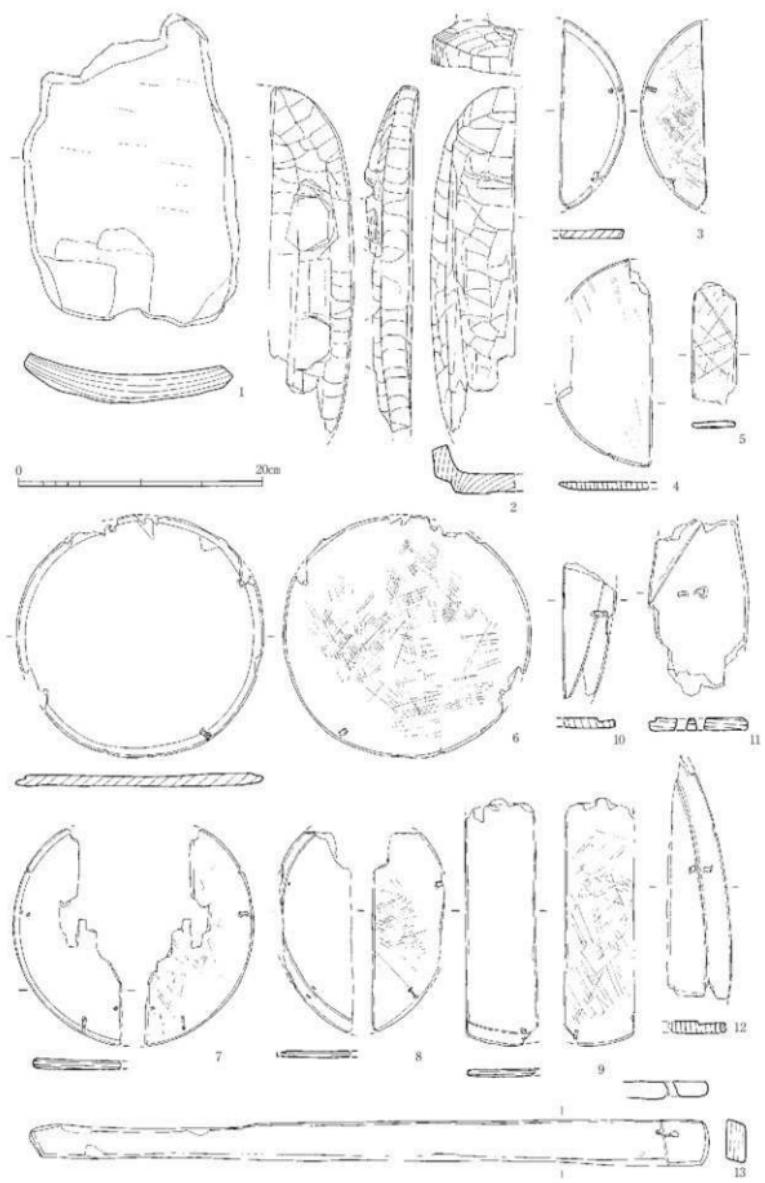
第 107 図 IV-C 区包含層出土木製品実測図② (1/4)



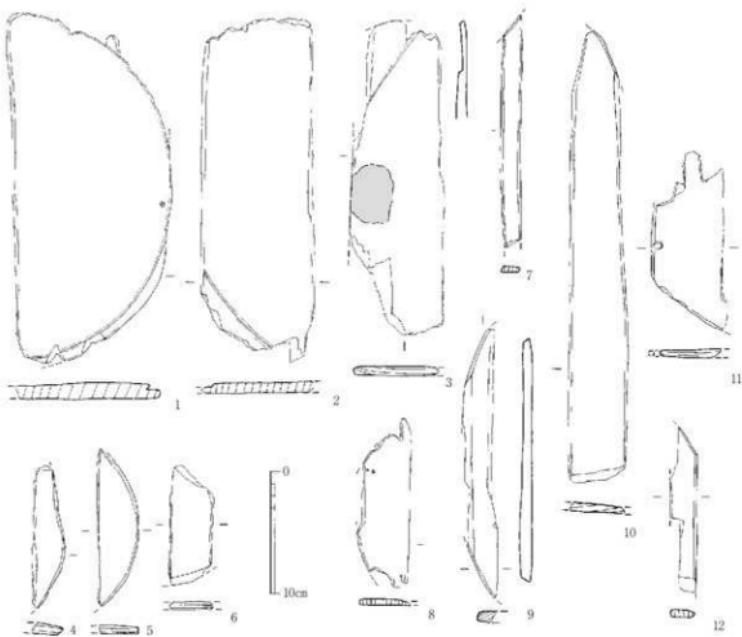
第 108 図 IV-C 区包含層出土木製品実測図③ (1/4)



第109図 IV-C区包含層出土木製品実測図④ (1/4)



第110図 IV-C区包含層出土木製品実測図⑤ (1/4)

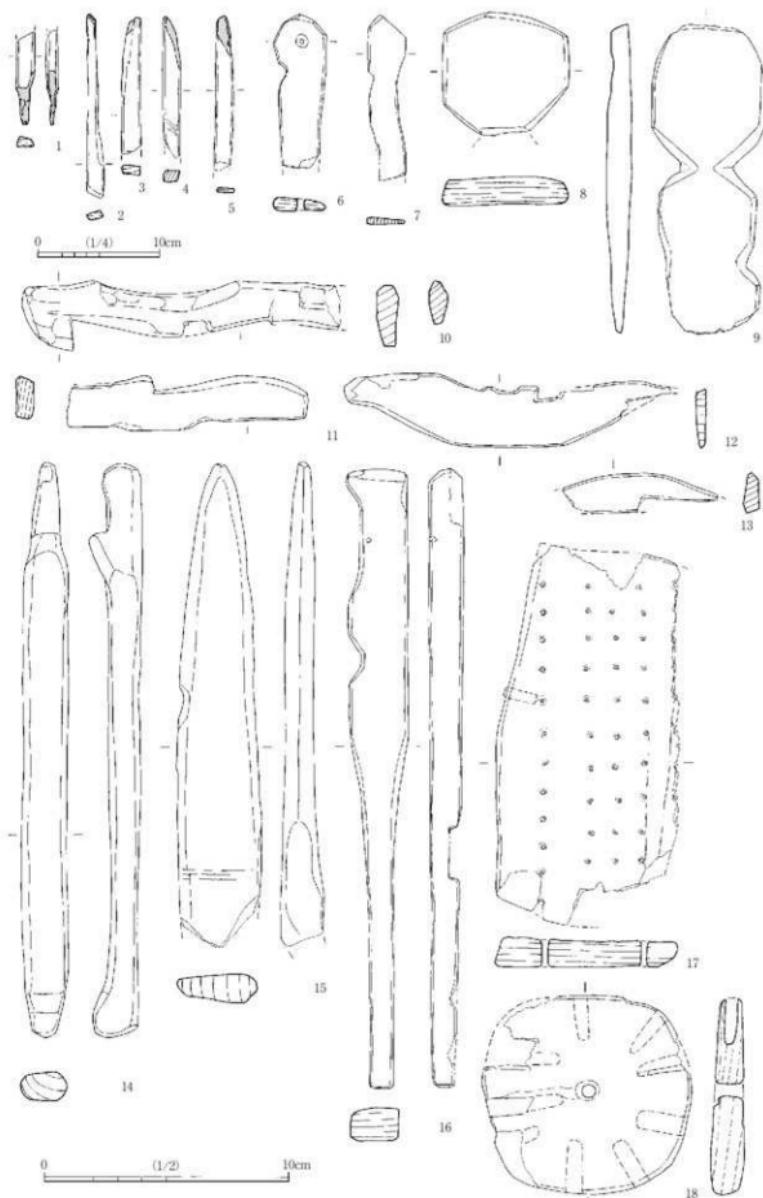


第111図 IV-C区包含層出土木製品実測図⑥ (1/4)

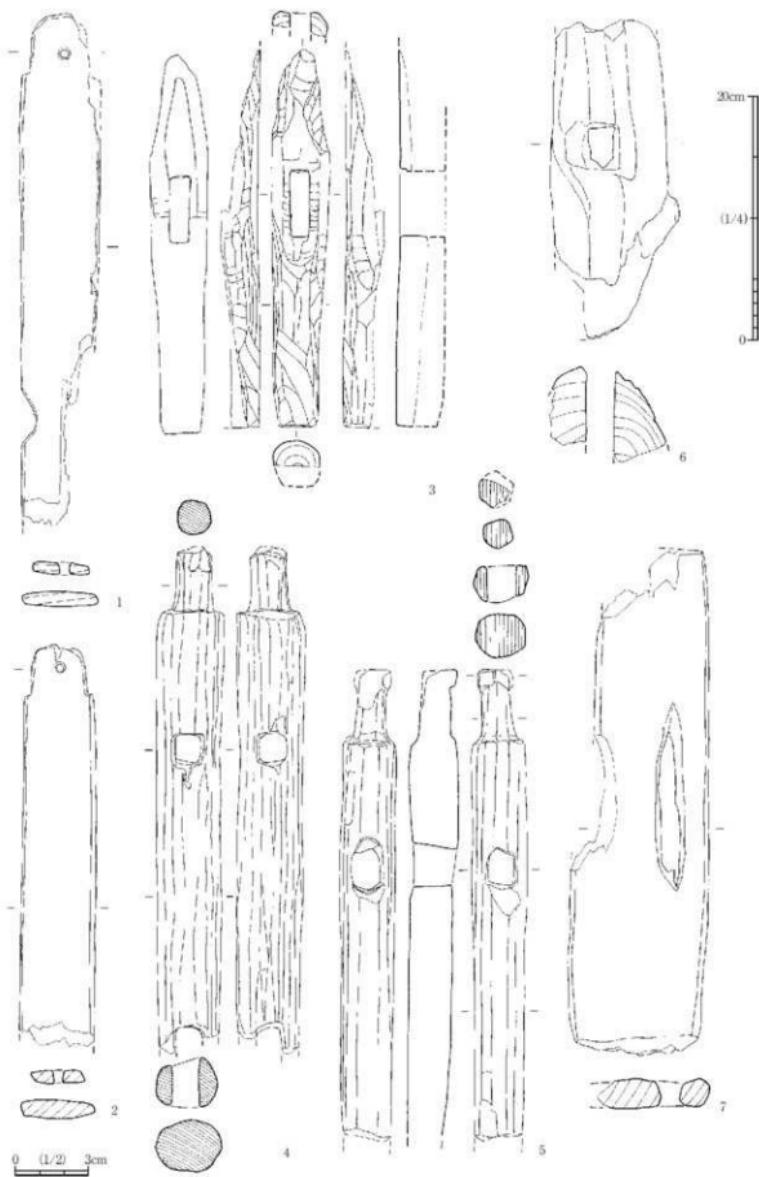
第113図1・2は荷札である。上端部が細くなつておき、中央に孔が穿たれる。1は下位に挟りが施される。3は部材である。全体に細かい削りを施し、中央には長方形の孔を穿つ。裏面には孔に直行する溝が切られており、圧痕が見られる。何らかの別の部材と組み合うものと考えられる。4・5は部材である。上端が細く仕上げられ、5は端部が膨らむ。4は2ヶ所、5は1ヶ所の方形孔が穿たれる。6は部材である。中央に方形の孔が穿たれ、他の部材の差込口と考えられる。7は扉か。側縁部に長い孔が穿たれ、把手として使用したないしは把手がつけられていた可能性がある。

第114図1・2はねずみ返しである。出土時には接合していたものの、明確に接合していなかつたため、別に実測している。中央に方形の孔が穿たれる。表面は腐食のため加工痕が見えづらい。3は台状木製品である。内面は上げ底状を呈し、外は台形を呈する。たたりの台などの可能性がある。

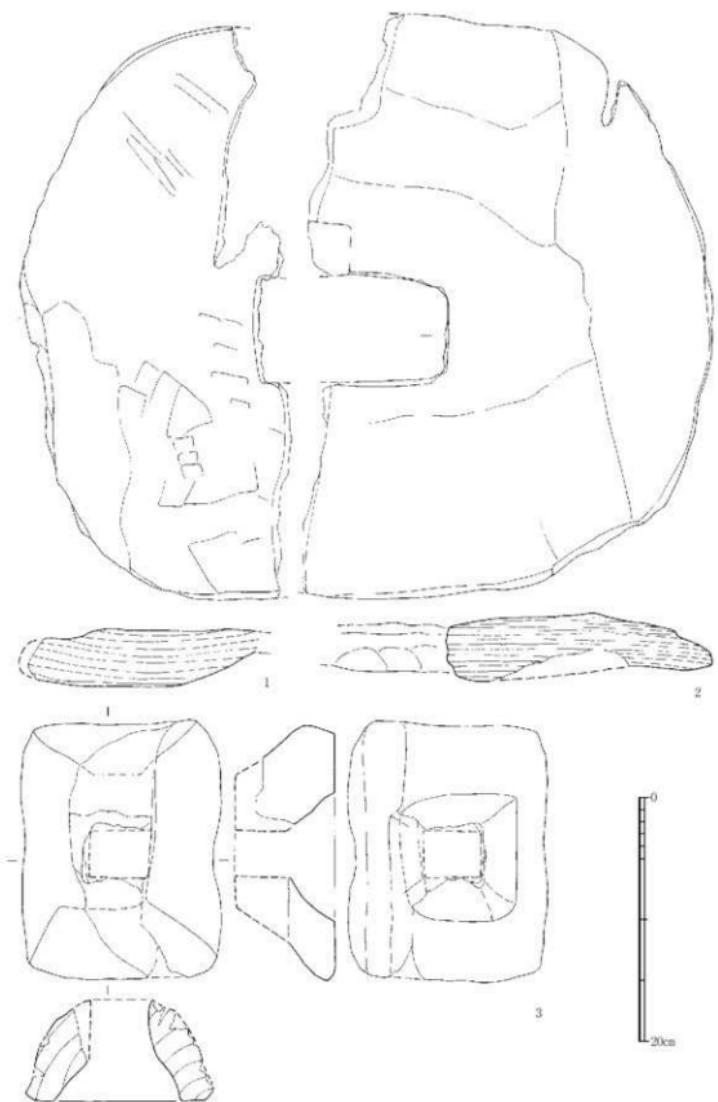
第115図および第116図1～12は板状施設器具材である。第115図5は平面長六角形を呈し、大足などの可能性があるが、中央が薄くなるなどの特徴が見られない。6は上半が細くなり両面は平滑に薄く仕上げる。札などの可能性がある。7・8は割り込みが施され、何らかの部材になるか。9は下半が屈曲する。容器などになる可能性がある。上端部付近がわずかに炭化する。10は加工台か。四角形の板に細い突出部が付く。11は表面にわずかに擦過痕が認められる。16は下端が残存しており、鍬等の可能性がある。第116図1～5は厚く、井戸枠の一部ないしは井戸枠製作の際の残材か。4は両側に凹みが見られ、他の材の圧痕の可能性がある。6は井戸枠の残材か。下面に切断痕が見られる。7は残材である。上面に切断痕が見られ、鍬等の製作時の残材の可能性が



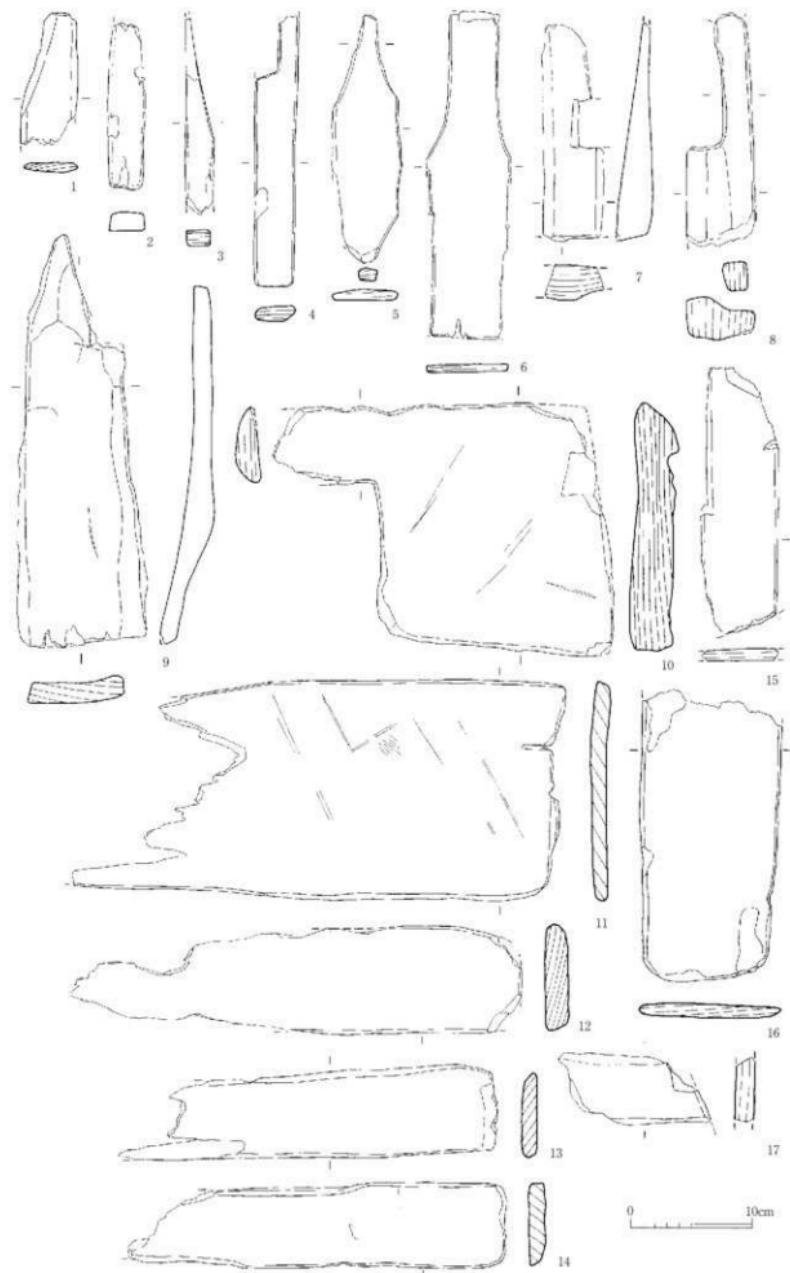
第112図 IV-C区包含層出土木製品実測図⑦ (1~5は1/4、その他は1/2)



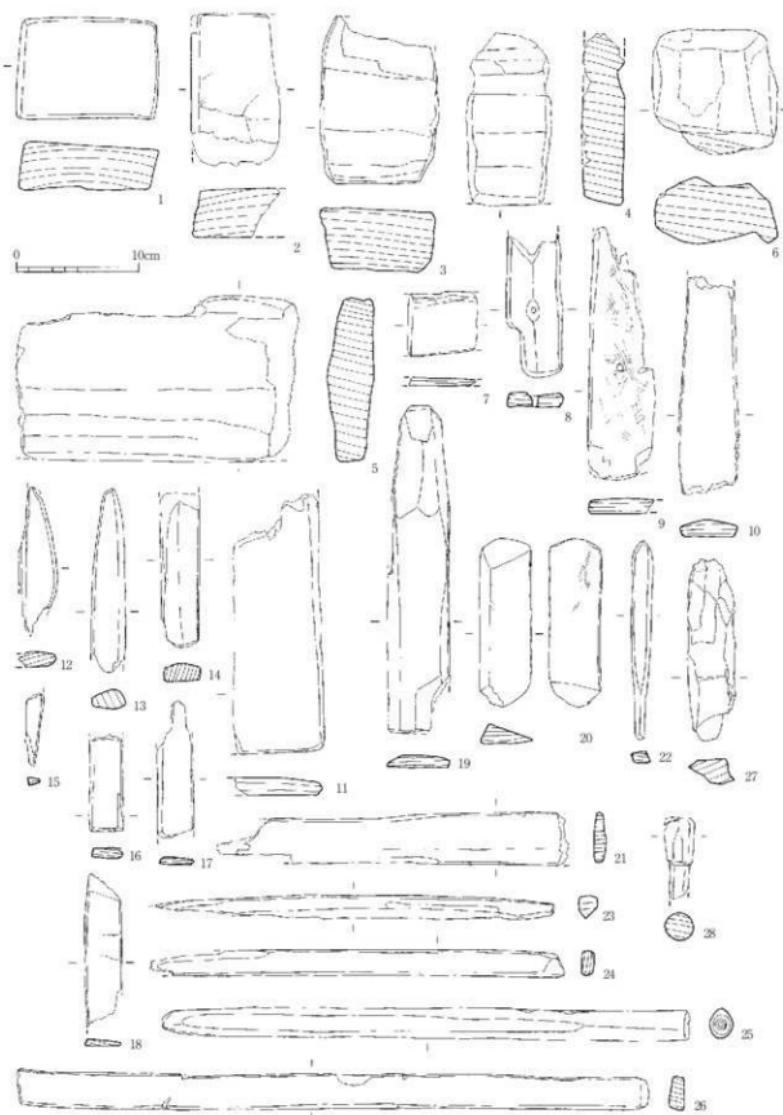
第113図 IV-C区包含層出土木製品実測図⑧ (1・2は1/2、その他は1/4)



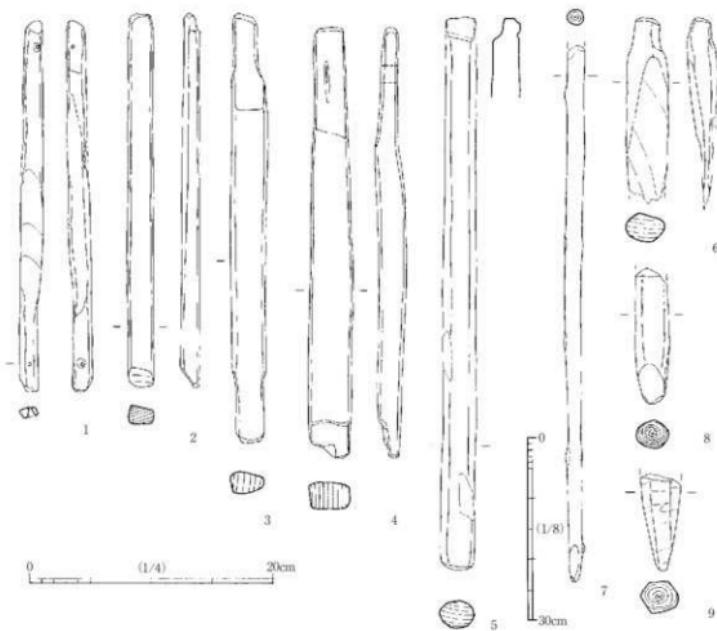
第 114 図 IV-C 区包含層出土木製品実測図⑨ (1/4)



第115図 IV-C区包含層出土木製品実測図⑩ (1/4)



第116図 IV-C区包含層出土木製品実測図⑪ (1/4)



第117図 IV-C区包含層出土木製品実測図⑫ (7は1/8、その他は1/4)

ある。8～21は板・棒状施設器具材である。8・9は中央に孔が穿たれる。8は側面に段が造り出され、部材の可能性がある。9は表面に擦過痕が認められる。11は両面を平滑にしており、表面にはわずかに擦過痕が認められる。12～21は細長い板・棒状を呈する。12は側面が弧状を呈し、農具や容器、形代等の可能性がある。18は先端を斜めに削り、ヘラ状を呈する。19は両面を丁寧に削っており、先端がわずかに細くなる。20は断面三角形を呈し、両端を斜めに削ることで尖らせる。

第116図22～26、第117図は棒状の施設器具材である。22は下端が細長い柄状を呈する。23は先端が尖り、24は両面を削りにより平坦にする。25は先端がやや細く、丸くなつており、鉛等の柄の可能性がある。27は削りにより3つの面を造り出すものの、破損しており、詳細は不明である。28は端部が太くなつており、ゆはずや栓等の可能性がある。第117図1は両端部に孔が穿たれており、上端は表から、下端は裏からそれぞれ穿孔する。2は端部を削りにより薄くしており、差込式の部材の可能性がある。3は両端を細くしており、差込式の部材ないしは織機などの可能性が考えられる。4は下端を削り



文中写真20 包含層木製品出土状況(南から)



第118図 IV-C区出土木簡類実測図(1/2)

により薄くしており、上端付近には細長い孔が穿たれる。孔部分には鉄板等が嵌っていた可能性がある。5は上端部を削りにより薄くしている。6は杭ないしは楔か。1ヶ所を削って先端を尖らせる。7～9は杭である。7は先端のみ1ヶ所削り尖らせる。表面は枝を落としたのみの簡単な造りである。8は先端を4ヶ所、9は先端の円周4分の3ほどを4ヶ所削ることで尖らせる(城門)。

出土木簡類(巻頭図版5、図版43・44、第118図)

出土した木簡および札についてまとめて報告する。墨痕が確認されたものに関しては木簡、その他については札として報告する。文字の解釈については(10)で別に報告し、ここでは形態などについて報告する。また、この他にも薄い板状の木は出土しているが、遺構出土のものや削りが丁寧

なものののみ図化している。特に 1009 号土坑では同様の木片が多数出土しており、木簡の削りカスないしは木簡自体の廃棄所であった可能性が考えられる。

1～5 は包含層、6～9 は 1009 号土坑出土である。1・2 は札である。2 はわずかに擦痕がみられる。いずれも墨痕等は認められなかった。3～9 は木簡である。3 は片面に墨書が見られ、下端はやや細くなる。他に墨痕のある破片が出土しているが、明確な接合位置が確認できなかつた。4 は両面に削りを施して平滑にし、表面にのみ墨書が見られる。上端は平面四角形、下端は三角形状を呈する。5 は片面に 2 列の墨書が見られる。6～9 は木片でわずかに墨痕が見られる（城門）。

(10) 木簡釈文

IV-C 区

木簡状木製品が計 9 点出土した。内訳は文字が判読できる木簡が 3 点、墨痕が認められるが、判読できないものが 5 点、墨痕がないものが 1 点である。118-4 が包含層（吉国 451 トレンチ）から出土した以外は、包含層（吉国 452 東側トレンチ 淡黒褐灰土）から出土した。

118-3 戸川マ嶋山 九斗 天平六年十月十八日 (221)・(19)・7 6081

上下両端折れ、左右両辺割れ。旧稿では 2 点の木簡として報告した⁽¹⁾。その際、同一個体であることを予測していたが、その後の保存処置の際に接続することが判明し、これによって折れていた部分にかかっている 2 文字が「九斗」と判読できた。本来の形は不明だが、人名と日付が記されていることから、荷札の一部であった可能性がある。天平 6 年は西暦 734 年にあたる。川マ（川部）は、『古事記』允恭天皇段に大后的妹、田井中比売の名代として河部を定めたとある。西海道においては、『続日本紀』宝亀 6 年（775）4 月壬申条に肥前国松浦郡の人として、川部酒麻呂がみえる以外では、はじめて確認された。

川部の意味について、漁獵を職とする川人部の一部をさいて設けたとする説もある⁽²⁾。先の川部酒麻呂は天平勝宝 4 年（752）に入唐した遣唐使第 4 船の船頭^{かどし}であった。帰途、船尾に失火があり、船を廻す酒麻呂の傍らから火が出たが、酒麻呂は手が焼け爛れても船を離さず、火を消すという功績をあげた。この功をもって 10 階を授け、松浦郡の員外主帳に任じられ、さらに宝亀 6 年に至つて從五位下を授けられた。松浦郡は古来、壹岐や対馬、さらには韓半島へとつながる海上交通の拠点であり、酒麻呂が船頭であったこともふまえれば、川部は水上交通や漁業に携わったとみられる。

118-4 ・符 郡首□□少長□

272・37・8 6011

四周削り。下端を圭頭状に加工する。表面 1 文字目「符」が墨痕鮮やかに遺存するが、それ以下の文字はかすれて不鮮明である。表面 8 文字目は「河」、「白」、「呂」の可能性がある。裏面にも墨痕があるが判読できない。

郡（評）首は『新撰姓氏録』右京諸蕃下に高向村主同祖、段姓夫公の後とみえ、また『坂上系図』に阿智王が率いて帰化したと伝える七姓漢人に含まれる渡來系氏族である。少長は、藤原広嗣の乱について記した『続日本紀』天平 12 年（740）9 月戊申条に「企救板櫃鎮小長」とみえる鎮の指揮

序号	登録番号	器種	式	出土遺物	器種	器種	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	器種	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)
88-1	80269	35	IV-C	土1001 №6	木製品	圓	(34.00)	20.20	2.50	アカガシ原属	68		
88-2	80023	35	IV-C	土1001 №8, 9	木製品	下駄	22.60	11.30	6.85	達丸村(キリ?)	68		
88-3	80287	35	IV-C	土1001 №7	木製品	ねずみ面し	(45.90)	31.20	6.20	クスノキ料	68		
87-1	80271	35	IV-C	土1002 №12	木製品	ねずみ面し	(51.80)	(26.40)	8.30	クスノキ料	65		
89-1	80268	35	IV-C	土1002 №12	木製品	ねずみ面し	(33.40)	23.60	6.50	クスノキ料	63		
88-2	80126	35	IV-C	土1002 №13	木製品	結界杖?	39.90	3.30	2.00	ヒノキ料	1		
88-3	80036	35	IV-C	土1003 №15	木製品	板状器具材	76.10	7.20	1.50	ヒノキ料	67		
88-4	80230	35	IV-C	土1005 №7	木製品	垂鎬	(29.70)	(10.30)	2.50	ニシキギ原属	64		
89-1	80238	35	IV-C	土1006 №17	木製品	板状器具材	67.60	17.00	3.60	モミ属	1		
89-2	80009	35	IV-C	土1006 №26	木製品	舟芦?	55.60	12.60	3.20	モミ属	1		
90-1	80285	36	IV-C	土1008	木製品	扇貝形製品	35.50	12.80	5.50	アカガシ原属	1		
90-2	80275	36	IV-C	土1008	木製品	扇貝形製品	38.70	23.70	5.60	アカガシ原属	1		
91-1	80227	36	IV-C	土1009 №24	木製品	簡朴器皿	(27.40)	13.20	3.40	アカガシ原属	1		
91-2	80076	36	IV-C	土1009 №36	木製品	件	(32.10)		7.70	ツツキ属?	65		
92-1	80089	36	IV-C	土1010	木製品	盤	24.60	(4.90)	1.40	アカガシ原属	63		
92-2	80083	36	IV-C	土1010	木製品	盤	(24.60)	(8.00)	1.80	アカガシ原属	65		
92-3	80006	36	IV-C	土1010 №40	木製品	棒子?	(51.10)	10.60	3.85	アカガシ原属	62		
92-4	80221	36	IV-C	土1010 №37	木製品	竹材?	(58.00)	13.40	2.70	シノ属	68		
92-5	80133	36	IV-C	土1010	木製品	板状器具材	(42.35)	11.50	3.20	モミ属	64		
93-1	80219	36	IV-C	土1014 №41	木製品	箱	(20.10)	(27.90)	6.40	コナラ属	68		
93-2	80218	36	IV-C	土1012 №42	木製品	箱	35.60	10.50	7.60	クスノキ料	1		
93-3	80019	36	IV-C	土1014 №45	木製品	簡か鍔	(16.40)	(7.30)	0.90	アカガシ原属	62		
93-4	80017	36	IV-C	土1014 №45	木製品	刀柄	(29.80)	2.10	1.15	ヒノキ	1		
93-5	80068	36	IV-C	土1014 №45	木製品	神狀器具材	(9.70)	2.60	(1.40)	船形材	不明		
93-6	80027	36	IV-C	土1014 №45	木製品	神狀器具材	(8.80)		2.00	船形材	61		
93-7	80016	36	IV-C	土1014 №45	木製品	神狀器具材	(36.10)	2.90	1.30	ヒノキ	68		
93-8	80018	36	IV-C	土1014 №45	木製品	ヘラ状製品?	19.80	2.20	0.95	スギ	1		
93-9	80021	36	IV-C	土1014 №45	木製品	板状器具材	(18.30)	(4.20)	0.50	スギ	不明		
93-10	80025	36	IV-C	土1014 №45	木製品	板状器具材	(46.75)	8.20	2.00	スギ	不明		
93-11	80026	36	IV-C	土1014 №45	木製品	神狀器具材	(12.75)	3.60	1.20	コナラ属	不明		
93-12	80020	36	IV-C	土1014 №45	木製品	神狀器具材	(17.80)	2.50	1.20	スギ	不明		
93-13	80057	36	IV-C	土1014 №45	木製品	神狀器具材	(11.90)	1.35	1.10	ヒノキ	不明		
94-1	80257	36	IV-C	1号井戸 №1	木製品	舟芦?	(110.80)	(28.60)	4.00	クスノキ料	68		
94-2	80231	36	IV-C	1号井戸 №1	木製品	舟芦?	118.80	30.40	5.00	モミ属	68		
94-3	80070	36	IV-C	1号井戸 №3	木製品	舟芦?	39.30	9.70	4.05	モミ属	1		
94-4	80088	36	IV-C	1号井戸 №3	木製品	舟芦?	(20.35)	10.85	5.10	クスノキ料	62		
94-5	80251	36	IV-C	1号井戸 №2	木製品	舟芦?	(108.60)	(27.80)	4.00	クスノキ料	66		
95-1	80261	36	IV-C	1号井戸 №6	木製品	舟芦?	(16.70)	(10.80)	5.20	モミ属	61		
95-2	80263	36	IV-C	1号井戸 №6-②	木製品	舟芦?	77.80	(13.90)	5.20	モミ属	67		
95-3	80207	36	IV-C	1号井戸 №6-②	木製品	舟芦?	(112.80)	32.00	4.60	クスノキ料	65		
95-4	80259	37	IV-C	1号井戸 №5	木製品	舟芦?	118.40	(28.40)	5.20	モミ属	68		
95-5	80260	37	IV-C	1号井戸 №8	木製品	舟芦?	123.50	24.80	4.40	モミ属	1		
96-1	80253	37	IV-C	1号井戸 №9	木製品	舟芦?	125.00	28.80	4.60	モミ属	69		
96-2	80246	37	IV-C	1号井戸 №11	木製品	舟芦?	121.80	33.80	6.80	モミ属	1		
96-3	80256	37	IV-C	1号井戸 №10	木製品	舟芦?	116.80	29.60	4.80	モミ属	1		
97-1	80252	37	IV-C	1号井戸 №12	木製品	舟芦?	119.60	29.20	4.20	モミ属	68		
97-2	80233	37	IV-C	1号井戸 №13	木製品	舟芦?	127.00	24.20	6.00	モミ属	69		
97-3	80302	37	IV-C	1号井戸 №16	木製品	舟芦?	113.00	26.80	4.60	モミ属	69		
97-4	80258	37	IV-C	1号井戸 №17	木製品	舟芦?	104.60	21.60	4.20	モミ属	69		
98-1	80240	37	IV-C	1号井戸 №14	木製品	舟芦?	(95.00)	27.40	7.50	モミ属	68		
98-2	80243	37	IV-C	1号井戸 №14-②	木製品	舟芦?	(97.90)	(27.00)	8.70	モミ属	68		
98-3	80250	37	IV-C	1号井戸 №16	木製品	板状器具材	(72.10)	20.50	3.30	シイ属	68		
99-4	80245	37	IV-C	1号井戸 №15	木製品	板状器具材	(39.50)	21.10	3.50	シノ属(ツブライ)	63		
99-1	80249	37	IV-C	1号井戸 №18裏	木製品	舟芦?	130.50	25.60	3.40	モミ属	69		
99-2	80236	37	IV-C	1号井戸 №20北	木製品	舟芦?	111.60	22.00	5.60	モミ属	1		
99-3	80237	37	IV-C	1号井戸 №21東	木製品	舟芦?	110.00	20.80	5.00	モミ属	1		
100-1	80239	37	IV-C	1号井戸 №22西	木製品	舟芦?	117.20	19.80	6.00	モミ属	1		
100-2	80235	37	IV-C	1号井戸 №23南	木製品	舟芦?	112.40	21.40	5.60	モミ属	1		
100-3	80234	37	IV-C	1号井戸 №24-②	木製品	舟芦?	(93.20)	22.10	4.50	モミ属	68		
100-4	80244	37	IV-C	1号井戸 №24北	木製品	舟芦?	(109.70)	23.60	7.10	モミ属	62		
100-5	80241	37	IV-C	1号井戸 №25東	木製品	板状器具材	(30.70)	19.30	4.50	シイ属	62		
100-6	80255	37	IV-C	1号井戸 №25北-②	木製品	板状器具材	(41.80)	20.70	4.50	シイ属	63		
101-1	80247	37	IV-C	1号井戸 №26西	木製品	舟芦?	96.40	22.10	4.90	モミ属	1		
101-2	80262	37	IV-C	1号井戸 №27東	木製品	舟芦?	89.00	24.50	4.50	モミ属	1		
101-3	80254	37	IV-C	1号井戸 №28東	木製品	舟芦?	104.00	(17.00)	(5.00)	クスノキ料	64		
101-4	80232	37	IV-C	1号井戸 №28	木製品	舟芦?	(26.90)	(22.20)	4.80	モミ属	62		
101-5	80196	38	IV-C	1号井戸 ①	木製品	舟芦?	(39.00)	17.20	3.90	モミ属	63		
101-6	80040	38	IV-C	1号井戸	木製品	板状器具材	15.80	11.90	3.50	モミ属	不明		
101-7	80063	38	IV-C	1号井戸	木製品	板状器具材	(12.30)	12.10	4.35	モミ属	61		

()は残存量

第7表 IV-C区出土木製品一覧表①

番号	器種	器種番号	器種名	出土遺物	種類	器種	高さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	寸法	器種	器種番号	器種名
102-6	80001	38	IV-C 1号井戸	木製品	板状器具類	17.20	9.70	3.00	モミ箋	不明			
102-7	80101	38	IV-C 1号井戸	木製品	板状器具類	18.50	(7.00)	2.95	モミ箋	0.1			
102-2	80071	38	IV-C 1号井戸	木製品	板状器具類	(20.00)	(12.00)	5.00	モミ箋	0.1			
102-3	80066	38	IV-C 1号井戸 (4)	木製品	舟形鉢	21.80	9.70	4.90	モミ箋	不明			
102-4	80129	38	IV-C 1号井戸 (4)	木製品	板状器具類	24.00	10.00	5.40	モミ箋	1			
102-5	80059	38	IV-C 1号井戸	木製品	舟形鉢	(29.60)	15.50	5.10	スダジイ	0.3			
102-6	80001	38	IV-C 1号井戸	木製品	舟形鉢	53.20	(11.00)	4.35	モミ箋	0.7			
102-7	80042	38	IV-C 1号井戸	木製品	板状器具類	37.80	12.95	5.00	モミ箋	1			
102-8	80002	38	IV-C 1号井戸	木製品	舟形鉢	54.50	(9.90)	4.50	モミ箋	0.4			
102-9	80000	38	IV-C 1号井戸	木製品	舟形鉢	(57.00)	(9.20)	(4.00)	モミ箋	0.3			
102-10	80072	38	IV-C 1号井戸	木製品	板状器具類	(29.60)	(7.20)	4.90	スダジイ	0.1			
103-1	80039	38	IV-C 1号井戸	木製品	舟形鉢	(42.80)	(16.20)	5.30		0.3			
103-2	80294	38	IV-C 1号井戸	木製品	板状器具類	65.60	21.50	6.00	モミ箋	1			
103-3	80003	38	IV-C 1号井戸	木製品	板状器具類	71.10	16.10	5.00		0.6			
103-4	80034	38	IV-C 1号井戸	木製品	板状器具類	(38.70)	15.30	5.40	ツブライ	0.7			
103-5	80139	38	IV-C 1号井戸 (3)	木製品	板状器具類	(22.30)	(7.30)	3.20	モミ箋	0.1			
103-6	80029	38	IV-C 1号井戸 (4)	木製品	板状器具類	55.80	15.30	3.90	モミ箋	1			
104-1	80134	38	IV-C 1号井戸	木製品	板状器具類	(27.00)	12.20	3.40	モミ箋	0.3			
104-2	80024	38	IV-C 1号井戸	木製品	舟形鉢	67.70	22.40	3.40	スダジイ	0.8			
104-3	80001	38	IV-C 1号井戸 (4)	木製品	舟形鉢	(34.40)	18.30	3.00	ツブライ	0.7			
104-4	80012	38	IV-C 1号井戸	木製品	板状器具類	(86.20)	20.00	5.10		0.8			
104-5	80013	38	IV-C 1号井戸	木製品	板状器具類	(86.40)	20.50	5.10	スダジイ	0.5			
104-6	80011	38	IV-C 1号井戸	木製品	板状器具類	(83.20)	(11.20)	4.70	スダジイ	0.3			
104-7	80041	38	IV-C 1号井戸	木製品	板状器具類	(15.30)	(14.00)	3.00	クスキ科	不明			
104-8	80007	38	IV-C 1号井戸	木製品	板状器具類	(75.40)	4.20	1.30	スギ?	不明			
105-1	80149	38	IV-C 1号井戸	木製品	板状器具類	25.50	(26.10)	4.00	クスキ科	0.1			
105-2	80128	38	IV-C 1号井戸	木製品	板状器具類	(16.20)	(12.35)	(3.75)	スダジイ	0.1			
105-3	80118	38	IV-C 1号井戸 (3)	木製品	板状器具類	(44.40)	8.90	1.50	モミ箋	0.8			
105-4	80121	38	IV-C 1号井戸	木製品	板状器具類	(25.20)	6.70	0.50	スギ	不明			
105-5	80166	38	IV-C 1号井戸 (3)	木製品	板状器具類	(38.75)	6.90	0.60	スギ	不明			
105-6	80118	38	IV-C 1号井戸	木製品	舟形鉢	(28.00)	3.80	0.50	スギ	0.8			
105-7	80120	38	IV-C 1号井戸	木製品	板状器具類	(24.50)	6.30	0.60	カヤ	不明			
105-8	80113	38	IV-C 1号井戸	木製品	曲面側板	(9.50)	(2.00)	0.60	スギ	0.1			
105-9	80112	38	IV-C 1号井戸	木製品	曲面側板	(16.85)	(3.40)	0.60	スギ	0.1			
105-10	80111	38	IV-C 1号井戸	木製品	曲面側板	(18.00)	(4.90)	0.60	スギ	0.1			
105-11	80110	38	IV-C 1号井戸	木製品	曲面側板	(9.20)	(6.80)	0.65	スギ	0.1			
105-12	80117	38	IV-C 1号井戸	木製品	杭	(18.95)		3.20	歯孔材	0.2			
105-13	80114	38	IV-C 1号井戸	木製品	縫隙	(3.30)		7.20	アカガシ箋	0.5			
80209			IV-C 1号井戸	自然遺物	籠草			-					
106-1	80147	39	IV-C 包含漆黒燒灰土	木製品	匣	(7.80)	2.60	(1.55)	歯孔材	0.1			
106-2	80003	39	IV-C 包含漆黒燒灰土	木製品	匣	6.30	7.70	1.90	アカガシ箋	不明			
106-3	80123	39	IV-C 東倒T+ 包含漆黒燒灰土	木製品	板状器具類(横?)	11.50	(7.80)	(3.80)	モミ箋	0.7			
106-4	80115	39	IV-C №3	木製品	木桶	(22.30)	8.80	4.60	クスキ科	0.7			
106-5	80228	39	IV-C №14	木製品	箱	28.40	8.90	5.60	イヌキ	1			
106-6	80228	39	IV-C 包含漆黒燒灰土	木製品	箱	29.70	7.60	7.70	サカキ	1			
106-7	80222	39	IV-C №30	木製品	箱	33.00	9.10	8.40	ツバキ箋	1			
106-8	80073	39	IV-C 不明	木製品	栓	7.85	2.30	1.10	ヒノキ?	1			
106-9	80075	39	IV-C 不明	木製品	大星	13.00	4.70	2.90	ヒノキ	0.8			
106-10	80095	39	IV-C 包含漆黒燒灰土	木製品	大星	(10.10)	(2.45)	2.70	スギ	0.1			
106-11	80088	39	IV-C 包含漆黒燒灰土	木製品	大星	(16.00)	(2.65)	2.10	スギ	0.1			
106-12	80177	39	IV-C 包含漆黒燒灰土	木製品	大星?	(27.70)	(6.85)	2.20	スギ	0.5			
107-1	80274	39	IV-C 包含漆黒燒灰土	木製品	舟形枕木製品	(47.00)	11.80	1.80	ヒノキ	0.8			
107-2	80081	39	IV-C 包含漆黒燒灰土	木製品	平盤	35.40	(11.90)	1.85	アカガシ箋	0.6			
107-3	80054	39	IV-C 包含漆黒燒灰土	木製品	平盤	37.40	17.30	1.50	アカガシ箋	0.8			
107-4	80208	39	IV-C 包含漆黒燒灰土	木製品	平盤	(13.60)	8.20	1.20	アカガシ箋	0.2			
107-5	80014	39	IV-C 包含漆黒燒灰土	木製品	梯	(10.10)	(4.80)	3.20	歯孔材	0.1			
107-6	80187	39	IV-C 包含漆黒燒灰土	木製品	箱	15.05	3.20	1.80	アカガシ箋	0.8			
107-7	80223	39	IV-C 包含漆黒燒灰土	木製品	栓	25.00	8.90	8.00	ツバキ箋	0.4			
107-8	80278	39	IV-C 包含漆黒燒灰土	木製品	口×容器	(22.60)	(22.50)	5.00	モミ箋	0.1			
108-1	80126	39	IV-C 東倒T+ 包含漆黒燒灰土	木製品	瓶	26.20	4.15	2.90	スギ	1			
108-2	80004	39	IV-C 不明	木製品	燭台	48.60	(5.70)	2.30	モミ箋	0.5			
108-3	80137	39	IV-C №1	木製品	手巻	(29.80)	(8.10)	2.50	ヒノキ	0.5			
108-4	80088	39	IV-C №53	木製品	縫隙	15.55		6.90	アカガシ箋	0.6			
108-5	80127	39	IV-C 東倒T+ 包含漆黒燒灰土	木製品	縫隙	14.40		6.00	歯孔材	1			
108-6	80193	39	IV-C 包含漆黒燒灰土	木製品	縫隙	11.70		6.40	歯孔材	0.7			
108-7	80002	40	IV-C 包含漆黒燒灰土	木製品	縫隙	11.80		8.00	歯孔材	0.8			
108-8	80080	40	IV-C 包含漆黒燒灰土	木製品	縫隙	12.20		7.50	歯孔材	0.9			
108-9	80190	40	IV-C 包含漆黒燒灰土	木製品	縫隙	11.65		(7.05)	歯孔材	0.4			
108-10	80085	40	IV-C 包含漆黒燒灰土	木製品	縫隙	(5.75)		8.10	歯孔材	0.5			
108-11	80096	40	IV-C 包含漆黒燒灰土	木製品	縫隙	(6.60)		5.55	歯孔材	0.4			

↑は複数個

第7表 IV-C区出土木製品一覧表②

件番	器種番号	区	出土遺構	種類	形態	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	寸法	施存	備考
100-12	80176	IV-C	27	木製品	縞縫	(4.70)	(5.80)			02	
100-13	80048	40	IV-C 包含層	木製品	縞縫	(7.30)		6.20	ケヤキ	05	
100-14	80050	40	IV-C 包含層	木製品	縞縫	(8.00)		7.30	ケヤキ	05	
100-15	80066	40	IV-C 不明	木製品	縞縫	(5.30)		7.50	數孔材	05	
100-16	80081	40	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	縞縫	(7.90)		7.10	數孔材	05	
100-17	80079	40	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	縞縫	(3.40)		4.70	スギ	05	
100-18	80087	40	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	縞縫	(8.15)		4.20	數孔材	05	
100-19	80029	40	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	縞縫	(3.70)		4.90	數孔材	05	
100-20	80078	40	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	縞縫	(5.75)		4.65	ツノキ属?	05	
100-21	80098	40	IV-C 包含層(東側Tr.)黒褐色灰色土	木製品	縞縫	(4.35)		3.60		05	
100-22	80080	40	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	縞縫	(9.85)		4.10	數孔材	05	
100-23	80189	4	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	縞縫	(12.90)		4.35	數孔材	05	
100-24	80077	40	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	縞縫	(13.00)		3.70	數孔材	04	
100-25	80085	40	IV-C №10	木製品	縞縫	(3.90)		6.10	數孔材	07	
100-26	80191	40	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	縞縫	(1.00)		4.20	アカガシ重属	1	
100-1	80193	40	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	縞?	(2.74)	2.20	1.80	カヤ	1	
100-2	80229	40	IV-C 包含層(東側Tr.)	木製品	縞	(20.90)	(31.40)	3.90	クスノキ科	05	
100-3	80228	40	IV-C 包含層(東側Tr.)	木製品	縞	(22.70)	(46.10)	4.60	ニニ属?	08	
110-1	80195	40	IV-C 東側Tr.包含層(黒褐色)灰色土	木製品	縞	(25.70)	17.70	2.20	數孔材	1	
110-2	80224	40	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	縞	(28.40)	(7.00)	(3.90)	カヤ	03	
110-3	80182	41	IV-C 27	木製品	底板	(16.55)	(5.20)	0.90	ビノキ	03	
110-4	80099	41	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	底板	(18.90)	(7.40)	0.70	ヒノキ?	04	
110-5	80105	41	IV-C 不明	木製品	底板	(10.10)	(3.60)	0.60	ビノキ?	01	
110-6	80135	41	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	底板	(20.20)		1.00	スギ?	09	
110-7	80119	41	IV-C 不明	木製品	底板	(17.75)	(8.90)	0.90	ヒノキ?	04	
110-8	80109	41	IV-C 不明	木製品	底板	(18.35)	3.95	0.55	ヒノキ	03	
110-9	80108	41	IV-C 不明	木製品	底板	(20.30)	5.85	0.55	ヒノキ	03	同一
110-10	80183	41	IV-C 27	木製品	曲板	(11.20)	(4.30)	0.85	ヒノキ	01	
110-11	80132	41	IV-C 不明	木製品	曲板	(14.40)	(8.10)	1.10	ヒノキ	01	
110-12	80086	41	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	曲板	(20.10)	(5.40)	1.00	スギ	01	
110-13	80003	41	IV-C 不明	木製品	曲板	(55.90)	3.80	1.60	ヒノキ	01	
111-1	80056	41	IV-C 不明	木製品	蓋板	(28.60)	(13.30)	1.40	ヒノキ	04	
111-2	80082	41	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	蓋板	(28.20)	(8.20)	0.95	ビノキ	02	
111-3	80102	41	IV-C 不明	木製品	蓋板	(25.80)	(7.75)	0.90	ヒノキ	02	
111-4	80170	41	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	蓋板	(11.70)	(2.70)	1.00	アカガシ重属	01	
111-5	80044	41	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	底板	(13.00)	(3.40)	0.75	ヒノキ?	01	
111-6	80045	41	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	底板	(9.85)	(3.60)	0.70	ヒノキ	01	
111-7	80106	41	IV-C 不明	木製品	曲板	(19.20)	(1.50)	0.60	ヒノキ	01	
111-8	80146	41	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	底板	(14.00)	(4.30)	0.60	ヒノキ	01	
111-9	80173	41	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	曲板	(22.00)	(2.40)	1.05	ヒノキ	01	
111-10	80005	41	IV-C 不明	木製品	曲板	(37.10)	(4.70)	0.70	スギ	01	
111-11	80067	41	IV-C 西側Tr.包含層(黒褐色)灰色土	木製品	軸引箱	(14.50)	(8.40)	0.70	ヒノキ	02	
111-12	80174	41	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	軸引箱	(13.60)	2.15	0.70	スギ	不明	
111-13	80148	41	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	燃え木	(7.65)	1.50	0.90	計数樹	不明	
112-1	80141	41	IV-C 東側Tr.包含層(黒褐色)灰色土	木製品	燃え木	(15.10)	1.45	0.60	ヒノキ科	1	
112-2	80142	41	IV-C 東側Tr.包含層(黒褐色)灰色土	木製品	燃え木	(11.20)	1.70	0.80	ヒノキ科	不明	
112-4	80143	41	IV-C 東側Tr.包含層(黒褐色)灰色土	木製品	燃え木	(11.65)	1.35	1.00	マツ属(種種管束茎属)	不明	
112-5	80185	41	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	燃え木	(12.65)	1.40	0.45	ヒノキ科	0.5	
112-6	80164	41	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	人形	(8.30)	2.20	0.60	ヒノキ	04	
112-7	80278	41	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	人形	(8.80)	1.55	0.30		0.3	
112-8	80185	41	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	人形	(5.20)	5.10	1.15	アカガシ重属	0.5	
112-9	80190	41	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	人形	(12.70)	4.75	1.10	ヒノキ	1	
112-10	80201	41	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	馬頭	(13.10)	2.70	0.95	ヒノキ	0.8	
112-11	80145	41	IV-C 東側Tr.包含層(黒褐色)灰色土	木製品	馬頭	(9.90)	(2.25)	0.70	スギ	不明	
112-12	80030	41	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	馬頭	(13.45)	2.50	0.45	ヒノキ?	0.9	
112-13	80200	41	IV-C 東側Tr.包含層(黒褐色)灰色土	木製品	時代	(1.65)	(8.40)	0.65	ヒノキ	0.1	
112-14	80196	42	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	舟形	(23.60)	1.90	2.20	ヒノキ	0.9	
112-15	80052	42	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	縞引木製品?	(11.90)	3.30	1.70	數孔材	0.9	
112-16	80178	42	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	時代	(25.50)	2.30	1.45	ヒノキ	1	
112-17	80155	42	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	縞	(15.90)	(7.50)	1.20	モミ属	0.1	
112-18	80015	42	IV-C 不明	木製品	杏査	(8.60)	8.10	1.35	ヒノキ	0.8	
113-1	80107	42	IV-C 不明	木製品	荷札	(21.00)	3.30	0.65	スギ	0.7	
113-2	80022	42	IV-C 不明	木製品	荷札	(16.90)	2.95	0.80	スギ	0.5	
113-3	80276	42	IV-C 不明	木製品	部材	(31.00)	4.90	3.30	マツ属(種種管束茎属)	0.3	
113-4	80266	42	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土東側Tr.	木製品	部材	(47.70)	5.50	4.20	ヒノキ	0.4	
113-5	80277	42	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	部材	(38.70)	4.60	3.50	ヒノキ	0.5	
113-6	80037	42	IV-C 西側Tr.包含層(黒褐色)灰色土	木製品	柱?	(26.20)	10.70	6.80	スギ	0.7	
113-7	80038	42	IV-C 西側Tr.包含層(黒褐色)灰色土	木製品	梁?	(41.50)	11.50	2.50	スギ	0.7	
114-1	80272	42	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	ねずみ面し	(48.00)	(22.30)	4.80	クスノキ科	0.4	
114-2	80273	42	IV-C 包含層(黒褐色)灰色土	木製品	ねずみ面し	(48.30)	(33.00)	5.70	クスノキ科	0.5	同一個体

()は残存値

第7表 IV-C区出土木製品一覧表③

番号	器種	器名	出土場所	種類	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	備考	番号	
115-3	80220	42	IV-C №29	木製品	台付木製品	21.50	16.60	8.80	ハイキ茶	0.9
115-1	80124		IV-C 東側T-包含層黒褐色土	木製品	板状器具材	(10.85)	4.70	0.80	方?	不明
115-2	80188		IV-C 東側T-包含層黒褐色土	木製品	板状器具材	(13.70)	2.90	1.55	七ノ牛	不明
115-3	80199		IV-C 東側T-包含層黒褐色土	木製品	板状器具材	(16.10)	(2.25)	1.25	七ノ牛	不明
115-4	80187		IV-C 東側T-包含層黒褐色土	木製品	板状器具材	(22.30)	3.30	1.30	七ノ牛	0.5
115-5	80095	43	IV-C 不明	木製品	丸足?	29.20	5.70	1.15	七ノ牛	0.9
115-6	80162	43	IV-C 包含層	木製品	板状器具材	26.95	6.80	0.70	七ノ牛	0.9
115-7	80184	43	IV-C 東側T-包含層黒褐色土	木製品	板状器具材	(17.05)	(4.90)	2.05	スキ	不明
115-8	80184	43	IV-C 包含層黒褐色土	木製品	脚?	19.10	5.70	3.50	七ノ牛	0.6
115-9	80151	43	IV-C 東側T-包含層黒褐色土	木製品	板状器具材	31.90	10.65	2.50	クスノキ料	1
115-10	80151	43	IV-C 包含層黒褐色土	木製品	脚?	(27.80)	20.80	4.10	クスノキ料	不明
115-11	80062	43	IV-C 不明	木製品	板状器具材	(40.60)	17.90	1.40	スキ	0.7
115-12	80032	43	IV-C 包含層黒褐色土	木製品	板状器具材	(73.80)	17.50	4.00	クスノキ料	0.7
115-13	80051		IV-C №47	木製品	板状器具材	(20.90)	7.30	1.40	スキ	0.6
115-14	80033		IV-C №56	木製品	板状器具材	(81.00)	13.00	2.95	ヒノキ料	0.7
115-15	80168		IV-C 包含層黒褐色土	木製品	板状器具材	(21.80)	(16.40)	1.00	ヒノキ料	0.1
115-16	80046	43	IV-C №46, 47	木製品	脚?	23.80	11.60	1.20	イスノキ	0.6
115-17	80049		IV-C 包含層黒褐色土	木製品	板状器具材	(12.80)	(3.80)	1.85	スダジイ	0.1
116-1	80108	43	IV-C 包含層黒褐色土	木製品	板状器具材	8.50	11.60	3.90	ヒモ?	1
116-2	80171		IV-C 包含層黒褐色土	木製品	板状器具材	(12.40)	(7.20)	4.05		0.1
116-3	80001	43	IV-C 包含層黒褐色土	木製品	井戸枠?	8.70	(13.70)	5.10	モミ箆	0.1
116-4	80130	43	IV-C 不明	木製品	板状器具材	(14.80)	(7.00)	3.50	七ノ牛?	0.1
116-5	80160	43	IV-C 包含層黒褐色土	木製品	板状器具材	(23.10)	(11.60)	3.80	モミ箆	0.1
116-6	80061	43	IV-C 不明	木製品	脚?	19.15	10.20	5.70	敷乳材	0.5
116-7	80125		IV-C 包含層黒褐色土	木製品	板状器具材	5.30	(5.70)	0.70	ヒノキ	不明
116-8	80074	43	IV-C 不明	木製品	板状器具材	(11.80)	4.60	1.30	スキ	不明
116-9	80169	43	IV-C 包含層黒褐色土	木製品	板状器具材	(20.80)	(5.40)	1.40	ヒノキ	不明
116-10	80131		IV-C 不明	木製品	板状器具材	(17.80)	(4.80)	1.40	七ノ牛	不明
116-11	80156		IV-C 不明	木製品	板状器具材	(21.30)	(7.50)	1.50	モミ箆	不明
116-12	80152		IV-C 不明	木製品	板状器具材	(12.30)	3.55	1.25	ヒノキ	0.2
116-13	80140		IV-C 東側T-包含層黒褐色土	木製品	板状器具材	(15.00)	2.90	1.60	ヒモ?	0.6
116-14	80163		IV-C 包含層黒褐色土	木製品	板状器具材	(12.80)	3.20	1.50	モミ箆	0.5
116-15	80144		IV-C 東側T-包含層黒褐色土	木製品	板状器具材	(5.90)	(1.45)	0.70	スキ?	0.1
116-16	80154		IV-C 不明	木製品	板状器具材	(8.05)	2.70	0.85	ヒノキ	不明
116-17	80153		IV-C 不明	木製品	板状器具材	(10.30)	3.00	0.65	ヒノキ	不明
116-18	80104		IV-C 不明	木製品	六つ状品?	(12.30)	3.10	0.60	腐化	0.1
116-19	80084	43	IV-C 包含層黒褐色土	木製品	板状器具材	26.80	5.20	1.10	スキ	0.9
116-20	80115		IV-C 包含層黒褐色土	木製品	板状器具材	13.75	4.20	1.70	スキ	1
116-21	80172		IV-C 包含層黒褐色土	木製品	板状器具材	(28.80)	4.20	1.10	ヒノキ	不明
116-22	80181		IV-C	木製品	脚状器具材	(16.40)	1.80	1.00	ヒノキ	0.9
116-23	80122		IV-C 東側T-包含層黒褐色土	木製品	脚状器具材	(32.70)	1.90	1.50	ヒノキ	0.9
116-24	80157		IV-C 不明	木製品	脚状器具材	(34.10)	2.10	1.10	スキ	0.8
116-25	80158	43	IV-C 不明	木製品	脚状器具材	(43.20)	2.50	1.90	アカガシ箆	0.8
116-26	80161		IV-C 包含層黒褐色土	木製品	脚状器具材	51.80	2.70	1.20	スキ	1
116-27	80067		IV-C 包含層黒褐色土	木製品	脚?	14.90	4.00	2.30	ヒノキ料	不明
116-28	80097	43	IV-C 包含層黒褐色土	木製品	脚?	(8.80)		2.50	アカガシ箆	0.1
117-1	80103	43	IV-C 不明	木製品	脚状器具材	20.40	1.90	0.90	スキ	1
117-2	80167	43	IV-C 包含層黒褐色土	木製品	脚?	20.70	2.00	1.50	スキ	1
117-3	80170		IV-C №54?	木製品	脚? or 脚?	35.10	3.00	1.75		1
117-4	80055		IV-C 不明	木製品	脚状器具材	35.20	3.90	2.20	スキ	1
117-5	80159	43	IV-C 不明	木製品	脚状器具材	45.30	2.80	2.25	スキ	1
117-6	80138	43	IV-C 包含層黒褐色土	木製品	靴 or 程	(15.10)	3.20	2.60	コウヤマキ箆	0.9
117-7	80064		IV-C №11	木製品	脚?	(88.00)		2.80	方?	0.9
117-8	80188		IV-C 包含層黒褐色土	木製品	靴	(11.10)		2.70	クサギ箆	不明
117-9	80043		IV-C 包含層黒褐色土	木製品	靴	(8.00)		(3.30)	敷乳材	0.1
118-1	80215	43	IV-C 東側T-包含層黒褐色土	木製品	脚? or 脚?	(5.10)	(1.40)	0.20	未同定	0.1
118-2	80217	44	IV-C 東側T-包含層黒褐色土	木製品	脚? or 脚?	(32.40)	2.60	0.40	未同定	0.3
118-3	80213	44	IV-C 東側T-包含層黒褐色土	木製品	脚?	(10.50)	(2.00)	0.90	未同定	0.8
118-4	80216	44	IV-C №28	木製品	脚?	27.30	43.50	3.70	未同定	1
118-5	80216	44	IV-C 東側T-包含層黒褐色土	木製品	脚?	(8.00)	(2.50)	0.50	未同定	0.2
118-6	80202	44	IV-C 土1009 №35	木製品	脚? or 脚?	(3.05)	(1.05)	0.15	ヒノキ	0.1
118-7	80203	44	IV-C 土1009 №35	木製品	脚? or 脚?	(5.85)	(1.20)	0.15	ヒノキ	0.1
118-8	80204	44	IV-C 土1009 №35	木製品	脚? or 脚?	(2.20)	(1.10)	0.15	ヒノキ	0.1
118-9	80205	44	IV-C 土1009 №35	木製品	脚? or 脚?	(7.30)	(1.25)	0.20	ヒノキ	0.1

〔は〕残存種

第7表 N-C区出土木製品一覧表④

官であろう。同じ記事に「京都郡鎮長大宰史生從八位上小長谷常人」がみえ、天平12年には、京都郡鎮の指揮官は大長・小長に分かれていなかった。京都郡鎮は木簡出土地の近くに所在したと推定されており、京都郡鎮に大長・小長が置かれた時期があったことが本木簡からわかる。

118-5 □□□段

・□

得五段

(76) × 23×4 6081

上下両端折れ、左右両刃削り。表面「段」の上の文字は、1・2文字目が「一町」、3文字目が「五」または「三」の可能性がある。土地に関する文書と推測されるが詳細は不明。

この他、墨痕があるが、判読できないもの、墨痕のないものは、実測図の報告のみとする（酒井）。

【注】

(1) 酒井芳司・松川博一『福岡・延永ヤヨミ園遺跡』(『木簡研究』32、2010年) 110~3頁

(2) 太田亮『姓氏家系大事典 第一巻』角川書店、1963年、川入部・河部の項、1667~8・1672頁

(11) 小結

IV-C区から検出された遺構の中で注目されるのは、頑強な板材を使用した板組の1号井戸である。板材は転用ではなく、この井戸のために加工された板材を6段以上、相欠き組で組み上げるもので、公的な施設に関連する井戸としての位置づけが考えられる。

また、包含層部分に彫り込まれた土坑からは、木製農具の未製品が出土しており、木材の水漬けが行われ、近辺で木製品の生産が行われた可能性が示唆される。この包含層からは、馬歯や木製の壺鏡が出土しており、遺跡の性格を検討する上で重要なものであろう。

いずれにしろ、今回の調査区は調査された遺跡の範囲のごく一部であり、今後、木簡や墨書き土器など他の調査区と合わせて包括的に検討する必要があるであろう。

IV 化学分析

1 胎土（粘土）分析

(1) 分析にあたって

本遺跡の堅穴住居カマドに使用された粘土をサンプリングし分析を行うことで、その粘土がどのような化学的な特徴があるのか、またスサなどの混和物が含まれているかどうか、さらに今後の土器胎土分析の基礎データとすることを目的に、IV-B区134・137号堅穴住居跡カマドに使用された粘土の化学分析を株式会社古環境研究所に委託した。結果は以下の通りである（大庭）。

.....
株式会社古環境研究所

(2) はじめに

延永ヤヨミ園遺跡IV-B区の堅穴住居跡より出土した粘土について、薄片観察および蛍光X線分析を行い、顕微鏡観察による鉱物組成ならびに化学組成を検討した。

(3) 試料と方法

試料は、2住居跡（住134、住137）より出土した粘土2点である（第8表）。

分析は、粘土薄片を作製し偏光顕微鏡による観察と蛍光X線分析を実施した。以下に、各分析の方法について述べる。

(4) 粘土薄片の偏光顕微鏡観察

粘土は、恒温乾燥機により乾燥させた後、電気炉を用いて750度6時間で焼成した。岩石カッターなどで成形した後、エポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドグラスに接着し、接着面と反対の面に平面を作製した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作製した後、スライドグラスに接着した。その後、精密岩石薄片作製機を用いて試料を切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作製した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

これら粘土薄片は、偏光顕微鏡を用いて薄片全面にみられた微化石類（珪藻化石、骨針化石など）と大型粒子の特徴およびその他の混和物について、観察と記載を行った。なお、ここで採用した各分類群の記載およびその特徴などは、以下の通りである。

【珪藻化石】

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、大きさは10～数百μm程度である。珪藻は、海水域から淡水域に広く分布する。小杉（1988）や安藤（1990）は、現生珪藻に基づいて環境指標種群を設定し、具体的な環境復原を行っている。ここでは、種あるいは属が同定できる珪藻化石（海水種、淡水種）を分類した。

【骨針化石】

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状からなる。海綿動物の多くは海産であるが、淡水産としても23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。したがって、骨針化石は水成環境を指標する。

【植物珪酸体化石】

主にイネ科植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、長径約10～50μm前後である。一般にはプランツ・オパールとも呼ばれ、イネ科草本やスゲ、シダ、トクサ、コケ類などに形成される。

【胞子化石】

胞子は、直径約10～30μm程度の珪酸質の球状粒子である。胞子は、水成堆積物中に多く見られるが、土壤中にも含まれる。

【石英・長石類】

石英および長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち、後述する双晶などのように、光学的な特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く、一括して扱う。

【長石類】

長石は、大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。

カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（バーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帶構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）に見られることが多い。バーサイト構造を示すカリ長石は、花崗岩などケイ酸分の多い深成岩などに産出する。

[雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で、風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状に剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。花崗岩などのケイ酸分の多い火成岩に普遍的に産し、変成岩類や堆積岩類にも産出する。

[輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にビール瓶のような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。ケイ酸分の少ない深成岩類や火山岩類、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩類に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてケイ酸分の少ない火山岩類やケイ酸分の最も少ない火成岩類や変成岩類中にも産出する。

[角閃石類]

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は、細長く平たい長柱状である。閃緑岩のような、ケイ酸分が中間的な深成岩類や変成岩類あるいは火山岩類に産出する。

[ガラス質]

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄く湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山噴火により噴出した噴出物（テフラ）である。

[片理複合石英類]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、片理構造を示す岩石である。雲母片岩や結晶片岩、片麻岩や粘板岩などと考えられる。

[砂岩質・泥岩質]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、基質部分をもつ。構成粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質、約0.06mm未満のものを泥岩質とした。

[複合石英類]

複合石英類は、石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は、粗粒から細粒までさまざまである。ここでは便宜的に、個々の石英粒子の粒径が0.01mm未満のものを微細、0.01～0.05mmのものを小型、0.05～0.10mmのものを中型、0.10mm以上のものを大型と分類した。微細結晶の集合体である場合には、堆積岩類のチャートなどに見られる特徴がある。

[斑晶質・完品質]

斜長石や輝石・角閃石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなる岩石である。

〔流紋岩質〕

石英や長石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなり、流理構造を示す岩石である。

〔凝灰岩質〕

ガラス質で斑晶質あるいは完晶質構造を持つ粒子のうち、結晶度が低く、直交ニコルで観察した際に全体的に暗い粒子である。

〔不明粒子〕

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明な粒子や、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明粒子とした。

(5) 粘土の蛍光X線分析

蛍光X線分析では、粘土よりガラスピードを作製し、蛍光X線分析を行った。

試料は、セラミック乳鉢で粉末にして、恒温乾燥器に入れ120°Cで乾燥させた後、デシケータ内で放冷し、18000g秤量した。これを、無水四ホウ酸リチウム Li₂B₄O₇と、メタホウ酸リチウム LiBO₂を8:2の割合で調製した融剤3.6000gと十分に混合し、白金製るつぼに入れ、ビードサンプラーにて約750°Cで250秒間予備被熱、約1100°Cで150秒間溶融させ、約1100°Cで450秒間揺動被熱してガラスピードを作製した。

分析は、フィリップス社製波長分散型蛍光X線分析装置 MagiX (PW2424型)にて、検量線法による定量分析を行った。標準試料には、独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センターおよび米国標準技術研究所 (NIST) の岩石標準試料計15種類を用いた。定量元素は、酸化ナトリウム (Na₂O)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化アルミニウム (Al₂O₃)、二酸化ケイ素 (SiO₂)、酸化リン (P₂O₅)、酸化カリウム (K₂O)、酸化カルシウム (CaO)、酸化チタン (TiO₂)、酸化マンガン (MnO)、酸化鉄 (Fe₂O₃) の主成分10元素と、ルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr) の微量元素2元素の計12元素である。

(6) 結果

以下に、各粘土について粘土薄片の偏光顕微鏡観察（第120図）と蛍光X線分析結果を述べる。

a. 分析No.1：住134

粘土薄片の偏光顕微鏡観察では、海綿動物の骨格の一部の骨針化石が少量含まれていた。その他では、イネ科植物の葉身などで形成される植物珪酸体化石が多く含まれていた。砂粒物では、斜長石（双晶・累帶）や石英・長石類が多く含まれ、角閃石類や輝石類あるいは火山ガラスや火山岩類などが含まれていた（第9表）。

分析No.	種類	遺構	粒度	最大粒径	微化石類の特徴	砂粒物岩石・鉱物組成
1	粘土	住134	280μm~750μm	1.95mm	植物珪酸体化石多産、骨針化石(8)、胞子化石	石英・長石類、斜長石(双晶・累帶)【ガラス質】斜方輝石、角閃石類、凝灰岩質、雲母類、複合石英類(微細)、ジルコン、カリ長石(バーサイト)、複合石英類(大型)
2	粘土	住137	250μm~650μm	2.32mm	植物珪酸体化石多産、骨針化石(7)、胞子化石	石英・長石類、斜長石(双晶・累帶)【ガラス質】斜方輝石、角閃石類、雲母類、複合石英類(中型)、凝灰岩質、斑晶質、單斜輝石、ジルコン、複合石英類(大型)

第9表 胎土中の微化石類と砂粒物の特徴

分析 No	種類	遺構	粘土の特徴				砂粒の特徴				鉱物の特徴				植物 珪酸体化 石	その他の 特徴									
			放散 化石	海水 種珪藻 化石	淡水 種珪藻 化石	不明 種珪藻 化石	骨針 化石	胞子 化石	片 岩 類	深成 岩類	堆積 岩類	火山 岩類	凝灰 岩類	流紋 岩類	テフラ	石英	斜長石 (ペ リサイト 品・累帶)	カ ル ナ イト (ペ リサイト 品・累帶)	ジ ル コン	角 閃 石類	輝 石類	雲 母類			
1	粘土	住134	水成				○	○	Bg	○	△	△	△	○	○	○	○	△	△	○	○	○	○	○	○
2	粘土	住137	水成				○	△	Bg	○	△	△	△	○	○	○	○	○	△	△	○	○	○	○	○

第 10 表 胎土中の粘土および砂粒組成の特徴

粘土の堆積環境は、骨針化石が含まれていたことから、水成粘土と判断された。また、砂粒組成は、斜長石や角閃石類あるいは雲母類が特徴的に含まれていたことから、主に深成岩類に由来する鉱物群と考えられる。砂粒組成としては深成岩類を主として火山ガラスからなるテフラを含む組成 (Bg 群) である。なお、岩石の組み合わせは第 11 表に従った。蛍光 X 線分析では、二酸化ケイ素 (SiO_2) が 61.3%、酸化アルミニウム (Al_2O_3) が 20.9% であった。その他では、酸化鉄 (Fe_2O_3) が 5.20%、酸化カルシウム (CaO) が 1.94%、酸化カリウム (K₂O) が 1.61% などであった (第 12 表)。

		第 1 出現群						
		A	B	C	D	E	F	G
第 2 出現 群	片岩類	Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga	
	深成岩類	Ab	Cb	Db	Eb	Fb	Gb	
	堆積岩類	Ac	Bc	Dc	Ec	Fc	Gc	
	火山岩類	Ad	Bd	Cd	Ed	Fd	Gd	
	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De	Fe	Ge	
	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef	Gf	
	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Eg	Fg	

第 11 表 岩石片の起源と組み合わせ

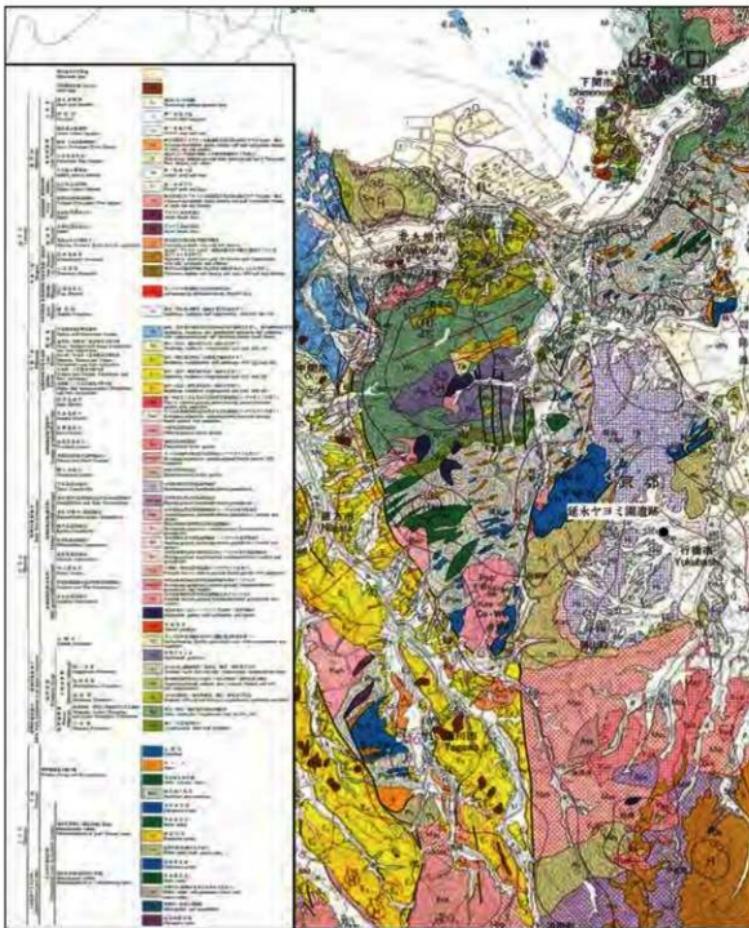
b. 分析 No. 2 : 住 137

粘土部分では、海綿動物の骨格の一部の骨針化石が少量含まれていた。その他では、イネ科植物の葉身などで形成される植物珪酸体化石が多く含まれていた。砂粒物では、斜長石 (双晶・累帶) や石英・長石類が多く含まれ、角閃石類や輝石類あるいは火山ガラスなどが含まれていた (第 9 表)。

粘土の堆積環境は、骨針化石が含まれていたことから、水成粘土と判断された。また、砂粒組成は、斜長石や角閃石類あるいは雲母類が特徴的に含まれていたことから、主に深成岩類に由来する鉱物群と考えられる。砂粒組成としては深成岩類を主として火山ガラスからなるテフラを含む組成 (Bg 群) である。なお、岩石の組み合わせは第 11 表に従った。蛍光 X 線分析では、二酸化ケイ素 (SiO_2) が 62.2%、酸化アルミニウム (Al_2O_3) が 20.9% であった。その他では、酸化鉄 (Fe_2O_3) が 4.36%、酸化カリウム (K₂O) が 1.69%、酸化カルシウム (CaO) が 1.60% などであった (第 12 表)。

分析 No	遺構	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	Rb	Sr	Total
1	住134	1.80	0.86	20.9	61.3	0.101	1.61	1.94	1.26	0.064	5.20	104	340	95.1
2	住137	1.53	0.76	20.9	62.2	0.099	1.69	1.60	1.18	0.044	4.36	113	278	94.4

第 12 表 住居跡出土粘土の蛍光 X 線分析による化学組成 (主成分 : %、微量元素 : ppm)

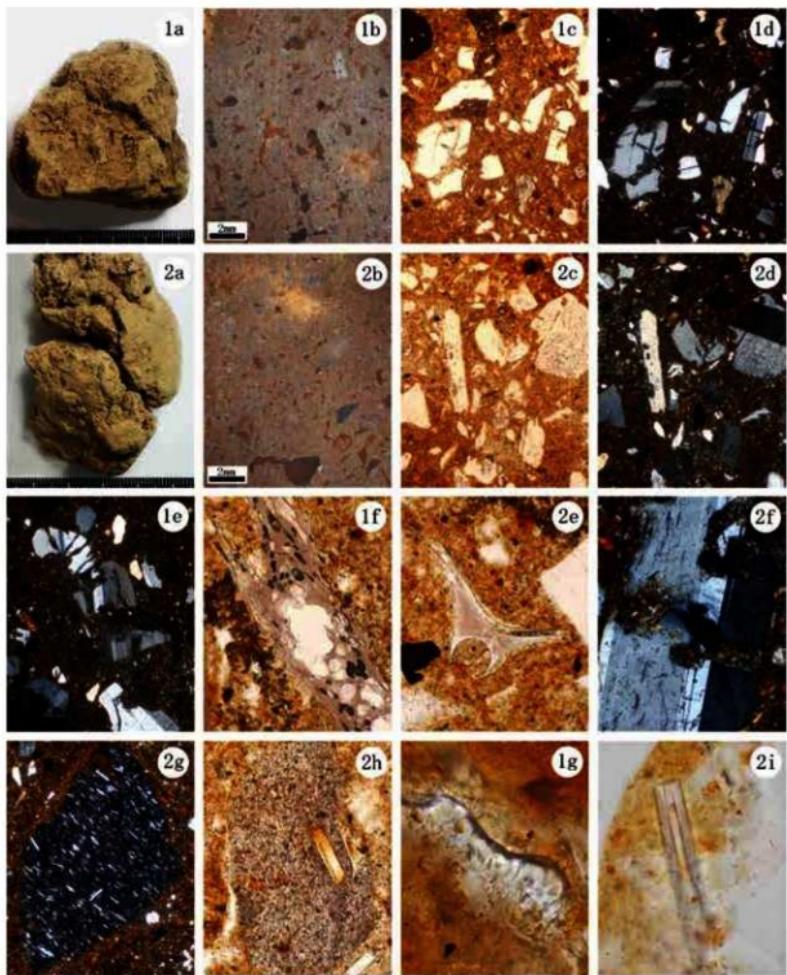


第 119 図 遺跡周辺の地質

(7) 考察

粘土薄片の偏光顕微鏡観察と蛍光X線分析を行った結果、いずれの粘土も同じ特徴を示した。すなわち、骨針化石を含む水成粘土であり、砂粒組成が深成岩類とテフラからなる組成(Bg群)であった。蛍光X線分析では粘土分を反映して共に酸化アルミニウム(Al_2O_3)が20.9%と高く、粘土分の多い良質の粘土であった。

当該遺跡は、小波瀬川と長崎川に挟まれた段丘上に位置するが、この段丘は更新世後期に形成された中位段丘（第119図の記号Tm）である。また、後期白亜紀前半の新期花崗岩類の平尾花崗閃綠岩（第119図の記号Hi）や真崎花崗岩及び長府花崗岩（第119図の記号Mas・Cho）あるいは勝山花崗岩（第119図の記号Kat）が分布する。粘土中の砂粒組成はこうした周辺の地質を反映し



1a~1d. 住134出土粘土塊（分析No. 1）、2a~2d. 住137出土粘土塊（分析No. 2）。

1e. 虫食い状の粒子（ $500\mu\text{m}$ ）、1f. ガラス質（ $100\mu\text{m}$ ）、2e. ガラス質（ $100\mu\text{m}$ ）、2f. 翠長石（ $100\mu\text{m}$ ）、
2g. 斑晶質（ $500\mu\text{m}$ ）、2h. 驚灰岩質（ $100\mu\text{m}$ ）、1g. イネ科殻の硅酸体（ $20\mu\text{m}$ ）、2i. 骨針化石（ $20\mu\text{m}$ ）

第120図 粘土試料と薄片の偏光顕微鏡写真

(a: 試料、b: 切断面、c: 開放コロ、d: 直交コロ、番号は分析No.に対応)

た特徴を示す。なお、火山ガラスからなるテフラは、中位段丘が形成される間に降灰したガラス質テフラと考えられる。

住居跡から検出された粘土塊は、遺跡周辺の段丘堆積物として分布する粘土を採取したと考えられる。

(8) まとめ

2住居跡（住134、住137）より出土した粘土2点について、粘土薄片の偏光顕微鏡観察と蛍光X線分析を行った。その結果、いずれも骨針化石を含む水成粘土であり、砂粒組成が深成岩類とテフラからなる組成（Bg群）であり、粘土分の多い良質の粘土であった。

これら粘土は、遺跡が位置する中位段丘堆積物中の粘土と考えられる。

【引用文献】

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用、東北地理、42（2）、p.73-88.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用、第四紀研究、27、p.1-20.

久保和也・松浦浩久・尾崎正紀・牧本博・星住英夫・鎌田耕太郎・広島俊男・中島和敏（1993）20万分の1地質図「福岡」、通商産業省工業技術院地質調査所

2 延永ヤヨミ園遺跡IV区における種実同定報告

株式会社古環境研究所

（1）はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しそな群集の構成や組成を調べることで、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。ここでは、延永ヤヨミ園遺跡で出土した種実の同定を行い、当時の植生について検討する。

（2）試料と方法

弥生時代後期後半～古代、中世のIV-C区包含層より出土した水洗選別済みの試料である。

同定は、試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

（3）結果

同定の結果、草本1分類群が同定された。学名、和名および粒数を第13表に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に形態的特徴を記載する。

・ヒヨウタン類 *Lagenaria siceraria* Standl. 種子 ウリ科 16粒：包含層

淡褐色で楕円形を呈す。上端にはへそと発芽孔があり、下端は波うつ切形を呈す。表面には綫に2本の低い稜が走る。藤下がヒヨウタン仲間とするもので、ヒヨウタン・フクベ・カンビヨウが含まれ、このうちフクベ・カンビヨウは食用になる。

遺構名	分類群		部位	個数
	学名	和名		
IV-C区包含層 吉国452	<i>Lagenaria siceraria</i> Standl.	ヒヨウタン類	種子 (破片)	15 1

第13表 延永ヤヨミ園遺跡IV区における種実同定結果

（4）種実同定から推定される植生と農耕

栽培植物である草本種実のヒヨウタン類は有用植物でもある。古くは縄文時代から検出され、弥

生時代以降は出土が多くなる。種子だけの検出であり、果皮が分解によって失われたのか、もしくは種子のみが投棄されたかのどちらかが考えられる。ヒヨウタン類の果実には200～300粒の種子が入るが各遺跡とも検出数は比較的少ない。本遺跡も同様であり、主要作物として栽培された様相ではなく、果実を器具に利用したり祭祀に用いたりするために適量栽培されたと推定される。

(5) 延永ヤヨミ園遺跡におけるヒヨウタンの利用状況

延永ヤヨミ園遺跡において、ヒヨウタンの出土が認められるのは、本項で報告するものを含め、以下の遺構である。

果皮（IV-C区1号井戸、9世紀後半）、種子（IV-C区包含層）、種子（III-C区3014号土坑、7世紀後半～8世紀初頭）、種子（III-C区包含層）

果皮が認められるものは、本書で報告している1号井戸出土例のみである（p132）。ヒヨウタンの口部分に横方向に孔が穿たれ、紐を掛けていたものと考えられる。その他は種子のみの出土であり、埋没時に果実の状態であったのか、種子のみであったのか判別できない。時期も7～9世紀の遺構出土例しかなく、通時的に利用されていたのか、当該時期に限定的に利用されていたのか判断できない。

現段階では、古代を中心としてヒヨウタンの利用がなされ、9世紀代には少なくとも器具に利用した例があると言えるのみである（城門）。

【参考文献】

- 藤下典之（1982）菜畠遺跡から出土したメロン仲間 *Cucumis melo L.* とヒヨウタン仲間 *Lagenaria siceraria* Standl. の種子について。唐津市文化財調査報告第5集菜畠遺跡。唐津市教育委員会。p.455-463.
- 藤下典之（1992）出土種子からみた古代日本のメロンの仲間、その種類、渡来、伝搬、利用について。考古学ジャーナル。354。ニュー・サイエンス社。p.7-13.
- 南木睦彦（1991）栽培植物、古墳時代の研究第4巻生産と流通I。雄山閣出版株式会社。p.165-174.
- 南木睦彦（1993）葉・果実・種子。日本第四紀学会編。第四紀試料分析法。東京大学出版会。p.276-283.
- 吉崎昌一（1992）古代雑穀の検出。月刊考古学ジャーナルNo.355。ニュー・サイエンス社。p.2-14.
- 渡辺 誠（1975）縄文時代の植物食。雄山閣。187p.



第121図 延永ヤヨミ園遺跡IV-C区包含層出土の種実

3 延永ヤヨミ園遺跡IV-C区出土木製鞍に伴う分析報告

公益財団法人 元興寺文化財研究所 山田卓司



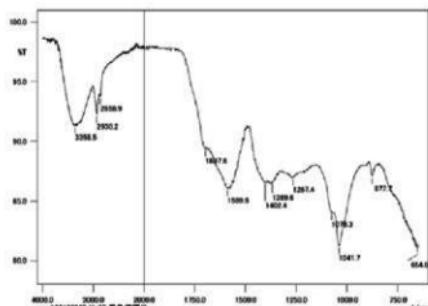
第122図 資料写真（保存処理前）と採取箇所

過する薄片を切り出し、永久プレパラートを作製した。生物顕微鏡を用いて断面観察を行い、塗膜の層構造を検討した。

毛様観察箇所からピンセットにより試料片を微量採取し（第122図）、エポキシ樹脂に包埋、横断面を金属顕微鏡で観察した。その後、断面方向の薄片を切り出し、永久プレパラートを作製した。生物顕微鏡を用いて断面観察を行い、毛様箇所を検討した。

（3）使用機器

- ・全反射フーリエ変換型赤外分光光度計（ATR-FTIR）【SensIR Technologies TravelIR】
試料に赤外線を照射し、そこから得られる分子の構造に応じた固有の周波数の吸収を解析し、化合物を同定する。全反射方式により、透過法では測定できない固体試料に適する。検出器 DLATGS を用い、分解能 4cm^{-1} で測定した。
- ・生物顕微鏡【OLYMPUS BX50】
- ・金属顕微鏡【OLYMPUS BH-UMA】



第123図 黒色塗膜片の ATR-FTIR 結果

（1）分析対象

延永ヤヨミ園遺跡IV-C区包含層出土鞍（預り番号 20120860 No.27、第122図）表面に付着する黒色塗膜と毛様観察箇所

（2）分析内容

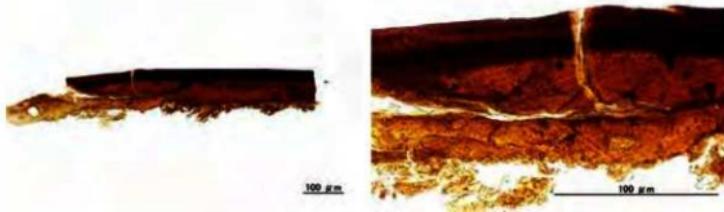
黒色塗膜をピンセットにより微量採取し（第122図）、赤外分光分析を用いて塗膜成分を検討した。残り片をエポキシ樹脂に包埋後、光が透

色層（2層の可能性もある）が観察された（第124図）。

よって、この鞍では、生漆を木地に染み込ませ下地とし、透明な漆で層を滑らかにした後、油煙など微細な黒色粒子を含む漆を塗り、表面を透明な漆で整えたものと考えられる。

b. 毛様観察箇所について

横断面観察と断面観察の結果より、観察箇所の溝は約 200 μm に及び、毛の可能性が考えられた（第125図）。毛様観察箇所に漆が染み込んでいる可能性も高く、種別を判断できる情報は得られなかった。



第124図 黒色塗膜片の断面観察（右図：左図の拡大）



第125図 毛様観察箇所の断面観察（左図：横断面、右図：断面）

V 総括

1 IV-B 2区及びIV-C区の遺構の変遷について

（1）はじめに

III-1で先述したように、調査当時の状況と遺構の分布、報告書分量などの関係で、IV区は道路を境に北をA区、南をB区、谷部分をC区とし、さらにIV-B区は1・2区に分けて報告することになった。そのため、ここで行う調査区南西隅の一角に位置する当区（IV-B 2区）及びIV-C区のみで遺構の変遷を検討しても当然遺跡全体の様相を理解するのは難しいが、今年度報告予定の国道201号事業による調査報告書3冊では、各巻で遺構変遷を検討している。本検討と合わせてご覧いただければ、本遺跡の国道201号に係る調査区における変遷過程についてはある程度解明できると考えている。

(2) 時期別変遷について

弥生時代後期～古墳時代前期

当区で最も古い時期の遺構は、弥生時代後期後半の132・142号住居跡である。本遺跡のこれまでの調査で弥生時代後期後半に集落が成立したことが判明しているが、当区堅穴住居跡の存在から集落成立当初より斜面にあたる当区まで集落が広がっていたことを確認できた。

この時期の142号住居跡の規模は床面積25mを超えるのに対し、132号住居跡が16m程度と差があること、またベッド状遺構も132号住居跡が一方のみ付設に対し、142号住居跡は双方に付設すること、さらに132号住居跡は住居主軸が等高線に逆らった形で北西-南東方向に振れるなど、時期は同一ではあるものの、違いが認められる。ただし、132号住居跡も先学により豊前地域で早く成立すると指摘される4本主柱穴の住居跡である。

また142号住居跡からは搬入品と考えられる西部瀬戸内系の甕及び器台が出土し、そのうち器台は住居埋土下層に伴い、住居時期を示す可能性が高い。この種の器台は、行橋市辻垣下河原遺跡A区1号溝に出土例があり、西部瀬戸内地域との交流の存在を示す資料である。しかし、本遺跡から出土した弥生時代後期～古墳時代前期に属する土器は、本遺跡が拠点集落であること、また立地も河川沿いである割には外来系土器の割合が少ないことが特徴の一つである。

時期は異なるが、IV-A及びIV-B1区では7世紀末から機能したと考えられる道路状遺構、IV-C区では波止場の可能性がある谷に突き出す平坦面が確認されていることから、142号住居跡で西部瀬戸内系土器が複数発見されたことは、谷及び山崎川に面する当区周辺が、弥生時代後期～古墳時代前期の本遺跡における他地域との交流空間の一つであったことを示す可能性がある。

古墳時代前期になると、122・135号住居跡と当区は引き続き集落が営まれる。中でも122号住居跡は6.7×5.2mと本遺跡では比較的大きな堅穴住居である。また122号住居跡出土土器は、庄内・布留系土器の本格的な流入より少し前にあたる、在地系土器のみで構成された古墳時代前期前半古相の良好な資料である。なお、132・135号住居跡の主軸がほぼ一致することは、135号住居跡が132号住居跡に後続する住居跡である可能性を示している。

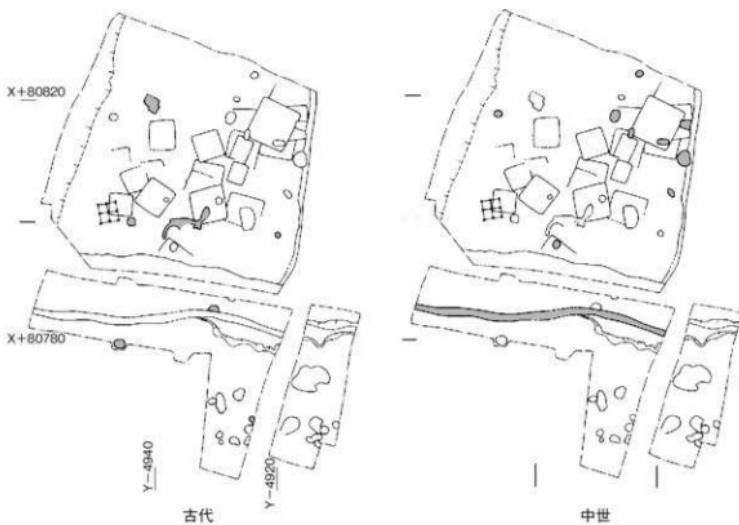
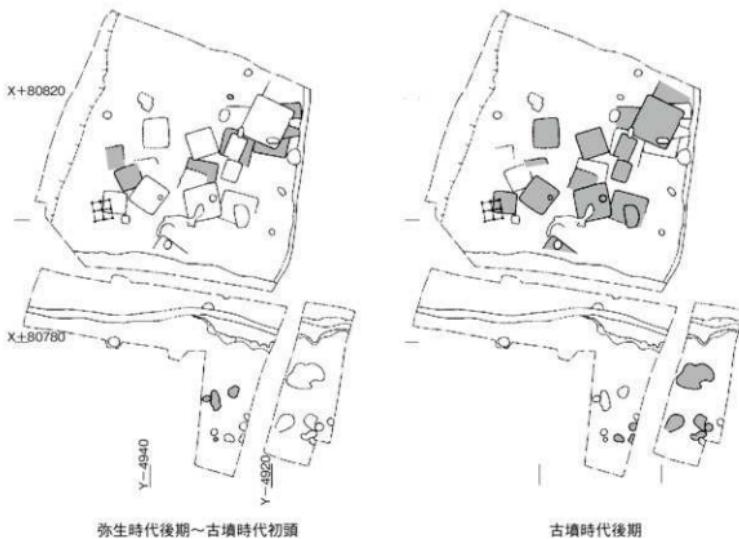
IV-C区では、古墳時代前期に属すると考えられる1009・1010号土坑から梯子、杵、鍬、鋤の未製品などの木製品が出土した。また未製品の存在から、古墳時代前期にIV-C区では木製品の水漬けが行われており、木製品が生産されていた可能性が高い。

古墳時代中期で確認された遺構は、121・138B住居跡のみで、集落は一定程度継続するものの、前段階に比べ集落は縮小傾向にある。なお、IV-C区の包含層出土土器から古墳時代中期に属する土器も一定程度存在すること及び既往の調査から、古墳時代後期まで集落は小規模ながら継続していると考えられる。

また古墳時代中期に属すると考えられるIV-C区1008号土坑で農具未製品が出土し、古墳時代前期と同じく木製品生産を行っていた可能性がある。

古墳時代後期

これまでの調査から、古墳時代後期になると急激に集落が拡大して2度目の盛期を迎えることが判明している。当区でも古墳時代後期になり、堅穴住居跡にカマドが付設される段階以降、古墳時代後期前半～中頃と考えられる133号住居跡を皮切りに、古墳時代後期後半には138A・139・



第 126 図 IV-B1 区・IV-C 区遺構変遷図 (1/800)

140・141・143号住居跡、次の後期末段階では120・134・137・144号住居跡と堅穴住居数が急速に増加することが確認できた。

主軸方位の検討では、134と144号住居跡、138Aと139号住居跡、140と137号住居跡、141と143号住居跡と、主軸がほぼ一致するとともに住居規模もほぼ同様のもので、堅穴住居の建て替え関係を予測させる住居セットが認められる。これらの住居群は、後期後半の140・141・143号住居跡は切り合うこと、また後期後半の139号住居跡と143号住居跡は近接するため、後期後半段階でのこれらの住居の併存状況の検証は困難である。その他の住居セットでは、堅穴住居存続期間が20年程度を仮定すると、後期後半段階では138A・140・144号住居跡、後期末段階では137・139・134号住居跡が併存していた可能性が高い。後期末段階の137号住居跡と139号住居跡は2m程度しか住居間の距離がないことから、確実な同時併存関係は検証できていないものの、141・143号住居跡セットを含めると、 7.1×6.9 mの大型住居である120号住居跡を中心的な存在とした5（棟）セットで一つのグループを形成していた可能性がある。

豊前地域の古代の集落については、吉田東明氏（吉田2012）と小澤佳恵氏（小澤2012）が検討しており、まず堅穴住居のサイズについては、大（床面積40m²弱）と小（床面積15m²前後）に二極分化する傾向があると指摘する。本遺跡IV-B2区では、120号住居跡が床面積40m²弱で、134・140・141号住居跡が床面積25～30m²弱、131・133・137・143号住居跡が床面積15m²～20m²、138A・139号住居跡が10m²前後と、4つに分かれ、多様な状況を示す。この時期の堅穴住居サイズの多様性については、先の小澤氏によると堅穴住居に居住する親族単位のサイズの多様性を示していると理解されている。当区で見られた住居セット関係及び住居群からなる単位集団の検討については、本遺跡調査の整理・報告がすべて完了した段階で、本遺跡内や地域内でどの程度普遍的であるかどうかの検証をすべきであると考えており、今回は存在の指摘のみにとどめておきたい。

また後期末の134・137号住居跡で確認したカマド廃絶時にカマドを粘土で被覆する行為は、カマド廃絶行為のみならず、堅穴住居内空間の在り方を考える上でも大きな成果である。詳細は本章3をご覧いただきたい。

7世紀前半には131号住居跡を最後に当区では基本的に堅穴住居跡はなくなると考えられており、146号住居跡出土土器は8世紀に属するものの、住居形態及び土器も小片であることから、8世紀まで堅穴住居が存続していたかは今後の調査の進展に委ねたい。

谷部にあたるIV-C区では、1004・1007・1012・1013号土坑が古墳時代後期に属すると考えられるが、これらの土坑から木製品の出土はほとんどない。しかし、古墳時代後期から古代の遣構として1001・1003号土坑があり、特に1001号土坑からねずみ返し、鋤、下駄が出土していることから、包含層出土土器の時期別の割合でいけば当区から出土した木製品のかなりの割合は古墳時代後期に属する可能性が考えられる。

古代

当区及びこれまでの調査成果から7世紀前半以降本遺跡では堅穴住居はなくなり、集落としては急激に縮小する一方、掘立柱建物から構成される一般集落的な状況は認められず、一般集落は別の場所に移動したと考えられる。

かわりに7世紀後半にはV-1、II-2区で官衙的配置が認められる大型掘立柱建物群が検出され

ている。また、7世紀末～8世紀には確実に機能し、一部10世紀まで存続したと考えられるIV-AからIV-B 1区で検出された道路状遺構も確認される。このことから、IV-B 2区では7世紀末～9世紀の遺構は確認できていないものの、IV-C区包含層から出土した8世紀後半に属する土器及び「天平六年」銘木簡、「津」銘墨書土器などの存在から、本遺跡は「草野津」が存在していた可能性が高く、遺跡としての在り方が大きく変わったと思われる。さらにIV-A区からIV-B 1区で検出された道路状遺構はIV-C区から丘陵上まで物資を運搬する道路であった可能性が高い。この「草野津」の考古学的検証については、本章5で詳述しているのでご覧いただきたい。

9世紀ではIV-C区1号井戸が確認されているが、通常官衙的な公的施設に伴う井戸形態である板材を桁状に組み上げた井戸であり、当該期の本遺跡の位置づけを示す資料として注目される。

10世紀前になると、IV-B 2区で調査区南端に等高線に沿うように配置された37・43号土坑、SX01が検出されている。特にSX01では、高台付土師器坏が溝状のくぼみに多量に廃棄された状態で出土した。このことは43号土坑北側で検出した多くのピット群は、掘立柱建物跡になる配置は確認できなかったが、集落縁辺のこの地に当該期の集落が存在したことを示す可能性がある。またIV-AからIV-B 1区で検出された道路状遺構は、少なくとも10世紀まで存続したと考えられることから、この段階にも8世紀段階に存在した「津」的在り方が小規模ながら継続していた可能性がある。

IV-C区で出土した木製品は、包含層出土土器から古墳時代後期に引き続き、かなりの割合が古代に属すると想定され、8世紀まで継続した木器生産が認められる。一方、斎車や形代の存在から律令的な祭祀行為も行われており、さきほどの「草野津」の存在を示す証拠になるであろう。

中世

中世にはIV-B区では34・35号土坑のみ、IV-C区では11号溝のみと、中世段階には丘陵縁辺部である当区周辺の利用は低いと考えられる。その後中世以降のものと思われる総柱建物である9号建物跡があるが、近世以降当区は主に田畠として利用されていたと想定される（大庭）。

【引用・参考文献】

吉田東明 2012 「豊前の古代集落」『古文化談叢』第68集 九州古文化研究会

小澤佳恵 2012 「豊前地域の集落－古墳時代後期から奈良時代にかけての一考察」『集落から見た7世紀』第61回

埋蔵文化財研究集会発表要旨資料 埋蔵文化財研究会

2 延永ヤヨミ園遺跡周辺の古墳時代初頭前後竪穴住居の構造

(1) はじめに

これまでの本遺跡の調査では、一度目の盛期である古墳時代初頭前後に属する竪穴住居跡が多数検出されているが、その上層では古墳時代後期の竪穴住居跡及び中世の溝・ピットなど多数の遺構が重複しているため、古墳時代初頭前後の竪穴住居跡の全形を知りえたものは少ない。

そのため、以下では本遺跡を含む京都郡内で検出された古墳時代初頭前後の竪穴住居について検討することで、本遺跡の竪穴住居跡の様相を明らかにしたい。

番号	道筋名	住居番号	住居所蔵	平面	PL	長軸	短軸	面積	長短比	BN	備考	文献
1	筑水市立田道筋路	IV-B-11-21	大須賀前原半	方形	4	5.2	5.6	29.12	108%N		本編	
2	筑水市立田道筋路	IV-B-11-22	生後柳原半	方形	2	6.7	5.2	34.84	78%E		本編	
3	筑水市立田道筋路	IV-B-11-23	大須賀前原半	方形	4	4	4	16	100%B		本編	
4	筑水市立田道筋路	H-C-11-13	大須賀前原半	方形	5.2	4	20.8	77%N				
5	筑水市立田道筋路	H-C-11-14	大須賀前原半	方形	3	5	2	25	100%B			
6	筑水市立田道筋路	H-C-11-15	大須賀前原半	方形	4	5.5	4	23.4	95%N			
7	筑水市立田道筋路	1-1-16	大須賀前原半	方形	2	5	5	25	100%B			
8	筑水市立田道筋路	1-1-17	大須賀前原半	方形	2	4.7	4.4	20.68	94%N			
9	筑水市立田道筋路	1-1-18	大須賀前原半	方形	3.5	3.5	12.25	100%B				
10	筑水市立田道筋路	1-1-19	大須賀前原半	方形	2	5	4.7	23.5	94%N			
11	筑水市立田道筋路	1-1-20	大須賀前原半	方形	2	5	4	20	100%B			
12	筑水市立田道筋路	1-1-21	大須賀前原半	方形	2	4	4	16	100%N			
13	筑水市立田道筋路	1-1-22	大須賀前原半	方形	3	3	3	27.9	100%N			
14	筑水市立田道筋路	H-D-14	大須賀前原半	方形	3	3.5	4.45	51.45	81%C			
15	筑水市立田道筋路	H-D-15	生後柳原半	方形	4	4.65	4.85	20.6925	96%N			
16	筑水市立田道筋路	H-D-16	大須賀前原半	方形	2	6.2	3.4	33.48	87%E			
17	筑水市立田道筋路	H-D-17	大須賀前原半	方形	4	7.4	7	51.8	95%N			
18	筑水市立田道筋路	H-D-18	生後柳原半	方形	2	5.95	4.5	26.775	76%H			
19	筑水市立田道筋路	H-D-19	大須賀前原半	方形	2	6	4.95	27.3	70%A			
20	筑水市立田道筋路	H-D-20	生後柳原半	方形	5.15	4.1	21.15	80%D				
21	筑水市立田道筋路	H-D-21	大須賀前原半	方形	2	5.5	4.5	24.75	80%E			
22	筑水市立田道筋路	H-D-22	生後柳原半	方形	3.65	3.5	7.625	67%N				
23	筑水市立田道筋路	V-3b-13	大須賀前原半	方形	4	6.94	6.3	43.727	91%D			
24	筑水市立田道筋路	V-3b-14	大須賀前原半	方形	2	4.5	3	13.5	67%D			
25	筑水市立田道筋路	V-2b-4	大須賀前原半	方形	2	4.2	4	16.8	95%N			
26	筑水市立田道筋路	V-2b-5	大須賀前原半	方形	2	4.2	4	16.8	95%N			
27	筑水市立田道筋路	V-3b-2	生後柳原半	方形	5	3.9	19.5	78%A				
28	筑水市立田道筋路	V-3b-10	大須賀前原半	方形	5.5	4.6	26.68	79%E				
29	筑水市立田道筋路	V-3b-11	生後柳原半	方形	5	5	4	24.5	65%N			
30	筑水市立田道筋路	V-3b-12	大須賀前原半	方形	4	6.5	6	39	92%N			
31	筑水市立田道筋路	V-3b-13	大須賀前原半	方形	4	6	6	36	100%E			
32	筑水市立田道筋路	V-3b-14	生後柳原半	方形	3.5	3.4	11.9	97%N				
33	筑水市立田道筋路	V-3b-15	生後柳原半	方形	5	5.2	3.8	19.76	73%N			
34	筑水市立田道筋路	V-3b-16	大須賀前原半	方形	4	5.7	5	28.5	88%E			
35	筑水市立田道筋路	V-3b-17	大須賀前原半	方形	3.6	3.6	13.96	100%N				
36	筑水市立田道筋路	V-3b-18	大須賀前原半	方形	6	5.8	21.8	97%E				
37	筑水市立田道筋路	V-3b-19	大須賀前原半	方形	4	5.5	4.5	24.75	80%E			
38	筑水市立田道筋路	V-3b-20	大須賀前原半	方形	4	7.35	7.55	53.2875	99%O			
39	筑水市立田道筋路	V-3b-21	大須賀前原半	方形	4	6.4	6.2	39.68	97%N			
40	筑水市立田道筋路	V-3b-22	大須賀前原半	方形	2	4.6	4.4	20.24	96%D			
41	下西田道筋路	1-1-27	生後柳原半	方形	4	5.9	5.8	31.22	98%E			
42	下西田道筋路	1-1-37	生後柳原半	方形	2	6.8	4.9	33.32	72%N			
43	下西田道筋路	1-1-39	生後柳原半	方形	2	4.9	4	19.6	82%N			
44	下西田道筋路	1-1-40	生後柳原半	方形	5.6	5	22.96	72%N				
45	下西田道筋路	1-1-41	生後柳原半	方形	4	5.9	5.5	27.05	97%N			
46	下西田道筋路	1-1-42	生後柳原半	方形	2	5.7	3.9	22.23	68%N			
47	下西田道筋路	1-1-43	生後柳原半	方形	2	5.8	4.8	27.84	82%N			
48	下西田道筋路	1-1-44	生後柳原半	方形	6.3	4.7	29.61	75%A				
49	大久保田道筋路	往1	生後柳原半	方形	2	7.05	5.4	38.07	77%A			
50	大久保田道筋路	往4	生後柳原半	方形	5.5	4.45	24.475	81%H				
51	大久保田道筋路	往7	生後柳原半	方形	2	3.7	2.7	9.99	72%N			
52	大久保田道筋路	往10	生後柳原半	方形	2	3.7	2.7	9.99	72%N			
53	大久保田道筋路	往11	生後柳原半	方形	4	4.0	7.32	54.168	99%N			
54	大久保田道筋路	往20	生後柳原半	方形	2	4.0	3.9	17.16	89%N			
55	大久保田道筋路	往21	生後柳原半	方形	2	7.25	4.5	32.625	62%C			
56	大久保田道筋路	往38	大須賀前原半	方形	4	8.2	7.4	60.68	90%E			
57	大久保田道筋路	往45	大須賀前原半	方形	4	7.5	6.7	50.25	89%H			
58	大久保田道筋路	往72	大須賀前原半	方形	2	4.6	4.2	19.32	91%N			
59	大久保田道筋路	往12	大須賀前原半	方形	5.4	3	21.75	80%E				
60	大久保田道筋路	往13	大須賀前原半	方形	2	4.0	3.9	15.6	89%N			
61	黒田八百石道筋路	往4	大須賀前原半	方形	4	5.9	4.55	26.845	77%D			
62	黒田八百石道筋路	往8	大須賀前原半	方形	6	6.45	6.24	49.48	97%N			
63	黒田八百石道筋路	往11	大須賀前原半	方形	5.56	4.29	23.8524	77%D				
64	黒田八百石道筋路	往1-2	大須賀前原半	方形	5.47	4.74	25.9278	87%E				
65	黒田八百石道筋路	往1-4	生後柳原半	方形	2	6.02	4.3	21.598	80%H			
66	黒田八百石道筋路	往1-5	大須賀前原半	方形	4	6.47	5.46	35.3025	84%E			
67	黒田八百石道筋路	往1-6	大須賀前原半	方形	5.5	4.15	21.7014	77%D				
68	黒田八百石道筋路	往1-7	大須賀前原半	方形	2	5.9	4.5	21.595	77%D			
69	黒田八百石道筋路	往1-9	大須賀前原半	方形	4	4.89	4.09	18.3237	91%N			
70	黒田八百石道筋路	往1-10	大須賀前原半	方形	2	5.51	4.76	26.2726	86%H			
71	黒田八百石道筋路	往1-16	大須賀前原半	方形	5.01	3.99	19.9809	80%E				
72	黒田八百石道筋路	往1-19	大須賀前原半	方形	3	5.96	4.32	25.7472	72%N			
73	黒田八百石道筋路	往1-10	大須賀前原半	方形	6	6.4	5.41	34.624	85%H			
74	黒田八百石道筋路	往1-11	生後柳原半	方形	2	5.33	4.2	22.386	79%D			
75	黒田八百石道筋路	往1-12	大須賀前原半	方形	3	5.05	4.95	20.9475	80%H			
76	黒田八百石道筋路	往1-13	大須賀前原半	方形	2	5.5	4.85	20.4275	77%D			
77	黒田八百石道筋路	往1-14	生後柳原半	方形	2	5.5	4.85	20.4275	77%D			
78	黒田八百石道筋路	往1-26	大須賀前原半	方形	4	6	5.65	33.9	94%E			
79	黒田八百石道筋路	往1-24	大須賀前原半	方形	4	5.9	5	29.51	85%E			
80	山ノ神道筋路	S/H0001	生後柳原半	方形	2	5.1	4.1	20.93	80%A	山川界外付属地3-3	萩木2002	
81	黒龍市木道筋路	往8	大須賀前原半	方形	3.85	3.2	12.32	83%N				
82	木ノ神道筋路	往23	大須賀前原半	方形	2	5.4	3.7	19.98	69%D			
83	木ノ神道筋路	往25	大須賀前原半	方形	2	6	4	24	85%E			
84	木ノ神道筋路	往26	大須賀前原半	方形	6	6.4	2.8	37.41	90%E			
85	木ノ神道筋路	往36	大須賀前原半	方形	6	6.6	6.1	46.36	92%E			

人見幸夫・鶴村貢之、2013「延永2年1月 国道跡一区[1-1]」一般社団法人鶴のマーク・園連会編成文庫滋賀文化財調査報告書第1集 九州歴史資料館

飛野伸文、2010「[滋賀] 佐久保田道筋路新規調査報告書」、延永2年1月 国道跡一区[1-1]」一般社団法人鶴のマーク・園連会編成文庫滋賀文化財調査報告書第1集 九州歴史資料館

城城編、2010「[滋賀] 佐久保田道筋路新規調査報告書」、延永2年1月 国道跡一区[1-1]」一般社団法人鶴のマーク・園連会編成文庫滋賀文化財調査報告書第1集 九州歴史資料館

岡田由編、2013「[延永2年1月] 国道跡一区[1-2-3]」編成文庫滋賀文化財調査報告書第238号 九州歴史資料館

飛野伸文編、2014「[延永2年1月] 国道跡一区[1-2-7]」編成文庫滋賀文化財調査報告書第44号 九州歴史資料館

延津教育委員会、2009「[みやこ町内遺跡群] 豊津町文化財調査新規報告書第6号 みやこ町教育委員会

平島義治、2000「[山ノ神道筋路] 豊津町文化財調査新規報告書第26号 豊津町教育委員会

平島義治、2000「[久保田道筋路群] 藤山町文化財調査新規報告書第9号 藤山町教育委員会

木下編、2007「[延永] 道筋・古寺正寺道筋路群」、編成文庫滋賀文化財調査報告書第6号 由田町教育委員会

平島義治、2012「[みやこ町内遺跡群] みやこ町文化財調査新規報告書第8集 みやこ町教育委員会

長嶺正秀・木永秀哉編、1985「[下西田道筋路] 行橋市教育委員会

延野2013

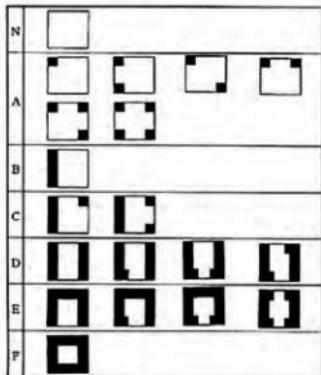
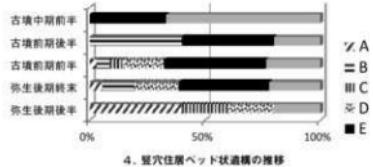
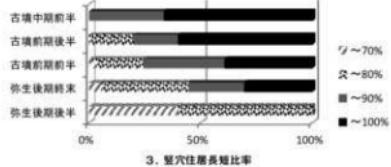
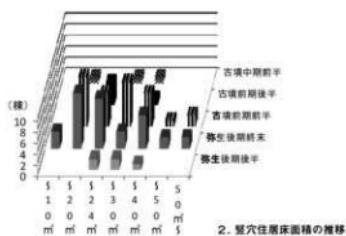
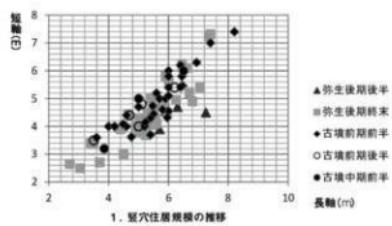
大庭編2014

岡田由編2014

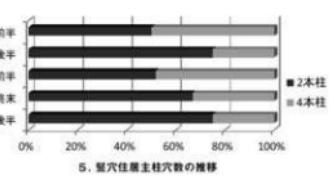
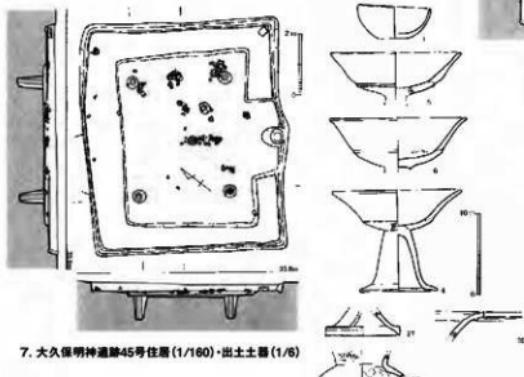
平島2009

木下編1987

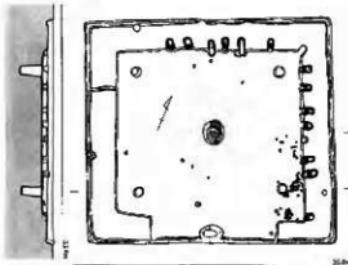
</



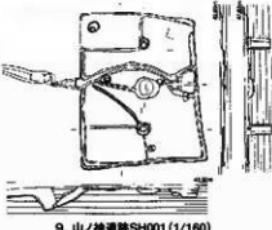
6. ベッド状遺構の分類(寺井絵文より引用)



5. 窓穴住居主柱穴数の推移



8. 大久保明神道跡38号住居(1/160)



第128図 延永ヤヨミ古跡周辺における窓穴住居跡の変遷 (1/6、1/160)

(2) 壁穴住居の分析方法

本稿対象時期における北部九州の壁穴住居については、寺井誠氏による先行研究があり（寺井1995）、本地域の位置づけを明らかにするために、寺井氏の分析手法に則って行うこととした。

寺井氏は分析対象とする壁穴住居の条件として、「全掘もしくはそれに準ずる程度に調査され、全貌を知ることができるものの」とするが、本稿では時期や主柱穴が明確でない壁穴住居跡も参考資料として第127図の一覧表に掲載した。この第127図では寺井氏による集成に倣い、平面形・主柱穴数・法量（長軸・短軸）・面積・長短比・ベッド状遺構型式の順に表を作成した。このうち、ベッド状遺構型式については、第128図左中の寺井氏の分類によるが、簡単に説明すると、A類は壁隅、B類は短辺の1辺、C類は短辺の1辺と壁隅、D類は両短辺、E類は三方、F類は四方に付設するものとし、N類はベッド状遺構のないものである。

(3) 本地域における壁穴住居の分析

第127図の一覧表から、第128図にある壁穴住居跡規模の推移・面積推移・長短比・ベッド状遺構の形態推移図を作成した。これらを基に本地域の壁穴住居の分析を行いたい。

まず、壁穴住居の平面形態と床面積・長短比の時期変遷をみると、弥生時代後期後半では該当資料数は5例と少ないものの、長短比では80%以下の平面が長方形のみで、床面積では30m²前後と小型のもののみで構成される。寺井氏は、豊前や筑豊では2本主柱の長短比の平均が80%以下を下回ることはほとんどないとするが、弥生時代後期後半の本地域では壁穴住居平面形態はより長方形を指向するということが明らかになった。

弥生時代後期終末では、壁穴住居規模が床面積25m²前後を境に大小に2分化する。先の寺井氏によると、豊前では2本主柱では床面積30m²を超えることはないとするが、本地域では後期終末段階で4例、古墳時代前期前半と後半で各1例ずつ30m²を超える壁穴住居が認められ、2本主柱と4本主柱の場合の床面積の平均はほぼ同じである。寺井氏による住居規模が大きなもの-4本主柱、規模が小さなもの-2本主柱という構成ができるのは、今回の分析では古墳時代前期前半からと、寺井氏の分析よりも本地域は若干時期が遅れて成立し、中期前半までこの大-4本主柱、小-2本主柱という構成が続いた。

また弥生時代後期終末段階の平面形態は、長短比の平均が80%を上回り、最大100%のものも出現するなど、この段階から正方形への指向が強まり、古墳時代前期前半・後半・中期前半と時期が下るに従い、より正方形への指向を強める。

次に壁穴住居ベッド状遺構については、まず本遺跡ではN類の割合が全体で4割弱となり高いが、(1)で先述したように上層遺構により削平された事例が多かったことによるものと考えられる。また床面積16m²以下の小型住居のうち9/11棟が本遺跡のもので、そのうちベッド状遺構N類5例は、壁穴住居壁穴部のみ検出し、その範囲を住居跡としたことによる可能性が高いと思われる。

ベッド状遺構の型式変遷は、弥生時代後期後半ではA・C・D類と住居に占める面積が低いもののみ認められるが、弥生時代後期終末にE類が出現し、古墳時代前期前半にはA・B・C類は減少する一方、前期後半にはA類はなくなり、中期前半にはE・N類のみになる。このことは時期が下るに従い、ベッド状遺構が壁際での占有率を増加させたとした寺井氏の分析と同様の結果である。しかしながら寺井氏の分析時には、豊前地域では資料数が少なく、古墳時代前期後半にはベッド状

遺構がなくなる結果になっていたが、その後の資料数の増加により、古墳時代中期前半段階にも4割近く付設されている状況が今回の検討で新たに判明した。

また古墳時代中期後半と考えられるみやこ町大久保明神遺跡21・45号住居（第128図7）ではE類のベッド状遺構が付設されていることから、寺井氏が指摘する伝統的床面区分が本地域内陸部では古墳時代中期にまで存続することは、本地域の社会構造を考える上で非常に注目される。なお、みやこ町大久保明神遺跡30号住居は、出土土器から古墳時代後期後半であるが、E類のベッド状遺構が付設される。床面積約90m²の大型住居で主柱穴が8本存在することから、特殊な用途が考えられ、概には比較できないものの、古墳時代後期までベッド状遺構を付設する意識が存在するということは先ほどの指摘と合わせ、本地域の特性を考える上で重要である。

本地域では、弥生時代後期終末以降、古墳時代中期までE類が4割近くを占め、このE類にベッド状遺構を付設しない一方の壁際に屋内土坑を付設するものがほとんどであることから、本地域の堅穴住居構造はE類+屋内土坑が一般的であり、この屋内土坑上に梯子をかけ入り口部を構成していた事例が多かったものと考えられる（城門2014）。

また床面積40m²を測る弥生時代後期終末のみやこ町黒田伊龍遺跡II8号住居は主柱穴が6本ある。古墳時代前期前半古相のみやこ町大久保明神遺跡38号住居は床面積60m²を測る超大型堅穴住居であるが、ベッド状遺構を掘り込み、その掘り込み内部には焼土・炭化物が堆積する状況を確認した（第128図8）。住居内仕切り溝ではない、特殊な構造物の存在を示すものとして注目される。さらに本遺跡I-15・16号住居跡、みやこ町山の神遺跡SH001などでは住居内溝が住居外まで延びる排水溝の存在が確認されており（第128図9）、本地域における堅穴住居の排水構造を考える上で重要である。

以上、寺井氏の分析手法に則り検討し、寺井氏の検討結果とほぼ同様の傾向となったものの、近年の資料数の増加により、本地域では古墳時代中期までベッド状遺構を付設する事例があることが確認されたことは重要な成果である。今年度末で本遺跡報告書4冊が刊行され、当該時期の堅穴住居の事例が格段に増えたことから、今後改めて検討の機会を持ちたい（大庭）。

【引用・参考文献】

寺井誠 1995「古墳出現前後の堅穴住居の変遷過程－北部九州の事例を基に－」『古文化談叢』第34集 九州古文化研究会

長嶺正秀 2008「瑞穂の国の成立II－豊前地方出土品－」 菊田町教育委員会

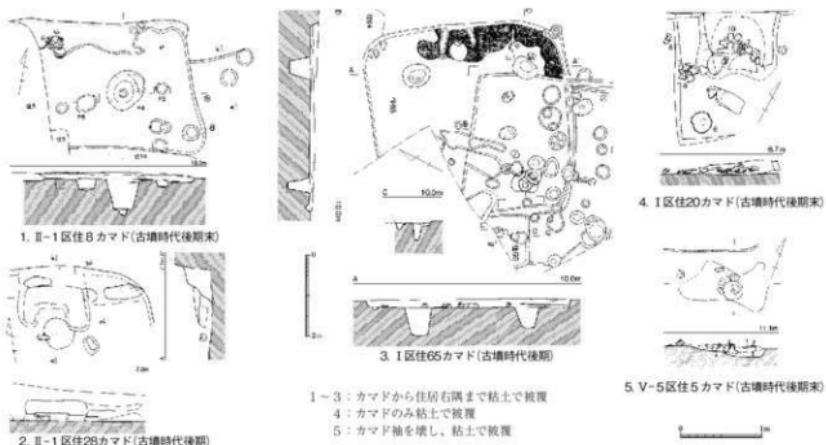
城門義廣 2014「V-4-(2) 住居跡入口の構造及び屋内土坑について」『東九州自動車道関係埋文化財調査報告 -11-』九州歴史資料館

3 カマドの廃絶行為について

（1）はじめに

カマドは古来より「火」に直接的に関わるものとして堅穴住居内で最も重要な箇所であり、堅穴住居を廃絶する際には火落とし及び火移しなどの一連のカマド祭祀において、カマド封じやミニチュア土器などを用いた祭祀行為が行われたと考えられている（武田1986）。

本遺跡におけるカマドは、集落としての最盛期にあたる6世紀後半～7世紀前半の堅穴住居に付



第129図 積穴住跡カマド廃絶行為の事例 (1/60、1/120)

設され、その付設される方角は住居の北及び西がほとんどである。この検出されたカマドでは、住居廃絶時にカマドを粘土で被覆、カマド袖をほとんど破壊、支脚を抜く、カマド内に土器を意図的に埋めるなど、多種多様なカマド祭祀行為が確認できる。これらのカマド祭祀行為のそれぞれの在り方について検討するには、まずはカマドをきっちり調査し、その情報を記録することが重要であるが、多種多様な在り方を示すカマドの調査は非常に難易度が高く、容易なことではない。

その中でIV-B区137号住跡カマドは、まず袖をほとんど壊し、その上に粘土を被覆しカマド封じ的な行為を行い、その粘土被覆を住居右隅まで行うという特徴的な事例を確認した。これまで報告された本遺跡のカマドの中にも類例を発見できたことから、以下ではこの特徴的なカマドの様相を若干検討してみたい。

(2) カマドから住居右隅まで粘土で被覆する事例について

まず137号住跡カマドでは両袖とも基底部まではほとんど壊し、土師器高杯を転用した支脚はそのまま、カマドから住居右隅にかけて黄白色粘土で被覆していた(第32・33図)。被覆行為は土層観察で住居埋土などの間層は確認できなかったことから一度で行われたと思われる。137号住跡カマドの廃絶行為としては、袖を壊す、粘土で被覆という2回の廃絶行為が確認できる。このような廃絶行為は、今年度報告の7世紀前半のIII-A・B区23号住跡カマド、古墳時代後期末のII-1区8号住跡カマド(第129図1)でも確認される。

またカマドから住居右隅まで粘土で被覆するのは同じであるが、袖を基底部までは壊さずある程度の高さを残すものに、古墳後期末の当区134号住跡カマド(第29図)、古墳時代後期のII-1区28号住跡カマド(第129図2)、I区65号住跡カマド(第129図3)が存在する。

以上のことから、カマド～住居右隅まで粘土で被覆する行為は、袖の破壊度及び支脚や土器などの遺物も粘土内に包含するかという細かな違いはあるが、古墳時代後期後半～7世紀前半に一定程

度存在するものの、古墳時代後期の堅穴住居数からすると1%に満たない割合であることから、特殊な事例であることがわかる。一方、カマドのみを粘土で被覆する事例は、古墳後期後半の当区139号カマド（第36図）、古墳後期末のI区20号住居カマド（第129図4）、V-5区5号住居跡カマド（第129図5）など一定程度の割合で確認されており、最終的にカマドを粘土で被覆する行為はある程度普遍化した存在であったと推測される。

では137号住居跡のように、カマドから住居右隅まで粘土で被覆する行為を行うかということについては、カマド右側がカマドにとって重要な空間を構成していたからこそ、粘土で被覆したという視点で考えるとこの行為の一様相が明らかにできると思われる。

古墳後期後半の当区140号カマド（第37図）やI区45号住居跡カマドが代表例であるが、カマド右側で瓶や甕といったカマドで使用した土器が発見されることが多く、カマド右側がカマドで使用する土器や薪の保管場所など、カマドを使う上での空間であったと推測される。このことは、当区137号住居跡住居南西隅から瓶や甕などの土器がまとめて出土しており（第32図）、カマド右側を粘土で被覆したためにカマド右側の位置より移動させたとも考えられる。

のことから、カマド右側がカマドを使うために必要不可欠な空間であったと考えられ、カマド右側まで粘土で被覆する行為が生まれたと推測される。なお、この事例は非常に少ないとから、食中毒など食に関わることなど特殊な要因に伴って行われた行為の可能性を指摘しておきたい。

（3）おわりに

カマドの調査は難易度が高い上に、袖とほほ同じ粘土でその上を被覆する本事例はさらに困難な調査であること、後から考えるとカマド内外の粘土被覆下に有機質などの情報が残されていた可能性もあるなど、カマド自体の調査を改めて痛感させられた。この事例は、当時のカマドに対する思いのみならず、カマドと密接に関係する空間の封じこめという、堅穴住居内部の空間使用の一部も明らかになったといえよう。

また近年報告書が刊行された行橋市長井丸尾遺跡堅穴住居1は古墳時代後期、みやこ町黒田八田ヶ坪遺跡11号住居跡は7世紀前半の、オンドル状煙道を持つカマドであることが確認されている。

今後本遺跡を含む行橋市・みやこ町の過年度調査の報告書が続々刊行される計画であることから、本例のようなカマドの事例も増加すると考えられる。今後の調査の進展に期待したい（大庭）。

【引用・参考文献】

武田光正 1986「A. 古墳時代後期の堅穴住居と遺物に関する問題」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告8』
福岡県教育委員会

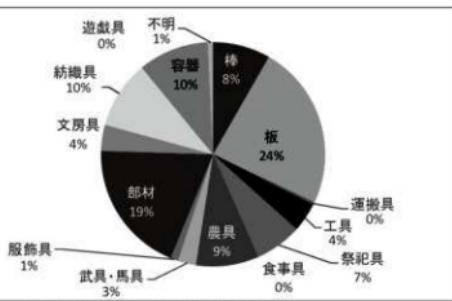
4 木製品について

IV-C区では土坑や包含層より多数の木製品が出土した。出土木製品を種類別に示したものが第130図である。器種不明品である板状器具材が最も多いが、次に部材・容器類・紡織具・農具と続く。しかしながら、遺構外出土の加工痕がほとんど見えない板状器具材は実測しておらず、細片になっていた遺物等もあり、どの程度実際の出土比を示しているものなのか不明である。時期は包含層出土のものは弥生時代後期～古墳時代後期・古代・中世のものが含まれる。個別では遺構出土のもの

以外は不明であるが、形態に特徴がある遺物を見ると、古墳時代後期～古代に属するものが多い傾向にある。

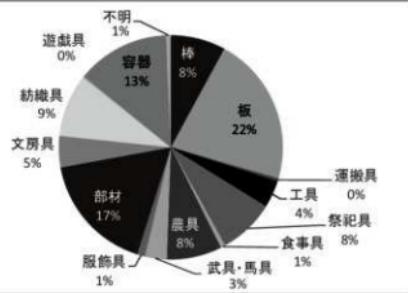
個別に見ていくと、運搬具は輶のみで、工具は砧・木槌・羽子板状木製品などが出土している。砧はいずれも円筒形のもので、1点は古墳時代後期に属するものである。祭祀具は形代・燃えさしが出土しており、形代に関しては人・馬・舟・刀など多種類が認められる。人・馬・鳥形はいずれも薄い板状を呈しており、古代以降に属するものと考えられる。農具は鍬や泥除けと考えられる未製品・ねずみ返し・大足などが出土しており、稻作関係資料が多く見つかっている。平鍬のうち1点は先端に鉄製鋤先を装着した痕跡が残るもので、古墳時代後期以降に属するものであろう。武器・馬具類は盾・鞍・鎧などが出土している。鞍は横幅に対して、綾幅が短い鞍が出土しており、形態的には古墳時代に属するものである。実際に1点は古墳時代後期の土坑から出土している。また、他の1点は黒漆が塗布された優品であり、これも古墳時代後期～飛鳥時代頃に属するものであろう。鎧は細長い刺りこみを持ち、踏み込み部には棒を差し込んでいたものと考えられ、古墳時代後期以降に属するものか。III-C区と共に鞍と鎧が出土しており、また、III-C区で鎧の未製品も出土していることから、当地で生産を行っていたものと考えられる。服飾具は衣笠・下駄が出土している。衣笠は時期不明であるが、古墳時代の首長の存在を示唆する遺物といえる。下駄は、形態的に古墳時代後期～古代の所産と考えられる。部材は9世紀の1号井戸から出土した井戸枠がほとんどであり、その他には、杭・梯子などがわずかに見られる。文房具は木簡の他、付札と考えられる荷札が出土している。紡織具は編錐がほとんどを占め、糸巻きが1点出土している。編錐は他にも小片が

IV区	N=267
棒	22
板	63
運搬具	1
工具	11
祭祀具	18
食事具	0
農具	24
武具馬具	7
服飾具	3
部材	51
文房具	12
紡織具	26
遊戲具	0
容器	27
不明	2



第130図 IV-C区出土木製品割合

III・IV区	N=441
棒	35
板	95
運搬具	2
工具	17
祭祀具	36
食事具	3
農具	35
武具馬具	14
服飾具	5
部材	76
文房具	20
紡織具	40
遊戲具	1
容器	59
不明	3



第131図 III・IV区出土木製品割合

出土しており、本来はより多くの出土品があったものと考えられる。形態的にはリボン形のものとダンベル形、木柱に刻みを入れたタイプがあり、リボン形のものはさらに独楽をつなぎ合わせた形態の太い円筒状のものと細身のものに分かれる。1ヶ所に孔をあけるタイプのものは出土しておらず、このような形態差が何に起因するもののかは明らかではない。ただ、後述する京築地区内の他の時期を含む、他遺跡でも認められず、地域的な特徴である可能性もある。容器類は曲げ物板が多く、槽・盤が各1点見られる。地域内では古墳時代まで剣物が多いという指摘もあり、曲げ物類に関しては古代以降の所産である可能性があり、実際9世紀を主体とする1号井戸から1点出土している。板状器具材の中に、容器類の板が含まれている可能性があり、数はこれより多くなると考えられる。棒状器具材の中には、農工具の柄などが含まれる可能性がある。

Ⅲ・Ⅳ区共に数量を示したものが第131図である。Ⅲ-C区の木製品も合わせたものだがほとんど傾向は変わらないと言える。東九州自動車道の建設に係る調査を行ったⅠ・Ⅱ区でも中世の部材・井戸枠・桶ならびに古代の斎串などが出土しているが、点数はⅢ・Ⅳ区に比べて少なくこの傾向が大きく変わることはないと考えられる。

以上のように、多くの種類の木製品が出土しているが、時期がわかるものが少なく、時期ごとの出土量比や変遷は不明である。そこで他に京築地区内で木製品がある程度まとまって出土する遺跡を概観し、本遺跡の特徴をつかみたい。行橋市下稗田遺跡では弥生時代前期の木製品が出土しており、農具や案・矢板・杭などがある。築上町安武深田遺跡では奈良時代の編錘、弥生時代の杓子などが出土し、同町の宇留津川角遺跡では5世紀代に属する農具・部材が700点以上出土している。みやこ町池田遺跡では古代の築堤遺構内から杭や木橋が出土し、同町末江下前田遺跡では5世紀中期の溝から木製品が出土しており「水辺の祭祀」の可能性が指摘されている。上毛町ハカノ本遺跡では13世紀後半～14世紀前半の溝から農具や建築部材が出土している。同町安雲山田遺跡では6世紀末～7世紀初頭の農具や建築部材が出土している。苅田町馬場長町遺跡では8世紀末～9世紀初頭の建築部材が出土し、同町雨窪遺跡群では8世紀後半～9世紀前半と考えられる部材が出土している。

京築地区内の木製品を概観すると弥生時代前期・古墳時代中期の出土例が多く、古墳時代後期後半～古代の事例もいくつか認められる。基本的に形態は、他遺跡の古墳時代中期～古代例と本遺跡例で大きく差異はなく、農具や部材、容器類、編錘が出土していることも同様である。ただ、斎串や形代などの祭祀関連遺物や鞍・鏡といった武具・馬具関連遺物は他の遺跡ではほとんど認められず、黒漆を塗布した鞍などの精製品も同様に認められない。これらは、古墳時代前期や古代において、導水施設による祭祀を行っていた首長、「津」の管理を行っていた郡関連官衙の影響によるものと考えられ、本遺跡の特徴を木製品でも示していると言える。今後、時期の分かる資料が増えた段階で再検討が必要だろう（城門）。

【参考文献】

- 岩瀬透編 2012『都屋北遺跡Ⅱ』大阪府埋蔵文化財調査報告2011-1 大阪府教育委員会
木下修・水ノ江和同編 1991『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告4』福岡県教育委員会
木村達美・井上信隆編 2007『みやこ町内遺跡群Ⅰ』みやこ町文化財調査報告書第2集 みやこ町教育委員会
木村達美編 2008『みやこ町内遺跡群Ⅱ』みやこ町文化財調査報告書第3集 みやこ町教育委員会
佐藤浩司 2006『豊前地域における弥生・古墳時代の木製品』『行橋市史 資料編』pp.831-871, 行橋市史編纂委員会

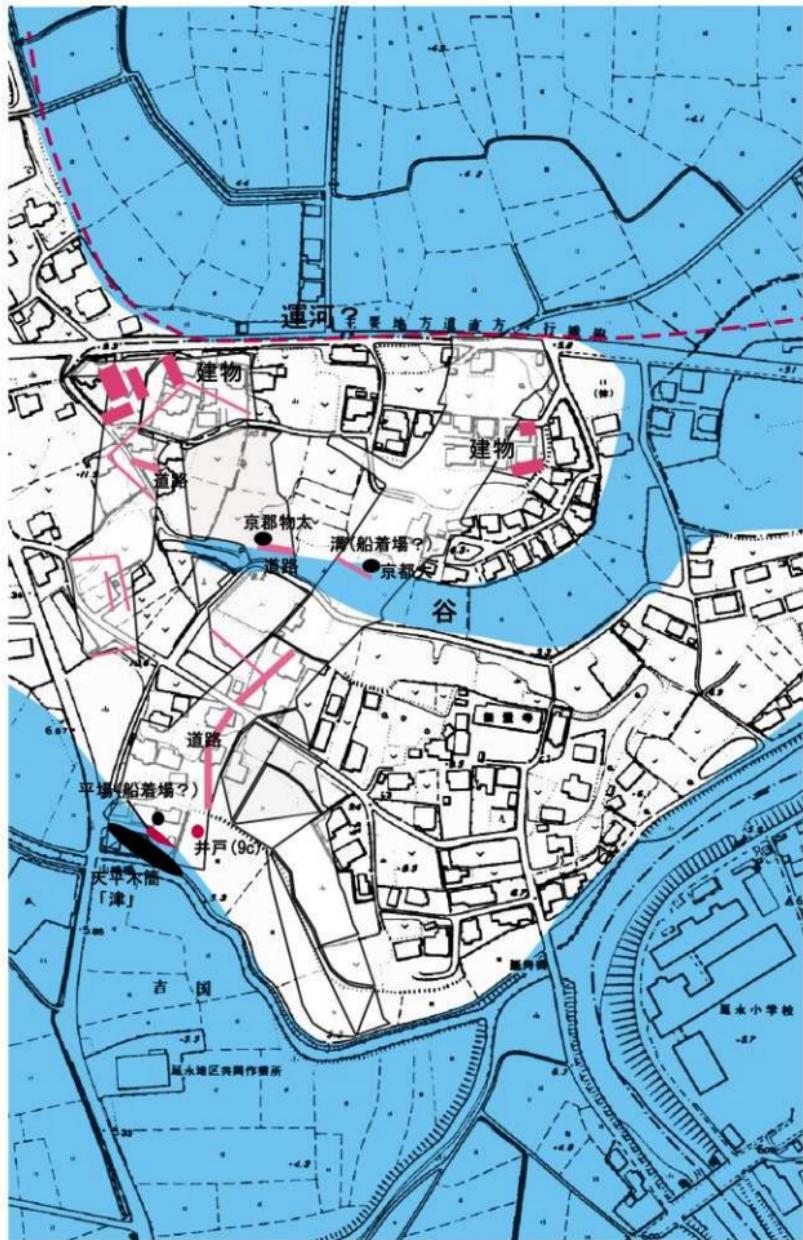
- 秦憲二編 2013『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告4』九州歴史資料館
- 秦憲二編 2013『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告7』九州歴史資料館
- 飛野博文編 2004『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告1』福岡県教育委員会
- 長嶺正秀・末永弥義編 1985『下神田遺跡』行橋市文化財調査報告書第17集 行橋市教育委員会
- 細川修平編 2014『蛭子田遺跡2』滋賀県教育委員会・公益財團法人滋賀県文化財保護協会
- 本村充保 2006『遺跡出土下駄の全国集成に基づく編年および地域性の抽出に関する基礎的研究』『櫛原考古学研究
所紀要 考古學論叢』29:pp.1-95. 奈良県立櫛原考古学研究所
- 本村充保・高橋敦 2009『遺跡出土下駄に関する製作技法および使用樹種に関する基礎的研究』『櫛原考古学研究
所紀要 考古學論叢』32:pp.53-83. 奈良県立櫛原考古学研究所
- 山田昌久編 2003『考古資料大観8 木・織維製品』小学校
- 山田良三 1994『古代の木製馬鞍』『櫛原考古学研究所論集第十二』(櫛原考古学研究所編) pp.35-59. 吉川弘文館
- 山本輝生編 2001『日奈古・宇留津周辺の遺跡と岩丸・福間の遺跡』椎田町文化財調査報告書第11集 椎田町教育
委員会

5 延永ヤヨミ園遺跡における津の考古学的状況

本調査区では包含層からであるが「津」と記された墨書き器が出土し、「類聚三代格」に記述のある「草野津（かやのつ）」である可能性が高いことがわかった。これまで出土木簡などによつて本遺跡付近に「草野津」が存在したことは指摘されており（酒井・松川2010）、実際に「津」という文字が出土したこと、裏付ける形となつたと言える。文献史料上の検討については、6で記述することから、ここでは、考古学的に確認できる「津」の状況について検討する。

延永ヤヨミ園遺跡で検出された古代に属する遺構は第132図の通りである。遺跡北西端（V-2・II-2区）ならびに北東端（III-A B区）では7世紀後半～末頃の建物群が検出されており、北西では建物の軸から2時期あることが想定されている。いずれも側柱建物である。遺跡中央の谷部から西側に向かって（II-1区）、また谷部と南側の低地部をつなぐ形で（IV-A・B区）道路状遺構が検出されている。7世紀末～8世紀には確實に機能しており、一部10世紀まで存続したと考えられる。中央谷部（II-1・III-C区）ならびに南側低地部（IV-C区）で井戸が検出され、中央谷部の井戸からは「京都大」「京都物太」の墨書き器ならびに木簡、馬骨等が検出されている。時期は7世紀後半～8世紀代のものが多く、南側では、9世紀を主体とするものが検出されている。丘陵西側では溝状遺構が検出されており、道路状遺構と直行する溝やコ字形を呈するものなど、区画と考えられる溝も検出されているが、内部に建物等は見つかっていない。中央谷部では、杭が多数打ち込まれた状態で検出された船着場の可能性もある溝1条（III-C区）も検出され、7～8世紀に属する。南側低地部（IV-C区）では包含層から「天平六年」銘木簡や「津」の墨書き器が出土し、その北側では比高差60cm程の低地部に突き出す平場が検出されており、これも船着場の可能性がある。遺跡北西に位置する延永水取遺跡では、丘陵裾部で同じく古代に属する運河状の溝が検出されており、椿市廃寺に向かう交通路と推測されている。本遺跡北側でもそれに続く運河状の遺構が存在していた可能性があるが試掘調査等では確認できなかった。

港や運河状の遺構は、古くは長崎県壱岐市原の辻遺跡で弥生時代中期の貼石をもつ船着場遺構が



第132図 古代遺構概略配置図(1/2,500)

文字	遺跡名	所在地	備考
1 津津	前沢跡	岩手県北上市	
2 □(津)	秋田城跡	秋田県秋田市	
3 大津郷	私田柵跡	秋田県大仙市	
4 津	沼田遺跡	山形県酒田市	
5 □船津運十人	古志田東遺跡	山形県米沢市	木簡
6 津長	荒田目条里遺跡	福島県いわき市	木簡
7 川津	宿宮前遺跡	埼玉県さいたま市	
8 津	戸ノ坪遺跡	新潟県胎内市	
9 津	四十石遺跡	新潟県新潟市	
10 池津	中船遺跡	新潟県燕市	
11 津	戸水C遺跡	石川県金沢市	
12 津司	戸田寺中遺跡	石川県金沢市	
13 津	戸田寺中遺跡	石川県金沢市	
14 津三	中保B遺跡	富山県高岡市	
15 船津	村国遺跡	福井県越前市	
16 (津・港)	三の宮遺跡	長野県松本市	
17 □(津)	坂尻遺跡	静岡県袋井市	
18 岐津	坂尻遺跡	静岡県袋井市	
19 津	伊場遺跡	静岡県浜松市	
20 □(志)津	永田遺跡	滋賀県高島市	
21 広津	鴨遺跡	滋賀県高島市	
22 広津弥	鴨遺跡	滋賀県高島市	
23 太津	袖井遺跡	三重県桑名市	
24 中津家	長曾根遺跡	大阪府堺市	
25 馬津	良田平田遺跡	鳥取県鳥取市	
26 □口	出雲國庁	鳥取県松江市	
27 開津	宝満山遺跡	福岡県太宰府市	刻畫
28 津口	駄の原遺跡	熊本県山鹿市	地名か
29 津	延永ヤヨミ園遺跡	福岡県行橋市	草野津

第 14 表 「津」 茗資料出土一覧

るとしている。また、港湾遺構を集成する過程で、①港湾遺跡関連文字資料、②河川や低地から出土する祭祀遺物、③運搬具としての俵の製作道具である木鍤（網鍤）の出土という共通点が認められることを指摘している。根津明義氏（根津 2005）は港湾遺跡と認識する際の指標を示しており、上記に含まれないところでは、⑤乗降場と考えうる硬化面や、これに該当する施設が伴うこと、⑦船またはその道具類が検出されること、⑧船または船道具を収蔵する施設や、あるいは船を修繕するドックなどが近隣に所在すること、⑪倉庫群や道路遺構、その他木簡をはじめとする文字資料など、船着場との関連が考えられる検出物や蓋然性との総合的機能論から、当該遺構を船着場と判断することが出来ること。などを挙げている。

このような条件において延永ヤヨミ園遺跡で検出された遺構・遺物がどのような状況であるかを検討したい。まず、埠頭遺構に関しては先に述べたように、明確ではないながらもⅢ-C区の中央谷部で杭の立てられた溝、IV-C区で平坦面が認められる。また、船の航行する水域に関しては、中央谷部では珪藻分析によってジメジメとした湿地性の環境が復元されており、上層では汽水性の珪藻も確認されている。丘陵南側に関しては、付近を山崎川が流れおり、IV-C区南側の試掘調査で湿地性の土壌が確認されている。また丘陵北側には場所は不明確ながらも運河の存在が予想されることから、第 132 図のように中央谷部・丘陵南側と共に船でアクセスできる環境であったと推測される。管理施設や保管施設については、官衙的な建物が丘陵北西側のV-1・2区で確認されているものの、倉庫群に関しては未検出である。谷同士をつなぐように道路状遺構が検出されている

検出されているものの、古代においてもそれほど大規模な埠頭は例がない。本遺跡と同様「津」字墨書土器が出土している遺跡（第 14 表）を見ても、古代の港遺構は河川の開削により船溜りを作ったり、平坦面を作ったり、係留用の杭を敷設したような簡単な構造のものが普遍的であったと考えられる（船着場遺構に関しては『延永ヤヨミ園遺跡Ⅲ区Ⅱ』参照）。

船着場遺構以外の要素を加味した上で港湾遺跡の認定条件として井上尚明氏（井上 2013）は、①埠頭遺構が存在する、②船が航行、停泊する水域が存在する、③監理・物資保管などの施設が存在する、という 3 点を挙げており、これに港湾遺跡と関連する遺物の出土をもって補強の材料とする

ことから、その周辺に存在していたものと考えられるが、調査区外に延びている可能性も否定できない。

遺物に関しては、古墳時代後期に属するものであるが準構造船の堅板が中央谷部で出土している。そのため、少なくとも 6 世紀代までは船でアクセスできる環境であったことは間違いない。文字資料では「津」の墨書土器が検出されており、また郡符木簡の存在から、郡の役所的な機能があったことが示されている。祭祀遺物については、中央谷部および南側低地部で斎車のほか人形・馬形・鳥形・舟形などの形代が検出されており、II-1 区で井戸内から出土した馬骨も祭祀性が示唆されている。蓄を編む編錐に関しては、図化した中でも 30 点を越える点数が出土しており、米に関する物資を運搬していた可能性が指摘できる。

以上のように、延永ヤヨミ園遺跡では港に関連する考古学的物質がある程度まとめて検出されおり、後に述べる文献史学の研究成果とあわせて考えると、『類聚三代格』に記述のある「草野津」であることは間違いないものと考えられる。ただし、「公私の船」が「意に任せて往還」していたと記述されることから、港に欠かせない倉庫が多く必要と想定され、今後周辺の調査を含めて検討が必要である。また、「草野津」は日常的な管理主体が郡としても、根本的には豊前国の国津と考えられることから、官道からアクセス可能であったことは間違いくなく、みやこ町付近から刈田駅に抜ける官道と共に、津にいたる交通網の検証も必要であろう（城門）。

【参考文献】

- 安東勉 2001 「原の辻遺跡と港」『考古学ジャーナル』474: pp.7-10. ニュー・サイエンス社
- 飯坂盛泰編 2002 「蔵ノ坪遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第 115 集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 伊藤雅文編 2005 「金沢市歓田西遺跡群VI」石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 井上尚明 2012 「古代東国社会の成立と展開」
- 井上尚明 2013 「古代の運河と港湾遺跡」『古代交通研究会第 17 回大会資料集 古代の運河』pp.47-58. 古代交通研究会
- 岡寺良編 2002 「宝満山遺跡群 浦ノ田遺跡Ⅲ」福岡県文化財調査報告書第 169 集 福岡県教育委員会
- 熊本県教育委員会 1983 「上鶴頭遺跡」熊本県文化財調査報告第 63 集
- 酒井芳司・松川博一 2010 「福岡・延永ヤヨミ園遺跡」『木簡研究』32: pp.110-113. 木簡学会
- 館野和己編 2002 「飯塚遺跡」大分県国東町文化財調査報告書第 26 集 国東町教育委員会
- 飛野博文・小池史哲編 2001 「農林漁業用揮発油税財源身替農免農道関係埋蔵文化財調査報告」福岡県文化財調査報告書第 159 集 福岡県教育委員会
- 飛野博文編 2014 「延永ヤヨミ園遺跡 V-4 ~ 7 区」福岡県文化財調査報告書第 244 集 九州歴史資料館
- 長嶺正秀編 2010 「刈田町歴史資料館特別展 豊前地方の遺宝 律令時代と豊前国」刈田町教育委員会
- 根津明義 2005 「内陸の水上交通にかかる考古学の一視点-主に船着場遺構への認識をめぐって-」『石川県埋蔵文化財情報』13: pp.37-39. 財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 山本崇・高尾浩司 2014 「鳥取県良田平田遺跡の出土文字資料」『奈良文化財研究所紀要 2014』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
- 黒板勝美編 1974 「新訂増補国史大系 類聚三代格」吉川弘文館

6 木簡・墨書き土器からみた延永ヤヨミ園遺跡

ここでは木簡・墨書き土器をはじめとする出土文字資料を中心として、文献史料からみた延永ヤヨミ園遺跡について述べることにする。本遺跡は、京都平野の西寄り、東に開いた馬蹄形をなす丘陵上に位置する弥生時代後期から古墳時代の大規模な集落遺跡、古代の官衙（役所）関連遺跡であり、杭が多数打ち込まれた船着場と推測される溝や谷に向かう道路状遺構など、遺構からも港湾と関係する施設である可能性が十分に考えられている。

加えて本遺跡では、木簡や墨書き土器が出土し、その性格を明らかにする大きな手がかりを得た。179-1は京都郡不知山里（諫山郷）から納められた税物の荷札である。不知山里の下に人名があるかもしれないが、判読できない。裏面の物品名は、数量の単位が「束・把」ではなく、「石（斛）」であることから、穀穂（穂首狩りした穂の穂先）ではなく、穀とみられるので、糲と考えておく。この税目は何であろうか。「延喜式」主計上2諸国調には、正丁1人の調として米6斗とあり、同じく主計上3諸国庸には、正丁（21歳から60歳までの成人男子）1人の庸として米3斗とある。1斛=10斗=100升なので、これらを数人分組み合わせても、ちょうど1斛にはならない。したがって、調や庸の米ではないとみられる。

『令集解』田令1田長条の古記が引く慶雲3年(706)9月10日(『類聚三代格』では20日付)格から、田1町(10段)の租稻は15束で、田令3口分条から男が受給する口分田は2段であるから、男が納める租稻は3束となる。田長条の義解などから1束の稻をつくと米5升を得るとされるので、男1人分の租稻を糲に換算すると、米1斗5升となる。口分条から女の受田額は男の3分の2なので、この租稻を糲につくと、米1升となる。男女数名分が納めた租稻をついて春米としたのであれば、1斛という数量を得ることはできる。田令2田租条の古記・穴記・朱説が引く貞説などによると、京に運ぶ春米は、①あらかじめ田主（口分田を授けられた男女）が租稻をついた上で役所に納める、②納入された後に役所が田主に返して、つかせて納めさせる、③今行事として納められた後に役所が功賛を支給して、つかせて運ぶという方法がとられた。したがって、この荷札は①または②の方法で不知山里から数人分の春米をまとめて納める際に付けられたものであろう。

ただし、神護景雲2年(768)7月28日以前には、西海道の五位国司と国司を兼帶する諸司の官人(在京)の位祿と季祿料の春米は、西海道から運び出して京に輸送することが禁じられていた(『類聚三代格』卷6、大同4年〔809〕正月26日付太政官符)。したがって、この米は不知山里から京都郡に納められた後、西海道内の各國司の元へ運ばれて行ったのだろう。または後にみると、豊前草野津から勝手に西海道外へ船で運び出された可能性もある。

いずれにしても、この荷札は、郡名が書かれていないことから、京都郡内での輸送を前提としたものであり、米が京都郡から別の場所に運ばれる際に外されて廃棄されたものとみられる。そのことは荷札が出土した本遺跡が京都郡衙の関連施設であることを示唆する。179-3の呪符が出土していることからも、本遺跡が官衙的施設である可能性が高い。

118-3は荷札の可能性があるが、9斗という税物の数量からは、調・庸の米であるか、租をついた春米であるかは判断しがたい。「戸」は川部嶋山が所属する戸を意味し、上に戸主の名前があつたのだろう。天平6年(734)10月18日の紀年銘を持つことは重要で、本遺跡がこの頃に官衙として機能していたことがわかる。

この他、8世紀後半の京都郡大領（長官）を意味する「京都大」銘墨書き土器（土師器）、8世紀前半の京都郡物部大領を意味する「京都物太」⁽³⁾銘墨書き土器（須恵器）が出土した。隣接する企救郡大領に物部臣今繼（9世紀前半の北九州市長野角屋敷遺跡出土木簡）、『日本書紀』雄略天皇18年8月戊申条に筑紫聞物部大斧手といった人物が知られ、この地域の首長として物部氏がいたことも知られている。以上より、この墨書き土器からも本遺跡が京都都衙関連施設であり、大領が執務することもありうる施設であることがわかる。

118-4は、京都郡が発給した郡符であり、「少長」は京都郡鎮の指揮官である小長とみられる。筑前・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後の西海道6国においては、軍団兵士が上番して大宰府常備軍の兵士となっており、この差遣をつうじて大宰府は管轄下諸国に対して兵力を動員する権限を掌握了。大宰少弐藤原広嗣も乱を起こす際に、この権限を最大限に利用している。⁽²⁾登美・板櫃・京都郡の三鎮は本来、制度的に大宰府の管轄下にあった軍事拠点とみられ、このため大宰少弐であった広嗣は豊前三鎮を指揮下に置くことができた⁽³⁾。この他、三鎮は軍団の所在地や防人の駐屯地といった説、さらには本来、大宰府ではなく、西海道節度使の軍事拠点であり、節度使が天平6年（734）4月21日に停止された後に、その職務が大宰府に引き継がれため、鎮は大宰府の支配下に置かれたという見解もある。⁽⁴⁾いずれの説にしても、符の宛所が鎮であった場合は、京都郡の権限を越えた案件の可能性があり、発給主体は大宰府か豊前國であろう。ただ、木簡からは符の宛所である郡首某と少長との関係が明確に判読できないため、宛所が鎮であったとは断定できない。

さらに、郡符木簡の多くが宛所から召喚された人とともに移動し、発給主体に戻って廃棄されることをふまえると⁽⁵⁾、本遺跡が京都都衙関連施設とみられることから考えて、118-4は、京都郡が発給した郡符とみるのが穏当であろう。その場合、郡首某に命令された内容は、少長に関わる事項であったと考える。なお、広嗣の乱の際、京都郡鎮の指揮官が鎮長のみだったのが、118-4にみえるように、京都郡鎮にも大長・小長が置かれた時期があった。その時期は確定しがたいが、あえて言えば、鎮が充実する時期は、節度使体制下であろうから、天平6年以前であったと考えておく。

そして本遺跡付近には、『類聚三代格』巻16、延暦15年（796）11月21日付太政官符が引く天平18年（746）7月21日付太政官符で、豊前国崎津・豊後坂門津とともに「官人・百姓・商旅之徒」が意に任せて往還し、ほしいままに国物を運び出すことを禁止した豊前草野津があつたと推定されて来た。遺跡の東北東約1.2kmには草野の地名が残る（現在の草野は奈良時代には海中であった）。

景行天皇の巡幸説話でも、天皇は周芳の姿⁽⁶⁾（現在の山口県防府市佐波）から船で長崎県（福岡県行橋市長尾）に入り、この地を京と名付けたと伝える（『日本書紀』景行天皇12年9月戊辰条。京都郡の地名起源説話）。景行天皇の巡幸説話は、661～3年の百濟救援戦における齐明天皇の筑紫行幸に構想を得たとされ、そのルートは7世紀半ば過ぎの状況を反映している。また九州でもっとも早い4世紀代から畿内型古墳の前方後円墳（京都郡刈田町・石塚山古墳）が築かれたよう、豊前地域は古くから近畿と九州を結ぶ海上交通において、九州の玄関口だった。このように本遺跡が所在する京都郡は、7世紀以前から海上交通の拠点として機能していたのである。118-3に川部嶋山がみえるので、漁獵や航海技術を生業として来た川部が京都郡周辺にもいたことがわかる。7世紀以前から8世紀以降の草野津の時期にかけて、川部の一族は京都郡地域の水上交通や港湾施設の活動を支えていたのだろう。

郡符木簡を出土した遺跡として、静岡県浜松市伊場遺跡、滋賀県野洲市西河原遺跡、福島県いわ

き市荒田目条里遺跡といった、港湾などの郡家関連施設がみられることは注目される⁽⁷⁾。これは本遺跡が草野津であり、津が日常的には京都郡の管轄下に置かれていた蓋然性を高める。一般に地域の港湾施設は、地域の有力者の支配拠点でもあった。石川県金沢市畝田・寺中遺跡（加賀郡管轄の津司関連遺跡）や荒田目条里遺跡（磐城郡司の拠点である津関連遺跡）の事例から、地域首長の地域支配拠点は河川と結び付き、その河川を活用するために津を設定したことが知られている。そして、9世紀前半の土師器である「津」銘墨書き土器の本遺跡からの出土が確認されたことは、延永ヤヨミ園遺跡が草野津であることを決定付けた。発見された掘立柱建物6棟は7世紀後半～末のもので、船着場とみられる溝は7～8世紀のものである。118-3木簡から天平6年（734）前後に本遺跡が官衙として活動していたことが知られる。8世紀以降の建物は調査区外にあるのだろう。

文献史料によっても『日本書紀』の景行天皇の巡幸説話から7世紀後半より京都郡は、九州と近畿地方を結ぶ瀬戸内海の海上交通の拠点であったことが知られ、また『類聚三代格』から草野津は少なくとも天平18年（746）から延暦15年（796）まで機能していたことが確実である。すなわち草野津はおそらく前身から含めて港湾施設として、7世紀後半から8世紀末まで継続して稼働していたとみてよい。「津」銘墨書き土器はその直後に続く時期の資料であり、この施設が9世紀以降も含めて草野津であったとする根拠として差支えない。

先の『類聚三代格』巻16、延暦15年11月21日付太政官符にあるように、過所（通行証）は大宰府が発行し、これによって大宰府が西海道から物資を無断で運び出すことを規制した。実際の豊前・豊後三津での確認は、現地の官衙が行うことになる。鈴鹿・不破・愛發の三閻や長門閻は、閻の所在地の国司が管掌していた⁽⁸⁾。本遺跡は豊前国府跡（京都郡みやこ町豊津）とも近い。したがって、三閻等に準じれば草野津を管轄する現地の官衙は豊前国司であったろう。ただし、本遺跡出土の木簡や墨書き土器の検討成果をふまえると、草野津の日常的な運営は、京都郡衙によって、地域首長の港湾施設と一体的に行われていた可能性が高いものと考えるのである（酒井）。

【注】

- (1) 前田義人「福岡・上長野A遺跡」（『木簡研究』20、1998年）214～5頁
- (2) 松川博一「大宰府軍制の特質と展開—大宰府常備軍を中心にして」（『九州歴史資料館研究論集』37、2012年）41頁
- (3) 長洋一「広嗣の乱と鎮の所在地」（『九州史学』79、1984年）3頁
- (4) 北條秀樹「初期大宰府軍制と防人」（『日本古代国家の地方支配』吉川弘文館、2000年）185～9頁
- (5) 平川南「郡符木簡」（『古代地方木簡の研究』吉川弘文館、2003年）190～1・196頁
- (6) 津田左右吉「クマゾ征討の物語」（『日本古典の研究 上』1948年）177頁、永山修一「南九州の古代交通」（『古代交通研究』12、2003年）24・26頁
- (7) 注4と同じ
- (8) 平川南「古代における地域支配と河川」（『律令国郡里制の実像 下』吉川弘文館、2014年）248～9頁
- (9) 森哲也「下閻の成立」（『下閻市市史編集委員会編』『下閻市史・原始一中世』下閻市、2008年）279頁

7 出土木製品の樹種同定

(1) はじめに

延永ヤヨミ園遺跡IV-C区の調査では大量の木製品が出土している。本稿ではこれら木器の樹種同定の結果と器種による用材傾向について報告する。

延永ヤヨミ園遺跡は福岡県行橋市延永・吉国に位置する弥生時代後期から古墳時代・古代・中世にかけての集落跡である。遺跡は低丘陵上の全面に展開し関連遺構は谷地にまで広がっており、弥生時代末～古墳時代を中心とする集落としては県下でも有数の規模をもつ遺跡である。出土遺物は、弥生時代終末～古墳時代初頭、古墳時代後期、古代、中世の土器などが多数出土しており、木製品では容器・農具・工具・紡織具などの他に「戸川マ鳴山 九斗 天平六年十月十八日」と人名と日付が記された木簡などが出土している。また、隣接するIII-C区からは古墳時代後期の大型導水施設や奈良時代の「津」の文字が書かれた墨書き土器などが出土しており重要性が指摘されている。

遺跡内の調査区はI～V区にわかれ全体でおよそ45,000m²の広範囲におよんでいる。本稿で扱うIV-C区の他、I区やIII-C区からも木器が出土しており、これらの資料とあわせて検討することで当遺跡における木器の用材傾向を詳細に把握することが期待できる。

(2) 資料

樹種同定の対象となる木器は279点であり、土坑・井戸跡・水場遺構・包含層などから出土している。遺物の時期は古墳時代（5世紀後半）から古代（7世紀末～9世紀）と時期差があるが、一部を除き資料の中心は古墳時代後期と考えられている。器種は容器・農工具・紡織具や木簡や祭祀具、部材など用途は多岐にわたり、木簡には「戸川マ鳴山 九斗 天平六年十月十八日」と人名と日付が記された資料も出土している。

(3) 方法

木製品の樹種同定は以下の手順により行った。はじめに木器の木取りや形状を観察し、破断面などできるだけ形状を損なわない箇所から、木口・板目・柾目面の切片をカミソリで採取した。採取した切片をプレパラートに載せ、その上からガムクロラールを滴下しカバーガラスを被せて標本プレパラートを作製した。標本プレパラートのガムクロラールが固化した後、光学顕微鏡（Nikon ECLIPSE E200）で観察した。各切片の組織構造を原生標本や参考資料と比較して樹種を同定した。

(4) 結果

樹種同定の結果、木器279点の中から針葉樹8分類、広葉樹15分類が検出された。その内訳として、針葉樹はスギやヒノキなど166点、広葉樹はアカガシ亜属・シイ属（ツブライ・スダジイ）・クスノキ科・ツバキ属など93点、樹皮や未同定資料など20点である。木器の実測図を第86～118図に示し、形状や出土遺構などの詳細や同定結果について第7表に示す。

この他、以下に器種毎による同定結果と用材傾向などについて記す。なお、器種の時期・用途・分類等は第7表に準じるものとする。

※本報告では樹種鑑定上の解剖学的記載や各断面の顕微鏡写真について紙面の関係上掲載するこ

とができなかった。不備について記してお詫びする。

容 器

容器は31点が出土しており、曲物蓋板・曲物底板・曲物板・盤・転び箱などがある。同定の結果、針葉樹4分類(26点)、広葉樹2分類(2点)が検出された。

蓋板は6点が出土しており全て針葉樹である。内訳はヒノキ5点、スギ1点であり、点数は少ないもののスギよりヒノキの使用率が高い傾向が見られる。蓋板は延永ヤヨミ園遺跡III-C区からも13点が出土しており、樹種はヒノキ(8点)・スギ(3点)・ヒノキ科2点である。III・IV-C区共に点数は少ないがヒノキの使用率が高い。

底板は10点が出土しており全て針葉樹である。内訳はヒノキ7点、ヒノキ科3点である。蓋板と同様、全て針葉樹でありヒノキの使用率が高い。なお、第110図8・9(いずれも樹種はヒノキ)は同一個体である。底板は延永ヤヨミ園遺跡III-C区からも9点が出土しており、樹種はヒノキ(3点)・スギ(6点)・未同定(針葉樹1点)である。

曲物板は6点が出土しており全て針葉樹である。内訳はヒノキ4点・スギ1点・アカガシ亜属1点である。曲物板は蓋板または底板と考えられる資料であり、点数は少ないものの蓋板や底板と同様にヒノキの使用率が高い。曲物板は延永ヤヨミ園遺跡III-C区からも6点が出土しており、樹種はヒノキ(3点)・スギ(1点)・未同定(針葉樹2点)である。

曲物側板は4点が出土しており全て針葉樹である。内訳はスギ(4点)である。出土した曲物側板(第105図8~11)は全て完形ではなく破片化しているため接合箇所は明らかでないが、同一個体の可能性が高い。

盤は1点が出土しており広葉樹の散孔材である。盤は延永ヤヨミ園遺跡III-C区からも1点が出土している。III-C区から出土した盤は針葉樹のスギである。本遺跡では盤の出土点数は少ないもののスギ・散孔材と針葉樹、広葉樹共に検出されている。

台は1点が出土しており広葉樹のクヌキ科である。台が出土したのは延永ヤヨミ園遺跡I~V区においてIV-C区の1点のみである。

転び箱は2点が出土しており全て針葉樹である。内訳はヒノキ(2点)である。転び箱が出土したのは延永ヤヨミ園遺跡I~V区においてIV-C区の2点のみである。転び箱も出土点数は2点と非常に少ないものの、上述する蓋板・底板等と同様にヒノキの使用率が高い。

上述する器種のほかに容器では箱・槽と思われる資料が出土している。箱は1点が出土しており針葉樹のスギである。槽は1点が出土しており針葉樹のカヤである。

服飾具

服飾具は2点が出土しており、下駄・衣笠がある。同定の結果、針葉樹1分類(1点)、広葉樹1分類(1点)が検出された。

下駄は1点が出土しており広葉樹のキリである。キリの下駄は遺跡出土の資料としては稀有である。下駄は延永ヤヨミ園遺跡III-C区からも1点が出土している。III-C区出土の下駄は針葉樹のヒノキである。

衣笠は1点が出土しており針葉樹のヒノキである。衣笠が出土したのは延永ヤヨミ園遺跡I~V区においてIV-C区の1点のみである。

農 具